

7 溝と居館

本遺跡からは、16条の溝が確認された。

このうち溝9～溝16は、調査区の西半部に位置し、居館を構成する。居館は溝により方形に区画されたもので、居館1、居館2、居館3の3基が確認されている。これらは居館周辺の建物群と併せ集落を形成するもので、居館群自体も2段階に変遷する。

溝1～溝8については、これらが明らかな区画施設となり、居館1～3にみたような居館などを構成するものではない。しかし、集落に密接に係わるものであろうことが想像される。

(1) 溝1

溝1（付図5、第577図）は、調査区中央の南寄りに位置する。溝4からT字状に分かれ、南北方向に走る。溝4との関係については、土層観察を行いながら掘り下げを行い、切り合い関係にないことが明らかになった。溝4は本来溝5や溝3と一連の溝で、調査区中央を東西方向に走るものと思われる。溝1は、これから直交気味に分かれるものである。



第577図 八坂中遺跡溝1位置図

溝1は当初プランが明確ではなく、溝1層に大量に包含される遺物が帯状に確認されるという状況であった。そのため何度となく逆構検出を試みるとともに、遺物の実測・取り上げの後に全体をわずかに掘り下げた。その結果、幅0.6～2.1mの遺構プランを確認することができた。溝の断面は逆台形を呈し、底面は南から北に向かい傾斜する。その高低差は、確認できるだけで約0.4mを測る。調査区内の微地形をみると、溝4が走る中央部分が岡周より若干低く、地形に沿うように低い部分を溝4がみられる。溝1は南からこれに直交するように接続するものである。しかし、溝1や溝4などこのあたり全体の状況をみた時に、調査区西半にみられる尻割遺構などのような惣然さはない。また、溝1と溝4により画された一角についても、遺構の密度は低く、これらの溝すべてが厚敷区画に直接かわるものであるかは疑問である。

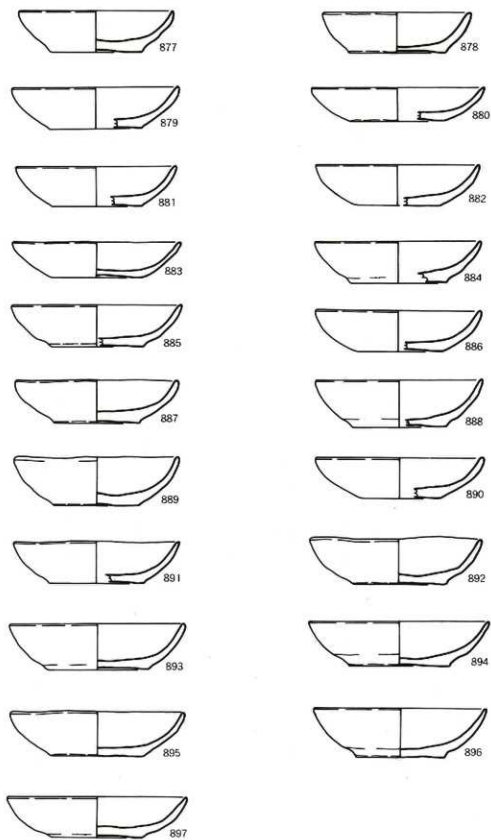
溝1は上塙162を切ったあたりで、確認できなくなる。しかし、上塙162の南側に位置する上塙176が溝1の痕跡である可能性が高く、溝1は本来さらに南までのびていたものと思われる。屍館2の南東側である調査区南端は調査区中央に比べやや高く、遺構が密集する。地形からみて、遺構の密集地はさらに調査区外まで及ぶものと思われる。

溝1からは、多数の完形品を含めて大量の土器が確認された。これらは大部分が上層から検出されており、埋没がなかなば進行した段階に一括廃棄された状況がみてとれる。土器のなかで、底部平底を呈する東国東瓦器輪が、調査においてまとめて検出されたのは初めてで、瓦器輪の年代的位置付けが明らかになった点は大きな収穫である。時期は13世紀後半～14世紀初に比定できる。

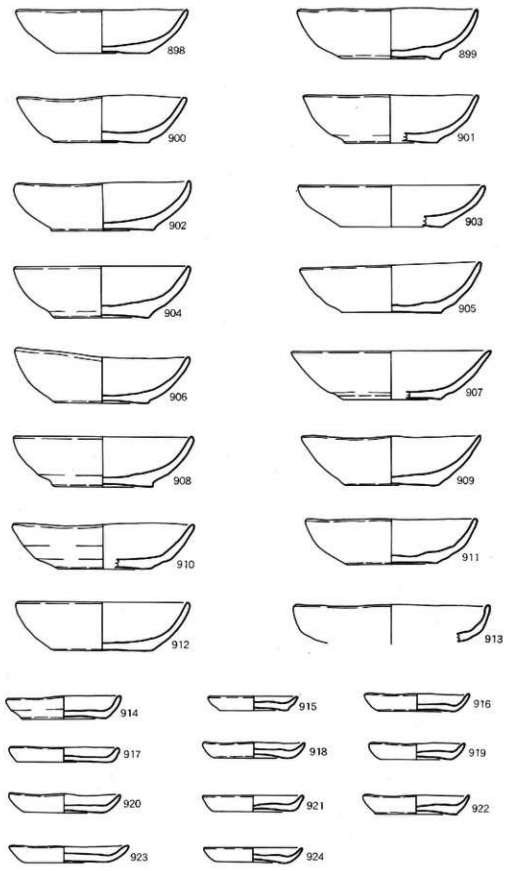
・出土遺物

出土遺物には、多くの土器（第578図～第590図）のほか石製品（第591図）や鉄製品（第592図）がある。土器のうち、877～913は土師質土器である。これらのうち、913を除く土器の共通する特徴として、まず底部があげられる。底部はすべて糸切りの平底底部であるが、底部からの立ち上がり部が、体部に移行する前に数mmほど直立気味に立つ。よって、器形的には円盤高台を思わせるものとなる。また、内面については体部下がほとんど屈曲せずに、内底面から体部にかけて緩やかに続く。そのため、体部立ち上がり部付近は器壁が厚くなる。一方で、外面の底部からの立ち上がりがそれほど顕著ではないのみみられるが、内面は同様な形態を示すことから、結果として体部立ち上がり付近が厚くなる。次に体部は、緩やかに内湾しながら口縁にいたるもので、総じて口径に比し器高が高い。口縁端部は丸く仕上げられており、体部内外面は回転ナデにより調整され、内底面には指ナデがみられる。内底面の指ナデにはいくつかのパターンが確認されるが、そのなかで渦巻き状のものが目立つ。口径は11.8～15.8cmのものがみられるが、14cm前後のものが主体を占める。これら土器群のもつ特徴のうち、底部形態が後述する平底を呈する瓦器輪（979～1012、1050～1060）の底部に類似する。底径もほぼ同様であることから、瓦器輪の底部だけを見た場合、焼きが悪く土師質にちかいは土師質土器坏と判別しにくい。また、瓦器輪の体部も内湾気味に口縁にいたるもので、土師質土器坏と同様な特徴をもつが、器高については瓦器輪に及ばない。しかし、形態的、製作技法的に全体としては類似した点が多いことから、土師質土器と平底を呈する瓦器輪は同一工人集団の手による可能性が高い。これらは13世紀後半～14世紀初に比定できる。913については、体部が緩やかに立ち上がり器高の低いもので、12世紀代のものである。

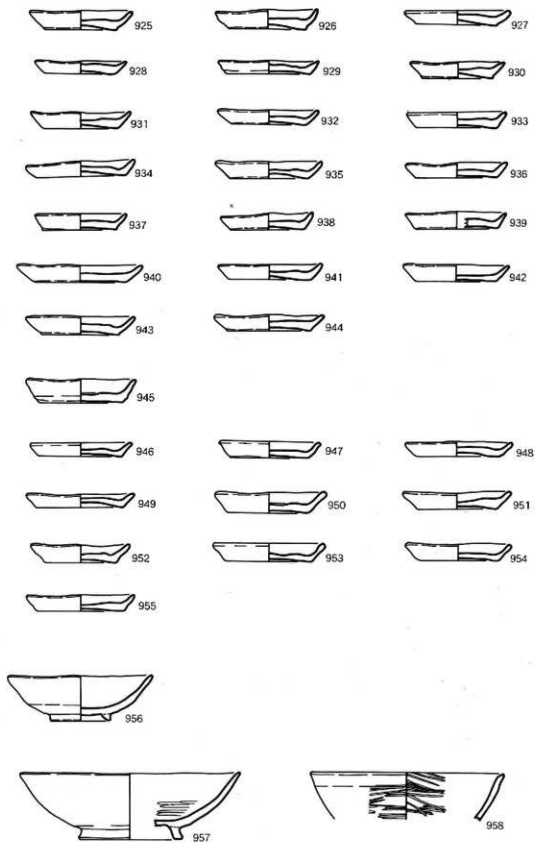
914～955は土師質土器小皿である。これらは形態などから、①体部が内湾気味のもの（914～927）、②体部が直線的なもの（928～945）、③体部がやや外反気味のもの（946～955）に大きく分けられる。①のなかには、体部の立ち上がり部が緩やかなものと比較的シャープに立ち上がるものがある。前者は口径が8cmをこえるものであるのに対し、後者は8cm以下である。また、914のように器高が2cmに達するような器高の高いものについては、13世紀後半以降のものであろう。②については、体部をシャープに立ち上げるものが大半を占める。また、口径も一部を除いて8cm以下のものが多い。しかし、形態的には口縁端部が尖り気味のものや、丸くおさめるものなどいくつかみられる。以上のうち、口径が8cmを大きく越えるものについては、12世紀代に遡るものと思われる。また、945のように器高の高いものもあり、これについては13世紀後半以降のものであろう。



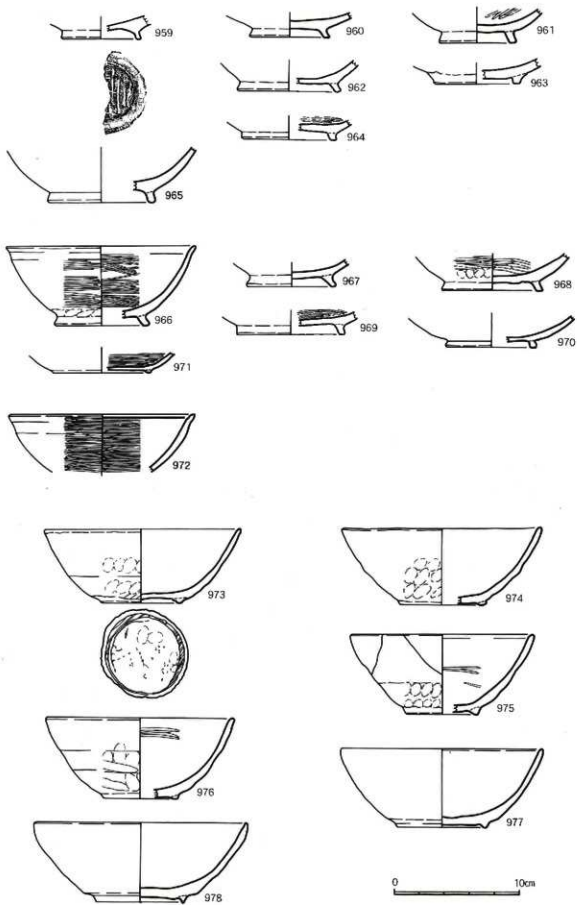
第578圖 八坂中道跡溝1出土土器(1)



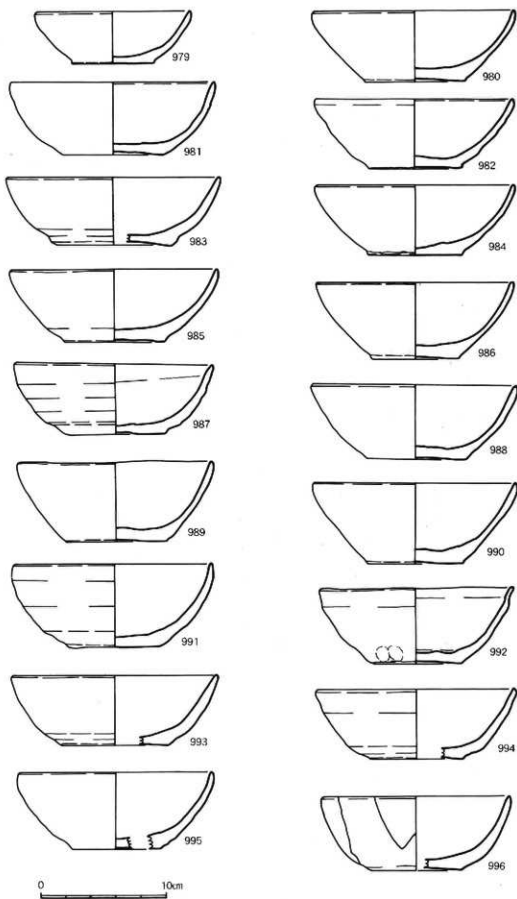
第579图 八坂中遺跡溝1出土土器(2)



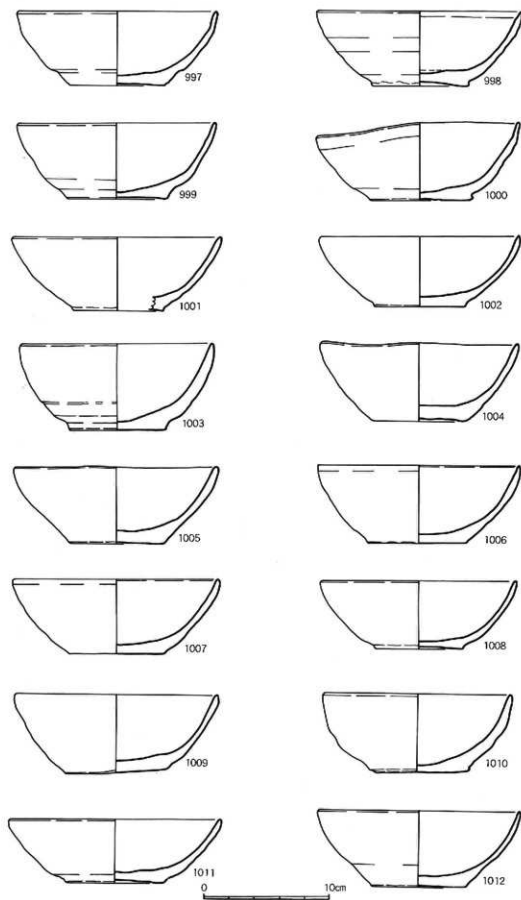
第580圖 八坂中遺跡溝1出土土器(3)



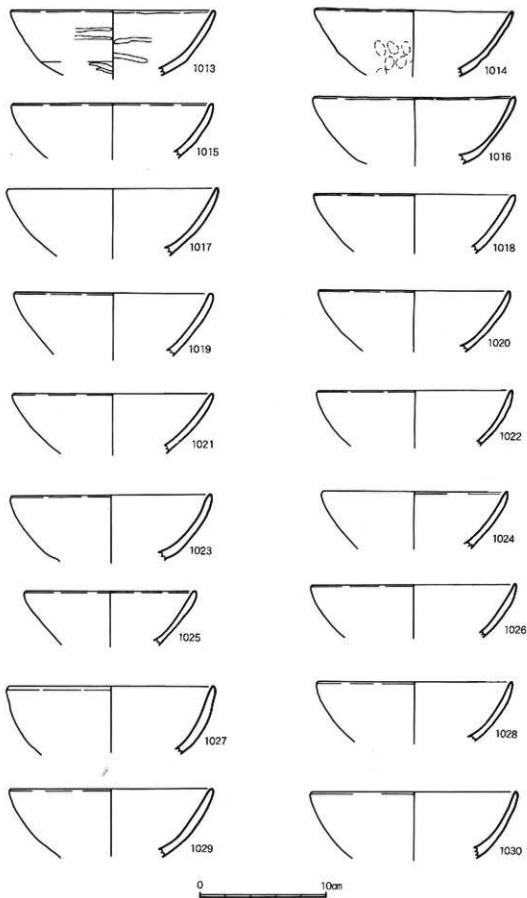
第581圖 八坂中遺跡溝1出土土器(4)



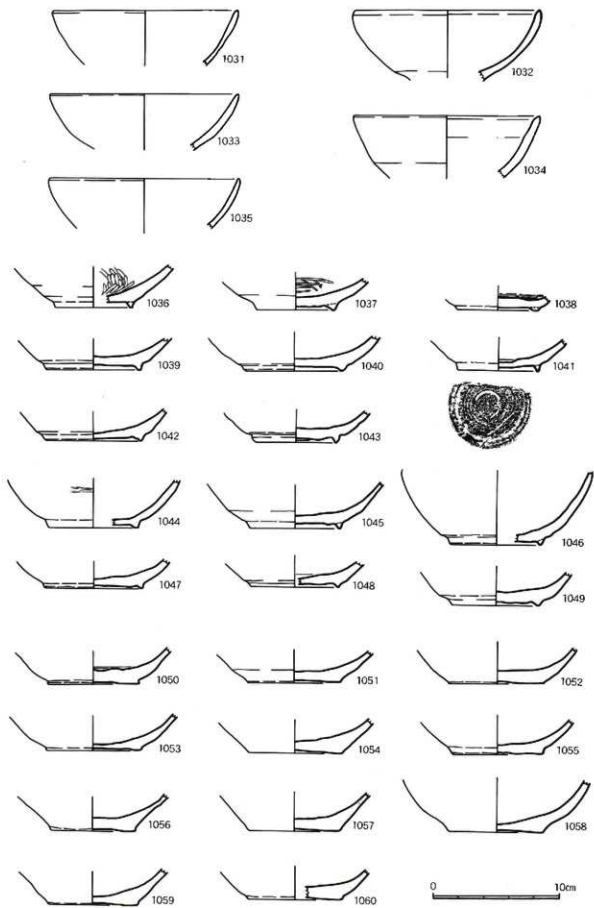
第582図 八坂中遺跡溝1出土土器(5)



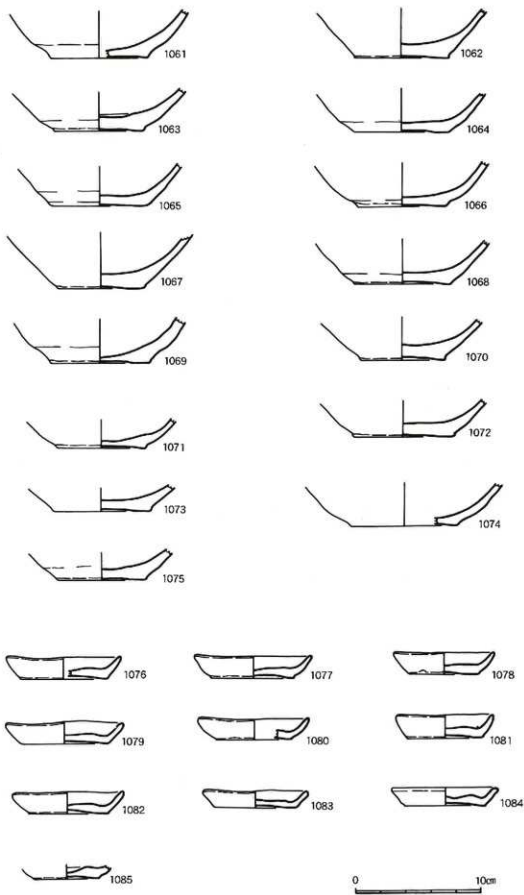
第583图 八坂中道跡溝1出土土器(6)



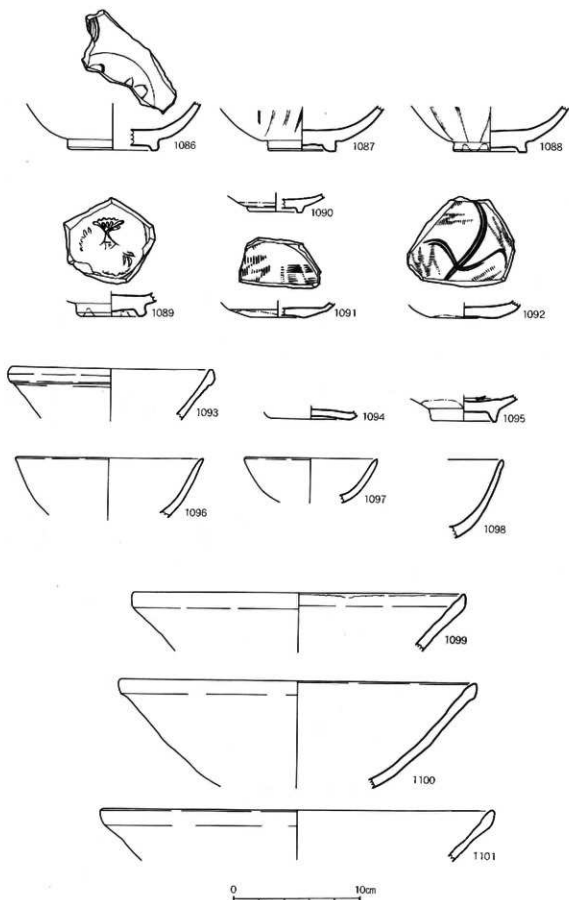
第584図 八坂中遺跡溝1出土土器(7)



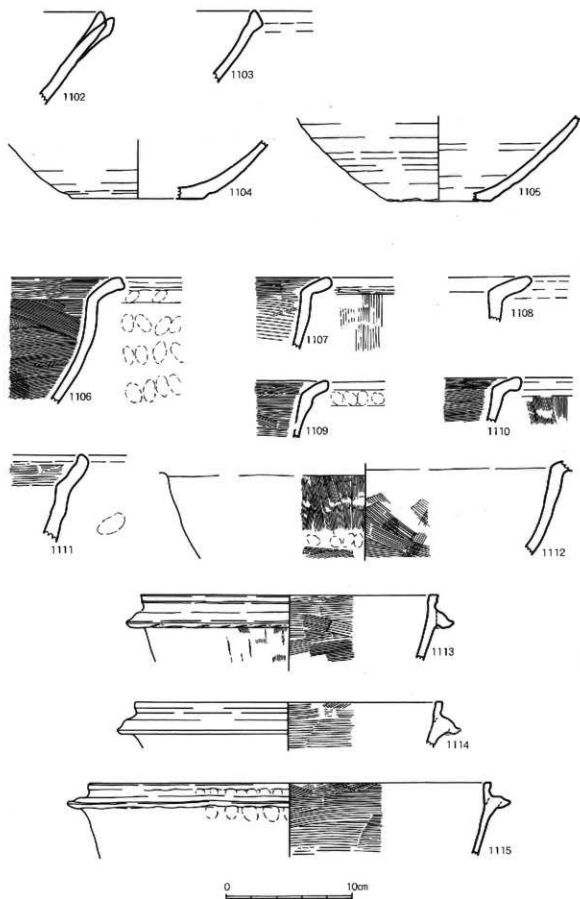
第585圖 八坂中遺跡溝1出土土器(8)



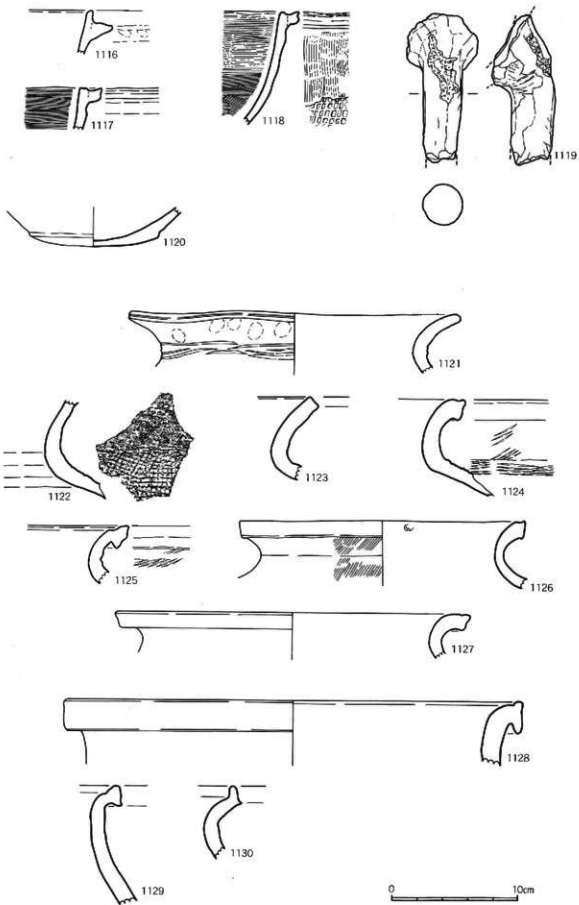
第586図 八坂中遺跡溝1出土土器(9)



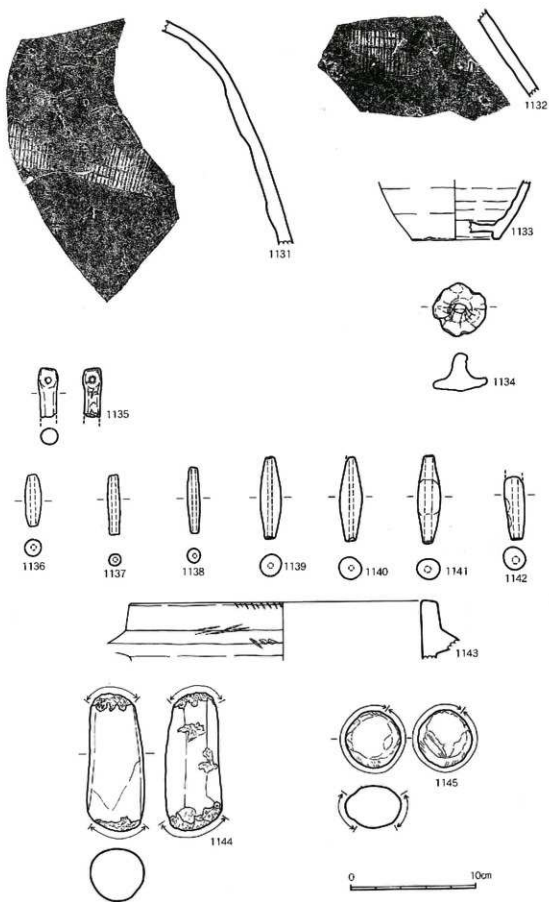
第587図 八坂中遺跡溝1出土土器(10)



第588圖 八坂中道跡溝1出土土器(11)



第589图 八坂中遺跡溝1出土土器(12)



第590図 八坂中遺跡溝1出土土器(13)と石製品(1)

③については、いずれも体部の立ち上がりはシャープであるが、器形に若干のバリエーションがみられる。口径は8cm前後である。

956は古備系土師器碗で、灰白色を呈する。復元口径11.4cm、器高3.5cmを測るものである。体部下半に緩やかな稜をもち、上半にはやや強いヨコナデが施される。そのため、上半は下半に比べやや器壁が薄くなり、直線的に口縁にいたる。体部下半から外底面にかけては指によるナデやオサエが顕著で、断面三角形の高台が付される。しかし、高台のはり付けはかなり難である。本土器は、胎上や色調からみても古備地域のものとの搬入品と思われ、13世紀後半～14世紀前半のものであろう。

957～965は土師器碗である。全体として少量で、全形に分かるものでは、浅いもの(957)と深めのもの(958)がみられる。高台の形態にもバリエーションがみられ、時期差を有するものが含まれていると理解される。また、959の外底面にはヘラ記号と思われるものが確認できる。全体として12世紀初頭前後から後半にかけてのものか。

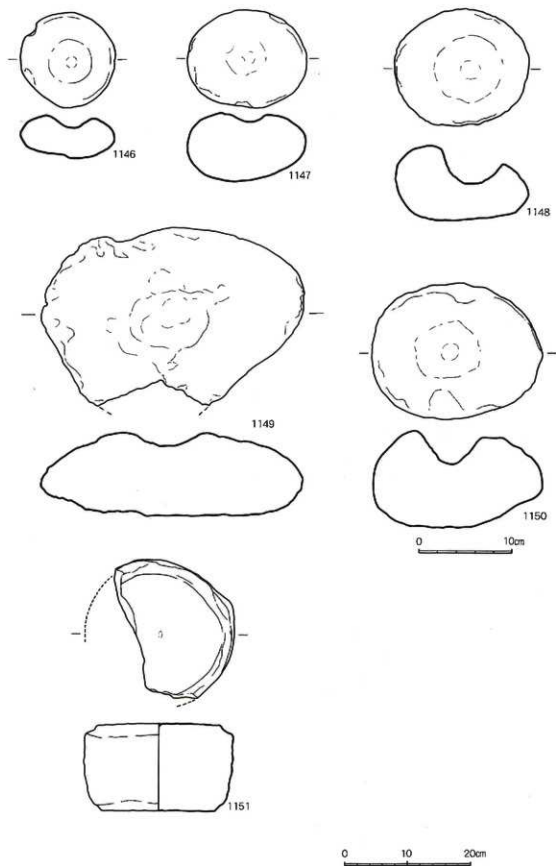
966～971は内黒土器であるが、いずれも破片資料で、量も少ない。このうち、971は他に比べ器壁がきわめて薄くのものである。内面にはヘラミガキがみられるが、比較的ヘラの幅は細い。高台は断面三角形の低いものが付される。全体として端正な作りで、在地の製品ではないと推定される。このほかについては、高台の形態に若干の差異が認められるもの、おおむね12世紀初頭前後する時期に比定される。

972は黒色土器碗で、畿内の桶狭産である。口縁部はヨコナデによりわずかに外反する。また、口縁部内面には1条の沈線がみられる。体部内外面にはヘラミガキがていねいに施されるが、ヘラミガキの幅は1、2mmと比較的細いものである。本黒色土器は、桶狭型瓦器碗の前身で、11世紀前半以前のものであるが、底部を欠くため明確な時期比定ができず、10世紀後半から11世紀前半の幅のなかでとらえておく。

973～1075が瓦器碗である。このうち、973～976、1013、1014は豊前型の瓦器碗である。これらは量的には少量で、図示したものがほぼすべてである。いずれも外面体部下半に指オサエが残り、難で低い高台が付される。ヘラミガキについては、体部内面にみられるものもあるが、外面についてはまったく確認されない。以上は、13世紀後半から14世紀にかけてのものであろう。

977～1075は、非押し出し技法の底部をもち、外底面に糸切り痕が明瞭に残る一群である。これらは、12世紀後半以降に押し出し技法を採用する豊前型瓦器碗と区別されるものである。このような非押し出し技法の瓦器碗は、国東町、武蔵町、安岐町、杵築市などの国東半島東部地域においてのみ確認されており、そのため東国東型瓦器碗と称されている(後藤一重「東国東型瓦器碗の系譜と編年」大分県考古学会第24回例会発表 1999)。東国東型瓦器碗には、高台が付くもの(977、978、1036～1049)と付かないもの(979～1012、1050～1075)がある。全体として、前者の占める割合は少なく、後者が圧倒的に多い。前者については、高台の形態や体部ヘラミガキの有無から、①群(1036、1037)、②群(1039～1041、1043、1044)、③群(977、978、1042、1045～1049)に分けられる。これらは①群→②群→③群のように型式変化するものと考えられ、ヘラミガキのあるものからないものへ、高台の高いものから低いものへという変化が読み取れる。③群では、ヘラミガキはまったくみられず、高台も形態化した低いものが糸切り底部の端に付されるのみである。この場合、高台を付ける際に、高台に沿って強いナデを施すために、高台の周囲が凹み気味となる。时期的には①群が12世紀後半、②群が13世紀前半、③群が13世紀中頃～後半に比定できるであろう。

本瀬橋出土瓦器碗の主体を占めるものは、高台が付かない平底底部のものである(979～1012、1050～1075)。これらは、口径は16cm前後、器高6cm前後にそのほとんどがおさまる。底部は完全な平底で、糸切りによる切り離しのままである。底部は体部に比べると厚めで、底部からの立ち上がり部が、体部に移行する前に数mmほど直立気味あるいは斜方向に立つ。あたかも円盤高台状を呈するものもある。内面は内底面から体部にかけて緩やかに続くもので、体部と内底面の境が明瞭でない。よって、外面底部の立ち上がりがみられず、直接体部に移行するものでも、体部立ち上がり部周辺は厚みをもつ。体部は内湾しながら口縁にいたり、口縁端部はやや尖り気味におさまる。口縁外面には歪む焼きの痕跡と思われる、暗灰色の色調の変化が帯状にみられる。体部の調整



第591図 八坂中遺跡溝1出土石製品(2)

は内外面とも回転ナデで、ヘラミガキや指オサエなどは基本的にみられない。焼きについては明らかに瓦器と言えるものから、須恵質にちかいものや、上師質土器と区別しがたいものまでバリエーションにとむ。瓦質のものも灰色のものが多く、色調と調整から豊前型とは容易に区別がつく。上師質土器杯の項でも触れたが、底部形態が土師質土器杯と酷似する。また、体部を内湾気味にする特徴も同様であるが、その立ち上がりやや急な方が瓦器柄である。以上は14世紀初～前半に比定できる。1015～1035についても東国東型瓦器柄体部であるが、底部を欠くため厳密な位置付けができない。しかし、その大部分は高台をもたない時期のものであろう。

1076～1085は瓦器小皿である。このうち1076～1082は器高が1.5cmを越えるものである。上師質土器小皿では、器高1.5cmを越えるものは少ないが、914、945などの形態にちかい。1083、1084は上師質土器小皿③としたものに形態的に類似する。

1086～1098は輸入陶磁器である。1093～1095は白磁で、1093、1095が12世紀代の碗、1094が13世紀後半～14世紀の口瓦皿である。これら以外は青磁で、1086が龍泉窯系の碗、1091、1092が阿安窯系皿で、12世紀後半を主体とするもの。1087、1088は蓮弁文をもつもので、13世紀代。1096～1098は無文のものである。

1099～1105は束播系こね鉢である。口縁部は1103を除き外面があまり肥厚せず、古相の形態を有する。

1106～1119は土鍋である。このうち1106～1112は口縁が短く体部から折れるものである。1111は古相の特長を残すが、他については12世紀後半から13世紀初のものであろう。1113～1118は口縁下に鈎が付されるもので、型的には鈎が1縁に近づくほど新しい。このなかで最も新しいもので、13世紀後半に比定される1118には体部下半に格子目タキがみられる。

1120は土師質の器種不明品で、底部は糸切りの後ナデ。内面は平滑に仕上げられている。

1121～1131は甕である。1121は須恵質で口縁部が緩やかに外反する。体部外面には平行タキがみられ、丹波の十瓶山窯の可能性をもつ。1122はやはり口縁が緩やかに外反するもので、体部外面に格子目タキをもつ。岡山県の龜山焼か。1123は産地不明。1124～1127は頸部が外湾気味に立ち、頸部近くで強く屈曲するもので、口縁内面が1縁に近い凹む。1124、1125は外面に細かな平行タキがみられるが、焼きが瓦質にちかく束播系のもとは判断がつかぬ。また、1127は上師質にちかく、外面にハケメがみられる。束播系甕を模倣したものであろう。1128～1132は常滑焼である。1128～1130は口縁部で、13世紀中頃から後半にかけての時期に比定される。

1133は須恵質で、内外面に薄い自然釉がみられる。器種、産地とも不明。

1134はきこ型を呈する土製品で、用途不明。1135～1142は土錘である。1135は棒状を呈し、端部に孔をもつ。1136～1142は新錘形をなすもので、主軸部に孔を施す。1143は滑石製石鍋で12世紀代に比定されよう。

1144～1151は石製品である。1144、1145はタキ石である。前者は円柱状を呈し両端にタキの痕跡が、また後者は円盤状を呈し、縁辺部にタキの痕跡が各々みられる。1146～1150は凹石で、片面の中央部に凹み部がみられる。1151は円柱状を呈するものである。石造品の一部であろう。

1152は鉄製品である。欠損品であるが、断面方形の棒状を呈する。器種は不明である。



□ 1152



第592図 八坂中道跡溝1出土鉄製品

(2) 溝2

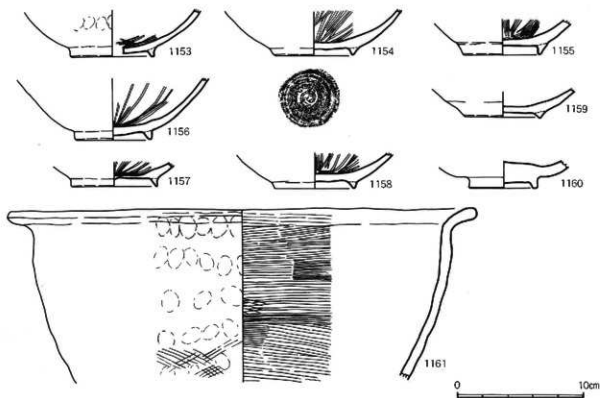
溝2(第593図)は、溝1の東側に位置する。溝は南西-北東方向に走るもので、溝1とは大きく方位を異にする。溝は南側の調査区外に及び、北東方向に約5mのびた後に消滅する。本来はさらに続いていたものと思われる。溝の幅は0.2~0.45mで、本遺跡のなかでは規模の小さな溝である。深さは、最大で検出面から0.3mを測り、床面は南西から北東のむけ傾斜する。溝が消滅するあたりで、建物22と建物23と位置的に重複するが、前後関係は明らかではない。溝の時期は12世紀後半に比定される。

・出土遺物

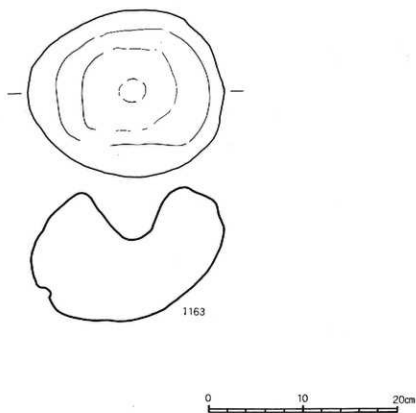
出土遺物には、土器(第594図)、石製品(第595図)がある。1153は七師器輪である。外底面は平坦にならず、わずかに下方に張り出す。切り離しの後、押し出されたものと思われる。体部は下半に指オサエの痕跡が若干残るが、ナデにより丁寧に仕上げられる。ヘラミガキは内面で確認されるが、外面にはみられない。1154~1158は瓦器輪で、色調はいずれも明るい灰色である。底部はいずれもほぼ水平で、体部から屈曲して底部に移行する。高台は断面三角形を呈するもので、平坦な底部の端に付される。外底面は、回転ナデが施され切り離しの状況は不明であるが、形態的にみてもあまり顕著な押し出しは為されていないものと思われる。体部外面にはミガキが施されず、回転ナデにより丁寧に仕上げられる。内面はミガキがみられ、見込み部に雑な同心円のものがあり、加えて見込みから体部にかけて放射状に施される。1154には外底面にヘラ記号がみられる。1160は青磁碗底部。1161は、口縁が短く折れる土鍋で、体部はやや深めである。1163は凹石。以上は、12世紀後半に比定される。



第593図 八坂中遺跡溝2位置図



第594圖 八坂中遺跡溝2出土土器



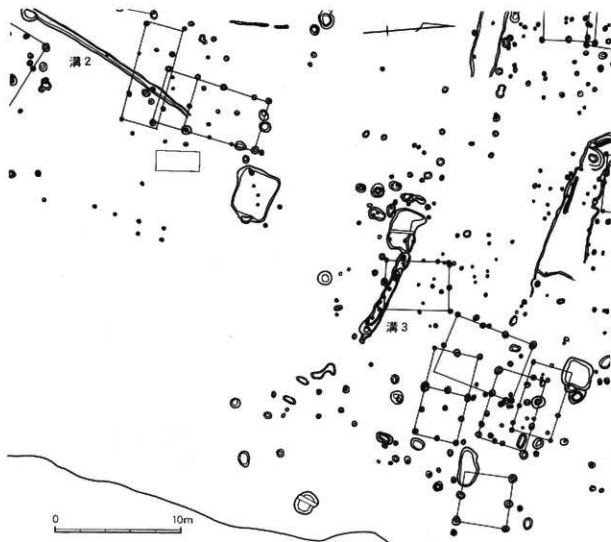
第595圖 八坂中遺跡溝2出土石製品

(3) 溝3

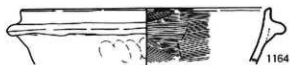
溝3（第596図）は、溝4の東方に位置する。北西から南東方向に走るもので、約8mにわたり確認される。溝4とは16mの間隔を有するが、本来は同一の溝で、溝4及び溝5とつながるものであろう。溝は幅0.3～0.5mで、柱穴の重複がみられる。全体として整然さに欠ける感がある。時期は溝1や溝4と同じ13世紀後半～14世紀初である。

・出土遺物

1164（第597図）は土鍋である。口縁下にやや幅広いの鋳を付すもので、内面にはハケメがみられる。13世紀前半～中頃のものとみられる。



第596図 八坂中遺跡溝3位置図



第597図 八坂中遺跡溝3出土土器

(4) 溝4

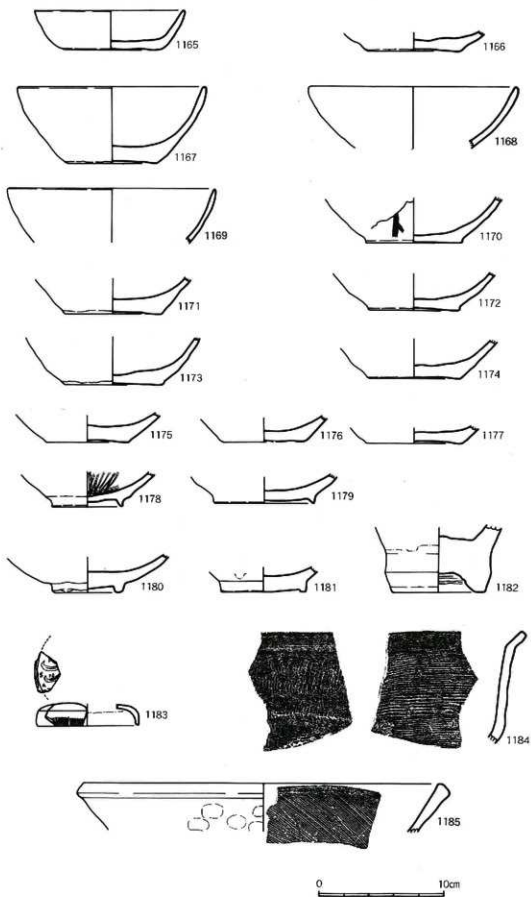
溝4 (第598図)は、溝1とT字状につながり、おおむね東西方向にのびる。溝は溝1とつながった部分から東方に10mほどいったところから、方向を南東方向に変え溝3の方向に走る。本来、溝4は西側と東側にある溝5及び溝3とつながっていたものと思われ、T字状につながる溝1と併せ併時存在していた。溝は幅L6~4.0mで、深さは最深部で検出面から0.5mを測る。床面レベルをみると、西から東へ傾斜する。時期は14世紀前半である。

・出土遺物

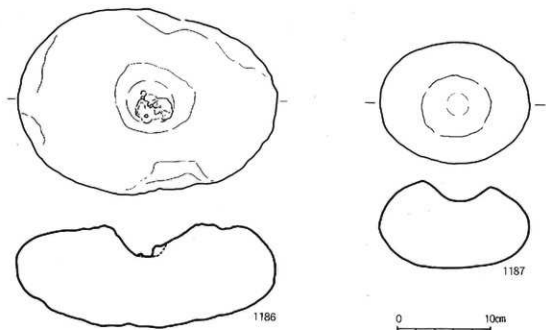
出土遺物には、土器 (第599図) と石製品 (第600図) がある。1165、1166は土師質土器環である。1165は、底部から緩やかに立ち上がった体部が直立気味に立つ。1166は底部資料である。底部からいったん垂直気味に立ち、その後体部が緩やかに立ち上がる。溝1において主体的にみられたものと同形態である。1167~1179は瓦器碗である。このうち、1167~1177は平底を呈するもので、14世紀初から前半のものである。底部は糸切りのままで、体部にはヘラミガキがみられない。1170の体部外面には墨書がみられる。1178は底部が水平で、あまり押し出しが行われていない。内面にはヘラミガキがあり、見込みは同心円状に、見込みから体部にかけては放射状に施される。12世紀後半のもの。1179は、糸切り痕の残る井押し出しの外底面に高台が付される。13世紀中頃か。1180は鎮蓮弁文をもつ青磁碗で、13世紀代。1181は12世紀の白磁底部。1182は中国製四耳壺底部で、13世紀後半から14世紀前半のもの。1183は中国製青白磁合子。1184は土鍋。1185は瓦質土器こね鉢である。1186、1187は凹石である。



第598図 八坂中遺跡溝4位置図



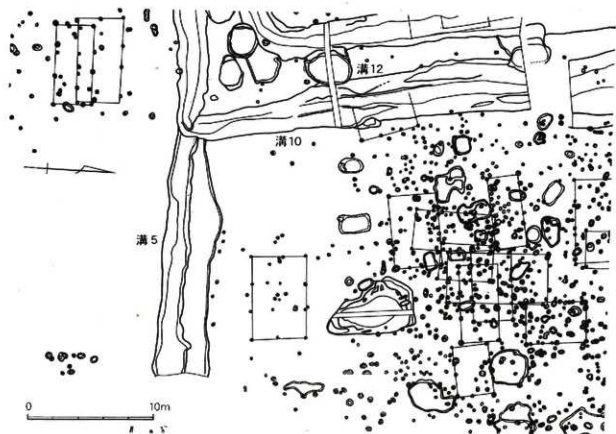
第599図 八坂中遺跡溝4出土土器



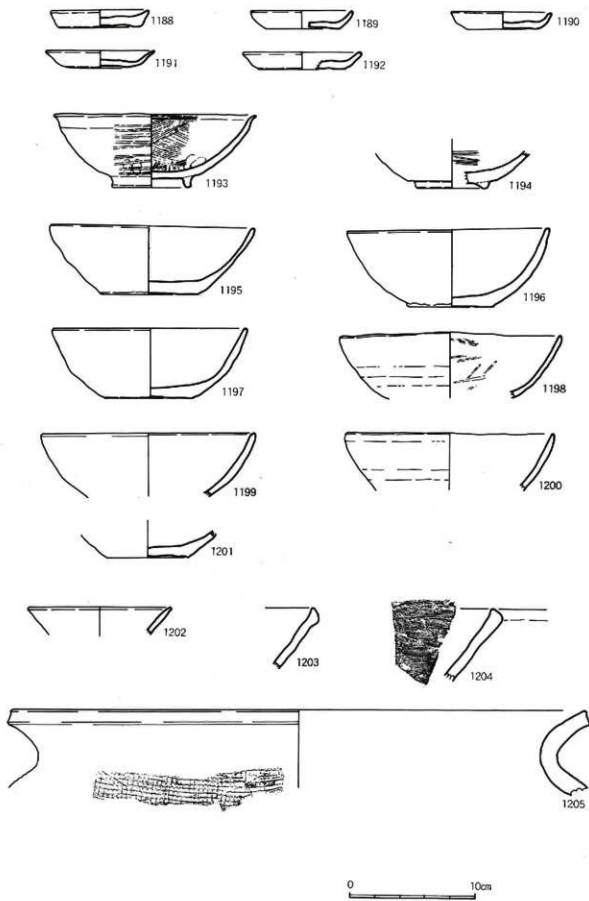
第600図 八坂中遺跡溝4出土石製品

(5) 溝5

溝5（第601図）は、居館3を二重に囲む溝のうち、外側にある溝10の東南コーナーの位置から東へのびる。溝は溝10に切られており、溝10から西の状況は不明である。溝5のある位置は調査区の中央であるが、南北の



第601図 八坂中遺跡溝5位置図



第602図 八坂中遺跡溝5出土土器(1)

断面をとった時にこの部分が最も低く、南側と北側から緩やかに下ってくる。溝10より西ではこの地形的な特徴が明確ではないが、これより東ではこの状況が明らかで、溝は木来溝4及び溝3とつながり微地形の最も低い位置を東南方向へ走る。幅は1.6～2.6mで、西から東へ傾斜する。13世紀後半～14世紀初のもの。

・出土遺物

出土遺物には、土器（第602、603図）、鉄製品（第604図）、石製品（第605図）がある。

1188～1192は上師費土器小皿である。このうち1188は復元口径7.6cmで、体部が短く直立気味に立ち、端部が尖り気味である。1189は体部がシャープに立ち上がり、内湾気味に口縁にいたる。復元口径8.0cm。以上は13、14世紀代のものか。1190～1192は体部の立ち上がりが緩やかで、口径も9cmを越すものもある。12世紀代まで遡るものか。

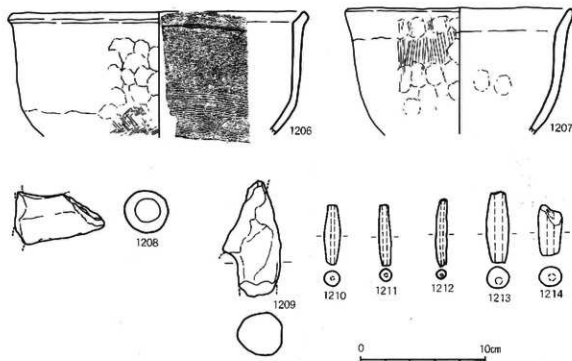
1193は上師器碗である。口縁部には強いヨコナデが施され、端部が外反する。外底面には糸切り痕がわずかに残り、断面方形の高台が付く。内外面にヘラミガキが施されるが、内面見込み部には同一方向の間隔のあいたミガキがみられ、体部には斜方向の分割ミガキが施される。12世紀代のものか。1194は内黒土器碗で、低い高台が付される。12世紀中～後半に下るものか。

1195～1201は、いずれも東国東型瓦器碗である。このうち1195～1197は平底を早するもので、13世紀後半～14世紀初頭の時期。1201は底部の端につまみ出したような低い高台がみられる。13世紀中頃～後半か。

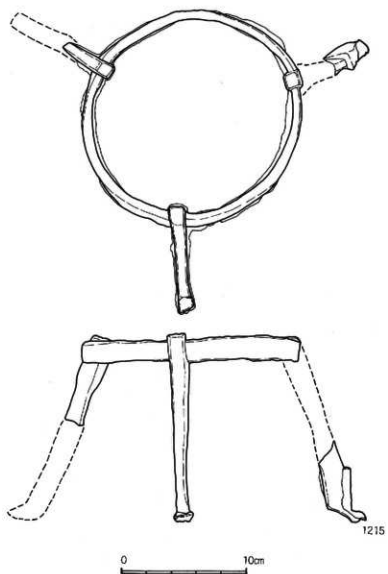
1202は白磁口壳皿で、13世紀後半から14世紀にかけてのもの。1203は東播磨系こね鉢。1204は須恵質のこね鉢で、内面にハケメがみられる。1205は亀山焼の甕で、外面に格子目タタキが施される。13～14世紀のもの。1206、1207、1209は上鍋である。1206は黄白色を呈し、口縁が短く折れる。内面と体部下半にハケメがみられる。14世紀初前後のものか。1207は口縁がわずかに折れる鉢状のもの。1209は脚である。1208は中空の円筒状をなす。1210～1214は上錘である。

1215は鉄製命輪で、鉄輪の口径約17cmを測る。脚が3本付ければ、接地部で短く外反する。鉄輪と脚の接合は、脚部の鉄板を鉄輪に巻く。形態が類似する例として、三光村深水邸埋納遺跡のもの知られている。

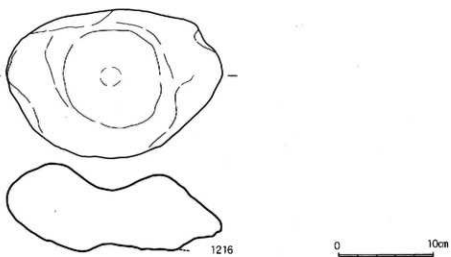
1216は凹石である。



第603図 八坂中遺跡溝5出土土器(2)



第604図 八坂中遺跡溝5 出土鉄製品



第605図 八坂中遺跡溝5 出土石製品

(6) 溝6

溝6 (第606図) は、屈館3を二重に囲む溝のうち、外側にある溝10の北東コーナー付近の位置から東へ伸びる。溝は溝10により切られており、溝10より西での状況は不明であるが、溝10と溝12の間の部分において、すでに認められないことから、溝10の部分で終わっていたか、溝10と重複するように折れて南北方向に走っていたことが考えられる。溝は溝10の位置から14mほど東にのび途切れており、幅0.4~1.6mを測る。時期は16世紀に比定される。

・出土遺物

溝からの出土遺物として、土器 (第607図)、石製品 (第607、608図) がある。

1217は土師質土器小皿である。体部の立ち上がりは緩やかで、斜方向にのび口縁にいたる。復元口径は8.0cmであるが、形態的には12世紀以前に位置付きたい。

1218は東国東型瓦器椀である。体部内外面には、ヘラミガキがみられず、回転ナデにより仕上げられている。底部を欠くので明確な時期は決めがたいが、ヘラミガキの消滅などから13世紀後半以降のものと同判断される。

1219は須恵質のこね鉢である。東播磨のものと思われ、口縁端部がまったく発達してないことから、12世紀以前のものであろう。

1220は鉢で、復元口径38.8cmを測る大型品である。体部は底部から緩やかに立ち上がり、体部は斜方向にの



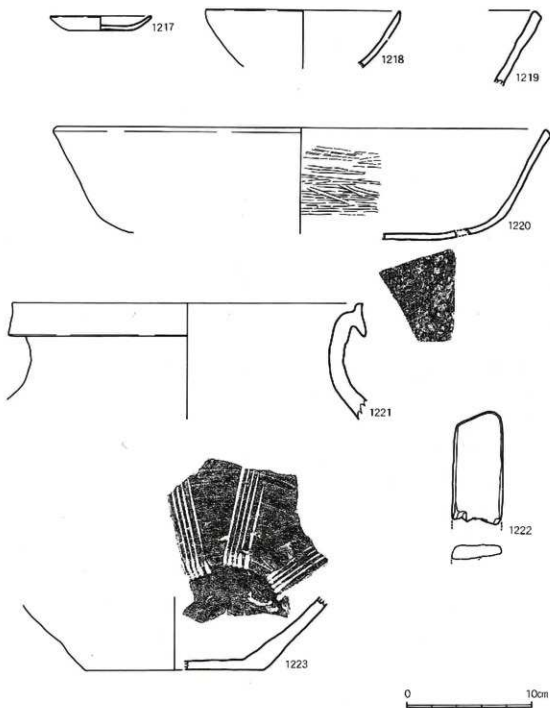
第606図 八坂中遺跡溝6、溝7、溝8位置図

びそのまま口縁にいたる。口縁端部はほとんど肥厚せず、やや角張る。外面はナデにより仕上げられ、内面にはミガキがみられる。また、底部には高台が削がれたと思われる痕跡があり、接合部には斜格子状の繼い沈線が連続してみられる。16世紀のものか。

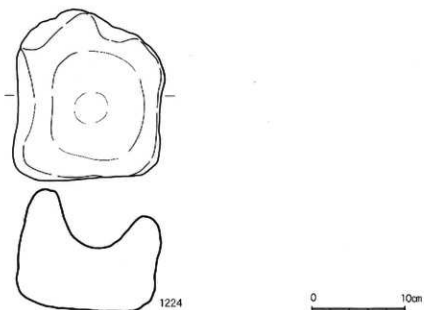
1221は常滑焼の甕である。口縁部は上下に拡張され、口縁帯を形成する。口縁の形態から、13世紀後半のものと考えられる。

1222は備前焼播鉢である。内面の摺目は5本単位で施されている。口縁部を欠くため、時期は明確にできないが、古相のものである。

1223は磁石、1224は凹石である。



第607図 八坂中遺跡溝6 出土土器と石製品(1)



第608図 八坂中遺跡溝6出土石製品

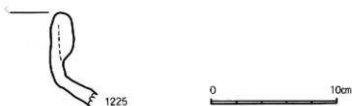
(7) 溝7

溝7（第606図）は、溝6と溝8に挟まれた位置にあり、東西方向に走る。やはり、居館3を囲む溝10により切られている。溝は東方に5m程いって途切れる。幅は0.6～1.8mである。溝10から西については、溝10と溝12の間や居館3内で確認されておらず、その状況はまったく不明である。可能性として、溝10に重複するような位置に折れ曲がっていたことも考えられる。

时期的には15、16世紀に比定される。

・出土遺物

溝から検出された遺物のなかで、図示できるものは少ない。1225（第609図）は備前統甕である。II縁部の玉縁は下方に長く垂下される。15、16世紀のものか。



第609図 八坂中遺跡溝7出土土器

(8) 溝8

溝8（第606図）は、溝6、溝7、溝8と3本並ぶ溝の最も北側に位置する。溝は居館3を囲む溝のうち、外側の溝である溝10により切られる。溝は幅0.4～0.8mと比較的細いもので、溝10の位置から東方へ15mほど走ったところで途切れる。この溝についても、溝6や溝7と同様に、溝10から西の状況が明確でない。すなわち、

溝10とその西側を数mの間隔をあけ平行して走る溝12の間で溝8の延長は検出されず、溝8は溝10の位置で終わるか、あるいは溝10に重複するように折れ曲がっていたものと思われる。上層内からは瓦器碗片や土鍋片が少量出土したのみで、図示できるものはなかった。時期的には14世紀以降に位置付けられる。

(9) 溝9

溝9（第610図）は、居館3東北コーナーの北方に位置し、南北方向に走る。北側については調査区外に及ぶ。本溝は、居館3を二重に囲む溝のうち内側の溝である溝12のコーナー部から、約5.5mの間隔をあけて始まる。



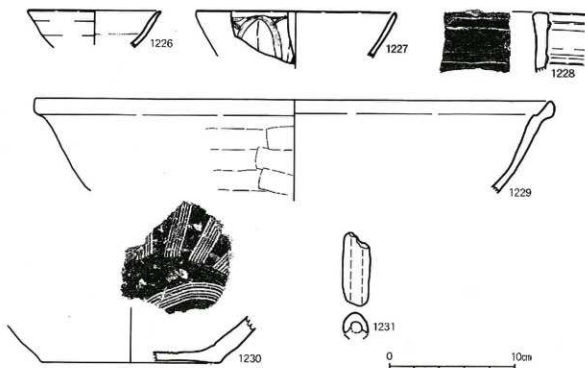
第610図 八坂中遺跡溝9位置図

溝は溝12の延長上をほぼ直線的に北へむかい延びる。居館1と居館3の北側については、各々の居館を囲する溝の北辺がほぼ同じライン上の上っており、計画的な築造を思わせる。居館の北側には、溝に近い位置に大型の土壌がいくつか並ぶようにみられるが、溝から3～10mの間は土壌や建物などの遺構がほとんどみられない。遺跡自体が12世紀前後からの重複遺跡であるため、この遺構空白部は必ずしも明確なものではないが、その状況から道と思われる。側溝や道路面といった明らかな道遺構は確認されていないが、意識的に遺構を配していないことから、居館を含む集落全体の配置計画の際に当初から道として意識されていたものと考えられる。この道状の遺構空白部は居館1、居館3の北側に沿い続き、居館3東北コーナーと溝9が途切れた幅約5.5mの部分にとりつく。また、道の北側については建物が梁間を道に面するかたちで配されている。建物の北は、廃棄土壌と推定される大型の土壌がみられ、それより北には遺構が広がらないことを試掘調査で確認している。

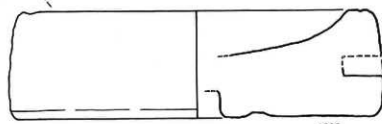
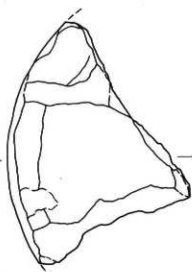
溝は幅1.2～1.8mで、土壌45を切る。この溝9に対し道を扶む位置にある溝12は掘り直しが認められ、現状で幅4m程の溝部分のうち、最も東よりに掘り直しの溝である溝12bがある。位置的、規模的に溝9と極めてバランスが良いことから、溝9は当初より掘られていたのではなく、溝12bが掘り直された時に併せて掘られた可能性が高い。時期は16世紀代である。

・出土遺物

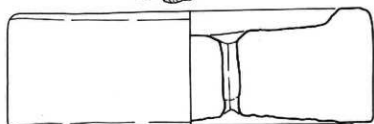
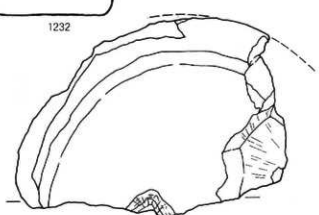
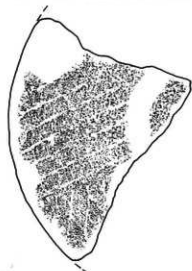
出土遺物には、土器（第611図）と石製品（第612、613図）がある。1226は白磁環で、内外面とも施釉される。1227は青磁碗で、外面に鑿理弁文がみられる。13世紀代のもの。1228は瓦質土器火鉢である。口縁内面がわずかに肥厚しており、外面には2条の沈線がみられる。沈線間にはスタンプ文が施されるが、これまで大分県内では確認されてない文様である。溝15から同じスタンプ文をもつものが検出されており、同一個体の可能性もある。16世紀前～中頃。1229は土鍋で、外面には横方向のヘラケズリが施される。16世紀代か。1230は瓦質土器挿鉢で灰白色を呈する。掴目は6本単位で、見込み部にも掴目がみられる。16世紀代か。1231は土鉢である。1232と1233は挽白の上白である。1232は下面中央に芯棒受けがあり、角穴の挽手穴がある。1233の天場のくぼみは約2cmで、供給口にむかい深くなる。下面のふくみは約1cmで、目は6分割であると思われる。1234は茶臼の下白で、目はやや雑である。1235は五輪塔地輪である。上面中央にくぼみがみられる。



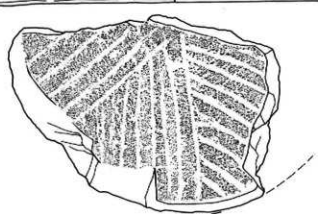
第611図 八坂中遺跡溝9出土土器



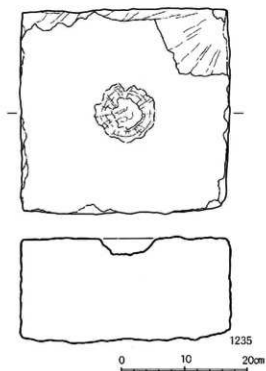
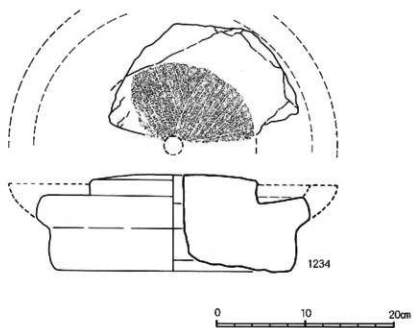
1232



1233



第612図 八坂中遺跡溝9出土石製品(1)



第613図 八坂中遺跡溝9出土石製品(2)

(10) 居館1

居館1(第614図)は、調査区西端に位置する。しかし、居館の西側から北西隅にかけての一部が調査区外に及ぶ。居館は基本的に溝13に面される長方形を呈し、さらに南側の外側を溝10により、西側の外側を溝16により囲まれる。また、東側には居館2と居館3が隣接しており、居館2を囲む溝11と居館3を囲む溝12が溝13と平行して走る。居館の規模は、溝13の内側で南北約60m、東西約22mを測る。規模からみると、隣接する居館2と居館3に比べ、居館内面積が約1.3倍である。また、平面形についても、方形を呈する居館2や居館3と大きく異なる。後述するように、居館を囲む溝については掘り直しが認められ、居館1を含む居館群も何段階かの変遷が想定される。居館内の建物等を含めた居館群の変遷については、後段で詳述する。

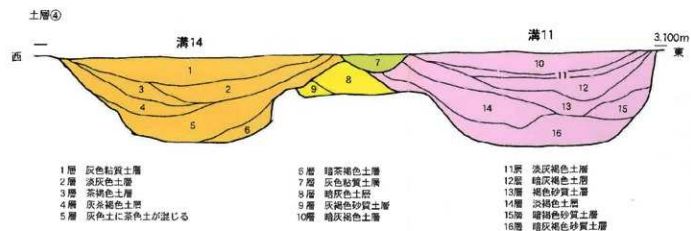
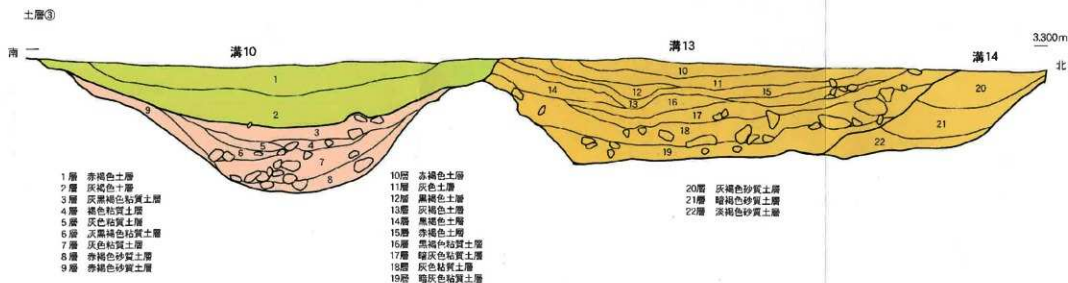
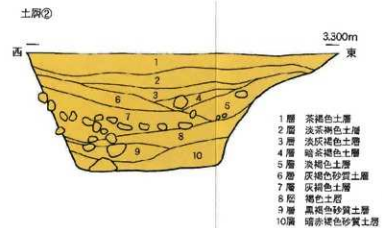
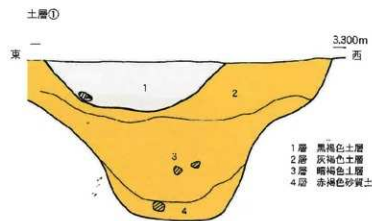
・溝13、溝14

現状で居館1を長方形に囲するのは溝13であるが、溝13より古い段階で居館1を区画していたと思われるものが溝14である。溝14が明確に認められるのは、居館の南辺から東南コーナーにかけてである。底面の幅は1.2～1.5mを測り、規模的には溝13の南辺とほとんど遜色がなかったものと思われる。また、深さは検出面から0.5～0.8mである。上層③(第615図)にみるように、溝14の大半が埋没した段階で溝13に切られている。南辺に関して、溝14の底面はほとんど溝13に切られておらず、上面でみれば溝14の南半を切りながら、やや南に移動し掘り直されたようである。土層③の溝14の埋没状況のみを限りでは、溝の南側(居館の外側)からの流れ込みが善いようで、溝14の南側に土塁があった可能性が高い。しかし、1ヶ所の上層観察のみであるため、溝14段階の居館全体にわたる状況は不明とせざるをえない。この溝14は、現状で居館1を区画する溝13と同じ位置に東南のコーナーをもち、北へ延びるところまでは確認できるが、居館の東辺、北辺、西辺ではまったく確認できない。掘り直しの溝13の掘削により、その痕跡をまったく留めないものと思われるが、換言すればまったく同位置に溝があったことを示すものと理解される。溝14内の遺構として、土層③のすぐ東において石組みが検出された(第617図)。石組みは、溝14を仕切るようなかたちで2列確認された。0.15～0.25mの礫を使用し南北に並べられるが、1段のみで、ある程度埋没がすすんだ段階で行われている。南側は溝13により切られる。溝からの遺物は少なく、小破片がばかりである(第620図)。よって、時期の細かな特定は困難ながらも、15～16世紀段階のものとして理解される。

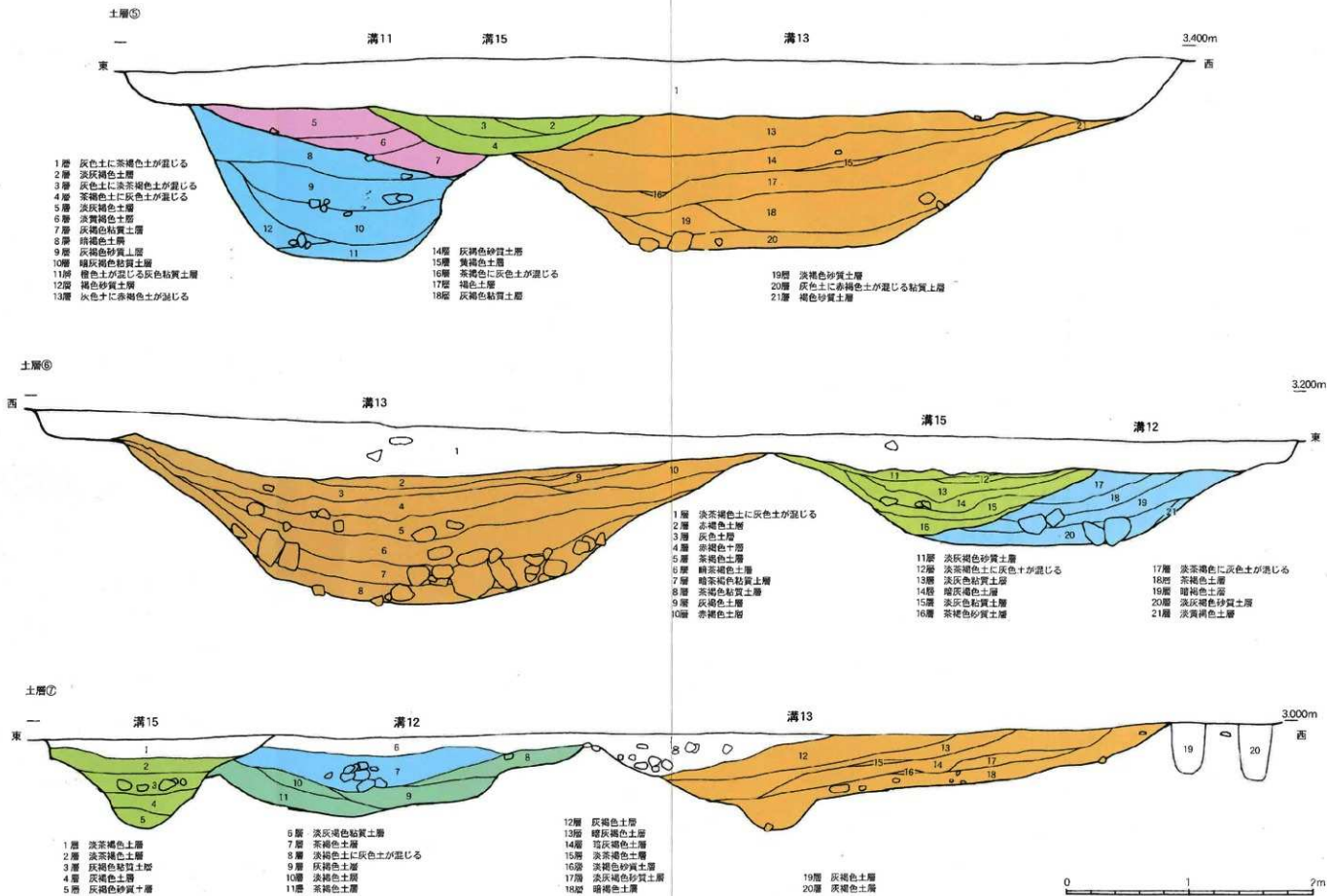
溝13は、溝14を掘り直すかたちで掘られたものと思われる。西辺、南辺、そして東辺の南東コーナーから約15mまでは、幅2.0～3.5m、深さ0.7～0.9mである。しかし、東辺の中段から急激に規模が拡大し、幅3.0～4.6m、深さ1.3～1.5mを測るようになる。削りだしの土層と思われるものが、東辺のほぼ中程にあたる南東コーナーから約32mの位置にある。その後溝は、北東コーナーに近づくにつれ幅及び深さの規模を急激に減じ、北東コーナー部では幅1.0～1.6m、深さ0.3～0.5mほどとなる。北辺については、若干幅が広がるが深さは浅いままである。一部が調査区外に及ぶため、出入り口についての結論を出しにくい。北東コーナー付近は溝の状況を考えて出入り口の可能性は高い。居館1の東側にある居館3では、居館の北西コーナー部で溝が切れており、この部分が出入り口であったと思われる。居館1の北東コーナー部は、居館3北西コーナーと相対する位置にあり、出入り口があっても不思議ではない。居館1東辺中央の土構については、削り出されたものであるが、検出面よりかなり低い。そのため、溝内部にいったんやや下り、また上るといった動きをとらざるをえず、メインの出入り口としては利用しにくい。また、南西コーナー部については、わずかに屈曲する。これは、前段階の溝14の時も同じ状況がみとれ、ここで屈曲せざるをえない何らかの理由があったものと推定される。溝13については、上層③の部分では掘り直しの可能性をもつ土層が認められるが、他の場所の土層(上層②、土層④、上層⑤、土層⑥、土層⑦)では確認できず、全体的な掘り直しは行われなかったと理解される。さらに上層を観察すると、土層②、上層③、土層⑤、上層⑥、土層⑦では、居館内側からの土砂流入が顕著で、溝の内側に土層が築造されていたものと思われる。しかし、溝の浅い北東コーナーから北辺にかけては、それほど顕著な土層は築かれなかった可能性はある。溝13からは土器や竹製品が検出された。土器は破片資料で、いずれも流れ込みと考えられる。そのなかで、溝東辺の上輪北側から、五輪葉の部品が比較的集中して確認された。投棄されたものの可能性が高いが、



第614図 八坂中遺跡居館1



第615図 八坂中遺跡居館1周辺の溝土層図(1)

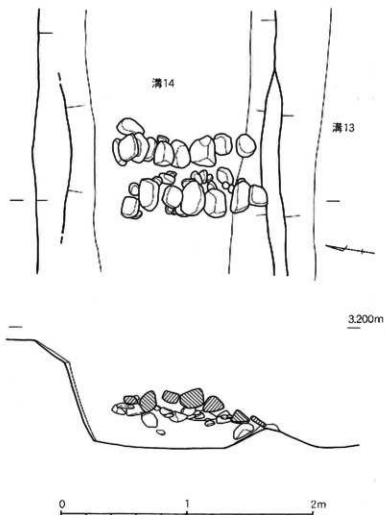


第616図 八坂中通跡居館1周辺の溝土層図(2)

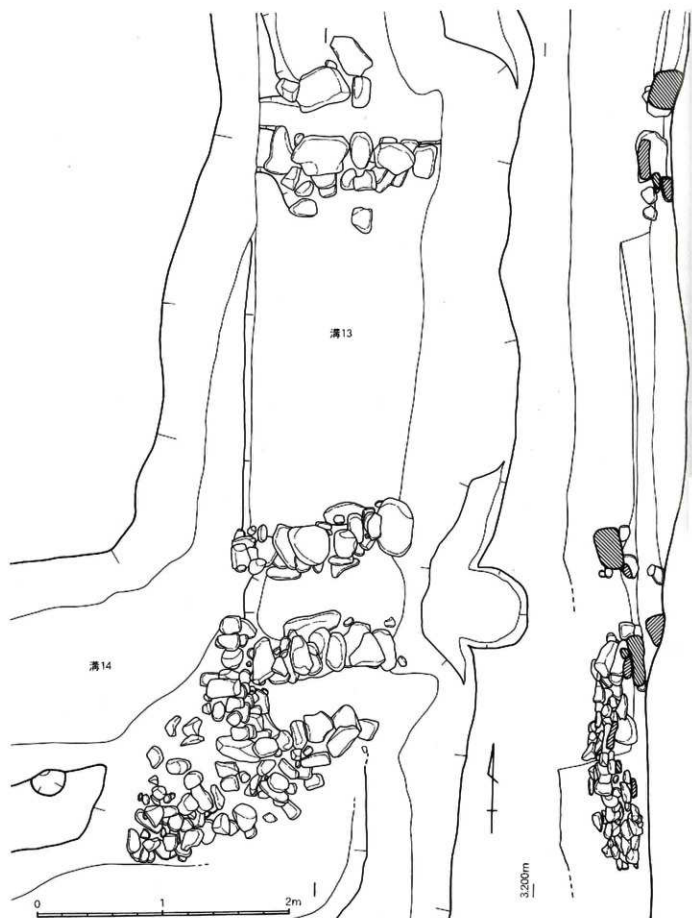
厨館内部の近接する場所に五輪塔などが並んでいたことも考えられる。土器などから（第621～629図）、溝13は16世紀後半にはほぼ埋没したものと思われる。なお、溝13を切る溝15については後段で詳述する。溝13内部の遺構については、溝14でみられたような石組みが南東コーナー部で確認された（第618図）。石組みは一部崩壊している部分もあるが、南東コーナーを曲がり東辺に入った所に3列、さらに約2.5mあけて2列がみられる。石組みの石は0.1～0.45m程のものが使用されており、溝14の石組み遺構に比べると大型の石材が目立つ。石組みは溝14と同様に溝を仕切るようなかたちでみられ、現状で最大3段の積み上げが確認できる。積み上げは基本的に底面からなされるが、全体として整然さに欠ける。

・溝16

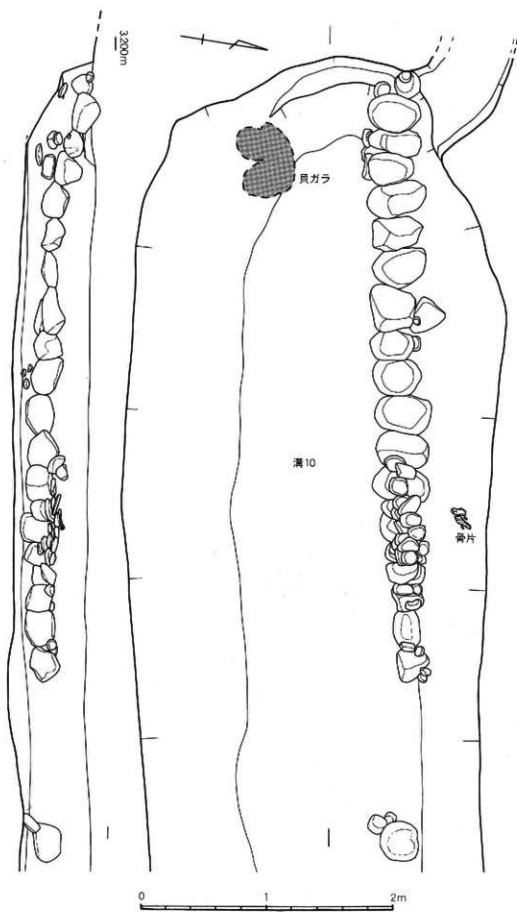
溝16は、長方形に廻り居館1を形成する溝13の西外側にみられる。溝13と平行して走るものであるが、大部分は調査区外に及び、南西コーナーに近い部分のみが検出された。溝の幅は0.8～2.0mで、南西コーナーに近づくほど細くなる。溝は掘り直しが一度確認され、当初の溝（溝16b）がほぼ埋没した段階で、規模を縮小した溝（溝16c）が掘られる。溝16cは幅1.4mで、幅、深さとも当初の溝16bに比べると圧倒的に劣る。居館1の南側には、溝13の外側に平行して走る溝10がみられる。溝16と溝10は直交する位置関係にあり、溝10にも明らかな掘り直しが一度認められる。溝16bが溝10bに、また溝16cが溝10cに各々対応するものと思われる。溝16と溝10が接するコーナー部の状況は、溝16bと溝10bの段階はわずかに離れており、通路としての機能をもっていたものと推定されるが、溝16cと溝10cの段階には両方の溝をつなぐ感じで小溝が設けられる。し



第617図 八坂中遺跡溝14内石組み遺構



第618回 八坂中遺跡溝13内石組み遺構



第619図 八坂中通跡溝10内石組み遺構

かし、浅いものであるため、この場所を通路としても差し支えないと思われる。また、上層①（第615図）により溝16の埋没状況を観察したが、溝16b及び溝16cの段階とも上層の位置を推定するまでにはいたらなかった。溝16からの出土遺物は小破片で量的にも少ない、そのため溝の時期を細かく特定することはむづかしく、15、16世紀以降の築造であることを確認できるのみである。

・溝10

溝10は、居館1の南西コーナー部から始まり、居館1の南辺、居館2の南辺と東辺、さらに居館3の南東コーナーから東辺まで続く長大なもので、その長さは100mを越す。ここでは、溝10のうち居館1の隣接部分についてのみ紹介する。溝10は、居館1を囲む溝13とは0.5～1.0mの間隔をもち平行に走る。居館1の南西コーナー部では、溝13が内側に屈曲するため、溝10と溝13の間隔は最大5mとなる。また、溝13より古い溝14の段階では、溝10と溝14の間の長さは、約2mである。土層③（第615図）をみると、確実に掘り直しが一度認められる。上層の溝10cは、土層③の地点で幅3.6m、深さ0.5mの規模をもつ。溝10cは、居館1を囲む溝13を切っており、溝13がほぼ埋没した段階で掘られていることが分かる。溝10cは居館2方向に直線的にのび、加えて居館1と居館2の間方向にT字状に分かれる。溝に沿う上層の有無については、土砂の流入状況を観察しても確定しがたい状況であるが、可能性として溝の北側にあったとも読み取れる。下層の溝10bは、北側に隣接する溝13、溝14と並存するものと考えられる。土層③では確認できないが、居館2南辺から南東コーナーにかけて設定した上層④（第638図）や土層⑤（第639図）では、溝10bの下層に溝10aを認めることができる。居館1の南側部分でも、当初は溝10aがのび、溝14などと並存したものであろうが、溝10bの掘削によりその存在は確認できないものとなった。溝10内の遺構としては、溝10の西端から約4.5mにわたり石列がみられる。石列は溝10bに伴うもので、0.25～0.5mの石材を用いている。北側の下端に沿うように並べられたもので、基本的に一段のみである。護岸施設に係わるものであろう。溝からは土器片や石製品が検出された。それらから、溝10bの埋没が16世紀後半～末に、また溝10cの埋没が唐津系の出現する16世紀末に比定できる。

・出土遺物

溝14

出土遺物（第620図）のうち1236、1237は瓦器片である。1236は東回東型瓦器片で、13世紀後半～14世紀初のもの。1237は口縁部で、内外面にミガキがない。1238は瓦質のこね鉢か。15、16世紀のものであろう。



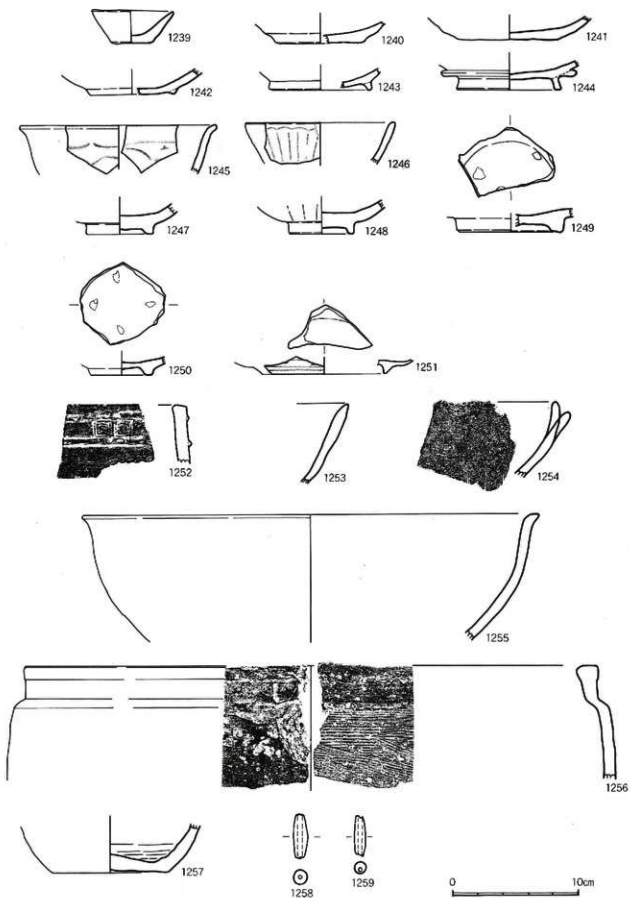
第620図 八坂中遺跡溝14出土土器

溝13南辺

土器（第621図）のうち1239～1241は土師質土器である。1239は小皿で口径に比し器高が高く、体部を斜方向に立ち上げる。国東半島地域では、15世紀後半以降器高の高い杯が出現する。中世大友府内町跡や臼杵などでも同様な時期から、器高の高い杯がみられるようになる。これらの地域では、国東半島地域とは異なり内外面にロクロ痕を残す。国東半島地域ではロクロ痕がみられず、杯に伴い別形態の小皿が伴出する。本品から法量分析の可能性が考えられる。时期的には16世紀前半か。1240、1241は杯の底部であるが、形態や底径から1240は14世紀代、1241は11、12世紀代に比定される。

1242は、豊前型の瓦器片である。底部に断面三角形の高台が付される。

1243、1244は内黒土器片である。1243は断面方形のやや低い高台が外開きに付される。1244は体部下に鈎が付くものである。高台は細く、高めである。1243が12世紀代、1244が11世紀代か。

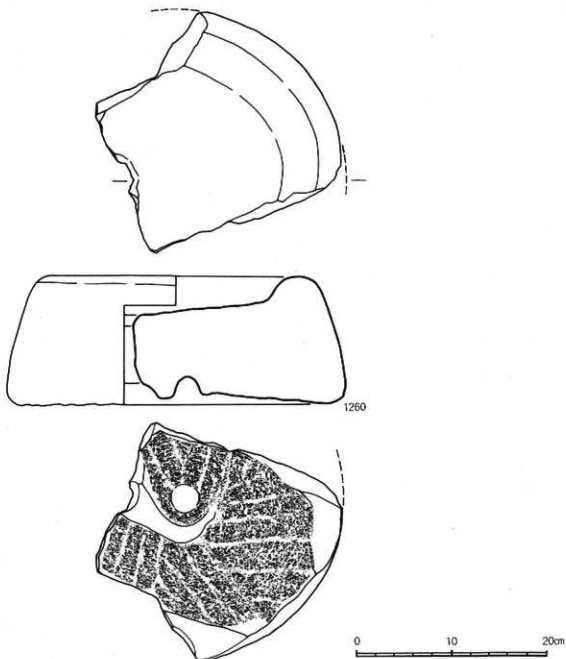


第621圖 八坂中遺跡溝13南辺出土土器

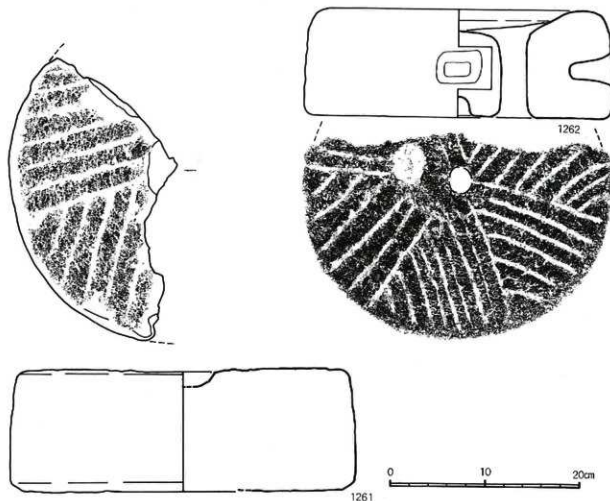
1245～1251は輸入陶磁器である。1245～1249は青磁碗で、このうち1245は口縁部が緩やかな端反りである。1246は、外面にヘラ描きによる剣先蓮弁文をもつもので、剣頭はやや乱れ気味である。1249は底部で、見込み部に胎土目の目積み痕が残る。1250は白磁碗で、やはり目積み痕が見込みに残る。1249、1250は朝鮮産と思われる。1251は青花皿で、口縁直口するものであろう。以上のうち、1245、1246、1249、1250は15、16世紀代に、また1251は16世紀後半に位置付けられる。

1252は瓦質土器火鉢である。口縁内側はわずかに肥厚し、外面には口縁下に2条の突帯が付される。突帯間には雷文のスタンプが配される。16世紀中頃までに主体を潰くものである。

1253は土鍋と思われるものである。1254は播鉢である。体部から大きく内湾して口縁にいたるもので、片口をもつ。内面にヘラ描きによる摺目が施されるが、間隔のあいたものである。1255は鉢である。口縁端部が外反



第622図 八板中遺跡溝13南辺出土石製品(1)



第623図 八坂中遺跡溝13南辺出土石製品(2)

し、端部は尖り気味である。1253と1254の時期は不明であるが、1255は16世紀代のものである。

1256は瓦質土器である。直立気味の体部が頸部ちかくで短く内傾した後に、頸部が口縁にむかい直立するものである。口縁端部上面は平坦で、外面はわずかに口縁帯を形成する。体部内面にはハケメがみられる。16世紀後半のものか。1257は偏前焼底部である。

1258、1259は土鍾である。

石製品(第622、621図)は、いずれも挽白である。1260は上臼である。天場のくぼみは供給口にむかい深くなっており、その深さは4.5cmである。下面中央には芯棒受けがあり、それを中心に目が配置されている。ふくみは1cm割を測る。小破片のため明確ではないが、6分画か。1261は下臼である。1262は上臼である。下面はふくみをほとんどたず平坦である。中央に芯棒受けがあり、その横に供給口がみられる。口は6分画で、放射状に配された主溝から、右上がり、副溝が木ないしは8本彫られる。また、側面には角穴の挽手穴がみられる。天場の深さは最大で2cm強を測り、供給口にむかい深くなる。

溝13東辺

土器(第624、625図)のうち、1263は上師質土器である。口縁部を欠くが、口径に比して器高の高いものである。内面に幅広いのロクロ痕が残る。15世紀後半以降のものか。

1264～1269は輸入陶磁器である。1264は色絵の杯で、口縁部は端反りである。文様には赤色や緑色を用いる。1265は青花碗で、底部が饅頭心タイプのものであろう。16世紀中頃以降に主体を置くものである。1266は口縁端反りの青花皿で、16世紀前半までに主体を置く。1267は青花皿である。口縁直口するものと思われ、16世紀

後半のものである。1268は白磁の坏で、口縁部は端反りの形態をなす。1269は青磁桜花皿で、基本的には15世紀にその中心を置くものである。

1270は唐津系の碗である。底部の高台は、ケズリ出しで作りだされている。また、軸は外面下部には及ばない。時期的には、16世紀末のものである。これについては、溝13を切る溝15からの混ざり込みの可能性がある。

1271～1273は瓦質上器火鉢である。1271は口縁部で、口縁部外面を肥厚させない。口縁下には2条の突帯を付し、その間にスタンプ文を配する。16世紀中頃までに主体を置くものである。1272、1273は底部で、脚が付される。1272は板状の貼り付けを行い脚とするものである。また、1273は板状の貼り付けに加え、さらに長方形の粘土を付加することにより裝飾性を高めている。形式的には1273→1272の順で変化するものと思われる。両者とも16世紀中頃までに主体を置くものである。

1274～1277は土鍋である。1274は直口口縁を呈するものである。外面には横方向のケズリがみられる。時期は明確にしがたいが、外面のケズリから15、16世紀のものと思われる。1275は口縁部付近に強いココナデが施されるため、わずかに外に折れ段が付く。端部は上方につまみ上げられる感じで、断面三角形気味を呈する。また、体部外面にはケズリがみられる。16世紀代に比定される。1276、1277は脚であるが、時期は所定しがたい。

1278～1283は備前焼鉢である。1278は口縁部があまり発達しておらず、上方にやや引き上げられた感じのものである。内面の摺目は8本単位である。14世紀後半から15世紀初の時期か。1279は小型品である。口縁は上方に長く引き上げられた感じである。内面の摺目は4本単位である。15世紀前半か。1280は厚みのある口縁部で、端部内側が内傾する。体部はわずかしか残存しないが、内面全体に摺目がみられるようである。16世紀末～17世紀初のものか。この1280は、溝13を切る溝15からの混ざり込みである可能性がある。1281～1283は底部資料である。内面の摺目は、1281が7本、1282が9本、1283が10本である。

1284、1285は瓦質の甕である。1284は、口縁端部を上方に引き上げ気味で、端部にむけ厚みを増す。体部内外面にはハケメが施される。1285は口縁端部を玉縁状にする。

1286～1288は備前焼の甕である。1286は口縁外面の玉縁が、わずかに下方に垂れる。1287、1288は底部である。

1289～1292は土甕である。欠損品を除き、長さは2.6～4.9cmである。

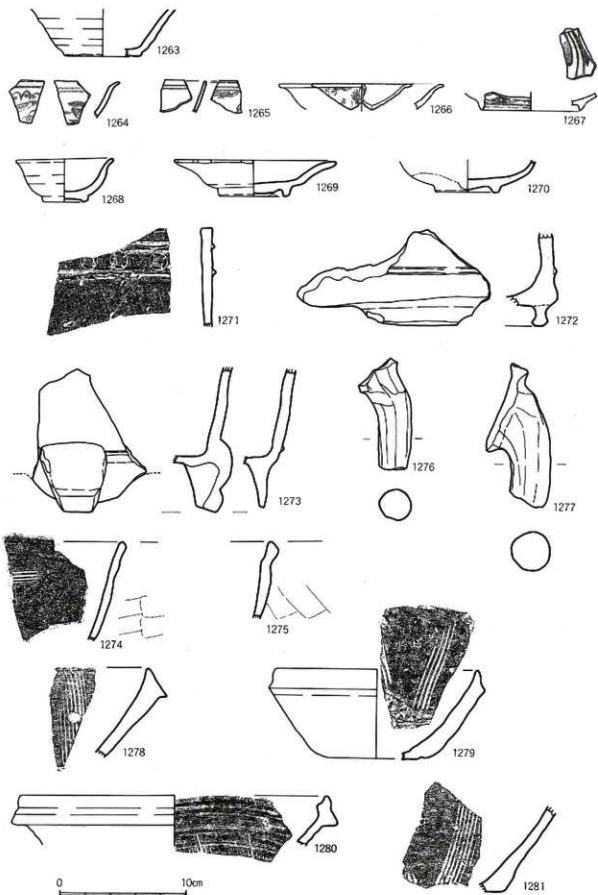
石製品(第625～629図)のうち、1293は砥石である。裏面とも顕著な使用が認められる。

1294～1297は凹石である。長径17～28.5cmの円鏡を使用したもので、いずれも片面をくぼませる。1297については、くぼんだ部分が2ヶ所認められる。

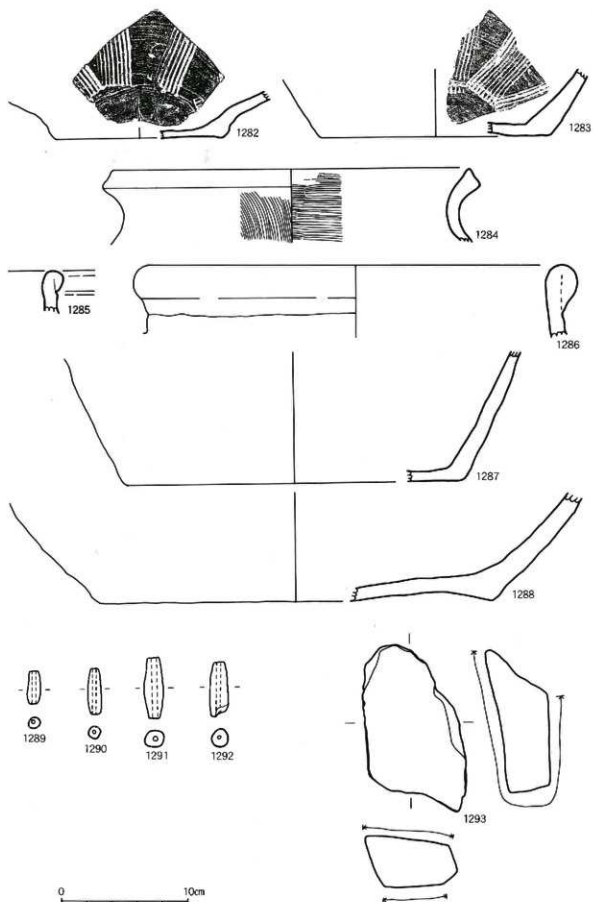
1298、1299は石臼で、両者とも挽口の臼である。1298の天場は供給口にむかい深くなっており、その深さは4.6cmを測る。下面はほとんどふくみをもたず、ほぼ平坦である。しかし、小破片のため目の分割数などは不明である。1299の天場は丸い供給口にむかい深くなっており、その深さは3cm弱である。側面には角穴の挽手穴が確認される。下面のふくみは0.6cmほどで、目は6分割であったと思われる。放射状に主溝を配し、主溝から右がりの副溝を5本前後設ける。全体として目は雑な感がある。

1300～1306は五輪塔である。このうち1300、1301は宝珠で、五輪塔空・風輪と考えられる。1300は柄を欠損するもので、空輪部はかなり扁平である。空・風輪部の境界の表現もかなり雑なものとなっている。1301は空・風輪部の境界の表現も明瞭で、空輪部の高さも高い。1302、1303は火輪部である。1302は軒口がやや厚く、反りもやや急である。上面には、塔空・風輪を受ける柄穴がみられる。1303は、軒の下部に垂木状の造り出し、加えて上部に露盤をもつ。軒の反りは、直線的で急である。1304、1305は地輪部である。1304は無段のもので、柄穴などはみられない。1305は上面に段を有するもので、段には連弁文を彫り出す。剥落等が著しいが、連弁文は複弁八葉で間弁はもたないようである。中央に柄穴があり、下面からは大きく挟り込む。1306は火輪部で、上面に段を有する。四方に梵字を配していたようであるが、剥落が著しく2ヶ所しか読むことができない。

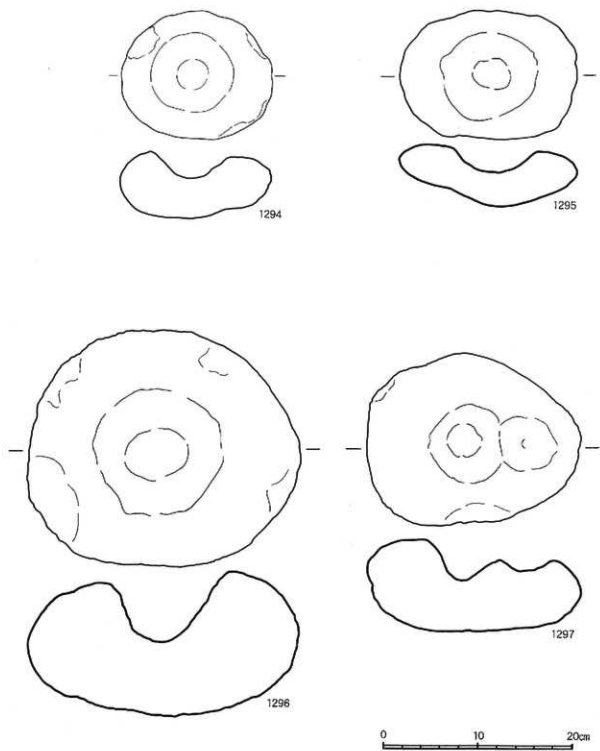
1307(第630図)は刀子で先端部を欠損する。刃幅は1.2cmと細身である。



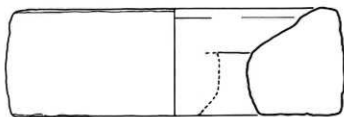
第624图 八坂中遺跡溝13東辺出土土器(1)



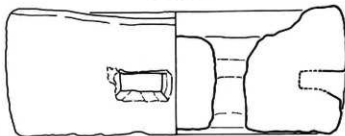
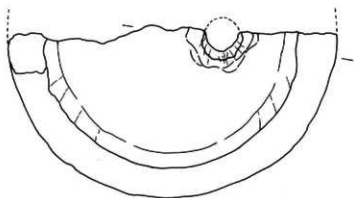
第625圖 八板中遺跡溝13東辺出土土器(2)、石製品(1)



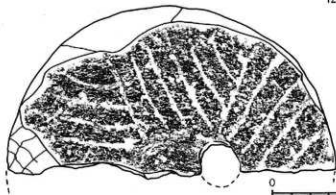
第626圖 八坂中遺跡溝13東辺出土石製品(2)



1298

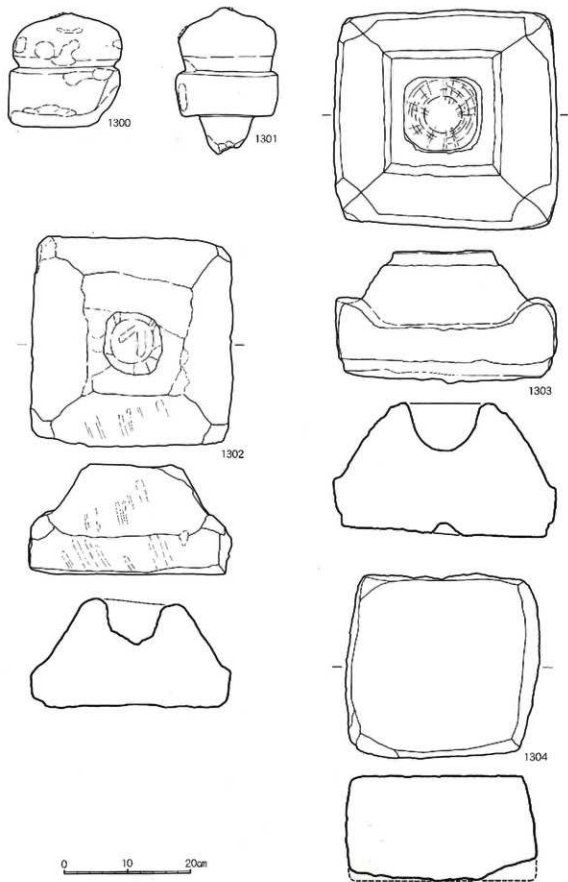


1299

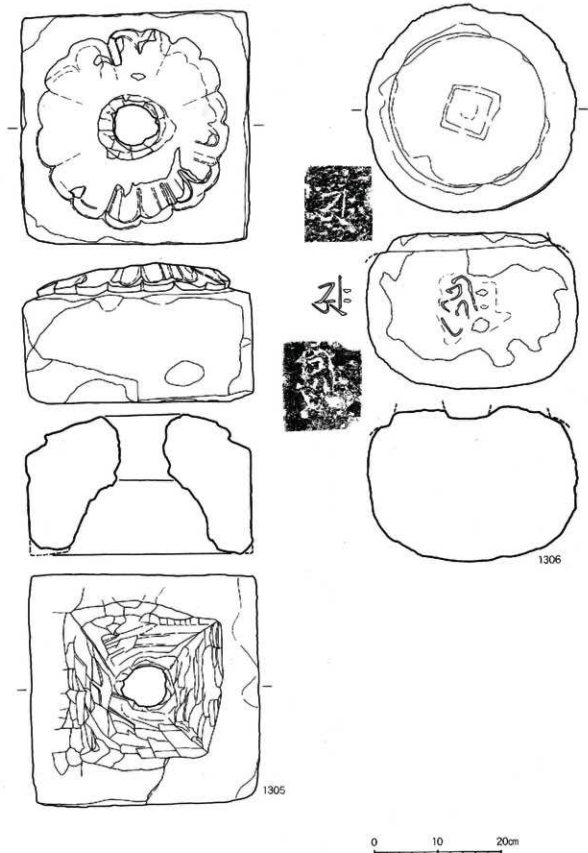


0 10 20cm

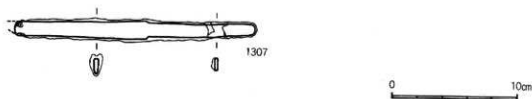
第627圖 八坂中遺跡溝13東辺出土石製品(3)



第628圖 八坂中遺跡溝13東辺出土石製品(4)



第629圖 八板中遺跡溝13東辺出土石製品(5)



第630図 八坂中遺跡溝13東辺出土鉄製品

溝16

溝16から検出された遺物は少ない(第631図)。1308は瓦器碗底部である。東国東型瓦器碗でも、明確な平底を呈する段階のものである。13世紀後半～14世紀初のもの。1309は白磁碗。1310はへら構きによる剣先速弁文で、15世紀から16世紀前半に主体を圍くものである。



第631図 八坂中遺跡溝16出土土器

溝10 (居館1～居館2南側)

土器(第632、633図)のうち、1311と1312は土師質土器小皿である。いずれも底部糸切りで、復元口径は8.6～8.8cmである。立ち上がりは比較的シャープで、13世紀代のものである。

1313と1314は土師器碗である。1313は高台が高く、11世紀代のものであろう。1314は小型品である。底部を丸く押し出し、高台を貼り付ける。12世紀代のものである。

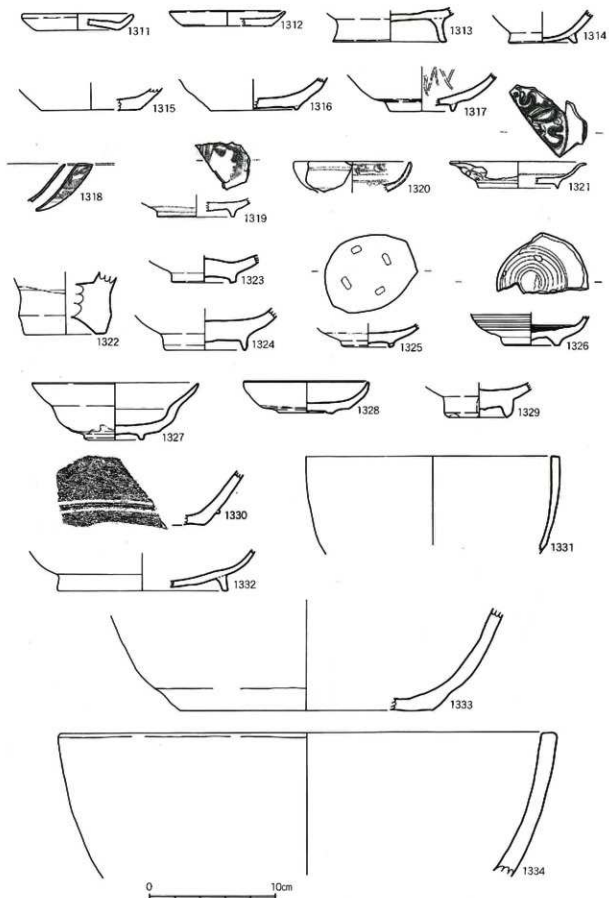
1315～1317は瓦器碗である。いずれも東国東型瓦器碗で、1315は完全な平底、1316は低い高台が付く。また、1317は内面にへらミガキがあり断面三角の高台が付される。1317が12世紀後半、1316が13世紀中頃～後半、1315は13世紀後半～14世紀初のものである。

1318～1325は輸入陶磁器である。このうち1318～1321は中国明代の青花である。1318は碗で、鮮やかな発色である。1319は碗底部で、蓮子碗と饅頭心碗の中間形態をなす。文様の発色は悪い。1320は直口口縁の皿である。文様は緑色に発色する。1321は端反り口縁の皿である。1321が16世紀前半までを主体に、1318が16世紀中～後半を主体に、1319、1320が16世紀後半以降に主体を各々圍くものである。1322は中国製白磁四耳壺の底部である。11世紀後半から12世紀前半のもの。1323、1324は中国製青磁碗底部である。1325は朝鮮製白磁皿底部で、見込みに目積み模が残る。15世紀代のものである。1326は朝鮮製粉青沙器碗である。15、16世紀に比定される。

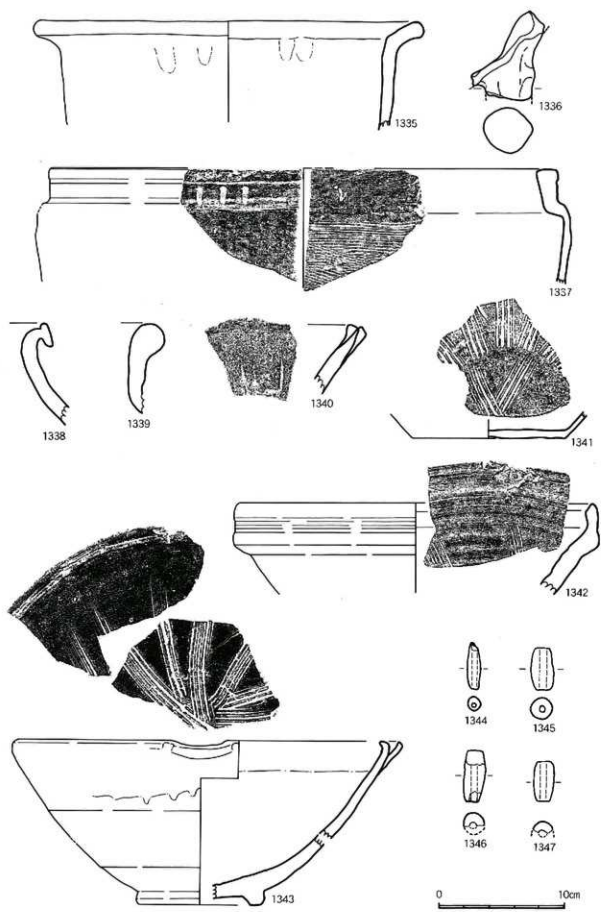
1327～1329は唐津系のものである。1327は岸岳系の製品と思われる。霽灰釉の発色は青白色で、加えて窯変でピンクがかった釉が流れる。1580～1590年代のものである。1328は皿である。外面高台部を除き緑色釉がかかる。16世紀末～17世紀初めのものである。1329は鉢あるいは皿の底部である。

1330～1334は瓦質土器鉢である。1330は火鉢と思われるもので、体部が斜方向に立ち上がる。器高の低いものと推定され、15世紀代にのぼる可能性をもつ。1331と1332は同一個体と思われる。比較的小振りのもので、体部が口縁にむけ直立気味に立つ。底部には高台が付される16世紀代のものであろう。1333はやや厚みをもつもので、高台などはもたない。1334は口縁部で、厚い器壁をもつ。

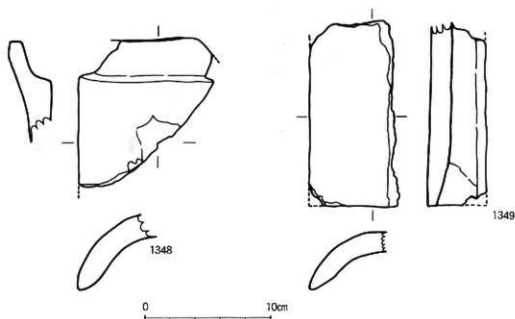
1335、1336は土鍋である。1335は体部が深めで、口縁は外に折れる。12世紀前半か。1336は脚である。



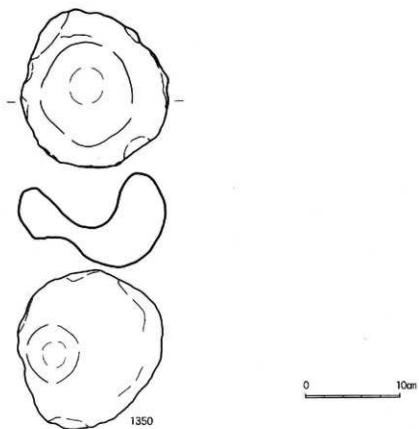
第632圖 八坂中遺跡溝10(居館1~居館2南側)出土土器(1)



第633図 八坂中遺跡溝10(居館1~居館2南側)出土土器(2)



第634図 八坂中遺跡溝10(居館1～居館2南側)出土瓦



第635図 八坂中遺跡溝10(居館1～居館2南側)出土石製品

1337～1339は甕である。1337は瓦質で、直立する体部から短く内側に折れ頭部にいたる。頸部には列点文状の沈線が施され直立する。口縁部は若干肥厚し、口縁帯を形成する。体部内面にはハケムがみられる。16世紀代か。1338は常滑焼で13世紀後半から14世紀のもの。1339は備前焼で、14世紀代のものか。

1340～1343は摺鉢である。1340は防長系の可能性をもつもので、口縁内面が二角形状にわずかに肥厚する。1341は瓦質のもので、内底面にも摺目が施される。1342は備前焼である。口縁外面に凹線をもち、口縁端部は内傾する。16世紀代のもの。1343は唐津系のものである。底部には削りだしの高台が付き、口縁部は短く内湾する。口縁部内外面のみ灰軸が施軸される。摺目は内底面から体部にかけて放射状にみられ、摺目の単位は3～5本である。

1344～1347は土鍾である。

1348、1349（第634図）は、ともに丸瓦である。

1350（第635図）は四角形である。門縁の内面にくぼみがみられ、深い方は深さ5cmを測る。

以上のうち、溝10cに伴うと思われるものは、1312～1314、1316、1325、1327～1332、1335、1340、1343、1350である。なかでも、唐津系の1327～1327、1343は、溝10cがT字状に分かれる位置から集中して検出されている。

(11) 厩館2

厩館2（第636図）は、厩館1の東側に位置する。溝11により方形に囲まれるもので、その規模は溝の内側で、南北32～35m、東西26～29mを測り、南北方向がわずかに長い。さらに、厩館2の北側には、厩館3が1～2.5mの間隔をもち隣接しており、南側と東側は厩館1の南側から続く溝10が溝11の外側を平行しながら走る。厩館を囲する溝には掘り直しも認められることから、厩館自身も何段階かの変遷があったものと考えられる。

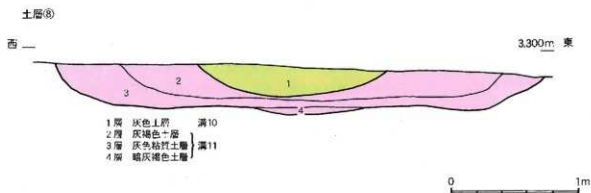
・溝11

溝11は各辺で幅が異なり、北辺で2.5～3.0m、西辺で2.0～2.5m、南辺で0.8～1.0m、東辺で0.8～1.5mである。深さについても南辺と東辺の南半分は0.2mほどと、他に比べると著しく浅い。溝は北辺の中央からやや西寄りの位置、及び北東コーナーで切れており、通路の役割を担ったものと考えられる。以下では、溝の掘り直しや切り合い関係をみていくが、西辺では上層⑤（第616図）で分かるように、溝11及び厩館1を囲む溝13、さらにそれを切る溝15（溝10c）が埋没した後に、溝11から溝13にわたる幅8m余にわたり、深さ0.5mの掘り込みがなされる。これは土層④（第615図）や土層⑧（第637図）ではみられず、西辺中程付近で終わっている。北側は上層⑥、上層⑦（第616図）でもみられることから、長さ40m余にわたっていたことが分かる。

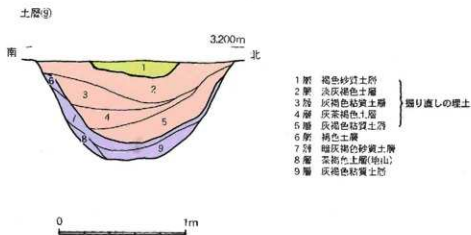
下部にマンガンの沈殿などもみられることから、水が溜まっていたことが想定され、水溜め的な性格を有するものであろうか。時期を決定できる遺物はないが、近世に入るものと思われる。同じような状況は東辺でもみられ、上層⑧（第639図）、上層⑨（第640図）で分かるように溝11と溝10にまたがる幅3.5～5.0mで、東辺全体にわたりみられる。しかし、東辺から曲がった南辺や北辺には及ばない。次に溝11自体をみてみると、土層⑤でみられるように確実な掘り直しがみられ、古相を溝11a、新相を溝11bとする。しかし、西辺の南端にある上層⑤では溝11aがみられず、このあたりでは溝11bの掘り直しのため溝11aの痕跡がのこらなかったものであろう。土層⑤では、溝11bと溝13を切り溝15が掘り込まれる。上層⑥では、溝11bと溝13を切り溝10cがみられる。溝15と溝10cは同一の溝と思われ、そのまま溝10にのび、T字状に分かれる。南辺から東辺にかけては、深さの高低はあるものの、溝11bのみが確認されることが上層⑧（第639図）や上層⑨（第640図）から分かる。北辺では土層⑩（第641図）、土層⑪（第642図）、土層⑫（第643図）で、溝11aののちに掘り直しの溝11bが掘られたことが分かる。上層⑥では、溝11bの後に溝15が掘られている。次に溝15間の土層であるが、溝11aの段階では、この層が残る北辺のみの状況ではあるが、溝の北側に土塁があったようである。溝11b段階では北辺の東半分は溝の北側に、また西辺は溝の西側に各々土塁が存在したものであろう。他の部分については不明である。溝の時期については厳密には確定しにくい。溝11bは少なくとも16世紀後半には埋没



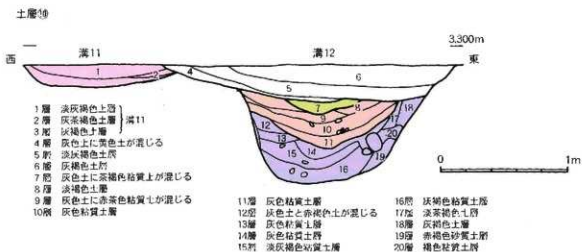
第636図 八坂中遺跡居館2



第637図 八坂中遺跡居館2周辺の溝土層図(1)



第638図 八板中遺跡居館2周辺の溝土層図(2)

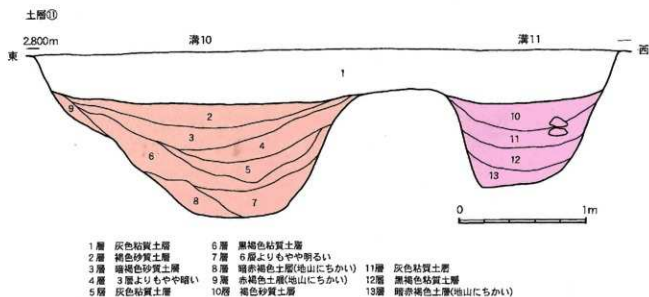


第639図 八板中遺跡居館2周辺の溝土層図(3)

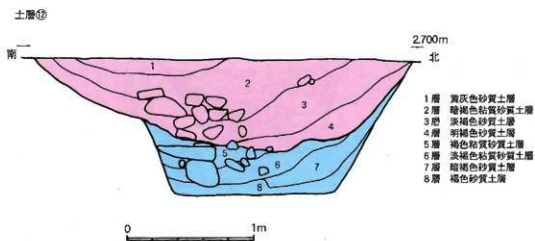
しているものと思われる。溝11 aについても16世紀代に埋設しているようで、その状況から掘削時期についてもそれほど遅らない時期であろうことが想定される。

・溝10

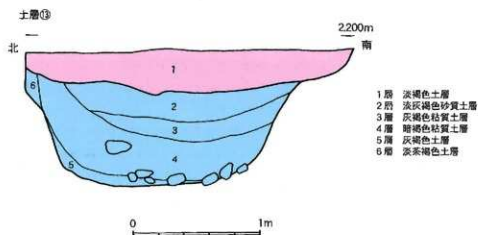
居館2の南側及び東側の溝10について説明する。南側では、居館2を形成する溝11とは0.5～1.0mの間隔をもち平行して走る。2本の溝は南東コーナーを曲がり、そのまま平行して東辺を走る。溝10の規模は、南辺で幅1.5～2.5m、東辺で2.0～2.5である。このうち、南辺から南東コーナーを曲がったあたりまでは、土層⑨(第638図)や土層⑩(第639図)にみるように確実に2度の掘り直しを確認できる。古い方から溝10 a、溝10 b、溝10 cである。溝10 cへは、溝11と溝13を切って掘られた溝15がT字状につきあたる。T字状につきあつた後、西へのびると幅を急激に広げるが、東方向には幅0.6～0.7mと幅を減じていく。東方向へは深さも0.2mしかなく、幅数m、深さ1m余を測る前代の溝とは隔絶の感がある。溝10 aに関しては、下層においてわずかに残るのみで、東辺ではその痕跡を留めない。溝に伴う土塁については、溝10 c段階では上層の観察からでは明らかでない。溝の規模から考えて、土塁と呼べるようなものは築造されなかった可能性が高い。溝10 bの段階では、南辺は溝の北側、すなわち溝10と溝11の間に土塁があったものと思われる。しかし、東辺では溝10



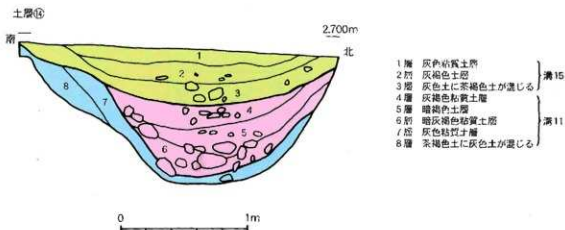
第640図 八坂中遺跡居館2周辺の溝土層図(4)



第641図 八坂中遺跡居館2周辺の溝土層図(5)



第642図 八坂中遺跡居館2周辺の溝土層図(6)



第643図 八坂中遺跡居館2周辺の溝土層図(7)

の東側にあった可能性が高い。清の時期は明確にしがたい部分も多いが、溝10cが16世紀末に、溝10bが16世紀後半から末に各々埋没していると考えられる。溝10aについても16世紀代に埋没していると考えられる。その状況から、掘削の時期も大きく遡らないものと理解される。

・出土遺物

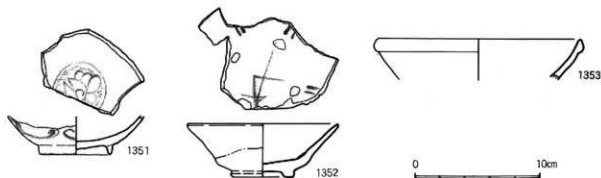
溝11南半

土器(第644図)は全体に少なく、図示できたものは3点のみである。1351は中国明代の青花碗である。文様は、輪郭を濃い細線で描き巾をダミで塗りつぶす方法ではなく、一筆描きで描く。底部は蓮子碗と饅頭心碗の中間形態をなす。時期的には、16世紀前半までに主体を置くものである。

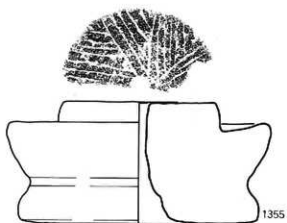
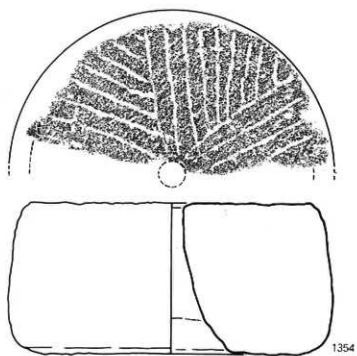
1352は唐津系の陶器碗である。内面には鉄絵による文様が描かれる。高台は削りだして、外面下半以外には灰緑色の釉がかかる。また、内底面には4ヶ所の目積み痕がみられる。16世紀末に比定される。本品は、溝11を切る溝15に属する可能性が高い。

1353は白磁碗である。口縁部が玉縁をなすもので、11世紀後半～12世紀前半に比定される。

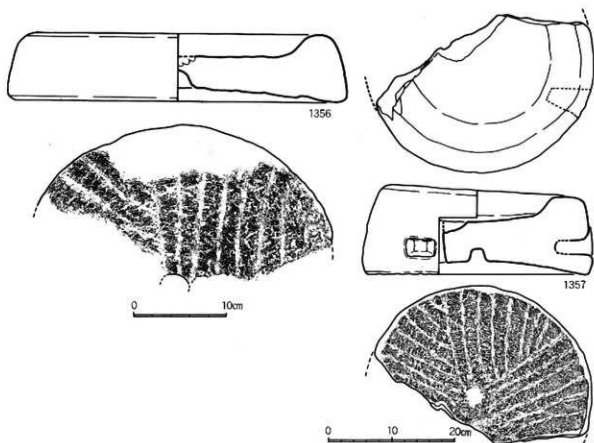
石製品(第645、646図)はいずれも石刀である。1354は挽臼の下臼である。中央に芯棒穴があり、穴は下部に行くにつれ径が大きくなる。目は6分割と思われる。1355は茶臼の下臼である。中央に芯棒穴があり目は8分面か。全体として整然さを欠くものである。1356は扁平な感を呈する挽臼の上臼である。下面には中央に芯棒受けがあり、ふくみは1.2cmを測る。破片のため明確ではないが、目は4分面と思われる。1357も挽臼の上臼である。天場は供給口にむかい深くなり、底面には挽手穴がある。下面は中央に芯棒受けがあり、目は6分割と推定される。



第644図 八坂中遺跡溝11南半出土土器



第645図 八坂中遺跡溝11南半出土石製品(1)

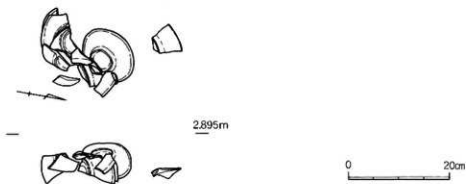


第646図 八坂中遺跡溝11南半出土石製品(2)

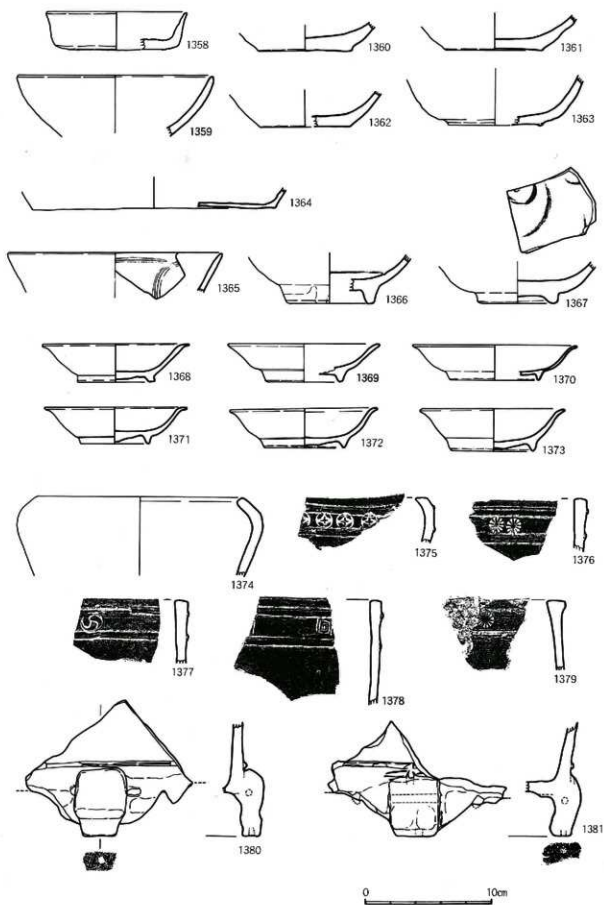
溝11北半

溝11北半の遺物については、上層観察の不備から、一部を除き溝の掘り直しに対応した取り上げができていない。土器（第648、649図）のうち、1358は土師質土器杯である。体部が直立気味に立つもので、15世紀前半のものか。

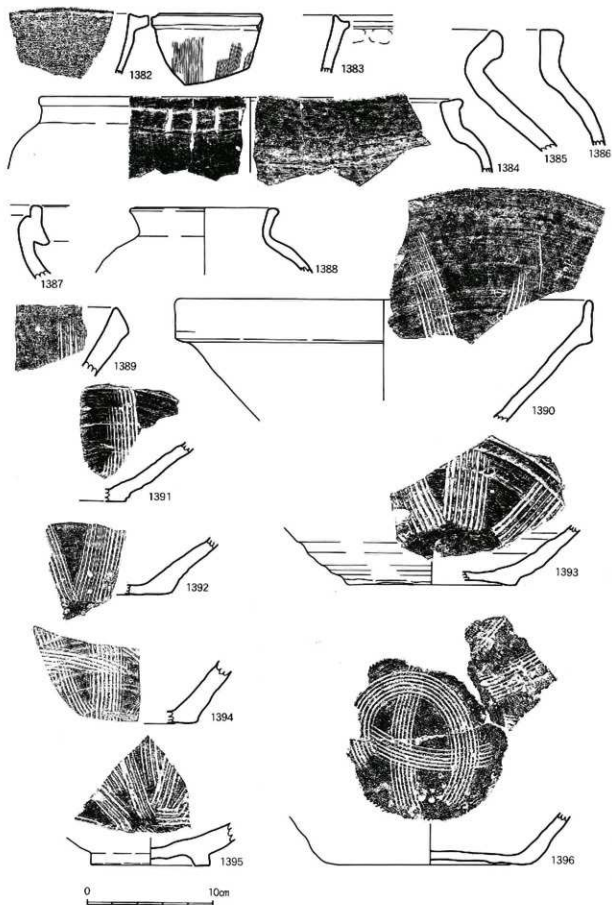
1360～1363は東国東型瓦器碗である。1360～1362は13世紀後半～14世紀初。1363は13世紀中頃であろう。1364～1373は輸入陶磁器である。1364は比較的薄手の陶器底部で、朝鮮製の可能性をもつ。1365～1367は



第647図 八坂中遺跡溝11内白磁皿出土状況



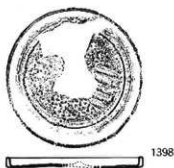
第648圖 八板中遺跡溝11北半出土土器(1)



第649图 八坂中遺跡溝11北半出土土器(2)



第650図 八坂中遺跡溝11北半出土瓦



第651図 八坂中遺跡溝11北半出土銅鏡

龍泉窯系青磁碗で、このうち1365は12世紀後半のものである。1368～1373は白磁皿である。これらは、溝11北辺中央付近にある上橋から西へ約6mの地点から検出された(第647図)。検出面付近に完形品が重なるような状態であったようだが、バックフォーにひっかけたため、旧状を大きく損なった。周囲を精査したが掘り力は確認できなかった。土器はいずれも口縁部端反りのもので、口径は11.1～11.8cmである。16世紀前半までに主体を置くものである。

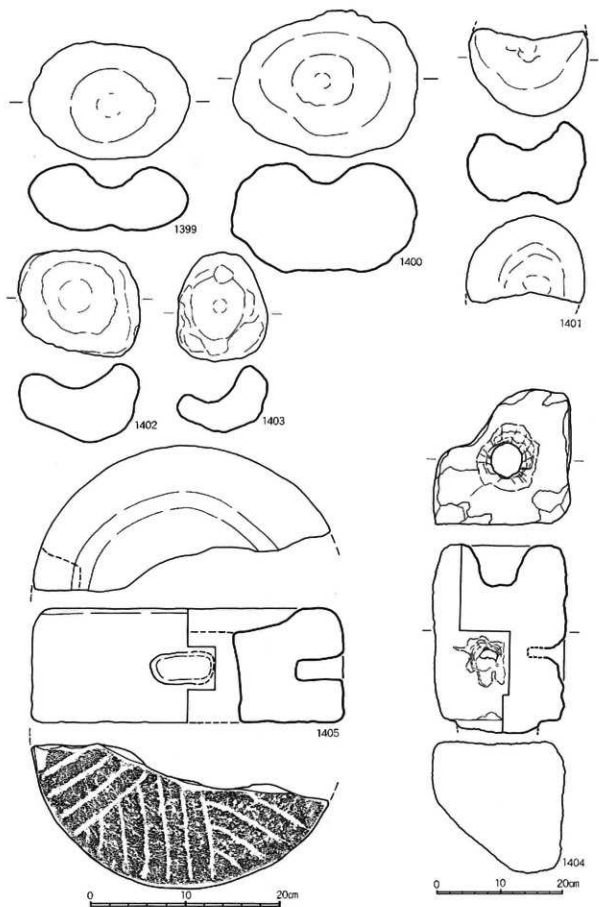
1374～1381は瓦質土器火鉢である。1374は口縁部が内湾するもので、類例は少ない。1375は緩やかに内湾し、外面の突帯間にスタンプ文を配する。1376～1379は深いもので、やはり口縁下の突帯間にスタンプ文を配する。以上のうち、1376～1378は口縁が肥厚せず、1379は口縁外面が肥厚する。時間的には前者が16世紀中頃までを主体にし、後者は16世紀後半以降に出現する。1380、1381はともに底部で脚が付く。脚は削り出して装飾をつけた板状の粘土の中央に、さらに方柱状の粘土を付加したもので、16世紀前半までに主体をおくものである。

1382、1383は上鍋で、両者とも鈎が口縁部付近にある。13世紀後半～末に比定されよう。

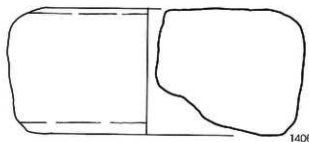
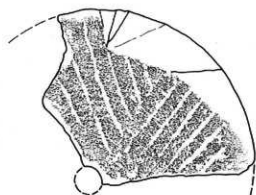
1384～1387は甕である。1384～1386は瓦質で、このうち1384は、直立する頸部に列点状の沈線が3本単位でみられる。16世紀後半か。1387は常滑焼で14世紀に入るものか。

1388は備前焼の壺か。

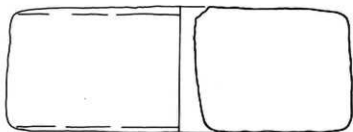
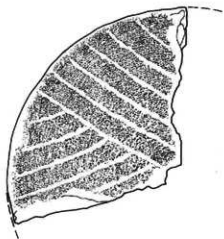
1389～1396は播鉢である。このうち1389～1394は備前焼である。1389は14世紀代、1390は15世紀代、1391～1393は摺目の数から15、16世紀に各々位置付けられる。1394は斜行の摺目が入っており、16世紀後半に比定される。1395は溝11の北辺上層から出土しており、溝15にともなう可能性が大きい。唐津系のもので、



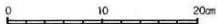
第652図 八坂中遺跡溝11北半出土石製品(1)



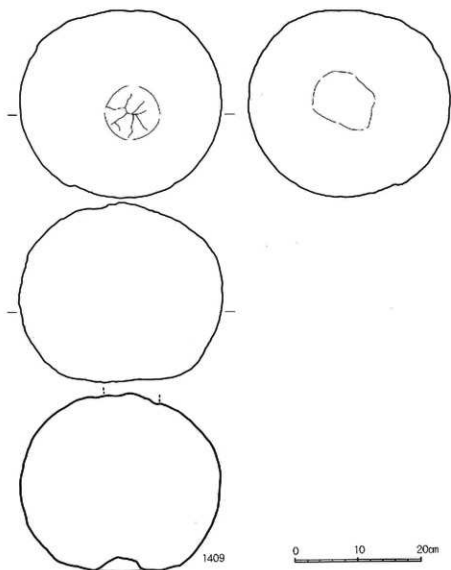
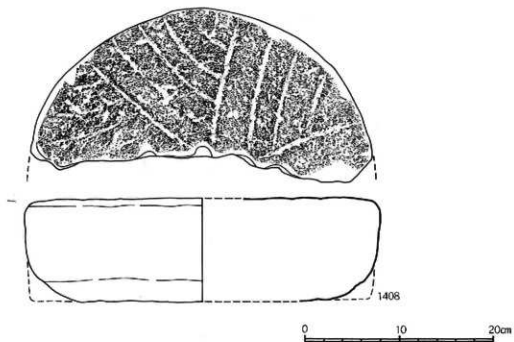
1406



1407



第653圖 八坂中遺跡溝11北半出土石製品(2)



第654回 八坂中遺跡溝11北半出土石製品(3)

溝10の1343と同一一体化か。1396は暗灰白色を呈する瓦質のもので、防長系の可能性をもつ。

1397(第650図)は丸瓦片である。内面に布目が残る。

1398(第651図)は和鏡である。溝11の北東コーナー部から廃棄された状態で検出された。紐の部分が打ち欠かれており、残存する鏡面はめくれあがる。文様の鋳出しは不鮮明である。12、13世紀代のものか。

石製品(第652~654図)のうち、1399~1403、1409は凹石である。いずれも円盤の片面あるいは両面にくぼみを作っている。

1404は石塔の部材と思われる。柱状を呈し、上面には上部の部材と接続用の穴が穿たれる。また、下面には段が付く。

1405~1408は挽臼である。1405は上臼で、側面には挽手穴が穿たれる。目は6分画と思われる。1406~1408は下臼である。いずれも6分画と思われるが、1408は主溝から右上がりに施される副溝が3~4本と、他に比べ少ない。

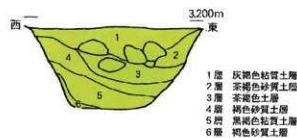
(12) 居館3

居館3(第657図)は、居館1の東側に居館2とともに南北に並ぶように位置する。居館は溝12により囲われており、方形基調を呈する。その規模は溝の内側で、南北28~31m、東西32~35mを測る。規模的にはわずかに居館2よりも大きい。ほぼ同様な規模であることが分かる。居館の配置をみると、居館1の南辺延長上に居館2の南辺が、また居館1の北辺延長上に居館3の北辺が各々くるように築造され、さらに3基の居館全体を溝10、溝16で囲うという極めて計画的な配置がうかがえる。しかし、居館2が南北方向に長く、居館3が東西方向に長い。居館2と居館3の東側ラインは直線にはならず折れが生じている。居館3については、北辺の西半に溝が及んでないことから、この部分が居館の出入り口機能を有するものと想定される。居館1と居館3の北側は、居館に沿って東西方向に溝構空白部があり、道であったと思われる。居館3は道に面して、大きく出入口を開けている。

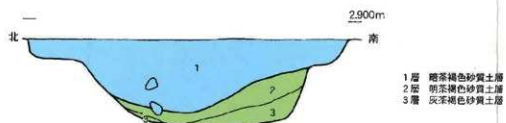
・溝12

溝12についても、何度か掘り直しが認められる。最も新しいものは、土層23(第659図)の最上層にみられるものである。しかし、この層は土層21(第656図)や土層24(第659図)ではみられず、溝12東辺北半のみに限られたものであることが分かる。これは、居館1と居館2・居館3の間の溝1層などにみられたものと同様なものと思われ、居館廃絶後に水溜めの機能をもつものとして掘られたものであろう。时期的には、近世に下ると考えられる。溝12本体としては、掘り直しを1度確認できる。下層を溝12a、上層を溝12bとする。溝12aは、北辺から東辺にかけてと西辺の一部に残存する。北辺では、中程の上層100付近から始まる。溝12bは約7m西から始まっており、当初段階とは始まる位置が異なる。溝12aは、上層24、上層23、上層21(第656図)で確認され、幅約4m、深さ0.7~1.0mの規模をもつ。しかし、東辺の中程からは幅を狭く減じていくようである。また、西辺の土層⑦(第616図)でも、わずかに確認される。下層部しか残存しないが、幅2m強を測る。南辺の大部分では、掘り直しの溝12bの掘削により、溝12aは痕跡を留めないが、幅2~3mの規模をもち全周していたものと推定される。土層24や土層23では溝12a自体に掘り直しの可能性をもつ層が認められ、一部ではさらなる掘り直しがあったことも考えられる。また、各土層とも居館内側からの土砂の流れ込みが顕著で、溝12aに沿うように内側に土層が築造されていたものであろう。溝12aの埋没は、遺物から16世紀後半であったと思われる。この溝12aの大半が埋没した段階で、溝12bが掘削される。北辺では溝12aのさらに西から始まる。上層100に切られるが、溝12aの北端を走るのが土層24で確認される。しかし、規模は幅1.4m、深さ0.3mで、当初の溝12aに比べると大きく縮小する。東辺にはいっても、溝12aの最も外寄りを幅1.5~2.5mとやや規模を広めながら走ることが、土層23や土層21で分かる。土層⑨では、溝12aとほぼ同じ幅となり、南辺の土層⑨(第658図)や、土層⑩、⑪、⑫(第655図)では、溝12aの痕跡が残らないほどに掘削し、幅2~3mの規模を有していたことが見て取れる。また、西辺の土層⑥、⑦(第616図)では、溝15

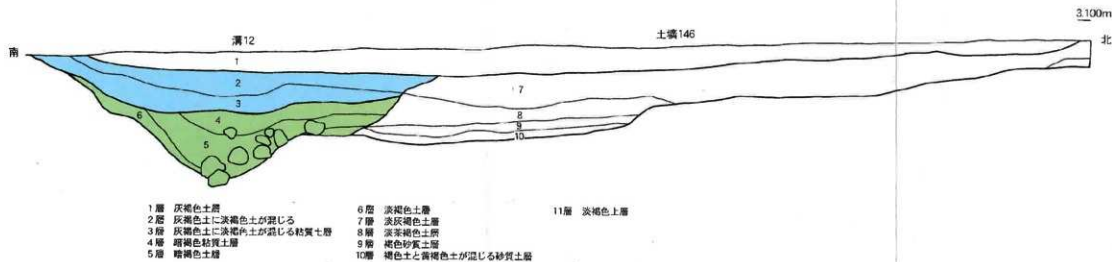
土層⑤



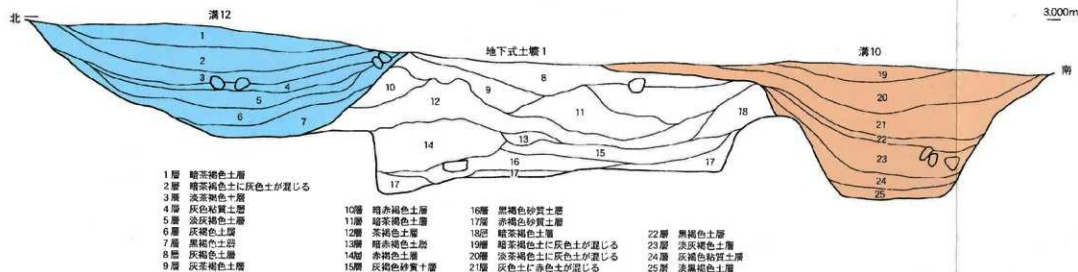
土層⑥



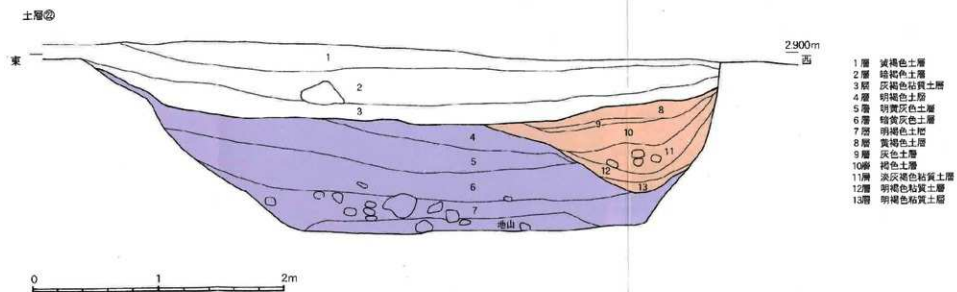
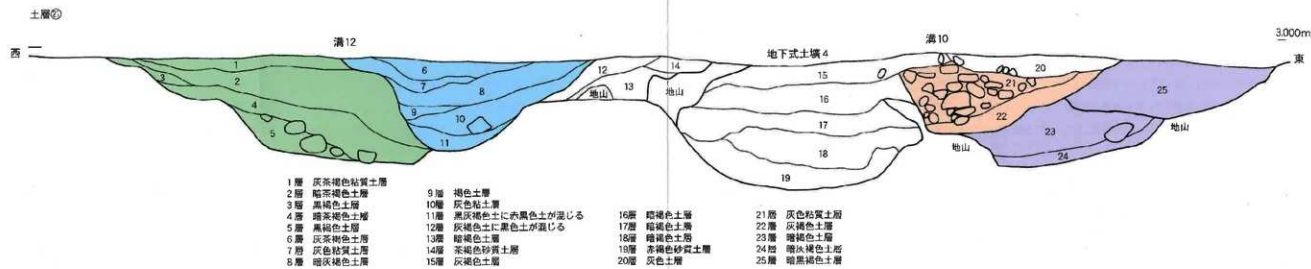
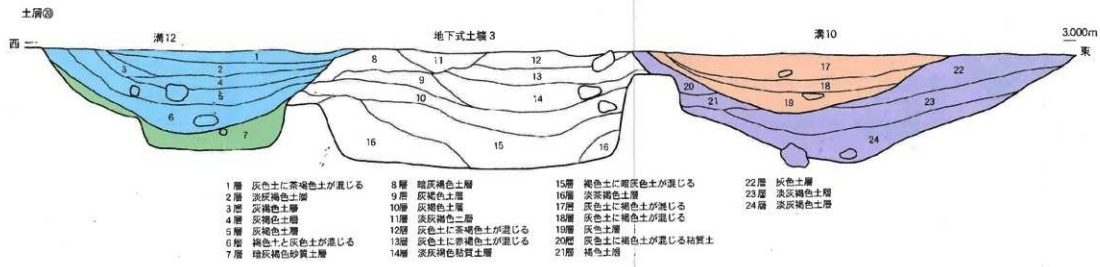
土層⑦



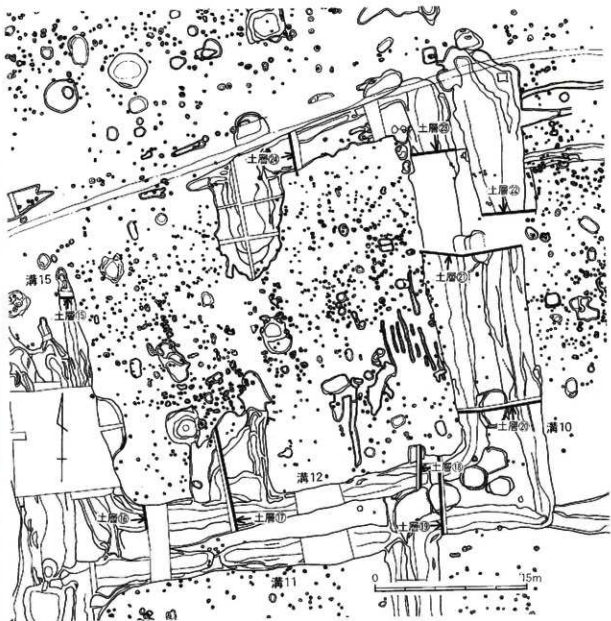
土層⑧



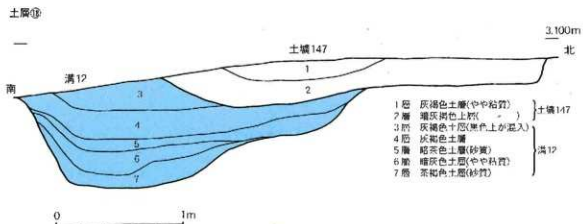
第655図 八坂中道跡居館3周辺の溝土層図(1)



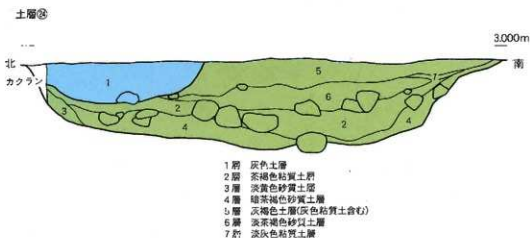
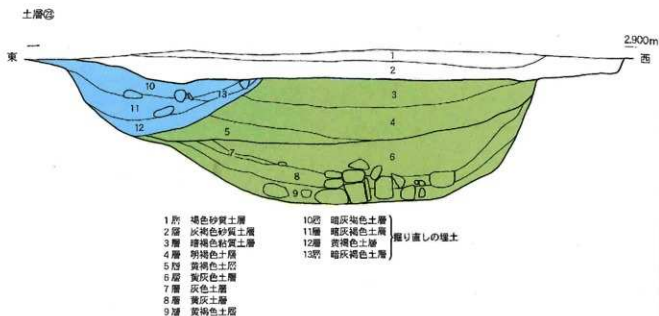
第656図 八坂中遺跡居館3周辺の溝土層図(2)



第657図 八坂中遺跡居館3



第658図 八坂中遺跡居館3周辺の溝土層図(3)



第659図 八坂中遺跡居館3周辺の溝土層図(4)

に切られるなどして全容は不明だが、幅3m前後の規模をもっていることが分かる。溝12b段階の土塁については、北辺では不明である。北辺に関しては、幅、深さとも小規模であることから顕著な土塁が築かれたかは不明である。東辺では外側からの流れ込みが顕著で、溝12と溝10の間に土塁があったものと推定される。南辺では明確にできない土層もあるが、外側にあった可能性が高い。溝12bの埋没時期は16世紀後半から末にかけての時期であろう。なお、溝12と溝10に挟まれた位置に地下式土塼1、2、3、4があるが、すべて溝12bに切ら

れる。しかし、溝12aとの関係は不明である。

・溝10

居館3の東南コーナーから東側にかけての溝10について述べる。居館1の東側に、居館2と居館3が並ぶが、東側のラインが揃っていない。そのため、両居館を囲う溝10は、居館2と居館3の間で折れが生じている。この部分溝10で最も新しいのは、土層②(第656図)の上層でみられるものである。幅5m、深さ0.6mを測るが上層②(第656図)ではみられず、溝10の北端から約20mにわたり確認されるのみである。これは、溝と言うよりも水溜め機能をもつ大規模な土層とも考えられ、居館絶後の近世に比定できる。隣接する溝12でも、同様なものが本溝と平行する位置で確認されている。溝自体に関しては、居館2の南側では古い順に溝10a、溝10b、溝10cが確認されていた。しかし、居館3の東側では溝10cはまったく確認されていない。居館2のあたりでも幅が狭く浅いものであったため、削平されたことも考えられ、本来溝10cが居館3の東側まで続いていたか否かについては即断できない。最も古い溝10aは、土層②、③、④(第656図)で確認でき、広い部分では幅5m以上、深さ1.5mを測る。南に行くにつれ規模を減じ、居館3の南東コーナー付近では、幅が半減する。この溝10aとしたうちでも、土層④などのように明らかな掘り直しが認められるものもあり、部分的には掘り直しがあったようである。また、居館2と居館3の間の折れが生じている付近では、溝10bの掘削により、溝10aはまったく確認できない。溝に伴う土塁については、土層②、③、④の状況から溝の東側にあったものと推定される。次に、溝10bは溝10a内の最も西寄りに掘られる。土層②の位置で幅1.8m、深さ0.7mであるが、土層③の位置では幅2.2m、深さ0.8mを測る。溝に伴う土塁については、溝10aの段階とは逆に、溝の西側にあったものと思われる。溝10bの埋没年代は16世紀後半である。この溝10bの北側延長上には溝9が、南北に走る。溝10bと溝9の間は、居館1と居館3の北側にみられる道に対応するように3mほどの間隔がある。溝9は規模的にも溝10bにちかいことから、溝10bと同じ段階で掘削されたものと推定される。これ以前の溝10a段階での溝9については、溝9内に顕著な掘り直しが確認できないことから、同位置にあった古い溝が溝9の掘削のためまったく残らなかったとも考えることもできるが、溝10a段階に相当する溝はなかった可能性が高いと思われる。最後に、溝10と溝12に挟まれた位置にある地下式土層1、2、3、4のうち、地下式土層1、4は溝10bに切られ、地下式土層3は溝10aに切られる。地下式土層2については、切り合い関係がない。

・溝15

溝15は、居館3の北西コーナー付近から始まる。当初、溝12の掘り直しの溝と予想していたが、居館3の南西コーナーで東に曲がらずそのまま少し直進し西に折れる。その後すぐに南に折れ、溝11と溝13の間を南進し、溝10cにつながるものと思われる。溝の規模は、居館3の北西コーナー付近で幅1.5~2.0m、深さ0.7mである。総じて、他の溝よりも小規模である。各溝との切り合い関係を土層で確認すると、土層⑥、⑦では溝12a、溝12bを切る。また、土層⑧で溝11a、溝11bを切り、土層④、⑤で溝13と溝11bを切る。溝15のつながる溝10cが、溝10の最終段階の溝であることから、居館周辺の溝のなかで最も新しいものと考えられる。すなわち、居館1、2、3という区画を行っていた溝がすべて埋没した後に、新たな区画を行ったものである。しかし、居館を区画した溝に比べ規模が大幅に減じ、感覚的には、堀だったものが、ただの区画の溝になったという感じである。溝15及び溝10cの埋没年代は16世紀末であるが、掘削の年代もそれにちかいものと推定される。溝の規模と時代背景が微妙に関係しているのであろうか。

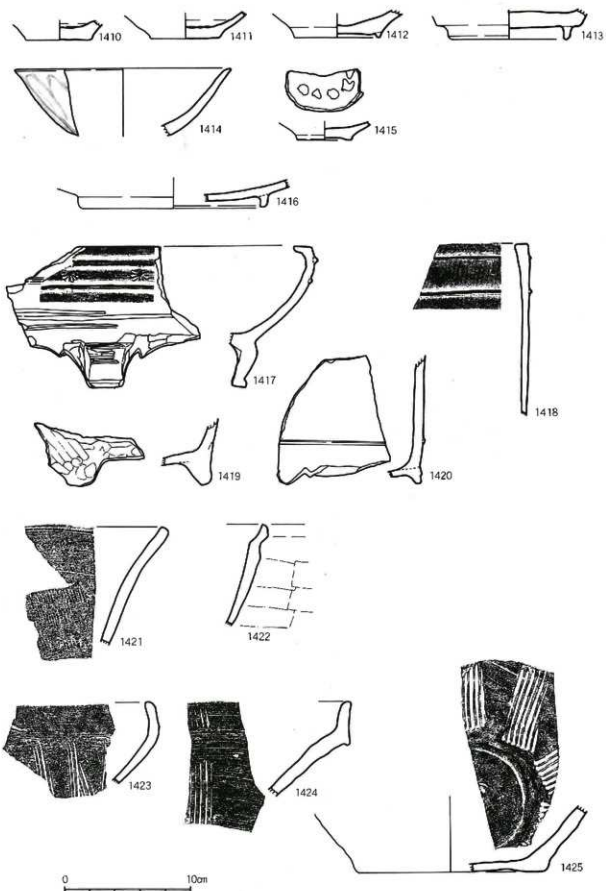
・出土遺物

溝12南半

土器(第660、661図)、石製品(第662~664図)が検出されたが、その大部分は溝12bに伴うものである。1410、1411は土師質土器である。底部は糸切りで、体部の立ち上がりから器高の高い器形であろう。内底面には、渦巻き状のナデがみられる。口径は5.2~5.4cmと小振りの感がある。16世紀のものか。

1412は東国東型瓦器椀で、底部の端に低い高台が付される。13世紀中頃から後半のもの。

1413は瓦質土器で、底部には高台が付く。体部は底部から垂直気味に立つ。



第660圖 八坂中道跡溝12南半出土土器(1)

1415、1413は輸入陶磁器である。1415は外面に竊蓮弁文をもつ青磁碗で、13世紀代のもの。1415は朝鮮製
 鉢軸陶磁碗で、内底面には砂目痕がみられる。16世紀末に比定できる。

1416は瓦質土器鉢である。16世紀後半に比定できる。

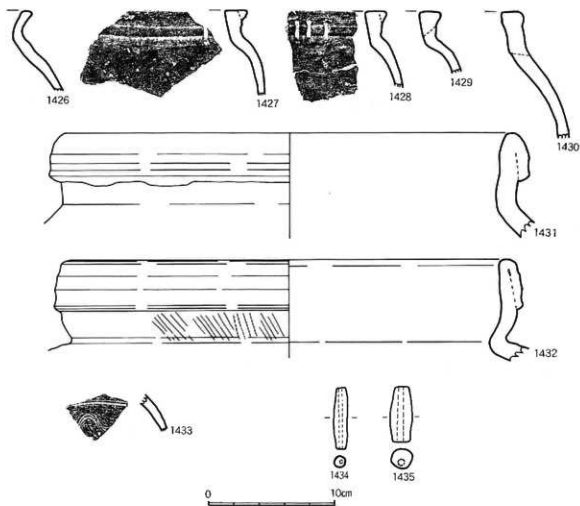
1417～1420は瓦質土器火鉢である。1417は器高の低いもので、口縁部は内側に折れ、底部には脚が付される。
 脚は削りだして装飾を加えた板状の粘土中央に方柱状の粘土を付加したものである。15世紀後半から16世紀前
 半までに主体を置くものである。1418は器高の高いもので、口縁部外面は肥厚しない。16世紀中頃までに主
 体を置くものである。1419、1420は脚部である。1419は指オサエなどが残る脚を付しており、在地産か。また、
 1420は切り込みのはいった板状の粘土を貼り付ける。

1421～1423は土鍋である。1421は体部が口縁にむかい緩やかに外反するもので、外面にハケメがみられる。
 14世紀以降のもの。1422は口縁部周辺に強いナデがはいるため、口縁がやや屈曲し段が付く。外面にはケズリ
 がみられる。16世紀代。

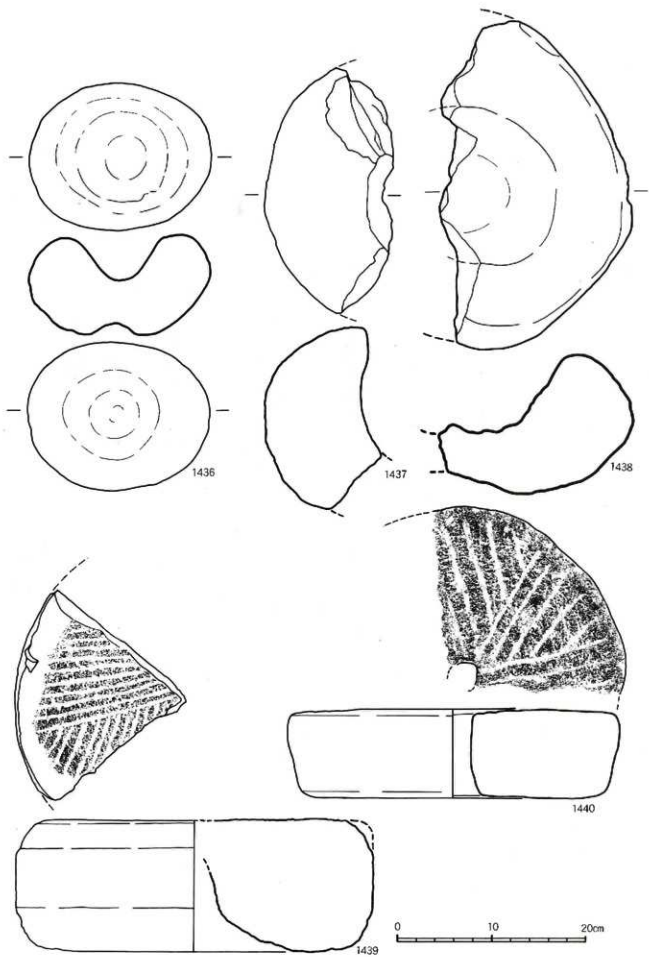
1423～1425は播鉢である。1423が瓦質で、口縁内湾気味である。16世紀代か。1424、1425は備前焼で、15
 世紀代のものであろう。

1426～1430は瓦質の甕である。1426は口縁が短く折れる。1427～1430は短く立つ頸部に列点文状の沈線が
 3本単位で施される。16世紀後半か。

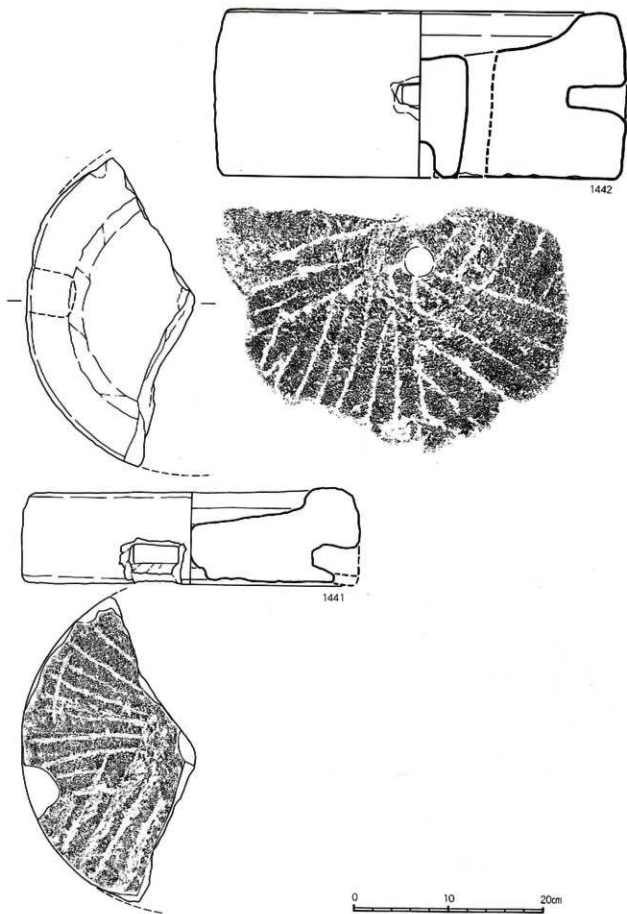
1431、1432は備前焼甕で、口縁部外面に凹線がみられる。16世紀後半～末に比定される。1433は備前焼の



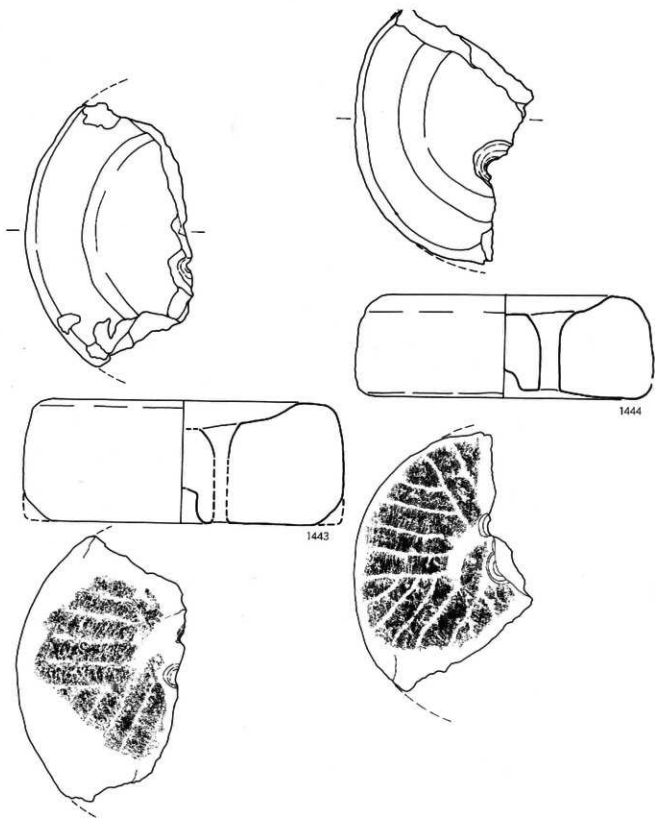
第661図 八坂中遺跡溝12南半出土土器(2)



第662図 八坂中遺跡溝12南半出土石製品(1)



第663圖 八坂中遺跡溝12南半出土石製品(2)



第664圖 八坂中遺跡溝12南半出土石製品(3)

肩部と思われ、柳指波状文がみられる。

1434、1435は土鍾である。

1436～1438は凹石である。凹縁の片面あるいは両面にくぼみがみられる。

1439～1444は挽白である。1439は下Fである。中央には芯棒受けがあるようで、下面にいくにつれ径が広がる。小破片のため目の分画数は不明だが、口自体は比較的密に彫られている。1440も下Fで、中央に芯棒受けがある。目の数は少なく、この破片のみから復元すると8分画になる可能性もある。1441は上白である。天場は供給口にむかい深くなるが、その深さは約3cmである。側面の下部には挽手穴がみられる。下面の目は非常に雑で、明確な分画をなさず、一部では放射状に彫られている。1442は上Fで、天場の深さは約3cmである。側面中唇には挽手穴がみられる。下面の目は中央の芯棒受けを中心に6分画されているが、やや雑である。1443も上白である。下面の目は雑に彫られ、数も少ない。1444も上白で、目は雑であるが6分画である。

溝12北半

土器（第665～667図）のうち、1445～1450、1465、1466は確実に溝12bに伴う。その他については、溝12aに伴出するものである。

1445は土師質土器小皿である。復元口径8.6cmを測り、体部は底部から比較的シャープに立ち上がる。器形と口径から13世紀代のものであると考える。

1446は土師器椀である。口縁部がわずかに外反し、内外面にはヘラミガキが施される。12世紀前半前後の時期に位置付けられよう。

1447は瓦器椀である。非押し出し技法により底部が作られており、東国東型瓦器椀の範疇にはいる。外底面の切り離し痕はであるが、底部の端に比較的しっかりした高台が付される。体部は器面の荒れが著しく、ヘラミガキの有無は不明である。12世紀後半～13世紀前半のなかに比定できよう。

1448、1449は白磁碗である。1448は口縁端部が短く外側に折れるもので、12世紀中頃に比定される。また、1449は玉縁口縁を呈するもので、12世紀前半前後のものであろう。

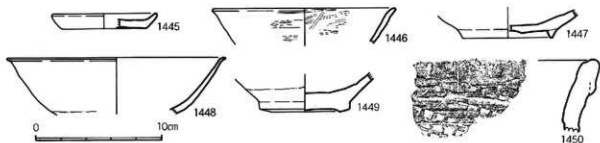
1450は瓦質土器甕である。頸部から口縁部にかけての資料と考えられ、口縁端部外面は玉縁状に肥厚する。しかし、作りはやや雑な感がある。外面には口縁の玉縁ちかくまで、格子目のタタキが施される。時期の決め手に欠くが、16世紀後半以降か。

1451、1452は土師質土器小皿である。1451がやや器高が高いが、両者とも体部を底部から直立気味に立ち上げる。端部は丸くおさまられる。口径は7.0～7.2cmで、14世紀初前後のものか。

1453、1454は土師質土器杯である。両者とも底部糸切りで、1453は体部の立ち上がりシャープである。また、1454は体部が斜方向に立ち上がる。1454は13世紀後半～14世紀初のものであろう。また、1453はそれよりも時期が下るものか。

1456、1457は白磁碗である。1456は玉縁口縁を呈するもので、11世紀後半から12世紀前半に位置付けられる。1457は底部で、玉縁口縁をもつものか。

1458～1460は青磁碗である。1458と1459は外面に鎗蓮介文をもつもので、13世紀代のものである。1460は口縁が緩やかに扇反りになるもので、15、16世紀に比定される。



第665図 八坂中道跡溝12北半出土土器(1)



0 10m

第666圖 八坂中遺跡溝12北半出土土器(2)

1461、1462は中陶製青花である。1461は碗で、体部外面には線影りの暗花文がみられる。また、口縁部内面には四方障文が配される。16世紀後半のものか。1462は台子の蓋である。漳州窯系のもので、大胆な筆使いによる文様が特徴される。16世紀後半のもの。

1463は瓦質土器甕で、口縁部が短く立ち上がる。15、16世紀代のものであろう。

1464、1467は瓦質土器火鉢である。底部ちかくの資料で、1条の突帯が付される。体部が斜方向に立ち上がることから、器高の低いタイプであろう。15世紀後半から16世紀前半に主体を置くものか。1467は口縁部外面が肥厚するものである。16世紀後半に比定される。

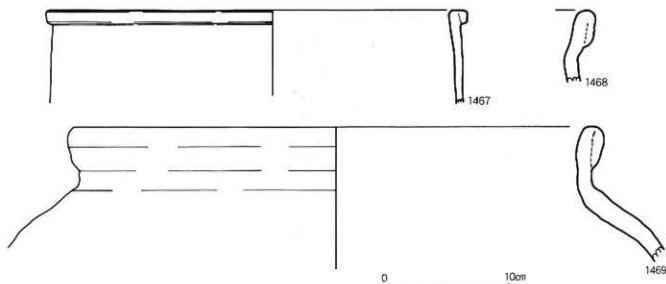
1465、1466は備前焼鉢である。1465は口縁部を欠くもので、摺目は10本単位である。1466は口縁部端部上面が内傾し、口縁外面には沈線状のものがみられる。16世紀前半のものか。

1468、1469は備前焼甕である。両者とも玉縁が下方に垂れる。15世紀代のものか。

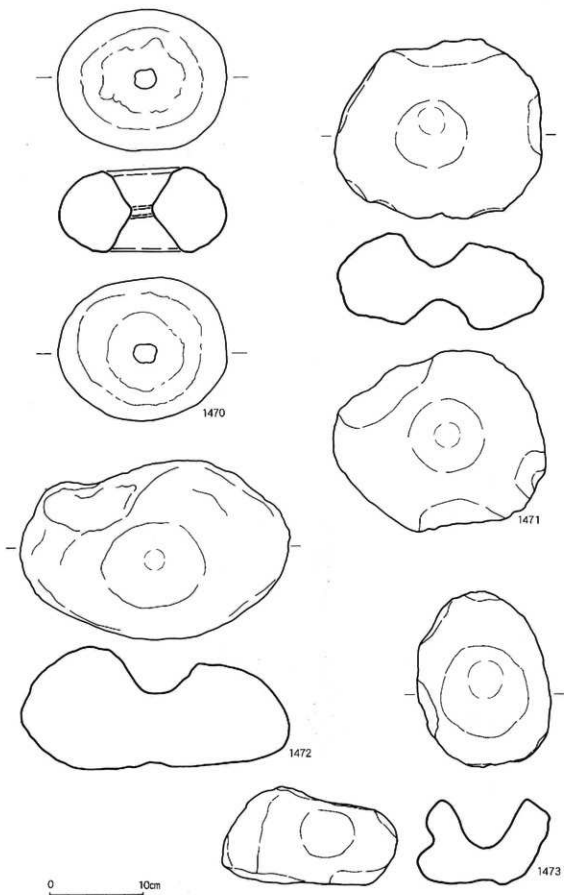
石製品（第668～672図）には、円石、石臼、五輪塔などがある。このうち、1478は溝12bに伴うものである。

1470～1473、1478は凹石である。1470は扁平気味の凹輪を用い、両面からくぼみを作り、それがつながった状況である。あたかも環状を呈する。本来的には環状をなすものではなく、あくまでも使用の結果このようになったものとする。1471も両面にくぼみを作る。両方のくぼみは、径、深さも似たような状況である。1472は、主として片面にくぼみがみられる。1473は3面にくぼみが観察できるが、1面のくぼみが深い。1478は長さ24.5cmを測るものである。くぼみは片面のみみられるが、深さ7.5cmとかなり深い。

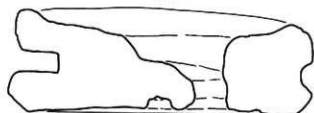
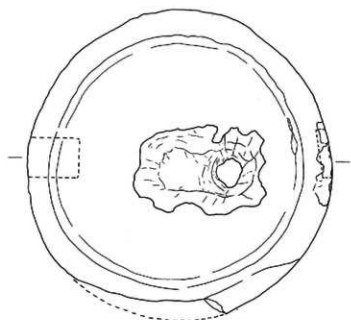
1474～1476は石臼である。1474は挽臼の上臼である。天端の中央からややはずれた位置に本来の供給口があるが、中央付近まで大きく拡大している。縁についても依然とした作りではなく、やや雑感がある。側面中程には、挽き木を挿入する挽手穴が1ヶ所みられる。挽手穴の反対側には手かけ穴と思われるくぼみがある。下面は中央に芯棒受けがあり、それを中心に溝を彫っているが、使用による磨滅が著しい。かろうじて残った目をみると、6分画であることが分かる。1475は茶臼の下臼である。受け部の下が台状に作り出されており、外面にはその製作痕が明瞭に残る。中央には芯棒穴がみられ、それを中心に目が彫られる。目は8分画と推定され、放射状に主溝を彫り、それから右しがりの副溝を9～10本彫りこんでいる。1476は挽臼の下臼である。全体に薄手で、加えて厚みが均等でない。中央に芯棒穴があり、それを中心に6分画の目を配する。口は使用により著しく磨滅した箇所もみられる。



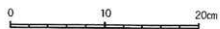
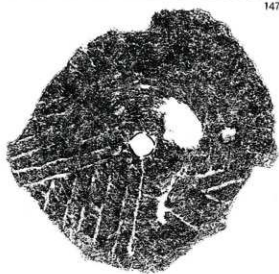
第667図 八坂中遺跡溝12北半出土土器(3)



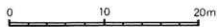
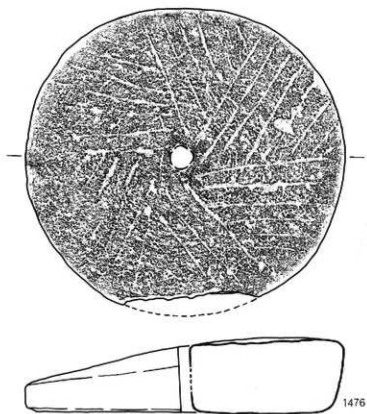
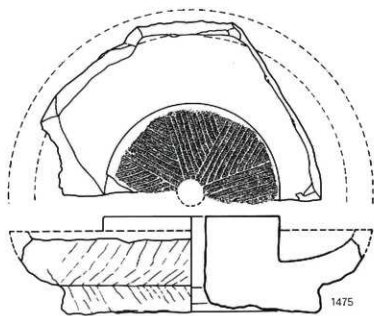
第668圖 八坂中遺跡溝12北半出土石製品(1)



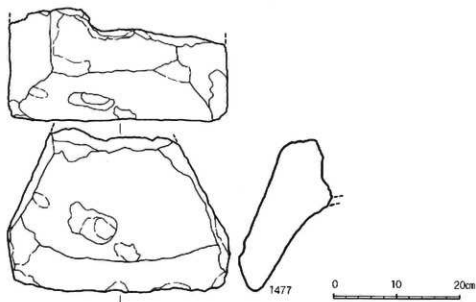
1474



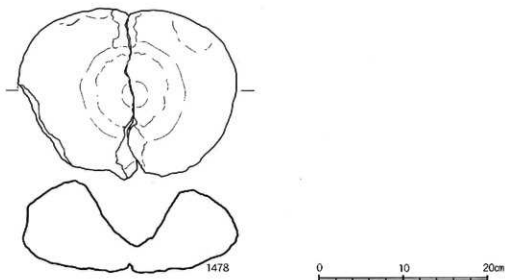
第669図 八坂中遺跡溝12北半出土石製品(2)



第670圖 八坂中遺跡溝12北半出土石製品(3)



第671図 八坂中遺跡溝12北半出土石製品(4)



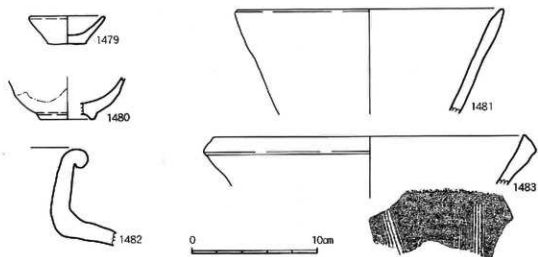
第672図 八坂中遺跡溝12北半出土石製品(5)

1477は五輪塔火輪部である。軒の反りは急で、上面には空・風輪部を接続するための穴がみられる。また、下面からは、軽量化のため内側を大きく抉っている。

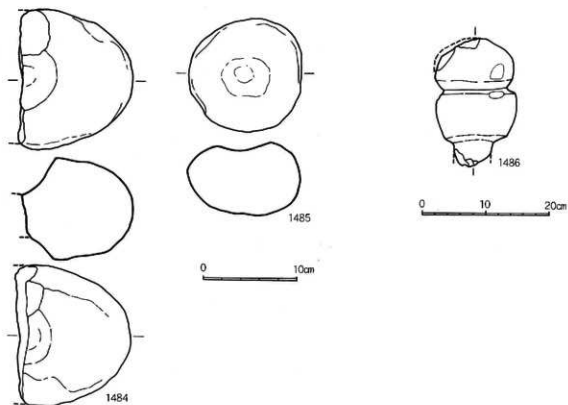
溝10（居館3東南側）

上器（第673図）と石製品（第674図）があるが、これらは溝10bに伴うものである。

1479は十師貨土器である。口径に比し器高の高い器形を呈する。復元口径は5.8cmである。関東半島地域では、16世紀になると口径に比し器高の高い坯がみられる。この時、小皿は別形盤のものを作ることが知られている。同じ時期に中世大友府内町遺跡などでは、坪、小皿という形態を作り分けず、同一形態のものを法量分化さ



第673図 八坂中遺跡溝10(居館3 東南側)出土土器



第674図 八坂中遺跡溝10(居館3 東南側)出土土製品

せる。1479は国東半島地域の16世紀代にみられる杯を小型化した形態であることから、杯、小皿を作り分けな
い状況が八坂川流域地域にあった可能性を示唆するものである。

1480は唐津系陶器碗で、胎上は赤褐色を呈する。釉は褐色を呈し内面と、外面の底部付近をのぞく部分に施
釉される。16世紀後半から末か。

1481は土鍋と思われる。

1482は偏前焼の壺である。口縁端部は外側に折り曲げて、小さな下縁状をなす。14世紀代か。

1483は備前焼播鉢である。内面の摺目は9本単位である。14世紀代のものか。

1484、1485は凹石である。1484は半分に折れたもので、本来は長径25cmを測るものである。片面にくぼみをもつ。1485は径12cmほどのもので、やはり片面にくぼみをもつ。

1486は五輪塔空・風輪部である。空・風輪部の境界の表現はやや雑になる。

溝10（居館3北東側）

石製品（第675図）と土器（第676、677図）があるが、このうち1492、1495、1496は溝10bに伴い、他は溝10aに伴出するものである。

1487は凹石である。径20cmほどの円礫を利用したもので、両面にくぼみをもつ。

1488は茶臼の上臼である。側面中程に現状で1ヶ所の挽千穴が確認できる。挽千穴周辺には方形の装飾を作り出す場合があるが、本品には認められない。目は8分面である。

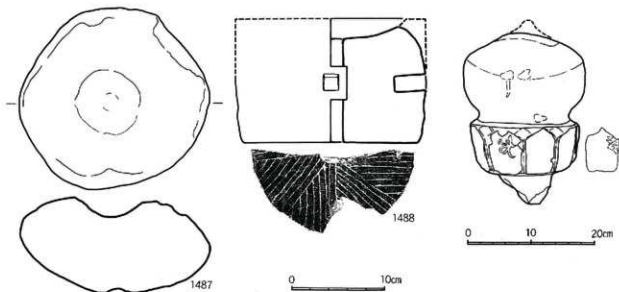
1489は五輪塔の空・風輪部である。風輪部に比して、空輪部が大きめである。風輪部は連弁状に作り出しており、四方に梵字を配するものと思われる。

1490、1491は東国東型瓦器輪である。1490は内面にミガキが施されていたようであるが、器面の状態が悪く明確ではない。外底面で切り離しの状況は確認できないが、押し出しはほとんどされていない。高台は比較的低いものが付く。13世紀前半のものか。1491は須恵貫にちかい焼きである。底部には、糸切りの後に板状圧痕がみられる。高台が消失し、完全に平底になった段階のものと思われる。13世紀後半～14世紀初めか。

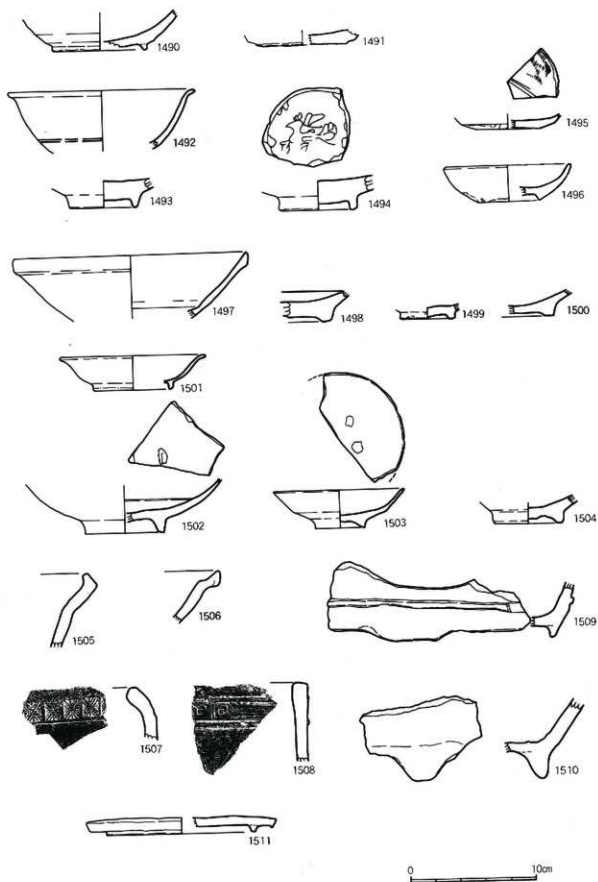
1492～1496は青磁である。1492は碗の口縁部で、口縁部が端反りである。14、15世紀代のものか。1493、1494は碗の底部で、いずれも底部が厚みをもつ。1494の内底面には印花文がみられる。15世紀前後のものであろう。1495は同安窯系の皿である。12世紀後半に比定される。1496は基筒底を呈する皿である。外底面付近は蹄脚である。15世紀後半から16世紀前半に主体を置くものである。

1497～1501は白磁である。1497は碗で、口縁部が玉縁をなす。11世紀後半から12世紀前半に主体を置くものである。1498～1500は底部である。1498は下縁口縁をもつ碗の底部と思われ、11世紀後半から12世紀前半に比定されるが、他については詳細な時期は不明である。1501は皿で口縁部が端反りになる。16世紀前半までに主体を置くものである。

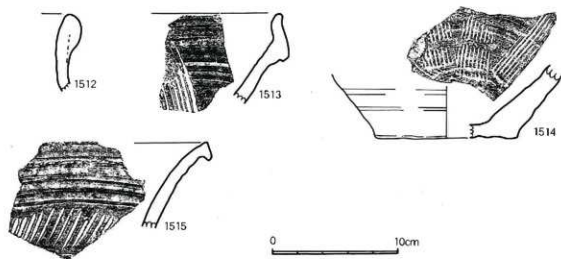
1502～1504は朝鮮製の陶磁器である。1502は白磁碗である。内面体部下に段を有し、見込み部には目積みの痕跡が残る。1503は皿で、体部下で屈曲する。やはり見込みには目積みの痕が残る。1504は陶器碗で、内外面に白ないしは灰色の釉がかかる。以上のものは15、16世紀代のものか。



第675図 八坂中遺跡溝10(居館3北東側)出土石製品



第676図 八坂中遺跡溝10(居館3北東側)出土土器(1)



第677図 八坂中遺跡溝10(居館3北東側)出土土器(2)

1505、1506は上鍋である。前者は防長系のもの、後者は在地のものである。

1507～1510は瓦質土器火鉢である。1507は器高の低いもので、口縁部が内湾する。15世紀後半から16世紀前半に主体を置くものである。1508は器高の高いもので、口縁部は肥厚しない。16世紀中頃までに主体を置くものであろう。1509、1510は脚部で、両者とも板状を呈するもので、比較的低い。16世紀中頃までに主体がある。

1511は瓦質土器の蓋である。

1512は備前焼裏で、土縁の口縁が下方に垂れる。15世紀代のものである。

1513、1514は備前焼搦鉢である。1513は口縁端部がわずかに外反する感じである。外面には凹線などはみられない。15世紀代のものである。1514は底部で、内面の摺目は9本単位である。

1515は、中世以前の須恵器装である。

溝15

土器(第678図)と石製品(第678、679図)が検出された。

1516は土師質土器小皿である。口径は3.9cmと小型なもので、糸切りの底部から体部を上方に引き上げる。16世紀代のものであろう。

1517、1518は瓦質土器火鉢である。1517は器高の低いもので、口縁はやや内湾気味で、端部を内側に大きく肥厚させるものである。外面口縁下には2条の突帯を付しており、突帯間にスタンプ文を配する。時期的には、15世紀後半から16世紀前半に主体を置くものである。1518は器高の高いものである。やはり口縁下に2条の突帯を付しており、その間にスタンプ文が施される。16世紀中頃までに主体を置くものであろう。

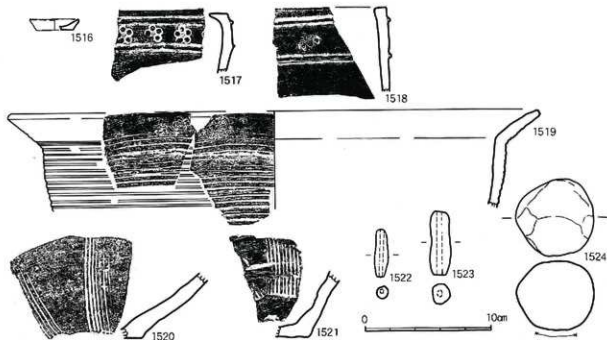
1519は瓦質土器鉢である。体部から口縁部が外側に折れるもので、体部外面には平行沈線が施される。16世紀代のものである。

1520、1521は備前焼搦鉢である。1520は底部ちかくの資料で、内面の摺目は7本単位である。1521も底部ちかくのもので、内面の摺目の単位は9本以上である。時期的には、後者が16世紀代に位置付けられ、前者はそれよりも遡るものと思われる。

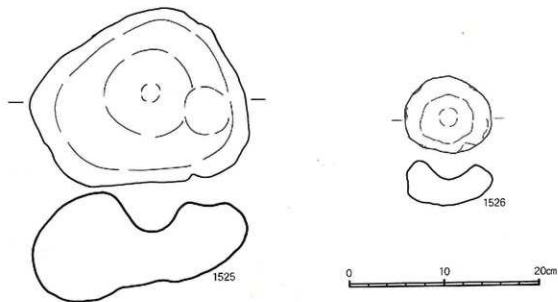
1522、1523は土鉢である。

1524は磨石と思われるもので、径6cm強を測る。

1525、1526は凹石である。1525は長径22.5cmを測るもので、両面にくぼみをもつ。1526は径13.5cmで片面のみくぼみを有する。



第678図 八坂中遺跡溝15出土土器と石製品(1)



第679図 八坂中遺跡溝15出土石製品(2)

(13) 居館周辺の溝出土その他の遺物

居館1、居館2、居館3周辺の溝から検出された遺物のうち、特定の溝への帰属が決定できなかったものや、複数の溝の間で接合されたものなどについて紹介する。

溝10、溝11出土土器

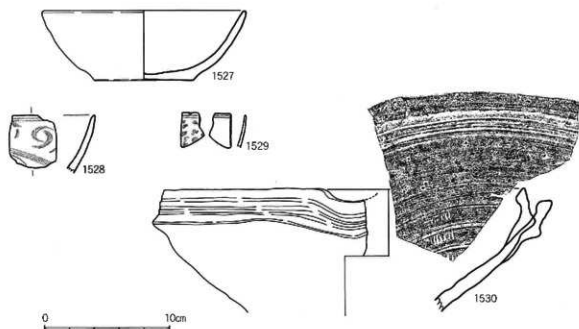
溝10、溝11のどちらに帰属するか明確にできなかった土器(第680図)である。

1527は東国東型瓦器輪であるが、焼成が悪く、半焼け気味のものである。底部は高台が付かない完全な平底で、糸切り後板状圧痕が残る。13世紀後半～14世紀初に比定される。

1528は中国龍泉窯系青磁碗である。体部内面に文様が描かれており、12世紀後半に位置付けられる。

1529は中四国時代の青花碗である。口縁部だけの資料であるが、底部は蓮子碗と呼ばれる形態と思われる。15世紀後半から16世紀前半に主体を置くものである。

1530は備前焼播鉢である。口縁外面には凹線がみられ、口縁端部上面は内傾する。16世紀代に比定される。



第680図 八板中遺跡溝10、11出土土器

溝12、13、15出土土器

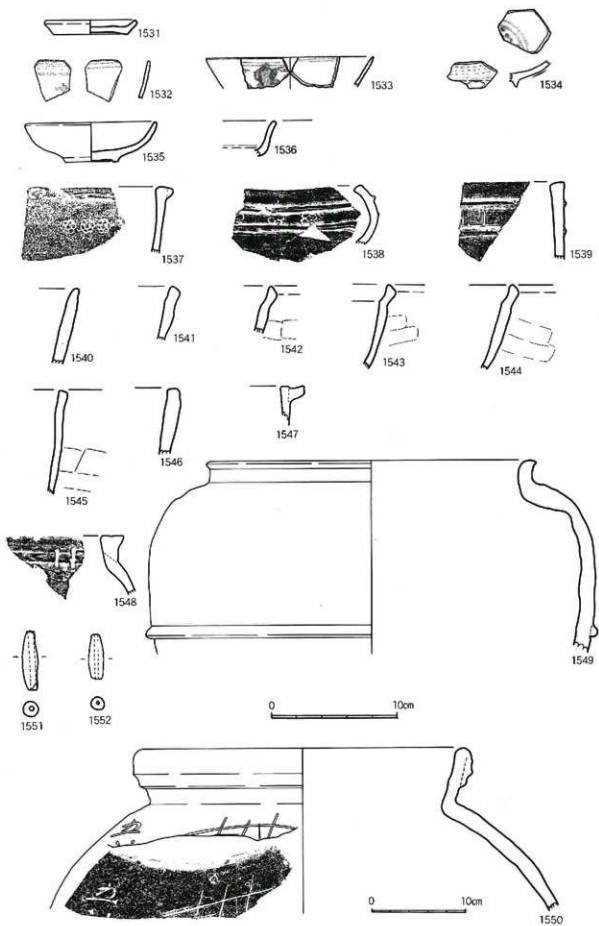
居館3の南西コーナー外側から検出されたもの(第681図)で、溝12、溝13、溝15のどれに所属するかを明確にできなかった。

1531は土師質土器小皿である。体部の立ち上がりはシャープで、斜方向に引き上げる。口径は7.0cmで、13～14世紀のものか。

1532～1534は中国明代の青花である。1532は碗で、蓮子碗タイプのもと考えられる。16世紀前半までに主体を置くものである。1533も碗であるが、椀頭心タイプであろう。16世紀中頃以降に主体をもつものである。1534は碗で、文様は緑色気味に発色する。いわゆる涼州窯系のものか。

1535、1536は福岡県高取窯系の皿である。口径に比しやや底径が小さく感じるもので、高台もあまり高くない。体部は、口縁周辺に強いナデが施されるため、中程から口縁にむかい屈曲気味に立ち上がる。釉はわずかに青みがかった発色をみせる薬火釉で、高台部を除き施釉される。17世紀初に比定される。1536も同様な器形を呈すると思われるが、強いヨコナデのため口縁部がやや外反気味である。やはり釉は青みがかった発色がみられる。

1537～1539は瓦質土器火鉢である。1537は口縁端部外面が肥厚するもので、口縁下にスタンプ文が配される。16世紀後半か、1538は器高の低いもので、口縁が大きく内湾する。口縁下には2条の突帯が付され、突帯間にスタンプ文が施される。15世紀後半から16世紀前半に主体をもつものである。1539は器高の高いもので、口縁



第681圖 八坂中遺跡溝12、13、15出土土器

部は肥厚しない。やはり口縁下に2条の突帯があり、突帯間にスタンプ文がみられる。16世紀中頃までに主体を置くものである。

1540～1547は上鍋である。1540、1546は内外面ナデ調整で、端部周辺は強いナデがはいり、1541～1544は口縁部周辺に強いヨコナデがはいり、外側に屈曲する。口縁端部は上方に引き上げられる。また、体部外面にはヘラケズリが施される。これらは16世紀代のものである。1545は口縁部が屈曲しないが、外面にヘラケズリがみられる。16世紀代か。1547は外面に鈎が付くもので、鈎は口縁端部まで上がっている。13世紀後半～末か。

1548は瓦質土器である。短く直立する頸部に列点状の沈線がはいり、16世紀後半か。

1549、1550は備前焼である。1549は木屋装である。1550は甕で口縁外面には凹線がみられる。肩部には、ヘラ記号と文字の一部がみられる。両者とも16世紀後半～末に比定される。

1551、1552は土鍾である。

居館周辺の溝間接合土器

居館周辺の溝間で接合した土器を紹介する(第682～684図)。

1553は、溝11、溝12、溝15の資料が接合した。備前焼の甕で、口縁部の玉縁は大きく垂下し、下部がやや角張る。16世紀にはいるものか。

1554は、溝12と溝15が接合した。備前焼甕で玉縁が垂下する。

1555は、溝11b、溝12b、土壘71が接合した。備前焼の甕で、垂下する口縁部の玉縁下部がやや角張る。15世紀から16世紀にかかるものか。

1556は、溝11と土壘146が接合したものである。備前焼の甕で、口縁部の玉縁はながく垂下する。15世紀代のものであろう。

1557は、溝10、溝11、土壘154の接合資料である。備前焼木屋装である。

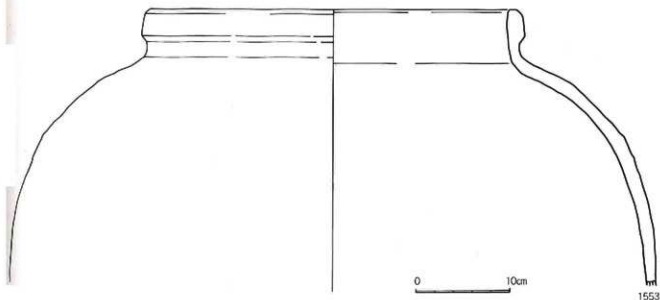
1558は、溝11と溝12bが接合したものである。備前焼鉢で、底部は平底である。体部は内湾気味に口縁にいたる。

1559は備前焼甕の底部で、溝11、溝12b、土壘71が接合した。

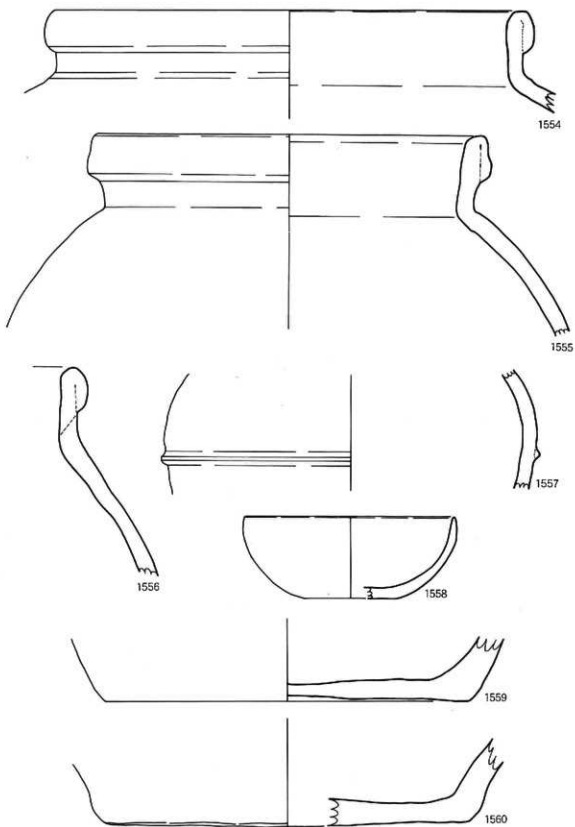
1560は、溝12、溝15、土壘70が接合した。備前焼甕底部である。

1561は、溝11、溝12、溝15の接合資料である。備前焼甕で、垂下する口縁外面の玉縁は下部がやや角張る。16世紀代のものか。

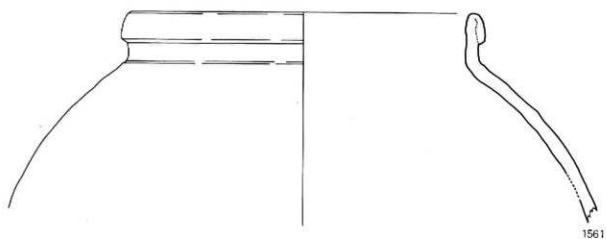
1562は溝12b、溝15、土壘72、土壘146が接合したものである。備前焼甕で口縁部外面には凹線が施され



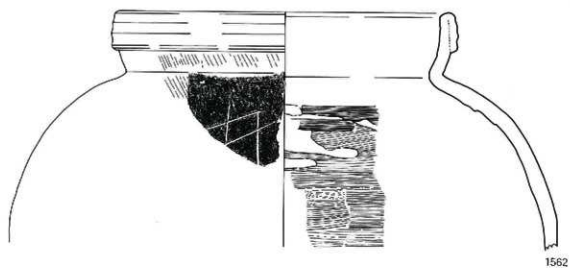
第682図 八坂中遺跡居館周辺の溝間接合土器(1)



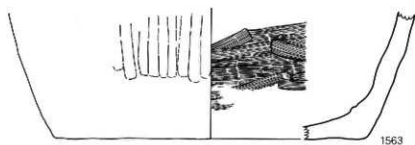
第683図 八坂中遺跡居館周辺の溝間接合土器(2)



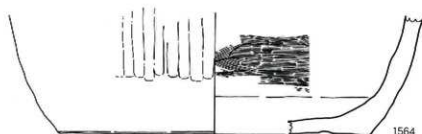
1561



1562



1563



1564

0 10cm

第684図 八坂中遺跡居館周辺の溝間接合土器(3)

る。また、頸部から肩部にかけてはハケメがみられる。肩部にはヘラ記号がみられる。16世紀後半～末のものである。

1563は筒前燒棄で、溝12と溝13が接合した。内面にハケメ、外面にヘラナデがみられる。

1564は、溝11、溝12b、溝13の接合資料である。筒前燒棄で、内面にハケメ、外面にヘラナデがみられる。

居館周辺の溝出土土製品

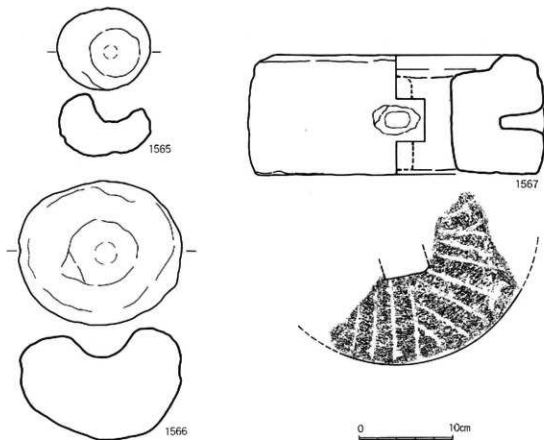
溝12および溝15のどちらとも特定できないもの（第685図1565～1567）や、調査ミスで居館周辺の溝出土としか分らないもの（第686図1568、1569）を紹介する。

1565、1566は円形である。1565は長径9.8cm、短径4.6cm、厚さ6.4cmを測る円盤を利用している。片面の中央からやや寄った位置にくぼみを作る。くぼみは径5.3cmで、深さは2.2cmである。1566は1565より大型で、長径17.2cm、短径15.2cm、厚さ11.6cmを測る円盤を利用している。片面にくぼみがあり、くぼみの径は約7cmである。

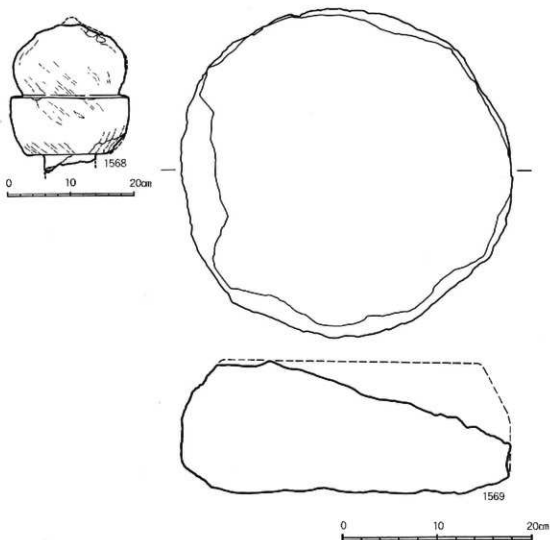
1567は挽臼の上臼である。天楊は供給口にむかい深くなり、その深さは約2cmである。側面の中程には挽子穴がみられる。下面の目は、破片資料であるが6分面と推定される。中央から放射状にのびる主溝に、右上がりの副溝が6本ほど彫られる。

1568は五輪塔の空・風輪部である。空輪部は丸みをもつもので、上部の突起は欠損する。空輪と風輪の境界は明瞭で、しっかりした作りである。風輪部に下には、火輪部との接合の際に用いる柄があるが、その大部分は欠損する。

1569は厚さ13.5cmを測る円盤状のもので、上面を欠失する。全体に火熱を受けた痕跡がみられる。挽臼の下臼か。



第685図 八坂中遺跡居館周辺の溝出土土製品(1)



第686図 八坂中遺跡居館周辺の溝出土石製品(2)

(14) 居館1、居館2、居館3の変遷

ここでは、以上述べたうち、居館1、居館2、居館3及びその周辺の変遷について、簡単に確認しておく。

- ・Ⅰ期(第687図) 居館1は溝14、居館2は溝11a、居館3は溝12aにより各々画される。そして居館群の前から東にかけ溝10aが、さらに居館1の西側を溝16がみられる。土塁について明確なものは居館3が溝12aの内側に、溝10aでは居館3部分が溝の東側に築かれる。掘削の時期は不明だが、16世紀中頃までか。
- ・Ⅱ期(第687図) 居館1は溝13、居館2は溝11b、居館3は溝12bにより各々画される。居館群周囲は北側をのぞき溝10bと溝16により二重に囲まれる。加えて、溝10bの北側延長に道状の部分をはさみ溝9が掘られる。土塁は、居館1が溝13の内側に、居館3が溝12aの外側にある。居館2部分では溝10bの外側にみられる。16世紀後半から末にかけての時期か。
- ・Ⅲ期(第688図) Ⅱ期までの区画が大きく変わり、溝15、溝10c、溝16cにより構成される。しかし、溝の規模は大きく減じ、土塁も明確ではない。時期的には16世紀末から17世紀初と思われる。
- ・Ⅳ期(第688図) 区画を区画するものではなく、溝跡を利用した池状遺構となる。この段階では館は廃絶し、周囲は水田化されていたと思われる。17世紀初以降の時期である。

I 期



II 期

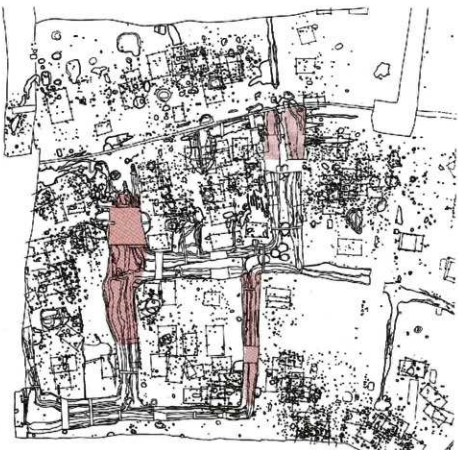


第687図 八坂中道跡居館の変遷(1)

Ⅲ期



Ⅳ期



第688図 八坂中遺跡居館の変遷(2)

8 鍛冶関連遺構

本遺跡からは、SX1～10の鍛冶関連遺構が確認された（付図5）。遺構は、鍛冶炉跡、廃棄土壌などで、その大半は厩館2内から検出された。

(1) SX1

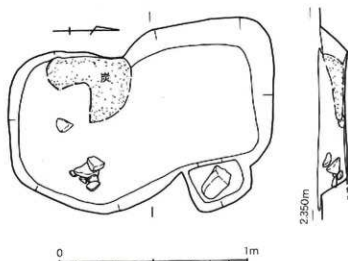
SX1（第689図）は調査区の東端に位置する。遺構は鍛冶炉跡の基底部がかろうじて残存したものと推定される。現状で浅い皿状を呈し、径20cm、深さ数cmの規模を測る。炉は地山を掘りくぼめた後、厚さ数～5cmほどの粘土を全面に貼り炉壁を形成する。炉壁は被熱のため、表面は黒褐色に、また炉の奥は赤褐色に変色している。本遺構は北西側0.75mに位置するSX2とセットをなすものと思われるが、両遺構を覆うような建物は確認されていない。時期については良好な遺物がなく決めがたいが、周辺の状況から14世紀以前のものであろう。



第689図 八坂中遺跡SX1

(2) SX2

SX2（第690図）は、SX1の北西0.75mに位置する。遺構の平面プランは長方形で、南北1.4m、東西0.8mの規模を有する。遺構内からは焼土、炭、鉄滓などが検出された。このうち鉄滓について、量はそれほどでもないが、その中には1570（第691図）のような鍛錬鍛冶滓のほか検出型もみられる。本遺構は、近接して位置する鍛冶炉（SX1）とセットをなすものと推定される。鍛冶剥片なども検出されており、鍛冶作業に伴う廃棄土壌の役割を担っていたものであろう。時期については、SX1同様不明であるが、14世紀以前のものであろう。



第690図 八坂中遺跡SX2

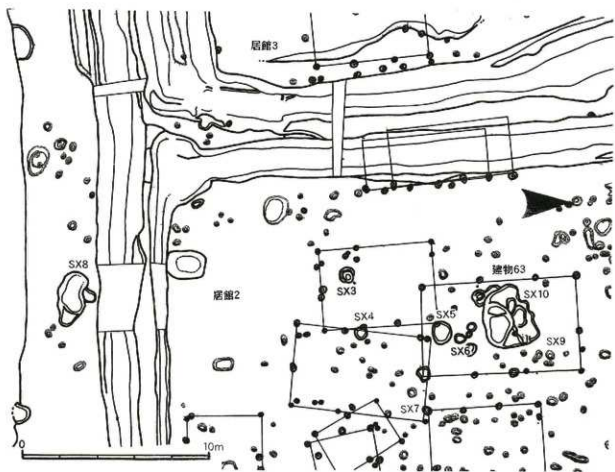


第691図 八坂中遺跡SX2出土鍛冶関連遺物

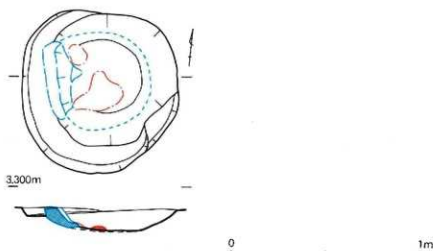
(3) SX3

居館2内部の南西部周辺には、鍛冶関連遺構が集中する(第692図)。SX8が居館2のすぐ外側にある以外は、すべて居館内部にみられる。鍛冶炉も数基確認することから、居館2内部で具体的な鍛冶作業が行われていたのは確実である。また、3基確認された居館のうち鍛冶関連遺構が検出されたのは居館2だけであることから、連続する居館群ではあるが性格的に差異を有するものと思われる。

SX3(第693図)は鍛冶炉と思われる。大半が破壊され、基底部がかろうじて残存するもので、炉壁も一部が旧状を保つのみである。現状で、掘り方は径0.7mの円形を呈し、深さは0.1mを測る。掘り方の西から南側にかけて、さらに浅い段落ちが確認されるが、残存する鍛冶炉とは直接かかわりがないものと考えられる。炉壁は西側に一部が残存する。厚さ数~5cmにわたり粘土を貼ったもので、粘土は被熱のため黒~灰色に変色している。残存する炉壁から、炉の内径は径約0.5mに復元されるが、SX9に比べるとやや大型である。基底部は粘土を貼った炉壁が残らず、地山が被熱のため赤褐色に変色している。時期は16世紀代と推定される。



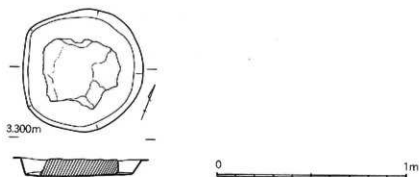
第692図 八坂中遺跡SX3~10位置図



第693図 八坂中遺跡SX3

(4) SX4

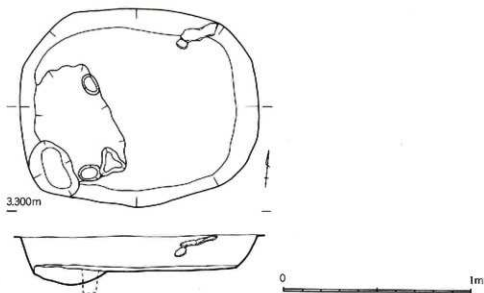
SX4 (第694図) は、SX3の東約4mに位置する。遺構は平面プラン円形を呈し、径約0.65mを測る。深さは検出面から0.1mほどで、床面は平坦である。遺構内の中央床面には、鉄滓がみられる。鉄滓は長さ0.4m、幅0.3m、厚さ0.1mを測る人型のものに見えるが、詳細に観察すると細かな鉄滓が再結合したものであることが分かる。鉄滓には鍛造剥片が付着しており、鍛冶作業にともなう鉄滓であると推定される。時期は、出土遺物がなく不明であるが、16世紀と思われる。



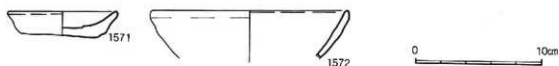
第694図 八坂中遺跡SX4

(5) SX5

SX5 (第694図) は、SX4の北約7mに位置する。遺構は平面プランが楕円形基調を呈するもので、長径1.25m、短径1.05mを測る。深さは検出面から約0.2mで、西壁にちかい部分はさらに深くなる。遺構内からは鉄滓や炭の小片が多数検出されたほか、鍛造剥片もみられた。本遺構は鍛冶炉とセットをなす虎糞土壇と考えられ、すぐ北側に接するようにみられるSX6が伴う鍛冶炉跡であろう。SX5からは1571、1572 (第696図) のような13、14世紀代の遺物が検出されているが、周辺の状況から16世紀代のものと思われる。



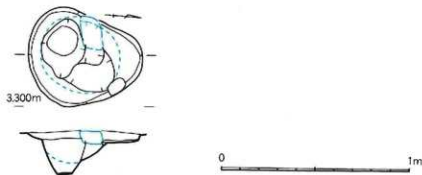
第695図 八坂中遺跡SX5



第696図 八坂中遺跡SX5出土土器

(6) SX6

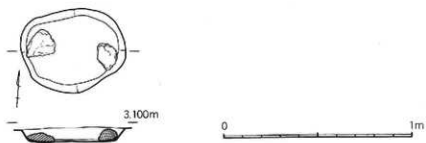
SX6 (第697図)は、SX5のすぐ北側に接するように位置する。柱穴に切られるなど大半は破壊されているが、かろうじて基底部分が残存する。炉の掘り方は径0.5mほどと推定され、深さは検出面から約0.15mである。炉壁は両側で一部が残るのみで、厚さ数cmの粘土が貼られている。残存する炉壁から鍛冶炉の径は約0.4mに復元される。位置的な状況から、本鍛冶炉は廃棄土壌であるSX5とセットをなすものと考えられる。時期は16世紀代と思われる。



第697図 八坂中遺跡SX6

(7) SX7

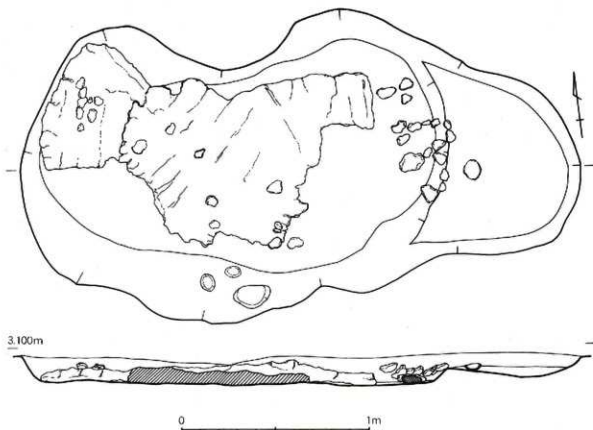
SX7 (第698図)は、SX5、SX6の南東約6mに位置する。遺構は楕円形を呈し、長径0.55m、短径0.45mを測る。深さは検出面から0.1m弱で、床面は平坦である。遺構内からは、鉄滓などが多数検出された。鉄滓は15cmを測る大型のものもある。鉄滓は杓型鍛冶滓などがみられ、なかには鍛造剥片が付着するものもある。本遺構は鍛冶炉に伴う廃棄土壌的な性格をもつものと思われるが、近接する周辺に鍛冶炉は存在しない。時期は良好な遺物がなく明確にしがたいが、16世紀代のものであろう。



第698図 八坂中遺跡SX7

(8) SX8

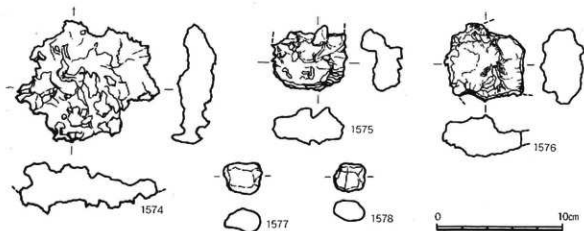
SX8 (第699図)は、厩館2の南西部外側にみられる。厩館2は溝11により両され、さらにその外側を溝10により囲まれるが、SX8は溝10から約1m離れ位置する。遺構は不定形を呈するもので、東西方向に長軸をもつ。現状で長径2.95m、短径1.45mの規模をもつ。これらは2基の遺構が重複しており、東側の一段高い部



第699図 八坂中遺跡SX8



第700図 八坂中遺跡 S X 8 出土土器



第701図 八坂中遺跡 S X 8 出土鍛冶関連遺物

分の土層を、鉄滓が多量に廃棄された土層が切る。切られた土層からは1573（第700図）の土器が検出された。土層から土層は13、14世紀代の所産と考えられる。

鉄滓が多量に廃棄された土層は、検出面からの深さ約0.15mで、床面上のほぼ全面にわたり鉄滓がみられる。鉄滓は長さ1.4m、幅0.9m、厚さ数～0.1mにわたりみられる。これらは廃棄された鉄滓が再結合されたものと考えられ、これらの中には梃型鍛冶滓や鉄塊系遺物が含まれる。加えて、鍛造剥片や粒状滓なども多数検出された。以上から、本遺構は鍛冶炉に伴う廃棄土層と考えられる。時期については、良好な遺物がなく不明とせざるをえないが、13、14世紀代以降の所産であることは確実で、16世紀代に比定される可能性が高い。

・出土遺物

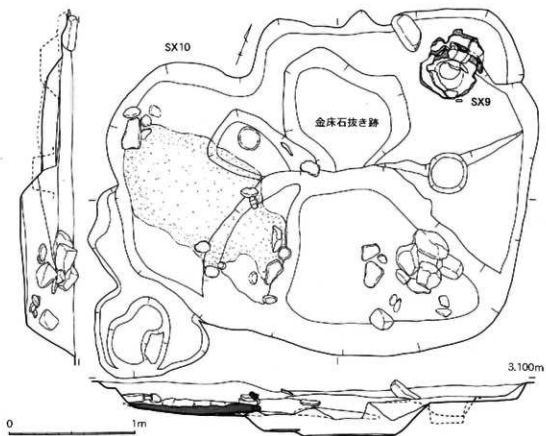
1573（第700図）は土師質土器坏で、底径6.8cmを測る。体部は斜方向に比較的シャープに立ち上がる。13、14世紀代のものか。

1574～1578（第701図）は鍛冶関連遺物である。このうち1574～1576は梃型鍛冶滓である。これらは、精錬生成鉄の不純物除去及び成分調整の精錬鍛冶工程で炉内において生じたものである。

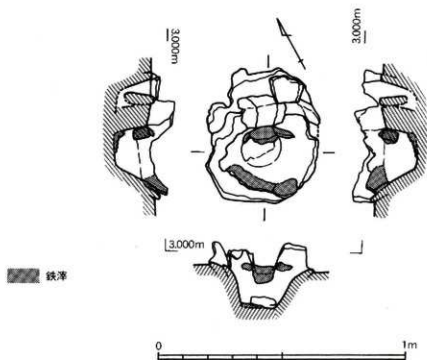
1577、1578は鉄塊系遺物である。本遺跡に精錬鍛冶の素材として持ち込まれた可能性をもつものである。これらはまだ鉄分が多く残り、鍛冶滓などに比べると小型でも重量感がある。

(8) S X 9、S X 10

S X 9、S X 10（第699図）は、厩館2内部にみられる。厩館2内の南西部には鍛冶関連遺構が集中しており、厩館2内で鍛冶作業が行われたことを物語る。S X 9及びS X 10は、S X 5、S X 6のすぐ北側に位置するが、これらは位置的に建物63の中に入る。建物に伴うものであるかの判断は難しいが、鍛冶炉であるS X 9は建物内部の中央やや北寄りにあり、この対向に鍛冶炉であるS X 6はS X 9と対称的な位置である中央やや南寄りにあることから、建物63内にはS X 6とS X 9の2基の鍛冶炉が存在した可能性は高いと思われる。このように、2基の鍛冶炉（S X 6、S X 9）とそれに伴う廃棄土層（S X 5、S X 10）を計画的に建物内に配していることから、建物63は鍛冶工場的な性格をもつ建物であったことが分かる。

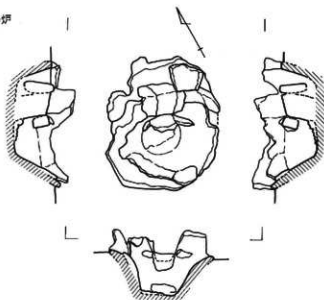


第702図 八板中遺跡 SX9、SX10

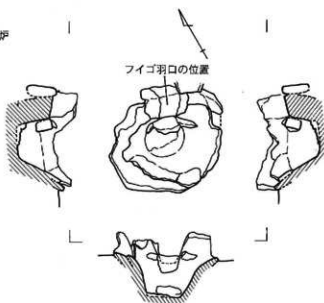


第703図 八板中遺跡 SX9(1)

1 回目採集の炉



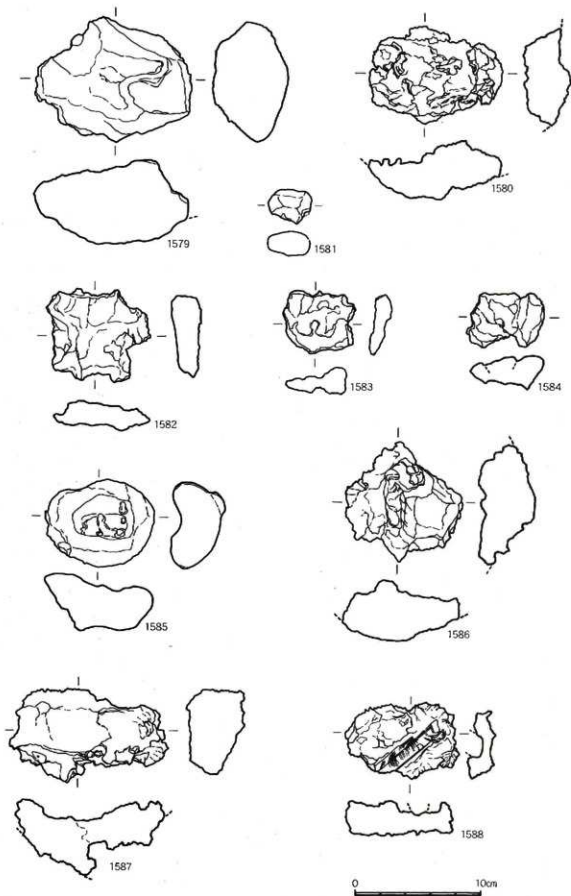
2 回目採集の炉



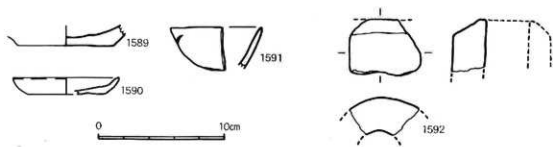
 推定の炉壁



第704図 八坂中遺跡 SX9(2)



第705図 八坂中遺跡 SX10出土鍛冶関連遺物



第706図 八坂中遺跡 SX10出土遺物

SX10は不定形を呈するもので、東西3.4m、南北2.7mの規模をもつ。このなかで鍛冶炉であるSX9は、東北隅に築かれている。SX9についての詳細は後段で述べるが、炉の北側には送風施設が設置されていたものと推定される。炉の西側にある長さ30cmほどの礎は、これに係わるものであろうか。また、炉の周囲はわずかに平坦面が広がっており、炉まわりでの作業スペースと考えられる。炉の南西側には、平坦面から約15cmの掘り込みが認められる。この掘り込みは、炉との位置関係などから金床石の抜き跡と推定される。金床石は炉内から取り出した製品を鍛える台で、上面が平坦な石が鍛えられていたものであろう。金床石の北側には職人が位置したと思われる、ファイゴを操作しながら炉内に製品をいれ、半身をかえし金床石にむかうという作業を繰り返したことが想像される。金床石抜き取り跡の南側には、か周囲の平坦面から約30cmの深さをもつ掘り込みがみられる。掘り込みは、東西1.5m、南北1.0mの規模をもつもので、床面は平坦である。廃棄上墳的な性格をもつものとも考えられるが、鉄滓などは埋土中から散発的に検出されるのみで、操業時に鉄滓などが集中的に廃棄されたような状況は確認できなかった。この場所は、炉脇の職人に対向する位置に職人が立つスペースであると推定される。すなわち、炉脇の職人が金床石に向かい製品を鍛え上げる際に、対向する位置に別の職人も立ち交互に製品を鍛える作業を行ったものであろう。対向する位置の職人は、強く打ちおろせるよう立ったまま作業を行うため、自分の立ち位置を低くしたものと推測される。以上に対し、金床石の南西側には鉄滓が厚く堆積する。鉄滓は長さ1.5m、幅0.8mにわたりみられ、床面から厚さ数～10cmにわたりみられる。これらは鉄滓が再結合し板状になったもので、極型鍛冶滓など含むものである。また、鍛冶工程で派生する鍛造剥片や粒状滓なども多量に検出され、精錬～鍛錬鍛冶の一貫作業がなされたことが推測される。

SX9（第703、704図）は鍛冶炉で、ほぼ完全な状態で検出された。本来これらの鍛冶炉は、当時の生活面を浅く掘くばめ構築されているため残存状態がよくない。本遺跡でもSX1、SX3、SX6などの炉跡が確認されているが、いずれも基底部がかろうじて残ったものである。SX9は、一段掘り下げられたSX10内に構築されたため、削平をまぬがれほぼ完全な状態で残ったものと推測される。炉は現状で（第703図）、長さ50cm、短径40cmの規模をもつもので、深さは約15cmを測る。これらは、一部炉壁が欠落している箇所もあるが、ほぼ完全な状態で残存しており、1度補修された状況も確認される。よって、本炉跡には1回目、2回目と2度の操業面がある。以下、その状況を説明する（第704図）。1回目の炉の炉壁は、炉の東側ではそのまま残存しているが、それ以外の部分では補修作業が行われたため、2回目の炉壁に隠れた状況である。南側から西側にかけては、1回目の炉壁の上に直接粘土を数cm貼り2回目の炉壁を作っている。そのため、現状より一回り大きい、現状のラインとはほぼ同じ形状であったことが分かる。北半分については当初の炉壁を覆うように礫などがいれられ補修作業が行われており、全容はつかみにくいが、当初の炉壁が確認される。しかし、东北部については炉壁が完全に欠落しており、被熱のため赤褐色に変色した地山となっている。以上から、1回目の炉は上面で南北50cm、東西40cmの規模をもつ、円形にちかいものであったことが分かる。また、深さは約15cmで、底面の広さは20cm×15cmほどであったと思われる。2回目の炉は、1回目の炉の北半分を埋めるかたちで形成されており、規模は半減する。北半部には、1回目の炉壁を覆うように礎をいれた後に、改めて厚さ10cmほど

に厚く粘土を貼り炉壁を作る。1回目の炉壁のうち、北東側などの破損が著しいことから、北半分を覆うような改修を行ったものであろう。東側は当初の壁をそのまま使うが、南側から西側にかけては古い炉壁の上に直接粘土を貼り、新しい炉壁を作る。その際、1回目の炉壁上部に付着していた鉄滓は除去されず、そのまま埋め込むかたちで粘土が貼られている。その結果、長径45cm、短径30cmを測る長楕円形となり、炉の規模も大きく減ることとなる。また、フィゴの羽口を置かれたと思われる部分が北側にみられる。北側の炉壁は他に比べ約10cmほど高く立ち上がるが、そのなかの幅10cmほどは壁の立ち上がりが見られず、羽口の装着部分と推測される。

以上のSX9、SX10の時期は、これを覆う建物63が居館2の主軸方向とほぼ同じであることから、居館2と同じ16世紀代に比定される。

・出土遺物

1579～1588(第705図)は、鍛冶関連遺物である。以上のうち、1581は鉄塊系遺物である。径3cmほどの小型品であるが、本道跡に精錬鍛冶の素材として持ち込まれた可能性をもつものである。これらはまだ鉄分が多く残り、鍛冶滓などに比べると小型でも重量感がある。

1584は再結合滓。その他は椀型滓である。椀型滓のうち、1585は重量感があり、鉄分を多く含むものである。

1589～1592(第706図)は土器である。1589は十師貫土器環で、13、14世紀代に比定できるものである。1590は十師貫土器小皿である。復元口径8.4cmを測るもので、12～13世紀代のものである。1591は青磁碗で、内面に文様がみられる。12世紀後半のものである。1592はフィゴ羽口で、復元内径は3.6cmを測る。

八坂中遺跡鍛冶関連遺物計測表

鍛冶剥片(単位 g)															
類	大きさ	SX2	割合	SX4	割合	SX5	割合	SX6	割合	SX7	割合	SX8	割合	SX10	割合
1	～0.7mm	0.4	1.6%	0		58.2	35.8%	0.5	5.3%	4.4	95.2%	216.0	50.9%	310.5	44.3%
2	0.71～1.4mm	2.9	11.3%	0.2	90.9%	67.3	41.3%	3.6	37.9%	0.1	2.2%	158.1	37.2%	287.3	41.0%
3	1.41～2.0mm	8.0	31.3%	0.02	9.1%	23.4	14.3%	5.2	54.7%	0.1	2.2%	33.7	7.9%	60.0	8.6%
4	2.1～4.0mm	13.3	51.9%	0		11.9	7.3%	0.2	2.1%	0.02	0.4%	15.2	3.6%	34.2	4.8%
5	4.1～5.6mm	0.9	3.5%	0		0.3	0.2%	0		0		0.2	0.05%	1.5	0.2%
6	5.61～mm	0.1	0.4%	0		1.8	1.1%	0		0		1.4	0.3%	8.0	1.1%

粒状滓(単位 g)															
類	大きさ	SX2	割合	SX4	割合	SX5	割合	SX6	割合	SX7	割合	SX8	割合	SX10	割合
1	～0.7mm	0		0		0		0.2	25.0%	0		0		0	
2	0.71～1.4mm	0		0		0		0.3	37.5%	0		3.3	17.7%	0.8	1.6%
3	1.41～2.0mm	0		0		0		0.2	25.0%	0		7.8	41.9%	11.7	23.8%
4	2.1～4.0mm	0.4	50.0%	0		0		0.1	12.5%	0		3.0	16.1%	21.8	44.3%
5	4.1～5.6mm	0		0		0		0		0		0		0	
6	5.61～mm	0.4	50.0%	0		0		0		0		4.5	24.2%	14.9	30.3%

9 埋納遺構

(1) 柱 穴 1

柱穴1(付図5)は、調査区西端に位置する建物8(第9図)を構成する柱穴である。建物8は居館1内にあり、東西方向に主軸を有し梁行1間、桁行3間の規模をもつ。柱穴1は北側桁行の西から2番目の柱穴で、柱穴内から銭貨が1枚検出された。しかし、銭貨の出土状況は明確には確認されておらず、検出されたのが柱穴埋土からか、あるいは柱穴抜き跡かは定かではない。

検出された銭貨は「永楽通寶」が1枚である(第707図1593)。「永楽通寶」は中国明代のもので、初鑄は1408年である。



1593



第707図 八坂中遺跡柱穴1出土銭貨

(2) 柱 穴 2

柱穴2(付図5)は、調査区西端に位置する。柱穴1同様居館1内にあるが、本柱穴は建物を構成するものではない。しかし、柱穴2のすぐ北側には建物12がみられることから、建物12に関連する柱穴である可能性もある。柱穴内からは銭貨が1枚確認されたが、その出土状況は明確に確認されておらず、検出されたのが柱穴埋土からか、あるいは柱穴抜き跡かは定かではない。検出された銭貨は「天祐通寶」で(第708図1594)、1017年初鑄の中国北宋銭である。



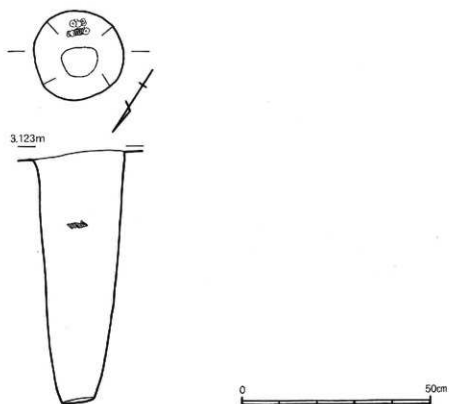
1594



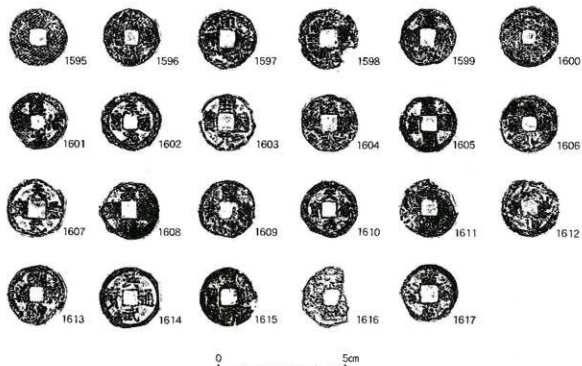
第708図 八坂中遺跡柱穴2出土銭貨

(3) 柱 穴 3

柱穴3(付図5)は、居館1内の東端に位置する。建物を構成する柱穴ではないが、付近には建物15、建物16、建物17などがみられる。柱穴(第709図)は径25cm、深さ65cmを測る。銭は検出面から深さ20cm弱のところから検出され、その位置から柱穴埋土部分であると考えられる。銭は1ヶ所から大きくふたつのまとまりとして検出された。ひとつのまとまりは、完全なさし銭状態で16枚が確認された。もうひとつかたまりは、3枚ずつなどに分かれていたが本来はさし銭状態であったと思われる。先の16枚とあわせてが一連のさし銭であったものと考えられる。銭の総数は24枚である。検出された銭(第710図)のうち、破損のため図示できなかったものを除き23枚を図示した。このうち銭種は明確に読めるものが6枚で、他は部分的に読めるものもある



第709図 八坂中遺跡柱穴 3



第710図 八坂中遺跡柱穴 3 出土銭貨

が錢種は判読できない。錢種の判読できたものは、1601が「淳化元寶」（北宋 初鑄990年）、1602が「至道通寶」（北宋 初鑄995年）、1603が「開元通寶」（唐 初鑄621年）、1607「天聖元寶」（北宋 1023年）、1610が「天禧通寶」（北宋 初鑄1017年）、1614が「洪武通寶」（明 初鑄1368年）である。

(4) 柱 穴 4

柱穴4（付図5）は、居館3の東側の外に位置する。居館を二重に囲む溝のうち、外側の溝である溝10に近い位置にあるが、建物を構成する柱穴ではない。ただ、周囲には建物に復元されない柱穴が多数あり、本来は建物を構成する柱穴であった可能性もある。柱穴からは1枚の錢貨が検出されたのみであるが、その出土状況は明確に確認されておらず、検出されたのが柱穴埋土からか、あるいは柱穴抜き跡かは定かではない。

錢貨（第711図1618）は、「元豊通寶」の篆書体である。北宋錢で、その初鑄は1078年である。



第711図 八板中遺跡柱穴4出土錢貨

(5) 柱 穴 5

柱穴5（付図5）は、居館3の東側の外に位置する。居館を二重に囲む溝のうち、外側の溝である溝10から約16m東にある。本柱穴は、現状では建物を構成するものとして復元されていないが、周辺には柱穴が多数あることから、本来は建物を構成するものであった可能性もある。柱穴からは錢貨が1枚確認されたが、出土状況が明確ではなく、柱穴埋土に伴うものか柱穴抜き跡に伴うものかは定かではない。

錢貨（第712図1619）は、「元豊通寶」の草書体である。北宋錢で、その初鑄は1078年である。

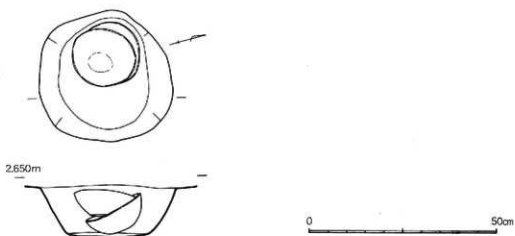


第712図 八板中遺跡柱穴5出土錢貨

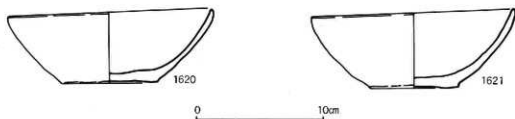
(6) 柱 穴 6

柱穴6（付図5）は、居館2の東の外側に位置する。居館2の北東コーナー部の外側にあたるが、この付近は比較的遺構が希薄な部分で、建物が2棟確認されるのみである。柱穴6は建物を構成するものではなく、位階的には建物85と重なる。柱穴（第713図）は、径35cm、深さ15cmを測るものである。あまり深くないことから、柱穴と言うよりも土壇と呼ぶ方が適当かもしれない。遺構内からは、瓦器焼成形品が2個体重なる確認された。

検出された瓦器類（第714図1620、1621）は、いずれも東国東型瓦器類である。両者とも底部は糸切りのままで、完全な平底を呈し、体部にはヘラ研磨がみられない。時期は13世紀後半～14世紀初である。



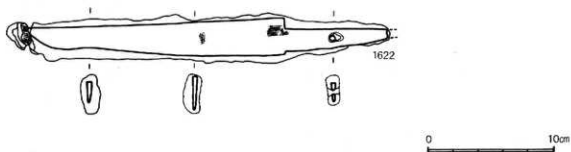
第713図 八坂中遺跡柱穴6



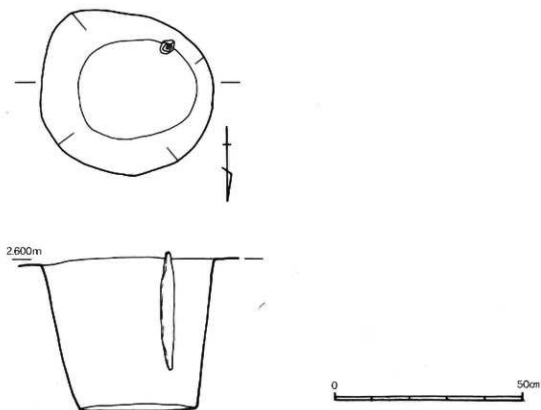
第714図 八坂中遺跡柱穴6出土土器

(7) 柱穴7

柱穴7（付図5）は、調査区の中央からやや東に寄った位置にある。中央を東西に走る溝4から、東へ約20mを測り、建物153（第103図）を構成する柱穴としてみられる。建物153は方形にちかい平面プランで、東西方向がやや長い。梁行2間、桁行2間の規模をもつもので、柱穴7は南側桁行の中央の柱穴にあたる。柱穴は現



第715図 八坂中遺跡柱穴7出土鉄製品



第716図 八坂中遺跡柱穴7

状で、東西50cm、南北40cm余を測り、深さは検出面から約40cmである。この柱穴の南西隅から、先端を下にして垂直に立てた状態で鉄刀が検出された。柱痕の位置を厳密には確認していないので不安は残るが、位置からみて柱穴埋上に埋納された可能性が高い。建物153を建てる時に、建物に対する何らかの祭祀として意識的に埋納されたものであろう。

1622（第715図）は検出された鉄刀である。全長28.4cmを測るもので、木質が残ることから、鞘に入った状態であったことが分かる。刃部は20.4cmで、刃部幅は1.6～3.0cmである。中程から先端部にかけてが、かなり幅が狭くなっていることから、長期間の使用によりかなり研ぎ減りしているものと推定される。時期的には土器もなく決め手に欠くが、16世紀代の遺構が調査区の西半分にしきみられないことを考慮にいれば、14世紀以前と考えられる。

（8） その他

以上のほかに、埋納に係わると思われるものを再度まとめる。いずれも、掘立柱建物を構成する柱穴から完形の土器が検出されたものである。詳細は「1 建物」の項に譲り、ここでは簡単に紹介だけしておく。建物118からは土師質土器小皿が1個体柱穴から確認された。13世紀後半のものである。建物142からは土師質土器杯が1個体検出された。13世紀後半～14世紀初めに比定される。建物158からは、12世紀代と思われる土師質土器小皿1個体検出された。

これらについては、地鎮や建物に対する祭祀的な性格をもつものと考えられる。

10 その他の出土遺物

(1) 弥生・古墳時代の遺物

本遺跡で検出された弥生・古墳時代の遺物を紹介する。これらは、中世遺構への流れ込み遺物などとして検出されたもので、これらの遺物が確実に伴う遺構は確認されていない。遺跡が立地する場所は八坂川の河川活動により形成されたものであるが、遺物の多くは顕著なローリングは受けておらず、比較的近接した場所にこれらの時期の遺構が存在したものと推定される。

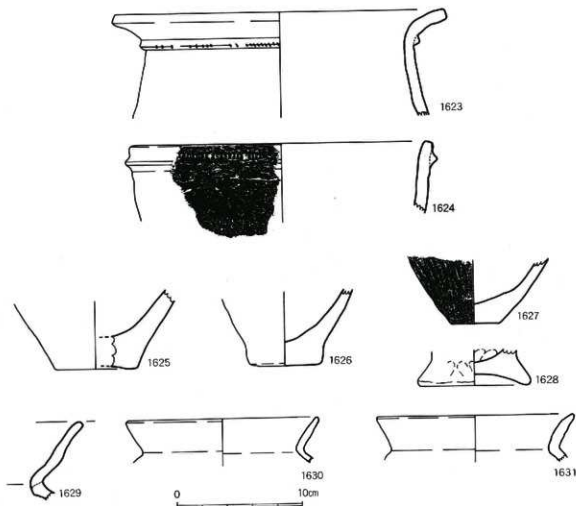
遺物（第717図）のうち、1623は甕である。内傾し長くのびる頸部から、口縁が強く外方に屈曲する。口縁端部は角張り、端正に仕上げられている。また、口縁の屈曲がはじまる部分には、断面三角形の刻み突帯が付される。弥生時代前期のものである。

1624は下城式の甕である。外面口縁下に断面三角形の突帯が付されるが、刻みは施されない。しかし、口縁端部外面には刻みが認められる。弥生時代中期に比定される。

1625～1628は底部である。いずれも平底で、弥生時代中期のものか。

1629は二重口縁壺である。古墳時代前期に位置付けられる。

1630、1631は甕で口縁部がくの字状に折れる。弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものである。



第717図 八坂中遺跡出土弥生・古墳時代遺物

(2) 古代前半の遺物

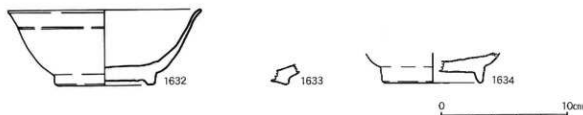
古代前半に位置付けられる遺物が中世遺構などから検出された。

なかでも、注目されるのは瓦である。いずれも平瓦の破片であるが、20数点が確認されている。出土場所は調査区の西半に集中しており、西に行くほど多くなる傾向が読み取れる。検出された瓦は顕著なローリングも認められず、比較的大きな破片もあることから近距離にこれら瓦を伴う遺構が存在するものと考えられる。寺院などに係るものである可能性が高いが、調査区内では瓦を確実に伴う遺構はもちろんのこと、古代寺院を遺想するようなものはまったく確認されていない。調査区は八坂川の河川活動により形成された自然堤防上に位置している。自然堤防は東西方向にのびるもので、北側には八坂川、南側には旧河道がある。寺院遺構があるとなれば、調査区西側の自然堤防上以外考えられず、このことは調査区内の瓦の検出状況とも符合する。調査区西側の自然堤防上に寺院遺構が存在した可能性は高いが、地形的あるいは遺物散布状況からみて複数の伽藍を配置するような大規模な寺院は考えにくい。寺院であれば、一堂形式のような小規模なものであったであろう。また、可能性として有力菅長の館、あるいは館に付随する仏教施設であることも考えられる。いずれの可能性を考えるにしても、一般集落とは異なるある種の特別な遺構がこの地区に存在したことは確実である。古代前半において、自然堤防の形成が、ある程度の集落を構えようような状況まで進行していたにせよ、相対的には不安定な場所であったことは現在以上であろう。このことを考えると、瓦を使用するような施設の場所があえてここに選ばれた理由も、八坂地区全体の政治や開発の動きと深く係わるものであろうことが想像される。

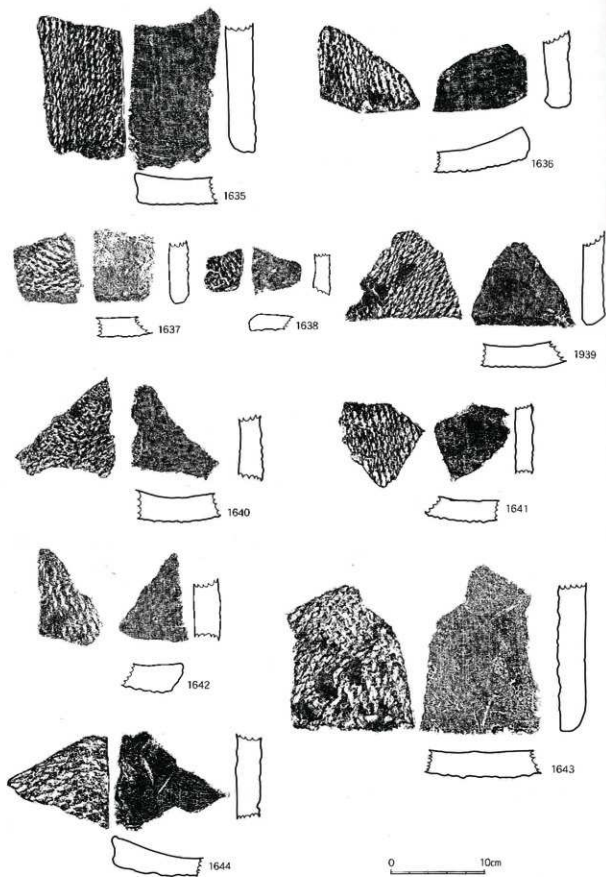
1632～1634 (第718図) は土器である。このうち1632、1633は越州窯系青磁碗である。1632は全体の器形が分かる資料である。輪高台をもつもので、高台は削りだしである。削りだしは明瞭で、体部と高台の境が明らかである。体部下半はやや丸みを有し、口縁端部がわずかに外反する。内面見込み部に目跡が残るが、目跡は線状に細く長いものである。加えて、畳付けにも目跡がみられる。軸は淡緑色を呈し、全面施釉の後畳付けのみ掻き取る。1633も越州窯系の青磁碗であるが、小破片のため全形は不明である。高台は1632に比べ低い。時期としては、1632が8世紀中頃～9世紀中頃に、1633が9世紀後半に比定できる。

1634は緑釉陶器皿で、高台は高く、見込み部中央付近に凹線がある。外底面には糸切り痕がある。胎土は白色を呈する軟質なもので、緑色釉が全面に施釉される。本品は防長産と推定され、時期は10世紀中頃か。以上のほか、後段で紹介する坏や梅、小皿 (第723図1681、1683、第724図1712、1713、第729図1810) もある。

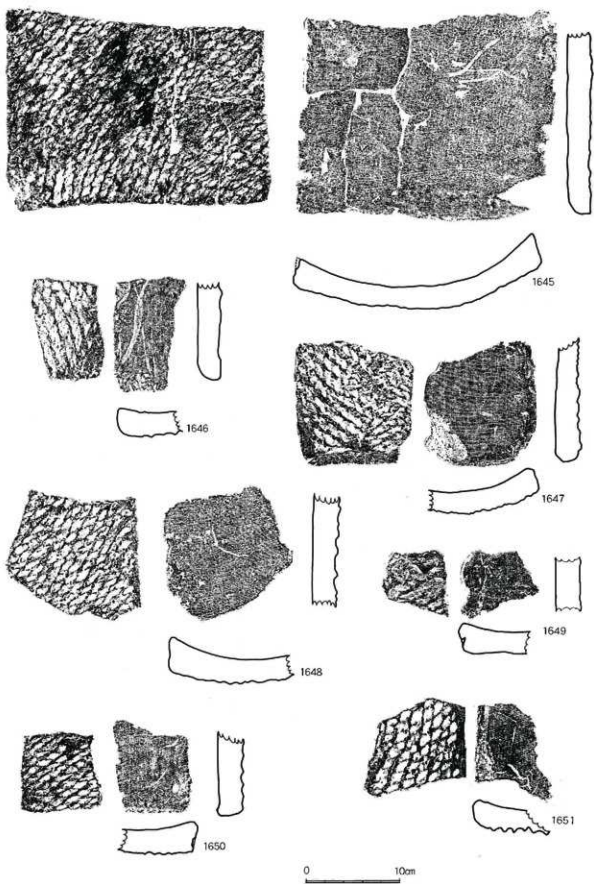
1635～1656 (第719～721図) は瓦である。いずれも平瓦で、軒先瓦はみられない。これらは、凸面に縄目タタキがあり、凹面に布目痕を残すことは共通するが、縄目タタキにより以下の2種類に分けることができる。Ⅰ類 (1635～1644) は縄目タタキの縄目が小さなものである。タタキの方向は、側縁に平行方向と垂直方向のものがある。Ⅱ類 (1645～1656) は縄目タタキの縄目が大きいのである。タタキの方向は、側縁に斜方向のものと垂直方向のものがある。側縁の仕上げは、垂直に切り落すもの (1635、1642、1644、1645、1646、1648、1650) と、段に面取りするもの (1636、1638、1647、1649、1651、1652、1653) がある。また、長側ないしは短側が残るものの中では、切り落として面取りするもの (1637、1639、1647、1650) と布目痕が側面までのびるもの (1635、1643、1645、1646) があり、後者は一枚造りの可能性が高い。以上の瓦の時期は9～10世紀に比定されるであろう。



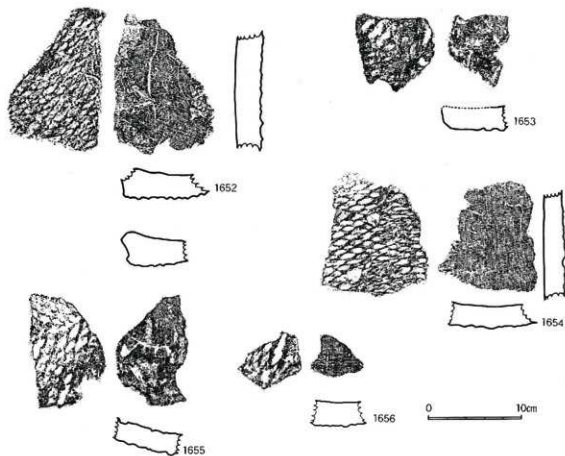
第718図 八坂中遺跡出土古代前半の土器



第719图 八坂中遺跡出土古代瓦(1)



第720図 八坂中遺跡出土古代瓦(2)



第721図 八坂中遺跡出土古代瓦(3)

(3) 古代後半以降の遺物

・土壙193北西側遺物集中地点

遺物の集中部が確認されたのは、土壙193の北西側である。遺物集中部は、バックフォーによる遺構検出作業中に、遺構検出面上部の暗褐色土中で検出された。完形品を含む土器が集中していたもので、何らかの遺構に係わるものと判断した。しかし、土器を取り上げた後に検出面までの掘り下げを行ったが、下部から遺構は検出されなかった。だが、その出土状況から一括性は極めて高いものと考えられる。

遺物(第722図)は、すべて土器である。

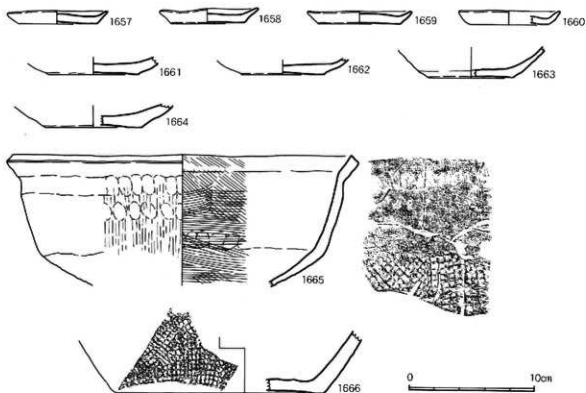
1657～1660は土師質土器小皿である。このうち、1657～1659は厚めの底部から斜方向に体部を短く引き上げるものである。体部は外反気味で、底部に比べ薄い。口径は7.8～8.2cmを測る。1660は、1657～1659に比べると体部の立ち上がり部に丸みがある。体部の厚みも底部とそれほど変わらず、斜方向に口縁へいたる。

1661～1663は土師質土器杯である。このうち1661と1662は、底部からいったんやや立ち上がった後に体部がはじまる。体部下半は丸みをもつ。1663は、体部が底部から直線的に立ち上がり、内湾気味に口縁部へいたる。

1664は東国東型瓦器柄である。底部は糸切りのままで、押し出しがまったく行われていない。

1665は上鍋である。口縁部は外に折れるもので、端部は角張る。内外面にはハケメがみられ、体部下半には格子目タタキが施される。1666は須志質の甕で、亀山焼と推定される。

以上の土器は13世紀後半～14世紀初に位置付けられる。



第722図 八坂中遺跡土坑193北西側遺物集地点出土土器

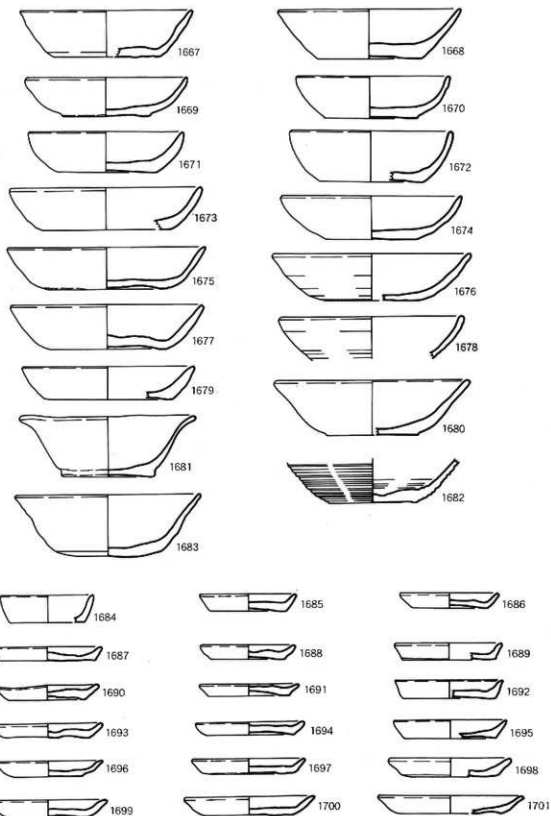
・産物以外の柱穴出土遺物

建物として復元された以外の柱穴から出土したもので、土器と石製品（第723～728図）がある。

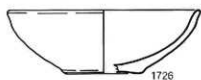
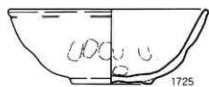
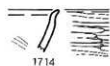
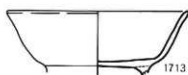
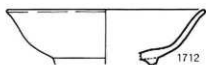
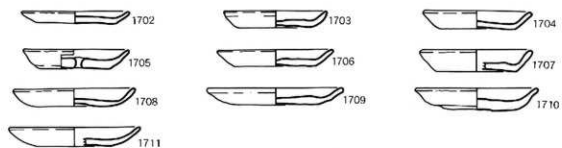
1667～1683は土師質土器である。以上のうち、1681と1683は外面の切り離しがヘラ切りである。1681の底部はやや厚めで、ヘラ切りの後ナデが施される。体部は下部でやや丸みをもつものの、直線的にのび口縁が大きく外反する。1683はヘラ切りの底部が平坦にならない。体部は大きく外反気味に口縁にいたる。両者とも9世紀中～後半に比定される。この他については、器形・口径などからおおきく2時期に分けられる。1667～1672、1679は13、14世紀代のもの。また、1673～1678、1680、1682は11、12世紀代のものであろう。

1664～1711は土師質土器小皿である。底部はいずれも糸切りである。これらは、①器高が2cmを越すもので、口径に比し器高の高いもの（1684）、②口径8cm前後で、体部の立ち上がりが急なもの（1685～1695）、③口径は8～9cm前後であるが、体部に立ち上がりが緩やかなもの（1696、1697、1702～1707）、④口径10cm前後以上で体部の立ち上がりもおおむね緩やかなもの（1698～1701、1708～1711）、以上のように大きく分類される。分類した各グループの中にも多少のバリエーションがあり、細かくはさらに議論が必要であるが、ここでは以下のような時期でとらえておく。①は14世紀前半、②は13、14世紀代、③は12世紀代、④は11、12世紀代である。また、1705については、底部中央に穿孔がみられる。このような形態のものが稀にみられるが、どのような用途に使用されるのか興味もたれる。

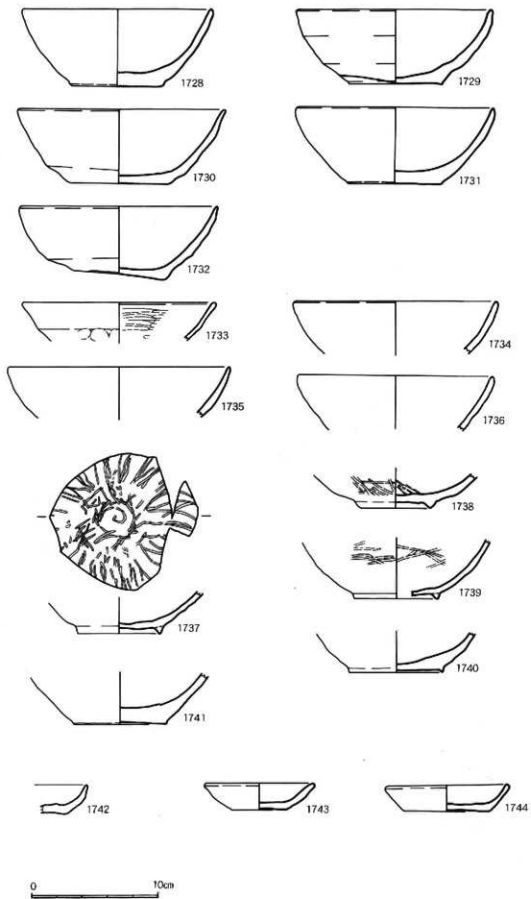
1712～1716は土師器である。1712は底部と高台の大部分を欠くものである。非常に浅いもので、体部は下部でいったん屈曲し、そのまま立ち上がった後に口縁部が緩やかに外反する。体部は内外面ともヘラミガキがみられず、ナデ仕上げである。1713もやはり浅い器形を呈し、体部下に高台を付す。外表面は板状圧痕があり、切り離しの状況は不明である。体部はやや内外面ともヘラミガキが施されず、ナデのみである。両者は、その器形・調整などから9世紀代に比定できるものと思われる。1714～1716については、体部内外面にヘラミガキが



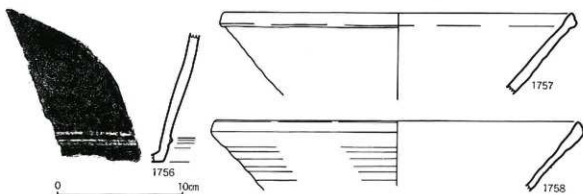
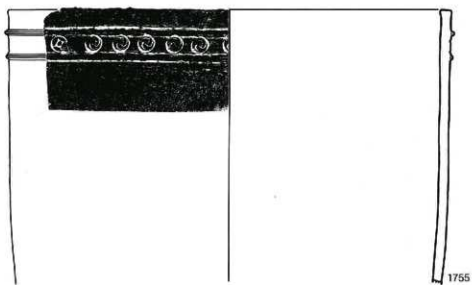
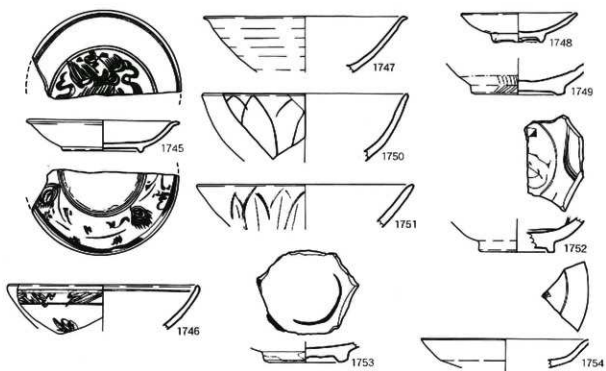
第723図 八坂中遺跡建物以外の柱穴出土遺物(1)



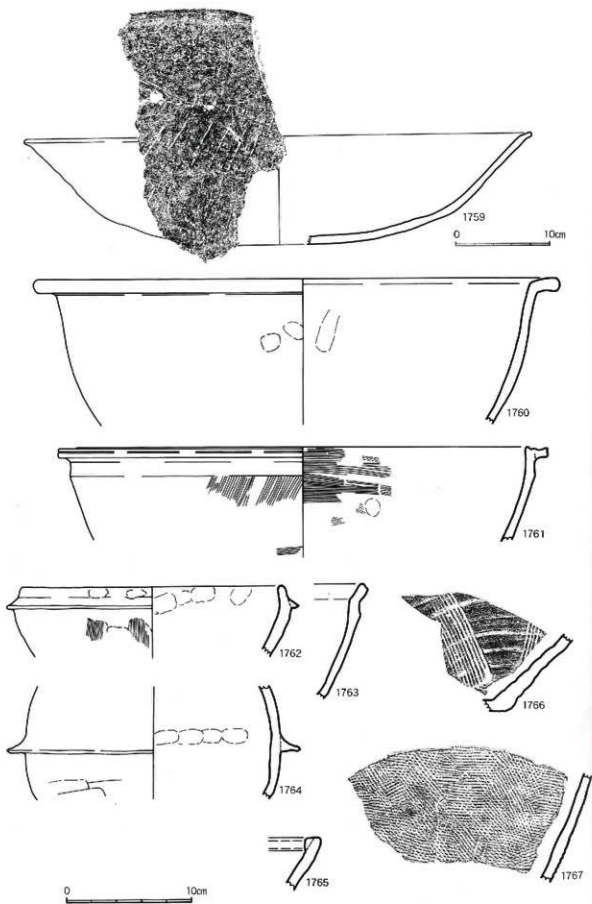
第724図 八坂中遺跡建物以外の柱穴出土遺物(2)



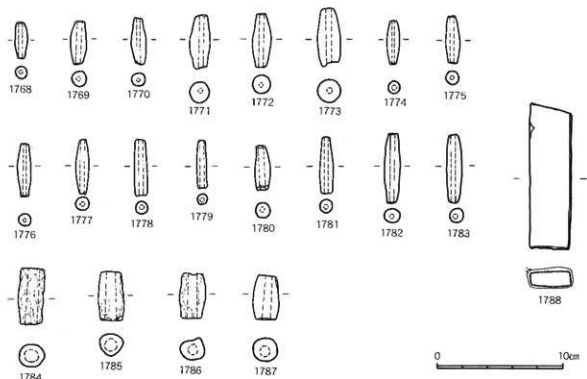
第725図 八坂中遺跡建物以外の柱穴出土遺物(3)



第726図 八坂中遺跡建物以外の柱穴出土遺物(4)



第727図 八板中通跡建物以外の柱穴出土遺物(5)



第728図 八板中遺跡建物以外の柱穴出土遺物(6)

みられ、外底面に糸切り痕が残るなど、12世紀初め前後のものであろう。

1717～1721は内黒土器椀である。このうち1717と1718は、輪高台をもつものである。体部は内外面ともヘラミガキがみられる。1720、1719は円盤状高台をもつもので、底部には糸切り痕が残る。1720の底部には、×印状のヘラ描きが確認できる。1721は輪高台を有し、高台と体部の境に罫が付される。以上は11～12世紀に比定されよう。

1722～1741は瓦器椀である。このうち1722～1732は余形に分かる資料である。1723は体部内外面にヘラミガキが施され、高台も断面方形のものが付される。12世紀後半に比定される。1722はやはりしっかりした高台が付くが、断面三角形である。磨滅のため体部のミガキは不明だが、13世紀前半に位置付けられよう。1724、1725は低い高台が付されるもので、体部にはヘラミガキがみられない。13世紀後半のものであろう。1726～1732は底部平底の一群である。いずれも底部糸切りで、非押し出しで技法により成形されている。東国東型瓦器椀の13世紀後半～14世紀初のものである。1733～1736は口縁部資料である。このうち1733は畿内の和泉型瓦器椀で、12世紀代のものであろう。他は東国東型瓦器椀で、13、14世紀のものであろう。1737～1741が底部である。1737は椀であるが、ヘラミガキを内底部に満巻き状にいわれた後、体部へむけ放射状に施す。1737～1739は12世紀後半。1740は13世紀中頃～後半。1741は13世紀後半～14世紀初である。

1742～1744は瓦器小皿で、14世紀代のもか。

1745～1754は輸入陶磁器である。1745、1746は青花で、1745は16世紀前半までを主体とするもの。1746は海州窯系で、16世紀後半以降。1747、1749は白磁碗で、前者が12世紀中頃以降、後者が11世紀後半から12世紀前半。1748は高台に挟りのはいった白磁皿で、15世紀代。1750～1753は青磁碗で、1752、1753が12世紀後半、1751が13世紀代、1750が14世紀に下る可能性をもつ。1754は同安窯系青磁皿で12世紀後半。

1755、1756は瓦質土器火鉢で16世紀代。1757、1758は東播系こね鉢。

1759～1763は土鍋である。各時期のものがあ、多様な器形がみられる。1759は14世紀以降、1760は12世紀、1761と1762は13世紀に各々比定できる。1763は外面にケズリがあり、16世紀代。

1764は茶釜、1765は防長系漆鉢、1766は備前焼漆鉢、1767は東播系の豊胸部である。

1768～1787は上鍾である。大きく分類すると、①孔の径が小さく紡錘形のもの（1768～1773）、②孔の径は小さく紡錘形を呈するが、①に比べスリムなもの（1774～1783）、③円筒形を呈し孔の径も大きいもの（1784～1787）、以上に分けられる。

1788は砥石である。

・その他の出土遺物

遺構検出作業中に検出されたもの、どの遺構に属するか不明なもの、調査区内採集資料などを紹介する。資料には、土器（第729～734図）、石製品（第735～738図）、金属製品（第739、740図）がある。

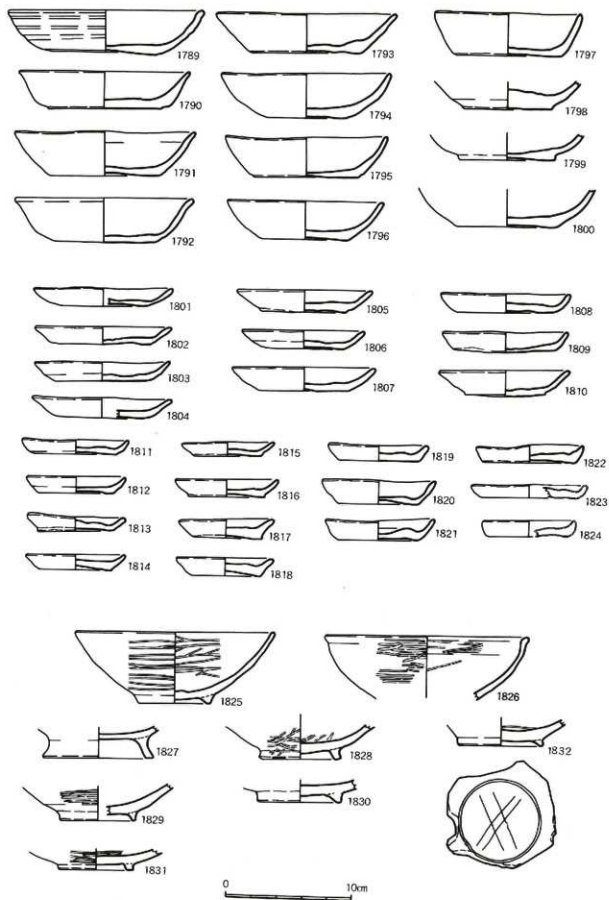
1789～1800は土師貫七器である。1789～1797は全形に分かる資料で、すべて底部系切りである。これらは、①器高が14cm以上と大型で、体部の立ち上がりが緩やかで、内湾気味に口縁にいたるもの（1789～1792）、②口径が12～14cmとやや小型になり、体部の立ち上がりが比較的シャープなもの（1793～1797）におおまかに分けられる。各グループの中にもバリエーションがみられるため、細かな議論は必要だが、ここでは①を11、12世紀代、②を13、14世紀代ととらえておく。1798～1800は底部資料である。1798と1799は②の時期に、また1800は①の時期に相当するものと思われる。

1801～1824は土師質土器小皿である。このうち1810は底部ヘラ切りである。体部は、底部から斜方向に立ち上げ、直線的に口縁にいたる。口縁端部は丸くおさまられる。口径は9.9～10.4cm、器高1.9～2.4cmである。大分県内における出現期の小皿としては、10世紀前半に比定されている中津市三口遺跡SK3の資料があげられる。10世紀後半に位置付けられる宇佐市弥勒寺SK5では、糸切りのものが混じり、法量も三口遺跡に比べ小さくなる。1810は法量的に弥勒寺SK5にちかいことから、10世紀中頃から後半ととらえておく。他については、すべて底部系切りであるが、①口径が10～11cmで、体部が斜方向に立ちあがるもの（1801～1809）、②1杯が8cm前後で、体部が短く立ち上がるもの（1811～1819、1822～1824）、③器高が1.5～2.0cmとやや高いもの（1820、1821）、以上のように分類される。①は11、12世紀代のもと考えられるが、口径が大きいことを考慮にいれると、古い方に主体があるものと推定される。②は13、14世紀に比定されるものであるが、一部については12世紀まで遡る可能性をもつ。③は13世紀後半～14世紀の所産であろう。

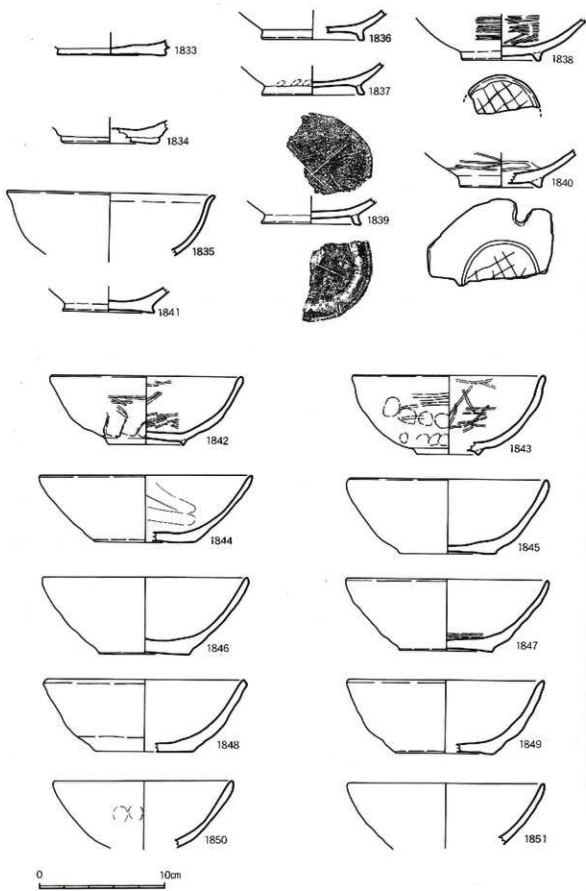
1825～1832、1852は土師器椀である。1825は体部下半が張らず、高台部から直線的に口縁にいたる。内外面には間隔のあいたヘラミガキがみられる。これに対し1826は、体部が内湾気味に口縁にいたるもので、口縁部がわずかに外反する。体部内外面にはヘラミガキが施される。いずれも12世紀代と思われるが、後者から前者へ新しくなる。1827～1832は底部資料で、高台の高いものから低いものまでである。このうち1827は11世紀代まで遡る可能性をもつが、他は12世紀代に比定できるものであろう。また、1832の外底面には、×印状のヘラ描きがみられる。この他、1852の口縁外面には黒書がみられる。

1833～1841は内黒土器椀である。以上のうち、1835は口縁部資料で、口縁部がわずかに外反する。調整は、器面が荒れているため明確ではない。他は底部資料である。このなかで、1833と1841は円盤状高台を呈するものである。1833の底面には、糸切り後板状疔痕が明瞭に残る。輪高台を有するものうち、1837と1839は高台がやや高く、外開き気味である。これらについては、1833と1841とともに11世紀代に位置づけられよう。また、1839は内底面と外底面に×印状のヘラ描きが、1838と1840の外底面には格子状のヘラ描きがみられる。

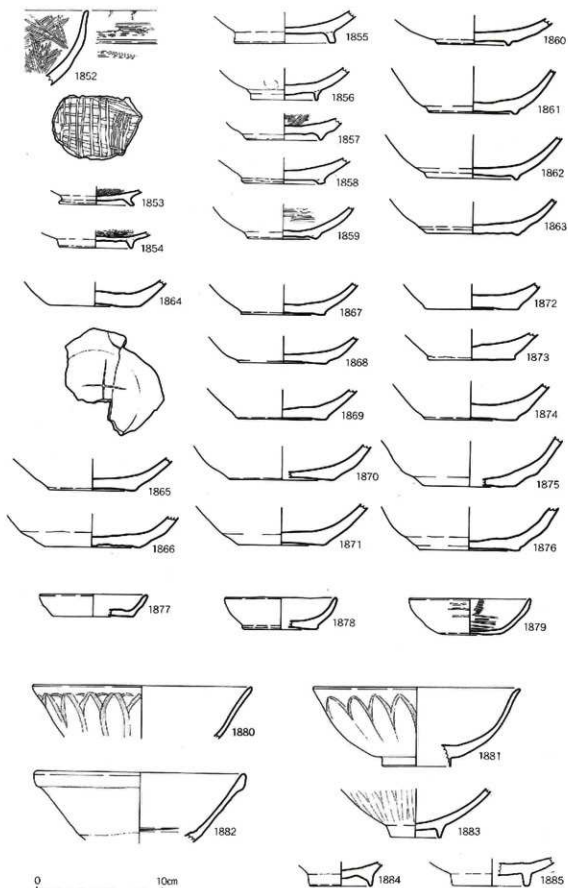
1842～1851、1853～1876は瓦器椀で、このうち全形に分かるものは1842～1849である。1842と1843は豊前型の瓦器椀で、器高の低下傾向がみられる。そのため、体部下半が丸みをもつ。外面体部下半にはユビオサエなどが顕著で、内外面に雑なヘラミガキがみられる。高台は断面三角形の低いものが付される。これらは13世紀後半に比定される。1844～1849は、底面が非押し出し技法の東国東型瓦器椀である。これらはいずれも完全な平底で、底面には糸切り痕が残る。13世紀後半～14世紀初めに比定される。1850、1851も底部を欠くが、13、14世紀代の東国東型瓦器椀である。1853～1876は底部資料で、このうち1853は畿内の橿原型瓦器椀であ



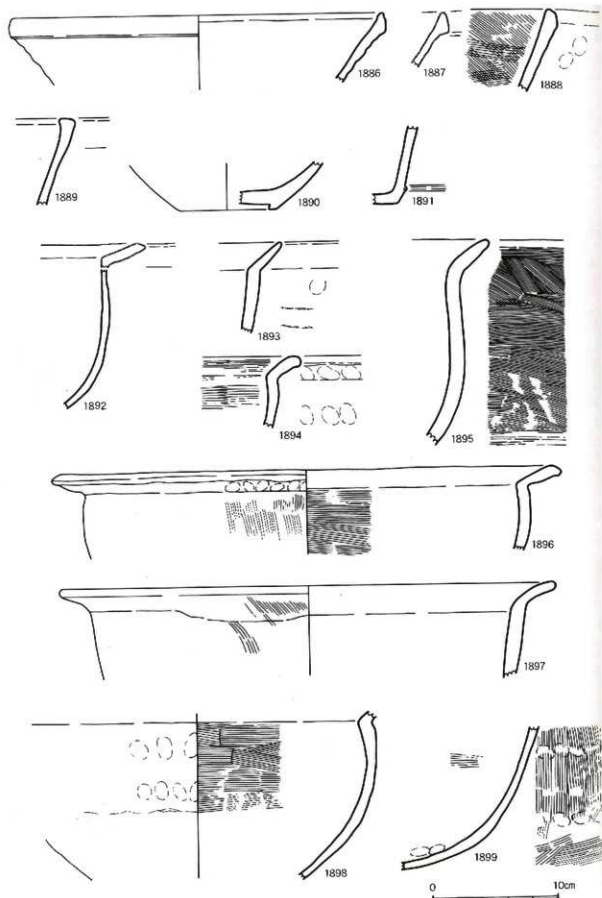
第729図 八坂中遺跡その他の出土遺物(1)



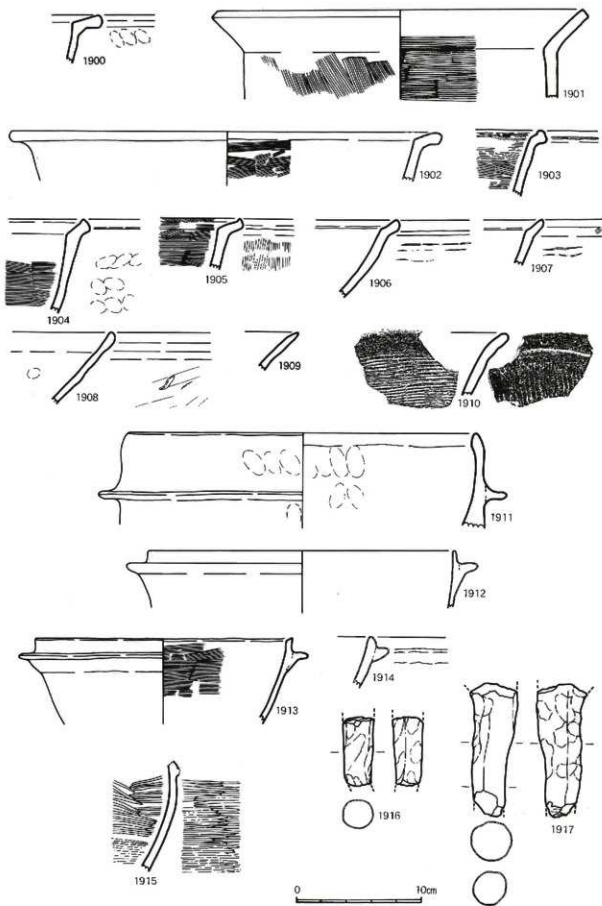
第730図 八坂中遺跡その他の出土遺物(2)



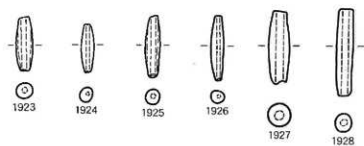
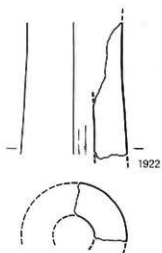
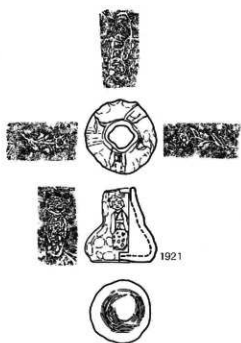
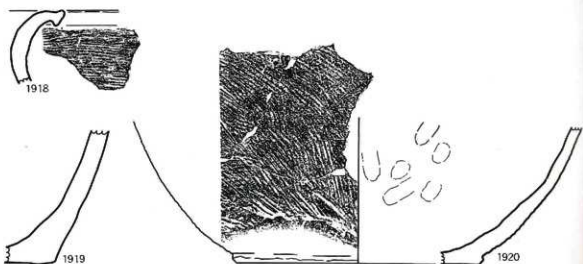
第731図 八坂中遺跡その他の出土遺物(3)



第732図 八坂中遺跡その他の出土遺物(4)



第733図 八坂中遺跡その他の出土遺物(5)



第734図 八坂中遺跡その他の出土遺物(6)

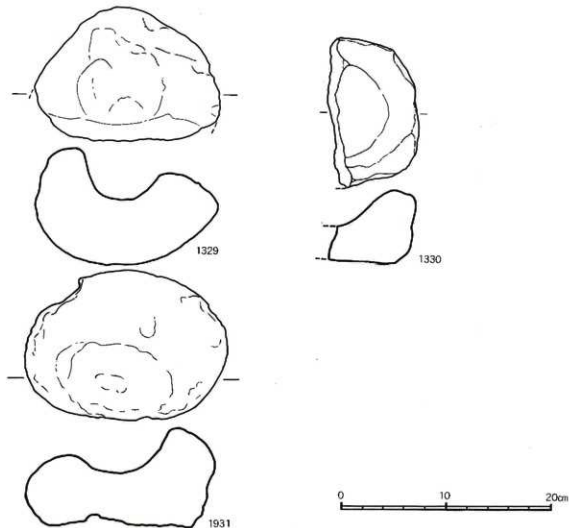
る。高台は外周に付されており、内底面には格子状のヘラミガキがみられる。12世紀前半のものか。1854は和泉型瓦器碗で、12世紀後半に比定される。1856、1859は押し出しがなされ、残りは非押し出しである。前者は豊前型、後者は東国東型と理解され、12世紀代と思われる1855と1856をのぞき、他は13世紀代に比定される。1864～1876は完全に平底化する東国東型瓦器碗で、13世紀後半以降である。このうち、1864の底部には十字状のヘラ描きがある。

1877、1878は在地の瓦器小皿で、13世紀後半から14世紀にかけてのもの。1879は畿内の楠葉産小椀である。楠葉でも類例の少ないもので、主として京都周辺など限られた地域に分布をもつ。13世紀後半に比定される。

1880～1885は輸入陶磁器である。このうち1880、1881、1883は青磁で、13世紀に位置付けられる。1882は下縁の白磁で、11世紀後半～12世紀前半のものである。

1886、1887は東播系のこね鉢で、12～13世紀のものか。1888は鉢で、内面にハケメがみられる。13世紀前後の所産か。1889も鉢と思われるが、土鍋の可能性もある。1890は鉢底部。1891は瓦質土器火鉢である。

1892～1914、1916、1917は土鍋である。このうち、1892～1902は口縁がくの字状に折れる点が共通する。全形が明らかなものは少ないが、丸底を呈するものである。体部は、長胴気味のものから半球形のものへと変化すると考えられ、全体として12～13世紀に位置付けられる。調整については、体部内外面のハケメの有無などにバリエーションがみられる。1903～1905は口縁部が短く外傾し、端部が上方に引き上げられるものである。内面にはハケメがみられ、一部については外面にもハケメが施される。13～14世紀にかけてのものか。1906～1908は大型で底部丸底を呈するものである。体部外面にはヘラケズリが施されており、16世紀代に比定される。



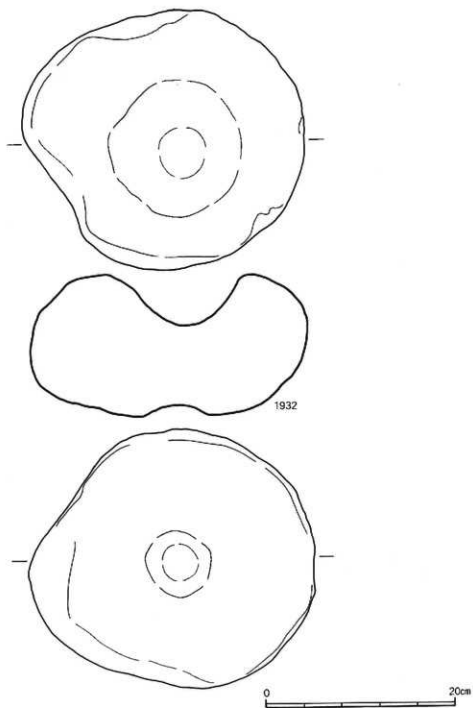
第735図 八坂中遺跡その他の出土遺物(7)

1909, 1910は、体部が口縁にむかい緩やかに外反するものである。1911～1914は口縁下に鈎が付されるものである。1911は鈎が口縁よりもかなり下に付されるもので、12世紀代である。他は13世紀に比定される。1916, 1917は上鍋の脚である。

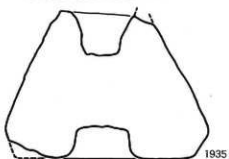
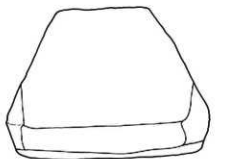
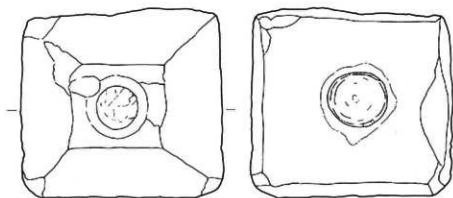
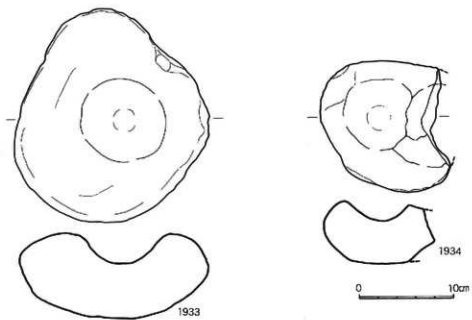
1918～1920は裏である。1918, 1920は須恵質である。1920は平行タタキが施される。1919は備前焼である。

1921は手捏ねの製品で、体部の四方向にヘラにより絵が描かれる。絵は、和服姿の女性と草花を各々対向する位置に描く。

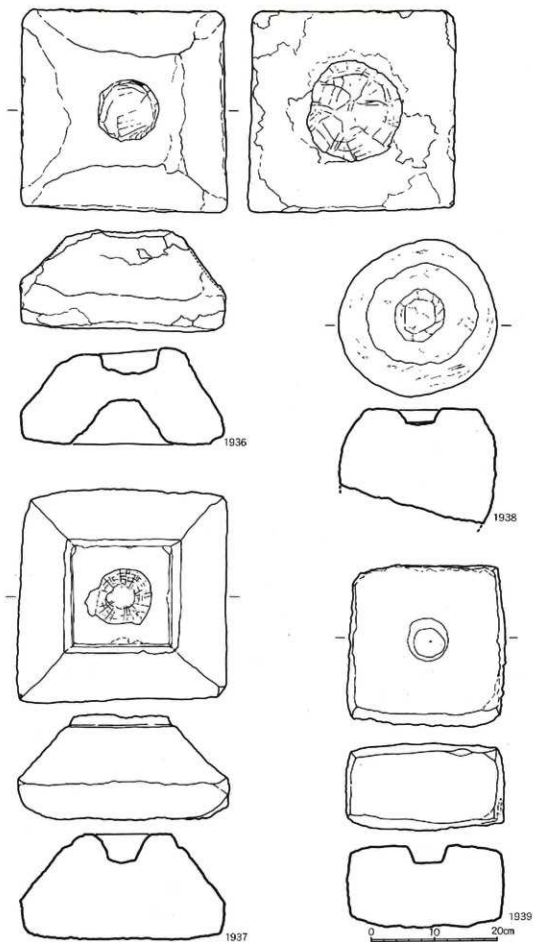
1922はフィゴの羽口である。内傾は3cm余を測る。



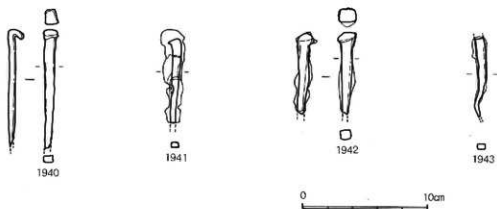
第736図 八坂中遺跡その他の出土遺物(8)



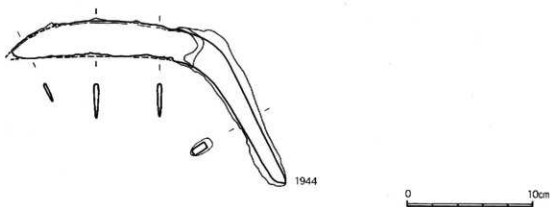
第737図 八坂中遺跡その他の出土遺物(9)



第738図 八坂中遺跡その他の出土遺物(10)



第739図 八坂中遺跡その他の出土遺物(11)



第740図 八坂中遺跡その他の出土遺物(12)

1923～1928は土錘である。

1929～1934は凹石である。凹面を利用しており、片面にくぼみを作るもの（1929～1931、1934）、及び両面にくぼみを作るもの（1932）がある。欠損品があるが、大きさは径10cm余～30cm余までのものがみられる。いずれも古代後半から中世にかけての所産である。

1935～1937は五輪塔の火輪部である。1935は高さが高く、軒の反りも急である。軒口の厚みは、他とほぼ同じである。上面に風・空輪部の柄を装着する孔が、また下面にも水輪部と装着するための孔がみられる。1936は、1935に比べると高さかなり低い。やはり上面と下面に穴がみられるが、下面の穴は水輪部との装着用も兼ねるものかもしれないが、深く抉っており、軽量化のためとも考えられる。1937は上部に露盤を作り出し、上面のみに風・空輪部の柄を装着する孔がみられる。

1938は水輪部である。下部を欠損するが、上面には火輪部との装着用の孔を有する。1939は地輪部である。

1940～1943は鉄釘である。いずれも先端部や頭部を欠損しているが、断面方形で、頭部を折り曲げたものである。

1944は鉄製の鎌である。刃部はわずかに湾曲するものの、ほぼ直線を呈する。刃部から基部へ大きく屈曲し、基部は直線的にのびる。刃部は先端部を若干欠くが、現状での長さは約14cmを測る。また、刃部の幅は最大で2.8cmである。基部は長く12.5cmを測る。

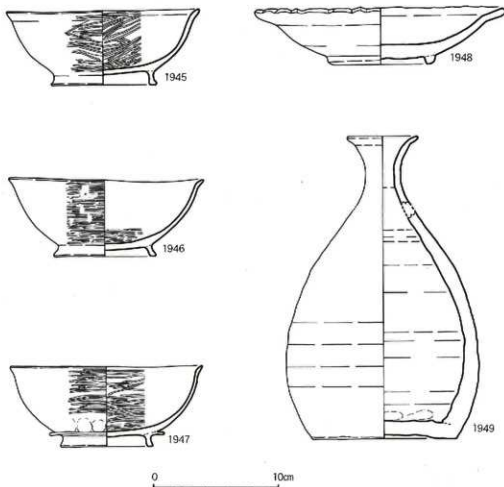
・試掘調査出土遺物

試掘調査の際に検出された遺物のうち、完形品または完形にちかいものを紹介する。

1945、1946は内黒土器輪である。1945は体部はわずかに丸みをもつもので、口縁部にいたり緩やかに外反する。口縁端部は尖り気味である。高台は比較的高く、やや外開き気味である。体部内外面にはヘラミガキが施される。内面のヘラミガキについては、体部下半まで内底面と一連のミガキがおよび、体部上半のみ改めて横なしいしは斜方向のミガキを施す。1946も同様な器形を呈する。ミガキについては磨滅が著しいため、詳細は不明である。1947は内黒土器輪で、体部と底部の境に罫が付く。全体の器形は、前二者とほぼ同じである。内面にミガキは、内底面が不定方向気味に、そして体部が横方向に施される。以上は11世紀後半のものか。

1948は中国製青磁皿の完形品である。口縁部は外方に折れるもので、端部は稜花状を呈する。軸は発色も悪く、軸切れも目立つ。1949と同じ場所より検出されており、一括埋納品であったと思われる。

1949は備前焼徳利で、本来は完形品であった。16世紀代のものである。



第741図 八坂中遺跡試掘調査出土土器

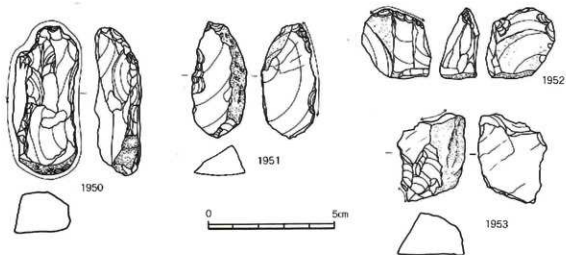
(4) 燧石

燧(火打ち)石とみられる石器が数点出土している(第742図)。

1950は、黄上色をした珪質岩の細長い剥片の全面に磨滅した剥離面がみられるものである。一部に素材時の自然面がのこっており、明らかに加丁されたものであることがわかる。磨滅は手擦れによるものか、火打ち作業によるものかは判明しないが、両者によるものであろう。長さ5.8cm、幅2.5cm、厚さ1.9cm、重さ32.8g。1951は、半透明のアメ色をした珪質岩の剥片である。自然礫から剥離されたもので、縁辺部に細かい剥離面がのこされており、火打ち作業によるものとみられる。長さ4.5cm、幅2.1cm、厚さ1.2cm、重さ11.6g。1952は1951に近い石材で、小さな角礫にいくらかの剥離面を加えて稜を形成し、その一辺(稜)で火打ち作業を行っている。長さ2.7cm、幅2.7cm、厚さ1.4cm、重さ11.6g。1953は石英の礫の一部を利用したものとみられる。一部に火打ち作業によるとみられる剥離面が観察される。産地は、佐賀関半島と推定される。長さ3.4cm、幅2.7cm、厚さ1.7cm、重さ17.0g。

以上4点については、時代が不明であるが、1953を除いては近世のものとして推定される。とくに1950は、使用頻度が高い燧石とみられ、また石材も隣接する山香町の江戸時代の特産品であった火打ち石「六太郎角」である可能性が高い。その色調は、当時の通称みそと呼ばれる良品とみられる。1951、1952はともに半透明のアメ色をなすもので、「六太郎角」とは別の河床産の珪化木系とみられる。1953は、中世大友府内町跡においても石英製の火打ち石とみられるものが出土しており、むしろ中世に属するものと考えられる。

速見郡山香町の山中六太郎に産する「六太郎角」は、本邦屈指の良質の燧石として西日本一帯に広く流通していたことが知られている。「六太郎角」の角とは、燧石すなわち火打ち石のことで、『豊後国志』の箇々の十産というところに「燧石 山香郷六太郎村出」記されており、「六太郎角」の名は遠く京阪地方まで聞こえていたという。このことから、山香郷の燧石採掘は、少なくとも今から200年以上も昔のことと推定される。その「六太郎角」は、「みそ」と呼ばれるものと、「浅黄」と呼ばれるものの二種類があり、「みそ」は黄味を帯びていて火花は大きいのが欠けやすいので長持ちしはしない。「浅黄」は火花は小さいが長持ちするということが、『豊後立石史談』の中に述べられている。



第742図 八坂中遺跡出土燧石

第3章 まとめ

遺跡からは、多くの遺構・遺物が確認された。これらの変遷を段階ごとに整理し、まとめにかえる。

第Ⅰ段階

具体的な遺構は確認されていないが、瓦や越州窯青磁、緑釉陶器などの遺物が一定量認められる9、10世紀の段階である。これより以前については、弥生式土器や須恵器がごくわずかに確認されるのみである。本遺跡の立地する場所は、八坂川右岸の氾濫原に形成された自然堤防上であるが、古代以前においては自然堤防形成途上で、集落地には不適な土地であったと考えられる。古代前半の遺物は調査区の西半に集中しており、この段階の遺構は、調査区西隣の自然堤防最高所にあつた可能性が高い。遺跡の性格としては、瓦などから寺院の可能性を考慮することができる。しかし、地形的に大規模な伽藍の展開は難しく、一堂形式の小規模なものであつたと思われる。このほか、可能性として有力首長の館、あるいは館に付随する仏教施設であることも考えられる。いずれの可能性を考えるにしても、一般の農業集落とは異なる特別な遺跡がこの地区に存在したことになる。これは、遺跡の立地する場所そのものの地理学的な環境や成立状況とも深く係わることで、第Ⅱ段階以降の状況にも大きく影響する。

第Ⅱ段階

集落が自然堤防全体に展開する段階で、11、12世紀に比定される。掘立柱建物や墓がみられ、自然堤防全体に展開する。建物の配置などに明確な企画性はみられず、屋敷地を両する明瞭な施設ももたない。また、建物規模についても際だって大型のものはなく、きわめて平均的な規模である。しかし、屋敷周辺には特定個人益と思われる墓がみられることから、階層的にはやや上位に位置付けられるものと思われる。墓は土壇墓で、一部に木棺を利用したものや、周溝を巡らすものがみられる。また、墓墳内における頭位をみると、西にもつものが多い傾向にある。

一般的な農業集落が早い段階から居を構えた場所でない本地区に、唐突に集落が出現することについてはそれなりの要因があると思われる。その第一は、自然堤防の形成が集落地として使用可能なまでに進行したこと。第二は、周囲に可耕地の少ないこの場所の価値が高く評価されたためである。本段階は宇佐宮弥勒寺領八坂荘の成立時期にあたり、荘園体制の整備の中で八坂中遺跡の地は、一般の農業集落とは異なる役割を担うものとして位置付けられるようになったものであろう。すなわち、本遺跡は八坂川の右岸に位置しているが、川が大きく蛇行することから、遺跡の西側と東側で川に面する。北側は氾濫原の川原が広がり、現在でも畑地と雑糧地が混じり広がっている。遺跡の南側は古い旧河道に起源をもつ低地で、早い段階で水田化されていたものと考えられる。このような状況のなかでみた場合、本遺跡の持つ性格として、八坂地区における物資集積ステーション的役割を担っていたことが推定される。遺跡は大字中に所在し、その名称からも遺跡を含む本地区が、古代の八坂郷から宇佐宮弥勒寺領荘園の八坂荘に引き継がれるなかで、その中核であったことを窺い知ることができる。よって、この周辺に地域支配の様々な機能が集中していたことが想像される。遺跡西側の現八坂橋まで満潮時には潮が上がることを考えれば、船輸送を利用した八坂地区の中核的物資集積拠点、すなわち八坂地区の玄玄間防役割を担う場所であった可能性が高い。さらに、遺跡の西側に小字市の地名がみられることから、小字市に限らず遺跡の周辺に市が開かれていた可能性も考えられる。前述したように遺跡の北側には広大な川原が広がっており、地域の土地利用の観点からみても、市が立つとすればこの周辺であろう。

第Ⅲ段階

第Ⅱ段階以後や空白期間があつた後、再び自然堤防上全域に集落が展開する。時間的には、13世紀後半以降である。この段階には、自然堤防中央を東西に走る溝（溝3、溝4、溝5は一連のものである）と直角方向に分かれる溝1などがある。これら自身が個別の屋敷地を両するものではないようであるが、集落に深く係わるもの

であったと理解できる。また、上堀窯などの墓も屋敷地周辺にみることができ、これらから、一部の屋敷については階層的に上位に位置付けられるものもあったことが分かる。上堀窯における頭位をみると、第Ⅱ段階とは異なり方位を北にとる。本遺跡においては、頭位方向が時期により明確に変化する。

遺物については、溝1から多量の瓦器椀や土師質土器が出土した。それらには完形品が多く含まれるとともに、吉備系土師器椀などの遠隔地土器も含まれていた。その量と質から、本遺跡が八坂地区中核部の一角を担うものであることが推定できる。また、大量にみられる底部糸切りで平底をなす瓦器椀は、これまで東国東の地域のみで確認されているものである。これは東国東型瓦器椀（詳細は「八坂の遺跡」3 考察・付論篇参照）と称されるもので、12世紀後半に底部非押し出し技法による土師器椀製作から転換し成立したもので、その後型式変化を遂げたものである。東国東型瓦器椀がこのように多量に検出されたのは初めてで、土器の製作・流通の面でも、本遺跡が地域の拠点的作用をもつものであったと考えられる。八坂地域における物資の物流センターの性格は、本段階にいたっても第Ⅱ段階同様維持されていたであろう。

ひとつ気かりな点は、第Ⅱ段階の後や第Ⅲ段階の後に、遺構・遺物からみて空白がみられることである。しかし、自然堤防上を全面的に調査したわけではないので、調査区外に遺構が存在することが十分に考えられる。自然堤防上での遺構の展開は時代によって大きく変化したものと考えられるが、立地条件などからみて本遺跡のもつ役割は基本的に各時代を通して大きな変化はなかったものと理解される。ただ、洪水などの自然災害の面からみればその脅威は常に存在し、発掘調査中の平成9年と10年にも自然堤防が全面的に冠水する被害の面から調査区北側の畑地では、近世の耕作面から1m以上の堆積が認められるなど、時代が遡るほど本自然堤防周辺の不安定さは増すものと思われる。自然堤防上における遺跡の取縮・拡大についても、このような自然災害とあながち無関係ではないかもしれない。

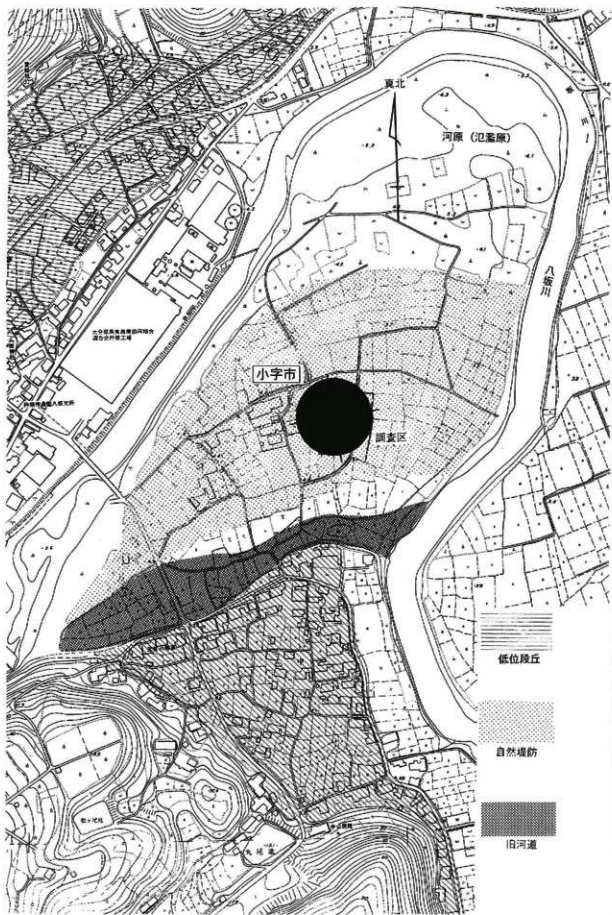
第Ⅳ段階

遺跡西半に、溝により囲まれた居館1、居館2、居館3が出現する。時期的には16世紀代である。この時、遺跡東半にはこの段階の遺構がまったく確認されず、東半については水田化されたものと理解される。現在、調査区中央付近に、幹線水路が自然堤防を横断するように南北に走っている。16世紀代の遺構の広がりには、この水路を境にしており、少なくとも居館の成立した16世紀には、この水路があり東半は水田化されたものであろう。

居館群の変遷はⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期の変遷が想定され（第687、688図）、最終的には17世紀初めで存続する。各居館の規模は居館1が60m×22m、居館2が32～35m×26～29m、居館3が28～31m×32～35mで、半町四方にも遠く及ばない。居館規模そのものが単純に館の主の力量を示すとすれば、各居館の主は当地方の領主である木付氏を支える在地の小領主層あたりと理解できる。しかし、連続して築かれる居館をまとめて囲む溝がみられるため、これ全体をひとつの居館とし、各居館は館内での機能・役割の差を示すと考えれば、先の評価を大きく上方修正する必要も生じてくる。居館群を囲む溝について、Ⅱ期では居館1と居館3のすぐ北側を東西に走る道路状の空間を挟みさらに北方に延び、道路に面して並ぶ建物群まで取り込んでしまう。このように考えれば、居館群全体を囲む溝は惣構的な役割を担うもので、内部に複数の屋敷区画や屋敷に隷属する階層の建物まで含んでいたとも理解できる。この場合、全体は一族邸宅と呼ばれる単位であった可能性が高い。いずれにしても、溝と土塁に囲まれた状況は防御性が高く、時代の社会情勢を強く反映したものであろう。

第Ⅴ段階

館が廃絶し調査区全体が水田化される段階で、17世紀以降である。館跡地では、館の変遷Ⅳ期で示したように、かつての館の溝を利用した長大な池が掘られている。用水の補充機能をもつものとして利用されたものであろう。その後、池も埋められ現在にいたるが、その間に水争いの犠牲者を埋葬したと伝承される築橋塚が水田中の畔に形成される。調査区の西隣には、近世に庄屋を務めた屋敷がみられるが、これは16世紀段階における居館群の勢力がそのまま移ったものと考えられる。



第743圖 八坂中遺跡周辺地形図

八坂中遺跡出土土器観察表

第7回 建物7								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
1	土師質土器 小皿	(9.0)	(8.8)	1.7	角閃石・長石・ 金雲母	体部の立ちあがりは急である	内面 回転ナデ、不定方向のナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り	A区 E-10 P-10
第8回 建物8								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
2	陶質鉢	-	-	-	内白っぽい灰色の釉 外赤・緑色の釉	片口部あり 唇孔あり	外面に自然釉	A区 E-10 P-9
第11回 建物10								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
4	土師質土器 小皿	7.5	6.0	1.1	角閃石・長石・ 茶褐色	底部中央に深い体部がシャープに 立ち上がる	内外面 回転ナデ 底部糸切り	A区 E-10 P-8
第15回 建物21								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
5	瓦葺壺	(15.8)	(7.4)	6.5	石英・金雲母・ 灰白色 外黒・緑部灰色	重ね焼きの痕跡あり 底部は平底	内外面 回転ナデ 底部糸切り、唇孔存在	A区 G-10 P-8
第19回 建物23								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
6	土師質土器 小皿	7.7	6.0	1.0~1.3	長石・白色粘土・砂粒・ 淡明緑色	体部は短い	内面 回転コナデ、ユビナデ 外面 回転コナデ	A区 J-11 P-13
第26回 建物35								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
7	瓦葺壺	(14.0)	(4.4)	5.8	白色粘土・黒色粘土・長石・ 灰色	断面方形の高台は貼り付け	内面 不定方向の板子ナデ、ナデ 外面 横方向のミガキ、コナデ、 ユビナデ、高台貼り付け、底部 板状工具によるナデ	A区 J-11 P-2-3
第48回 建物78								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
11	五匹土器 仏花器	-	-	-	砂粒・角閃石・長石・石英・ 明淡褐色・明褐色	欠損するが下部に脚がつく	内面 回転コナデ 外面 タテヘヨミナデ半焼き色？ 胴部に後述の脚に23回のスタ ンプ文が並ぶ。	A区 K-11 P-8
第58回 建物95								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
15	土師質土器 小皿	(7.7)	(8.2)	1.3	角閃石・ 黄褐色	体部は短く外反意味	内面 不定方向のナデ、回転ナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り	A区 E-2 P-17
第64回 建物105								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
16	須恵部 こね鉢	(29.0)	-	-	大粒の砂粒 内灰色 外灰色、口縁部は黄灰色	口縁部外裏がわずかに肥厚	内面 回転コナデ、コナデ 外面 回転コナデ、コナデ、ロ ケノ痕跡あり	A区 H-1 P-22
第67回 建物109								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
18	土師質土器 小皿	8.3	7.5	0.9~1.1	長石・ 褐色灰色	体部が短く直立 口縁部は尖り風味	内外面 回転ナデ、底部糸切り	B区 H-1 P-23
第71回 建物117								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
19	瓦葺壺	(16.1)	-	-	角閃石・長石・ 淡緑褐色	器高は短く体部の腰がゆるむ	内外面 回転ナデ	B区 J-4 P-6
20	瓦葺壺	(15.2)	-	-	角閃石・石英・ 灰色っぽい灰白色	-	内外面 回転ナデ	B区 E-9 P-6
第75回 建物119								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
21	土師質土器 小皿	8.5	6.3	1.6	角閃石・長石・ 褐色	体部の立ちあがりにはシャープ	内外面 回転コナデ 底部糸切り	B区 E-9 P-1
第76回 建物121								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺出名
		口径	高さ	器高				
22	瓦葺壺	(15.8)	7.0	5.8	長石・角閃石・石英・ 口縁部灰色 口縁部灰色 口縁部灰色	口縁外面に重ね焼き痕あり 底部は平底	内面 回転ナデ、直線回転ナデ 不定方向のナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り	B区 D-8 P-2
23	瓦葺壺	(16.2)	(8.2)	6.1	長石・角閃石・石英・ 口縁部黄灰色 口縁部黄白色	口縁外面に重ね焼き痕あり 底部は平底	内面 回転コナデ、ユビナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り、後述 板状工具	B区 D-8 P-2
24	瓦葺壺	(15.6)	(8.2)	5.8	角閃石・長石・石英・ 口縁部灰色 口縁部灰白色 口縁部黄灰色	口縁外面に重ね焼き痕あり 底部は平底	内面 回転ナデ、斜方向のナデ、 底部ユビナデと不定方向のナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り	B区 D-8 P-2

第70図 建物124								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
25	瓦器焼	(14.0)	(9.8)	6.3	石英・角閃石、 緑褐色	底部は平底	内外面 回転ナデ	B区 A.5 P.20
第71図 建物125								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
26	土師瓦土器 小皿	(10.6)	(5.6)	1.3	長石・角閃石、 口縁部褐色 (外縁部黄褐色)	縁部の立ちあがりはややか	内面 回転ナデ、底部不定方向ナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り後 杖任意	B区 A.4 P.7
第72図 建物123								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
27	瓦器焼	16.0	7.3	5.9	長石・角閃石、 口縁部褐色 (胴部灰白色)	口縁外面に凹凸波状痕 底部平底	内面 回転ナデ、底部回転ナデ 後一定方向のユビナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り後 杖任意	B区 D.2 P.1
第73図 建物126								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
28	土師瓦土器 小皿	(7.4)	4.7	1.7	石英・長石、 黄～赤褐色	腰部に比し底部が厚い 腰部は斜方向に直線的にのびる	内面 回転ナデ、底部不定方向ナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り後 杖任意	B区 D.1 P.7
第74図 建物129								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
29	土師瓦土器 小皿	7.4	5.5	1.2~1.3	角閃石、 灰白色～灰褐色	腰部は立ちあがりはややかで短い	内面 回転ナデ、底部一定方向ナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り後 杖任意	B区 F.4 P.3
30	白磁焼	(11.1)	-	-	乳白色の釉	口縁縁部がわずかに外方に折れる	内外面に施釉	B区 F.3 P.2
31	白磁焼	(17.3)	-	-	灰色っぽい白の釉	口縁部玉粒状	内外面に施釉	B区 F.3 P.2
第75図 建物142								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
33	土師瓦土器鉢	12.4~ 12.9	6.3	3.3~3.7	角閃石、 やや細かい赤褐色	腰部内肉気味	内面 回転ナデ、底部一定方向 のナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り、ユ ビナデ	B区 F.5 P.21
第76図 建物149								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
34	土師瓦土器 小皿	(19.4)	(6.2)	1.5	長石、 淡黄褐色	腰部の立ちあがりはややか	内面 回転ナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り後 杖任意	B区 F.7 P.7
第77図 建物151								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
35	青磁焼	(15.8)	-	-	黄色かった薄い緑の釉	口縁縁部が短く折れる	内面 口口底残る 内外面に施釉され入りあり	B区 H.6 P.9
第78図 建物156								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
36	土師瓦土器 小皿	(8.2)	(7.0)	1.4	角閃石・石英、 褐色	腰部はややかに外反	内面 回転ナデ、底部不定方向 ナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り後 杖任意	B区 I.4 P.13
第79図 建物158								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
37	土師瓦土器 小皿	8.8	5.6	1.9	角閃石・長石、 淡黄褐色	腰部の立ちあがりはややかで丸みを 持つ	内面 回転ナデ、底部回転ナデ 後ユビナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り後 杖任意	B区 I.7 P.16
38	土師	(30.6)	-	-	角閃石・長石、 赤褐色	口縁縁部は短く外反	内外面 ヨコナデ後ユビナデ	B区 I.7 P.16
第80図 建物159								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
39	土師磁焼	(13.6)	-	-	石英、 灰白色	口縁部は短く外方に折れる	内面 縦二枚二方向のユビナデ 外面 回転ナデ後ユビナデ、横方向 のユビナデ	B区 I.6 P.8
第81図 建物160								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
40	土師磁焼	(16.2)	(8.1)	5.2	暗褐色～黒褐色	胴部方形の高台を付す	内外面 七万字 外縁部糸切り	B区 I.4 P.11
第82図 建物161								
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色紙	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 記録番号
		口径	底径	高さ				
41	土師瓦土器 小皿	10.3	7.4	1.2~1.3	角閃石・長石、 褐色	底部中央に穿孔	内面 回転ナデ、底部不定方向 ナデ 外面 回転ナデ、底部糸切り後 杖任意	B区 I.4 P.11

第110図 井戸1

番号	部 種	法 量 (cm)			粘土・色調	形態の特徴	手法・型製・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	深さ				
42	土師製土師坪	(14.4)	(8.2)	3.2	赤褐色・角閃石・長石・赤色粘土・ 黄褐色	腰部内湾気味	内面 屈折ナデ、底面四方ナデ 外面 屈折ナデ、底面丸切り	A区 井戸1
43	白磁皿	—	(2.9)	—	淡青灰色 白色緑	—	内面 屈折ナデ、底面半四方ナデ 外面 屈折ナデ、口縁微収り、底面丸切り	A区 井戸1
44	瓦洲土師	—	—	—	金雲母・角閃石・長石、 内湾気味 外湾淡灰色	高台部はり付け	内面 ミガキナ 外面 ココナデ、高台起り付け	A区 井戸1

第111図 井戸2

番号	部 種	法 量 (cm)			粘土・色調	形態の特徴	手法・型製・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	深さ				
45	瓦器鉢	—	—	—	金雲母・長石、 黄褐色	—	内湾面 ココナデ	A区 井戸2
46	瓦製土師火鉢	—	—	—	角閃石・長石・赤色粘土、 黄褐色	—	外面 ココナデ、粘土帯幅付付け、 スタンツ文	A区 井戸2
47	土師	—	—	—	角閃石・赤色粘土・長石・金雲母、 淡青色	口縁微収を片方にのみみ出す	内面 ココナデ 外面 ココナデ、オサエナデ	A区 井戸2

第112図 地下式土壺1

番号	部 種	法 量 (cm)			粘土・色調	形態の特徴	手法・型製・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	深さ				
49	土師製土師小壺	(7.0)	(5.4)	1.25	角閃石・赤色粘土・金雲母、 黄褐色(二次焼成)	腰部の立ちあがりは丸みをもつ	内外面 屈折ナデ? 底面丸切り	地下式 土壺1
50	瓦器鉢	—	(5.6)	—	角閃石 灰色	軽い高台が付される	外面 屈折ナデ、底面丸切り	地下式 土壺1
51	瓦器鉢	—	—	—	角閃石・長石・金雲母、 灰色	—	外面 屈折ナデ 内面 内湾気味収まり、口縁内湾 気味	地下式 土壺1
52	白磁皿	—	—	—	くすんだ緑色	—	片縁部のみ収まり	地下式 土壺1

第113図 地下式土壺2

番号	部 種	法 量 (cm)			粘土・色調	形態の特徴	手法・型製・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	深さ				
53	土師製土師小壺	(10.0)	(8.6)	1.7	砂鉄・角閃石・長石・赤色粘土、 黄褐色	腰部の立ちあがり緩やか	内面 屈折ココナデ、ユビナデ 外面 屈折ココナデ、底面丸切り	地下式 土壺2
54	土師器鉢	—	—	—	角閃石・石英、 白くぼろ	口縁微収やかに外反	内外面 ココナデ	地下式 土壺2
55	瓦器鉢	—	(6.8)	—	砂鉄・角閃石・金雲母・長石、 内湾気味	底面平直	内面 屈折ココナデ、ユビナデ 外面 屈折ココナデ、底面丸切り	地下式 土壺2
56	瓦器小壺 (横型壺)	(9.8)	(7.0)	1.6	砂鉄・長石・角閃石、 灰白色、黄灰色	腰部の立ちあがり部は丸みを持つ	内面 屈折ココナデ、ナメテヨコ のハスガキ 外面 屈折ココナデ、ココエミガ キ	地下式 土壺2
57	土師	—	—	—	砂鉄・角閃石・長石、 黄褐色	口縁部くの字状に折れる	内面 ココナデ 外面 ナデ	地下式 土壺2
58	土師	—	—	—	砂鉄・角閃石・長石・白色粘土、 灰白色・灰白色	腰部下半に粘土目タキ	外面 ココナデ 外面 屈折ココナデ、粘土目タ キ	地下式 土壺2
59	横前焼成鉢	27.5	15.0	11.7~ 12.9	赤褐色	口縁部上蓋は内折する	内面 ココナデ、 唇目縁部(10力所) 外面 ココナデ、底面ナデ	地下式 土壺2

第114図 地下式土壺3

番号	部 種	法 量 (cm)			粘土・色調	形態の特徴	手法・型製・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	深さ				
60	土師打土壺 小壺	8.5	5.2	1.8	砂鉄・角閃石・長石・赤色粘土・ 金雲母・白色粘土・石英、 黄褐色	腰部上半はわずかに外反気味	内面 屈折ココナデ、ユビナデ 外面 屈折ココナデ、底面丸切り	地下式 土壺3
61	土師器鉢	—	—	—	角閃石・赤色粘土、 灰白色	口縁微外反	内面 ミガキナ、ココナデ 外面 ミガキナ、ココナデ	地下式 土壺3
62	土師	—	—	—	角閃石・長石、 濃いレンゴ色(二次焼成)	口縁部微内湾が三角制に整列	内面 ナデ、ココナデ 外面 ココナデ	地下式 土壺3

第115図 地下式土壺4

番号	部 種	法 量 (cm)			粘土・色調	形態の特徴	手法・型製・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	深さ				
63	土師器鉢	—	—	—	灰白色	口縁部緩やかに外反	内面 ミガキナ 外面 ミガキナ、ココナデ	地下式 土壺4
64	土師器鉢	—	—	—	石英・金雲母・長石、 灰白色	口縁部緩やかに外反	内面 四方角ミガキナ 外面 四方角ミガキナ、ココナデ	地下式 土壺4
65	瓦器鉢	—	(5.9)	—	石英、 淡褐色	断面方形の高台が付される	外面 ミガキナ、ナデ、高台起り付 け、微収り	地下式 土壺4
66	瓦瓦土師鉢	—	(12.6)	—	石英・角閃石、 黄褐色	断面長方形の高台が付される	内面 ナデ 外面 ナデ、高台起り付け、微収 り	地下式 土壺4
67	横前焼成鉢	—	—	—	—	口縁は微立し、腰部は丸みを持つ	断面単位4本以上 内外面 ココナデ	地下式 土壺4
68	横前焼成鉢	—	(13.4)	—	—	—	断面単位6本以上 内外面 ココナデ 底面ナデ	地下式 土壺4
69	常沖俵壺	(38.4)	—	—	砂鉄、 赤褐色の上から灰色がかかった 緑の粒がかかると	口縁部大きく外反	内面 ココナデ、ユビナデ 外面 ココナデ、ナデ 外面から内面に緑色(10力所)の 黄雲母が浮かぶ	地下式 土壺4

第116図 土壺表1

番号	部 種	法 量 (cm)			粘土・色調	形態の特徴	手法・型製・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	深さ				
70	土師製土師坪	14.7	9.6	4.1	角閃石・長石、 赤褐色	腰部は内湾気味	内面 屈折ナデ 外面 屈折ナデ、底面丸切り	A区 1号土壺表
71	内裏土師壺	16.9	9.8	8.0	角閃石・長石、 内湾気味	断面三角制の高台をはり付け	内外面 ミガキ	A区 1号土壺表

第138回 土曜展5

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
73	土師質土器杯	(15.7)	(6.2)	2.8	赤褐色・長石・角閃石、 (内)淡灰色 (外)濃い赤褐色	体部内湾気味で、口縁部わずかに外反	内面 回転指ナリ 外面 回転指ナリ、底面糸切り?	A区 6号土曜墓
74	瓦質土器杯	-	-	-	長石、 褐色	外面口縁下に浅線とスタンプ文	内面 回転指ナリ 外面 瓦方本	A区 6号土曜墓

第140回 土曜展6

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
75	瓦質土器鉢	-	-	-	長石・石英、 灰褐色	口縁部外面が肥厚	内面 細かい回転ナリ 外面 ココナナリ、へらでココナナリ	A区 6号土曜墓
76	漆皮成漆鉢	-	-	-	(内)深褐色 が、暗褐色 長石	-	内面 回転指ナリ 外面 瓦方本	A区 6号土曜墓
77	漆皮成漆鉢	-	-	-	長石、 (内)赤褐色 (外)暗褐色	-	内外面 回転ナリ	A区 6号土曜墓

第142回 土曜展7

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
78	土師質土器杯	(12.9)	(7.2)	2.6	長石・石英、 淡黄褐色	体部下半が丸みをもち、口縁やや外反	内外面 回転指ナリ	A区 7号土曜墓

第144回 土曜展8

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
79	土師質土器小皿	10.0	6.8	2.0	角閃石・長石・黒色石粒、 淡褐色	体部内湾気味	内外面 回転指ナリ 底面糸切り	A区 8号土曜墓
80	土師質土器小皿	10.1	7.4	2.2	長石・石英・赤色砂子、 淡褐色	体部内湾気味	内外面 指ナリ 底面回転へら切り	A区 8号土曜墓
81	土師質土器小皿	9.4	6.7	1.8	長石・角閃石・砂粒、 淡黄褐色 (外縁が一層暗褐色)	体部内湾気味	内外面 指ナリ 底面回転へら切り	A区 8号土曜墓
82	土師質土器小皿	10.1	8.0	1.8	角閃石・長石・石英、 淡黄褐色	体部内湾気味	内外面 指ナリ 底面回転へら切り	A区 8号土曜墓
83	土師質土器小皿	(10.4)	(7.5)	1.6	長石・石英、 (内)淡灰色 (外)黒灰色	体部内湾気味	内外面 ココナリ 底面回転へら切り	A区 8号土曜墓
84	土師質土器鉢	16.2	7.1	5.7	長石・砂粒・赤色砂子、 白色	断面長方形の高台をはり付け	内面 瓦方本 外面 瓦方本、回転ココナリ、底面糸切り	A区 8号土曜墓

第146回 土曜展12

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
122	土師質土器杯	16.6	8.4	4.5	角閃石・長石・石英・赤色砂子、 黄褐色	体部の立ちあがりには緩やかに、斜方角ののびる	内面 回転指ナリ、底面糸切り	A区 12号墓
123	土師質土器小皿	(9.2)	6.7	1.6	角閃石・赤色砂子、 淡褐色	体部の立ちあがりには丸みをもち緩やか	内外面 回転指ナリ 底面回転へら切り	A区 12号墓
124	土師質土器小皿	15.4	7.4	5.4	角閃石・長石・赤色砂子、 灰色・灰白色	断面長方形の高台をはり付け	内外面 指ナリ、底面糸切り 高台は斜り付け後ココナリ、底面糸切り、縁に線ナリ	A区 12号墓

第148回 土曜展13

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
129	内裏土器碗	14.8	6.5	8.0~8.1	角閃石・長石、 (内)淡褐色 (外)黄褐色	断面長方形の高台を斜向きにはり付ける	内面 指ナリ、底面ココナリ、瓦方本 外面 回転指ナリ、後縁方向のミガキ、高台は斜り付け後ココナリ、底面糸切り	A区 13号墓

第150回 土曜展14

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
130	白磁碗	16.2	5.5	6.4~6.9	特色の釉	-	内面 片切りの遺構文、貫入あり 外面 平塗、底面回転、溝線	A区 14号墓
131	青白磁台子蓋	6.6	-	2.0	緑がかかった乳白色釉	-	内面 黄緑、一部暗緑 外面 黄緑、溝入あり	A区 14号墓
132	青白磁台子角	5.5	4.4	2.5	緑がかかった乳白色釉	-	内面 黄緑、 外面 平塗、底面線、下平縁、斜り指ナリに細かい線刻	A区 14号墓

第164回 土曜展16

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
142	内裏土器碗	-	-	-	角閃石、 黄褐色	口縁部わずかに外反	内面 瓦方本 外面 ミガキ、ナメ方角のナリ、指ナリ	A区 16号墓

第166回 土曜展17

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
143	土師質土器小皿	(7.8)	(5.8)	1.3	角閃石、 黄褐色	体部の立ちあがりには急で、体部内湾気味	内面 指ナリ、回転指ナリ 外面 回転指ナリ、底面糸切り	A区 17号墓

第168回 土曜展18

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
144	土師質土器小皿	(8.4)	(7.4)	1.5	長石、 黄褐色	体部は直立気味に立ち上がる	内外面 ココナリ 底面糸切り	A区 18号墓
145	土師質土器小皿	-	-	-	角閃石 黄褐色	体部の立ちあがりには丸みをもち	内外面 ココナリ 底面糸切り	A区 18号墓

第172回 土曜展20

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
150	土師質土器杯	15.7	7.5	2.9	角閃石・長石・雲母、 淡黄褐色	体部内湾気味	内外面 回転指ナリ 底面糸切り	A区 20号墓

151	土師貫土器 小皿	14.2	7.5	3.0~4.3	内肉石・黒石	体部内肉気味	内外面 黒磁ナ子, 底部糸切り	A区 20号基
152	土師貫土器 小皿	8.0	8.4	1.8	黒石, 淡緑褐色	体部は急な立ちあがり	内面 黒磁ナ子後コナ子 外面 黒磁ナ子, 底部糸切り	A区 20号基
153	土師貫土器 小皿	7.8	6.3	1.0	黒石, 淡緑褐色	体部は急な立ちあがり	内外面 黒磁ナ子 底部糸切り	A区 20号基
154	土師貫土器 小皿	8.2	6.2	1.3	黒石, 淡緑褐色	体部は急な立ちあがり	内外面 黒磁ナ子 底部糸切り	A区 20号基
155	土師貫土器 小皿	8.2	6.6	1.1	黒石・石英, 淡緑褐色	体部は急な立ちあがり	内面 黒磁ナ子後コナ子 外面 コナ子, 底部糸切り	A区 20号基
156	土師貫土器 小皿	9.1	6.8	1.5~1.7	内肉石・黒石, 淡緑褐色	体部は急な立ちあがり	内外面 コナ子 内面 コナ子	A区 20号基
157	瓦葺明	—	(7.0)	—	石英, 淡灰白色	断面三角形の低い高台が付される	外面 コナ子, 高台縁り付け, 底部糸切り, コナ子	A区 20号基

第177回 土師系21

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・図型・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	器高				
199	土師貫土器 小皿	(15.4)	—	—	黒石, 淡緑褐色	—	内外面 黒磁ナ子	A区 21号基
200	土師貫土器 小皿	(7.2)	(6.0)	1.1	内肉石・黒石, 淡緑褐色	体部は直立気味	内外面 ナ子 底部糸切り	A区 21号基
201	瓦葺明	(15.4)	—	—	内肉石・黒石, 淡灰白色	口縁部に凸りつき痕	内外面 コナ子	A区 21号基

第181回 土師系25

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・図型・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	器高				
203	土師貫土器 小皿	(18.0)	(16.7)	3.0	石英・赤色粘土・金雲母, 淡緑褐色	体部の立ちあがりには緩やかで体部は内肉気味	内面 黒磁コナ子 外面 黒磁コナ子, 底部黒磁糸切り	B区 1号土師系
204	土師貫土器 小皿	(17.4)	(8.0)	3.4	黒石・赤色粘土・角閃石・金雲母, 淡緑褐色	203と同様な輪郭を呈する	内面 黒磁コナ子 外面 黒磁コナ子, 新設圧痕, 底部黒磁糸切り	B区 1号土師系
205	土師貫土器 小皿	(9.4)	(6.2)	1.2	黒石・赤色粘土・角閃石・金雲母, 淡緑褐色	体部の立ちあがりには緩やか	内面 黒磁コナ子 外面 黒磁コナ子, 底部糸切り 底一帯灰白色	B区 1号土師系
206	内土師土器 小皿	(16.2)	—	—	赤色粘土, 内肉褐色 外肉淡緑褐色	口縁部やや外反気味	内面 ミガキ, コビオサエ 外面 コナ子, コビオサエ	B区 1号土師系

第185回 土師系25

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・図型・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	器高				
208	土師貫土器 小皿	12.3~ 12.8	6.6	3.4	内肉石・石英・金雲母・赤色粘土, 淡緑褐色	体部内肉気味	内外面 黒磁コナ子 底部糸切り	B区 3号土師系
209	土師貫土器 小皿	12.9~ 12.7	6.0~6.2	3.6~4.0	内肉石・石英・赤色粘土・赤色粘土, 淡緑褐色	体部内肉気味	内外面 黒磁コナ子 底部糸切り	B区 3号土師系
210	土師貫土器 小皿	7.5~8.0	5.2	1.2~1.5	内肉石・石英・白色粘土・赤色粘土, 淡緑褐色	体部は斜方向にのびる	内外面 黒磁コナ子 底部糸切り	B区 3号土師系
211	土師貫土器 小皿	7.4~7.8	1.4~1.6	6.5	内肉石・石英・金雲母, 淡緑褐色	体部は斜方向にのびる	内外面 黒磁コナ子 底部糸切り	B区 3号土師系
212	土師貫土器 小皿	7.5~7.8	1.3~1.6	5.6	内肉石・金雲母・石英・白色粘土, 淡緑褐色	体部は直立気味	内面 黒磁コナ子 外面 コナ子, 底部糸切り	B区 3号土師系
213	土師貫土器 小皿	7.2~7.8	1.0~1.2	5.5	内肉石・石英・金雲母・白色粘土, 淡緑褐色	体部は斜方向にのびる	内外面 黒磁コナ子 底部糸切り	B区 3号土師系
214	瓦葺明	—	(5.4)	—	金雲母・角閃石, 灰色かかった白	断面三角形の高台が付される	内面 ミガキ 底部糸切り	B区 3号土師系

第188回 土師系26

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・図型・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	器高				
216	土師貫土器 小皿	13.2	8.6	3.4	内肉石・黒石・赤色粘土, 淡緑褐色	体部は近軸的にのびる	内外面 黒磁ナ子 底部糸切り, コナ子成形	B区 4号土師系
217	土師貫土器 小皿	13.4	9.3	3.6~4.0	内肉石・黒石・石英, 淡緑褐色	体部の立ちあがりには丸みをもつ	内外面 黒磁ナ子 底部糸切り, 新設圧痕	B区 4号土師系
218	土師貫土器 小皿	7.6	6.4	6.9	内肉石・黒石・赤色粘土, 淡緑褐色	短い体部が緩やかに立ちあがる	内面 黒磁ナ子後一方のフコナ子 外面 黒磁ナ子, 底部糸切り後フコナ子のフコナ子	B区 4号土師系
219	土師貫土器 小皿	8.4	6.3	1.8	内肉石, 淡緑褐色	器高がやや高く, 体部は近軸的にのびる	内面 黒磁ナ子後一方のフコナ子 外面 黒磁ナ子, 底部糸切り	B区 4号土師系
220	土師貫土器 小皿	8.4	5.7	1.7	内肉石, 淡緑褐色	底部切り直しを失した遺跡あり	内面 黒磁ナ子後コナ子 外面 黒磁ナ子, 底部糸切り, 新設圧痕	B区 4号土師系

第192回 土師系27

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・図型・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	器高				
222	土師貫土器 小皿	16.2	3.7	3.7~4.1	内肉石・石英, 淡緑褐色	体部は内肉気味	内面 黒磁コナ子 外面 黒磁コナ子, 底部糸切り	B区 5号土師系
223	土師貫土器 小皿	(16.6)	9.1	3.8	内肉石, 淡緑褐色	体部は内肉気味	内面 黒磁コナ子 外面 黒磁コナ子, 底部糸切り	B区 5号土師系
224	土師貫土器 小皿	(17.0)	(10.2)	3.3	内肉石 内肉褐色 外肉淡緑褐色	器高がやや低く, 体部は緩やかに立ちあがる	内面 黒磁コナ子 外面 黒磁ナ子, 底部糸切り	B区 5号土師系
225	土師貫土器 小皿	(15.8)	—	—	内肉石・赤色粘土, 褐色	—	内面 黒磁コナ子 外面 黒磁ナ子	B区 5号土師系
226	土師貫土器 小皿	(8.8)	(6.4)	1.8	内肉石・黒石, 内肉淡褐色 外肉褐色	体部の立ちあがりには緩やかで直立気味	内外面 黒磁コナ子 底部へう切り後ナ子	B区 5号土師系
227	土師貫土器 小皿	(8.0)	5.9	1.4	内肉石 赤褐色	226と同様な器形	内外面 コナ子 底部へう切り後ナ子	B区 5号土師系
228	土師貫土器 小皿	7.9	5.8	1.4	内肉石 赤褐色	226と同様な器形	内外面 黒磁コナ子 底部へう切り	B区 5号土師系
229	土師貫土器 小皿	2.4	6.2	1.3	内肉石・赤色粘土・石英, 褐色	226と同様な器形	内外面 黒磁コナ子 底部へう切り	B区 5号土師系

230	土師黄土器 小皿	9.6	6.4	1.6~1.9	角閃石・赤色粘土・石英 内湾い棕色 外湾褐色	他に比べやや歯高が深い	内外面 磁粒コビナテ 底部へう張り	B区 9号土師底
231	土師黄土器 小皿	8.9	6.4	1.7	赤色粘土・角閃石・ 外湾褐色	226と同様な器形	内外面 磁粒コビナテ 底部へう張り	B区 9号土師底
232	土師黄土器 小皿	8.3	6.3	1.7	赤色粘土・角閃石・石英・ 鉄色	226と同様な器形	内外面 磁粒コビナテ 底部へう張り	B区 9号土師底
233	土師黄土器 小皿	8.5	5.9	1.6	赤色粘土・角閃石・ 鉄色	226と同様な器形	内外面 磁粒コビナテ 底部へう張り	B区 9号土師底
234	土師黄土器 小皿	2.4	6.2	1.5	角閃石・赤色粘土・ 鉄色	226と同様な器形	内外面 磁粒コビナテ 底部へう張り	B区 9号土師底
235	土師黄土器 小皿	8.8	5.9	1.5	角閃石・赤褐色・ 赤褐色 鉄質黒色	体部の立ちあがりはやや内湾気味	内外面 磁粒コビナテ 底部へう張り	B区 9号土師底
236	土師黄土器 小皿	(9.8)	10.6	10.0	角閃石・石英 内湾い赤褐色 外湾褐色	口縁部は頸部から幅やかに開き、尖り気味	内面 磁粒コビナテ、底部は不定方向のナテ 外面 磁粒コビナテ、底部へう張り	B区 9号土師底

第197図 器類1

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
238	土師母蓋	47.0	—	—	角閃石・長石・石英・砂粒・赤色 粘土・白色粘土・赤色粘土・ 黄褐色	口縁外面が肥厚し、口縁部を形成、系 列気味で、底部を打ち欠く	内面 口縁部は縦方向のユビナテ ナテ、肩部土師コビナテ、中腰線 方向のナテ、下部ナテ 外面 ナテ、口縁部コビナテ 踏み上げ	A区 9-10号溝

第198図 器類1出土

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
239	土師列土器 小皿	—	(4.8)	—	角閃石・長石・ 赤褐色	体部の立ちあがりはやや緩やか	内面 ナテ 外面 ナテ、縦状気味、底部糸切り	A区 9号土師底
240	内黒土器板	—	—	—	角閃石・長石・ 内湾褐色 外湾黄褐色	口縁部わずかに外反	内面 ミガキ・ヨコナテ 外面 ココナテ、磁粒ナテ	A区 9号土師底
241	磁粒土器	—	—	—	角閃石・長石・石英・ 赤褐色	—	内面 有目 外面 ナテ	A区 9号土師底

第200図 器類1 要約2層出土

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
243	白磁	(8.8)	—	—	黄色っぽい乳白色釉	口縁部縁やかに外反	内外面 磁粒、真入あり	9-10号溝東 33
244	黄褐色磁	—	—	—	赤褐色	口縁部玉縁状を呈する	内外面 ココナテ	9-10号溝一 緒

第201図 器類2

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
245	土師母蓋	55.5	29.5	75.0	砂粒・角閃石・長石・白色粘土・ 褐色黄褐色	口縁外面が肥厚し、口縁部を形成、 深い黄褐色	ナテ、ユビナテ 磁粒のみ	9-10号溝

第202図 器類2出土

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
247	瓦質土器類	(41.0)	—	—	石英・ 淡灰色	口縁部くの字状に折れ、肩部を上 方に引きあげる	内面 ハケ目をナテで滑し、縦か い縦方向のナテ 外面 磁粒のいれ目	11号溝南 12

第203図 器類2

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
248	土師母蓋	87.0	25.5	73.8	砂粒・角閃石・長石・石英・白色 粘土・褐色	口縁部肥厚し、肩下には腹底部、肩部 にへう張り	ナテ、磁ナテ	11号溝

第205図 器類2

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
250	土師黄土器 小皿	(9.2)	(6.8)	1.3	赤褐色・長石・ 淡褐色	体部はややかに立ち上がる	内面 不定方向ナテ 外面 磁粒コビナテ、底部糸切り 縦状気味	A区 1号墓穴
251	内黒土器板	—	(6.0)	—	角閃石・長石・ 内湾 外湾赤や白っぽい褐色	断面三角形の高台を貼り付ける	内面 ミガキ 外面 磁粒ナテ、ユビナテ	A区 1号墓穴
252	瓦器板	—	(6.4)	—	黒石 灰白色	縦い高台を貼り付ける	内面 磁粒 外面 磁粒コビナテ、ココナテ、ナ テ	A区 1号墓穴
253	白磁板	—	(6.0)	—	灰色っぽい釉	—	内面 磁粒 外面 断面磁粒一部からない ところがある、底部~高台部分、 高台部に出し	A区 1号墓穴
254	黄褐色磁板	—	—	—	長石 赤褐色	足目は7本単位	外面 ナテ、ココナテ	A区 1号墓穴

第210図 器類2

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
255	土師黄土器杯	(13.2)	(8.0)	3.2	長石・石英・ 淡褐色	体部の立ちあがりはやや内湾気 味	内外面 磁粒ナテ 底部糸切り	B区 1号墓穴
256	土師黄土器杯	14.8	9.0	3.2	角閃石・長石・石英・ 黄褐色	体部は斜方向にのび、口縁外反気 味	内外面 磁粒ナテ 底部糸切り	B区 1号墓穴
257	土師黄土器杯	(14.8)	(11.0)	3.3	角閃石・長石・石英・赤色粘土・ 鉄褐色	体部内湾気味	内外面 磁粒ナテ 底部糸切り	B区 1号墓穴
258	土師黄土器 小皿	(8.4)	(6.5)	1.3	角閃石・長石・石英・ 淡褐色	体部の立ちあがりはやや斜方向に のびる	内外面 磁粒ナテ、底部糸切り	B区 1号墓穴
259	瓦器板	(15.4)	7.2	5.1	長石・ 黒色	口縁外面に縦状気味 底部平足	内面 磁粒ナテ、磁粒ナテ後一 方向のユビナテ 外面 磁粒ナテ 底部糸切り	B区 1号墓穴

260	瓦脚粒	(15.6)	7.0	5.9	黒石・石英、 炭灰白色	口縁外面に波ね溝状 底面平直	内面 筒状ナテ、筒状ナテ後一 方向のユビナテ 外面 筒状ナテ 底面丸縁付	B区 1号管穴
261	瓦脚粒	(16.6)	-	-	角閃石・石英・黒石、 (内)灰色、灰白色、楕灰色 (外)楕灰色・灰白色・灰色	口縁外面に波ね溝状	内外面 筒状ナテ	B区 1号管穴
262	瓦脚粒	(15.2)	-	-	内)灰色、灰白色 (外)灰色、楕灰色、炭灰白色	口縁外面に波ね溝状	内外面 筒状ナテ 底面丸縁付	B区 1号管穴
263	瓦脚粒	-	7.4	-	角閃石、 灰白色	底面平直	内外面 筒状ナテ 底面丸縁付	B区 1号管穴
264	瓦脚粒	-	7.6	-	角閃石、 灰色	底面平直	内面 筒状ナテ後一方向のナ テ、筒状ナテ 外面 筒状ナテ、底面丸縁付	B区 1号管穴
265	青磁碗	(16.2)	(7.5)	-	うすい褐色 底面に波ね溝状ないがいの粒	-	内面に文様 の浮彫 底面波ね内外面丸縁 付	B区 1号管穴
266	青磁碗	-	4.6	-	炭灰白色	-	底面波ね内外面丸縁 付	B区 1号管穴
267	青磁碗	-	-	-	青褐色 底面に波ね溝状ないがいの粒	-	外面 瓦弁文	B区 1号管穴
268	土鍋	(8.0)	-	-	黒石・角閃石・石英、 楕灰色	外蓋口縁下に突帯	内面 ナテ 外面 筒状ナテ、ナテ、一部オサ エ、貼付け突帯	B区 1号管穴
269	土鍋	-	-	-	黒石、 灰色	口縁は十字状に折れる	内面 板方向のナテ、筒状ナテ 外面 筒状ナテ、ナテ	B区 1号管穴

第212回 土器1

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
270	土師質土器 小皿	(7.2)	(5.8)	1.0	角閃石、 暗褐色	体部の立ちあがりには直立臭味 底面中央に穿孔あり	内面 筒状ナテ 外面 筒状ナテ、底面丸縁付、底 面に穴が開いている、穴の径0.5 cm	A区 土器7

第215回 土器3

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
271	土師質土器 小皿	(9.5)	(8.8)	1.5	角閃石、 暗褐色	体部の立ちあがりには丸みをもつ	内面 筒状ナテ、底面ナテ 外面 筒状ナテ、底面丸縁付	A区 土器3
272	白磁鉢	-	(5.4)	-	黄色味をおびた白	両台が付く筒状の胴部	外面 瓦粒、底面丸縁	A区 土器3

第217回 土器4

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
273	瓦脚粒	(15.8)	(8.4)	5.6	黒石・赤黒濁 (内)灰白色、灰色 (外)灰白色、灰色	低い両台が付される	内面 筒状ナテ、底面平直方向 のナテ 外面 筒状ナテ	A区 土器4
274	瓦器形	-	-	(5.9)	黒石・石英、 黄褐色	断面三角形の両台がはり付け	内面 不変方向の3方ナ テ、底面ナテ、後方向の2方 ナ、高台付付け後オサエ、底面 丸縁付	A区 土器4
275	瓦質土器 火鉢	-	-	-	角閃石・赤黒濁、 赤褐色	底面ちかくに突帯を1条貼り付け	外面 突帯貼り付け後ヨコナテ、テ ズリの筒状ナテ	A区 土器4
276	土鍋	-	-	-	黒石・角閃石、 (内)黄褐色 (外)黒褐色	口縁にむかい底縁的にのびる	内面 ヨコナテ 外面 筒状ナテ、ユビオサエ	A区 土器4

第218回 土器5

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
277	火鉢	-	-	-	黒石 (内)暗褐色 (外)赤褐色	口縁内側にわずかに肥厚 突帯部のスタンプ文は2段階	内面 ヨコナテ 外面 ヨコナテ、突帯貼り付、スタ ンプ文	A区 土器5

第221回 土器6

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
278	青花皿	-	-	-	青白色の釉	口縁は体部から外方へ折れる	文様 青色で一筆描き、 径約5cm、突入なし、 内面 赤黒色、泡輪 外面 黄褐色、泡輪	A区 土器6
279	瓦質土器 釜	(18.0)	-	-	暗褐色	口縁部は短く直立	内外面 ヨコナテ	A区 土器6

第224回 土器8

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
280	古磁	-	-	-	ややうすい褐色	上面縁は多角形状をなす	口縁部内面に成結	A区 土器8
281	瓦質土器 燗鉢	-	-	-	石英、 灰色味をおびた灰白色	-	内面 ナテ 外面 ヨコナテ、ユビオサエ	A区 土器8
282	土鍋	-	-	-	角閃石、 (内)褐色 (外)黒褐色(すずり付)	口縁部1半分に折れる	ヨコナテ	A区 土器8

第225回 土器10

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
284	古磁鉢花皿	(11.4)	-	-	うすい褐色	体部下で底曲し、大きく外反	内外面 瓦粒 赤丸入 両面 筒状ナテ	A区 土器10
285	瓦質土器 火鉢	-	-	-	灰白色	-	内面 筒状ナテ 外面 ナテ、ユビオサエ、瓦粒貼 状のものも貼り付け	A区 土器10

第230回 土器11

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
291	青磁碗	-	-	-	やや灰色をおびたうすい褐色	両台を欠く	内外面 瓦粒 赤丸入	A区 土器11
292	瓦質土器 火鉢	-	-	-	黒石・角閃石、 暗褐色	-	内面 筒状ナテ 外面 突帯貼り付、ヨコナテ、瓦 粒貼状のものも貼り付け	A区 土器11

293	土質	-	-	-	角閃石・長石、 (内)黄灰色 (外)褐色(すず付着)	口縁下にヨコナデが施され、口縁わ ずかに外反	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、ナメ方向のケ ズリ	A区 土壌11
-----	----	---	---	---	----------------------------------	---------------------------	---------------------------------	------------

第219図 土壌(21)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	胎意の特徴	手法・調整・文様	調査時の 法量名
		口径	底径	器高				
294	青磁碗	-	-	-	うすい緑色の釉	口縁部わずかに外反	真入なし、器高5cm	A区 土壌12
295	土師瓦土器 椀鉢	-	(14.2)	-	角閃石・長石、 黄褐色 黄色(二次焼成)すず付着	唇目ほ細かへらにより施される	内面ナデ、唇目の単位4本 外面ヨコナデ、コビナデ、ユビオ ツズ、底部縁後直前	A区 土壌12
296	土質	-	-	-	角閃石・長石、 (内)黄褐色、暗褐色 (外)褐色(すず付着)に暗褐色	口縁部くの字状に折れる	内面 ナデ 外面 輪状土質によるナデ	A区 土壌12
297	土質	(48.2)	-	-	角閃石・長石 すず付着	唇部から直線的に口縁部へのびる	内面 ナデ 外面 オサエナデ、横方向のケ ズリ、ヨコナデ	A区 土壌12

第220図 土壌(22)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	胎意の特徴	手法・調整・文様	調査時の 法量名
		口径	底径	器高				
298	黄銅炊爨	(33.0)	-	-	長石・林石 黄褐色	口縁部は玉縁状	内面 横方向のコビナデ 外面 ヨコナデ、横方向のナデ	A区 土壌12
299	黄銅炊爨	(44.6)	-	-	白っぽい赤褐色	口縁部は玉縁状	内面 ヨコナデ、横方向のコビナ デ 外面 ヨコナデ、ナデ、自然釉	A区 土壌12
300	黄銅炊爨	-	(31.0)	-	赤褐色	-	内面 へら状工具施 外面 横方向のナデ	A区 土壌12

第221図 土壌(23)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	胎意の特徴	手法・調整・文様	調査時の 法量名
		口径	底径	器高				
303	土師煎餅	-	(7.7)	-	角閃石・長石、 黄褐色	深い窩合が外側に付される	内面 横筋ナデ 外面 ナデ、窩合貼付け後輪 ナデ	A区 土壌13
304	青磁碗	-	-	-	うすい緑色	-	真入あり 外面 自然釉	A区 土壌13
305	瓦葺土器土質	-	-	6.7	白色粘土・金雲母、 (内)灰白色 (外)褐色	口縁部内側に肥厚	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、ヨコナデ後方 施のナデ	A区 土壌13

第222図 土壌(24)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	胎意の特徴	手法・調整・文様	調査時の 法量名
		口径	底径	器高				
307	土師瓦土器杯	-	(5.8)	-	角閃石、 長石	唇部の立ちあがりは急である	内外面 面筋ナデ 底部 糸切り	A区 土壌14

第223図 土壌(25)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	胎意の特徴	手法・調整・文様	調査時の 法量名
		口径	底径	器高				
308	土質	-	-	-	(内)黄褐色 (外)褐色(すず付着)	唇部から直線的に口縁へはいる	内面 ヨコナデ、横方向のハケ目 (1.5cm) 外面 横方向のハケ目 内面 ヨコナデ、唇目単位5本以 上	A区 土壌15
309	黄銅炊爨鉢	-	-	-	灰白色	-	外面 ヨコナデ、一部横方向のナ デ	A区 土壌15

第224図 土壌(26)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	胎意の特徴	手法・調整・文様	調査時の 法量名
		口径	底径	器高				
315	土師瓦土器 小皿	(7.2)	(6.0)	2.8	長石、 赤褐色	唇部直立片焼	内面 不定方向ナデ、面筋ナデ 外面 面筋ナデ、底部糸切りナ デ?	A区 土壌16
316	黄銅煎餅 こね鉢	-	-	-	長石、 (内)灰色 (外)灰色、口縁に黄灰色 石灰・金雲母	-	内面 ユビナデ 外面 面筋ナデ	A区 土壌16
317	黄銅煎餅	-	-	-	(内)灰色 (外)黄灰～灰色	外面に黄帯あり	内面 垂て長巻 外面 平行タタキ目、ヨコナ デ	A区 土壌16
318	黄銅炊爨	(14.8)	-	-	(内)褐色 (外)黄褐色、自然釉	口縁部短く立ちあがり、わずかに外方 に折れる	内面 面筋ナデ 外面 ヨコナデ、面筋ナデ、自然 文、面筋ナデの上から不定方向 のナデ	A区 土壌16
319	黄銅煎餅 鉢	-	-	-	-	-	内面 ヨコナデ、唇目単位5本 外面 ヨコナデ、底部ナデ	A区 土壌16

第225図 土壌(27)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	胎意の特徴	手法・調整・文様	調査時の 法量名
		口径	底径	器高				
320	土師瓦土器杯	(12.2)	5.8	4.0	長石 赤褐色粘土・角閃石、 黄褐色	器高が高く、唇部の立ちあがりには急 である	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、底部糸切り	A区 土壌17
321	黄銅碗	(13.8)	-	-	うすい緑色	唇部に添付文、口縁は外方に折れる	内外面 施釉、厚さ5cm	A区 土壌17
322	古磁碗	(15.0)	-	-	灰色をおびた緑色	-	外面に面筋施	A区 土壌17
323	土師煎餅 こね鉢	-	-	-	角閃石・長石、 (内)黄褐色 (外)黄褐色(二次焼成)	-	内面 横方向のコビナデ、ユビ オサエナデ	A区 土壌17
324	瓦葺土器鉢	-	-	-	石英・赤色粘土・長石、 褐色	-	内面 ハケ目、横ナデ? 外面 ヨコナデ	A区 土壌18

第226図 土壌(28)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	胎意の特徴	手法・調整・文様	調査時の 法量名
		口径	底径	器高				
325	土師瓦土器杯	(12.4)	(5.4)	3.9	砂粒、角閃石・長石 赤褐色粘土、 白色粘土 赤褐色	器高が高く、唇部の立ちあがりには急 である	内面 ヨコナデ、底部コビナデ 外面 ヨコナデ、底部糸切り	A区 土壌19
326	黄銅煎餅 こね鉢	-	-	-	砂粒	-	内面 ヨコナデ、面筋コビナデ 外面 ヨコナデ、面筋コビナ デ	A区 土壌19
327	白磁碗	(13.6)	-	-	白色の透明釉、光沢あり	口縁部玉縁状	内外面 施釉	A区 土壌19
328	白磁碗	(13.6)	-	-	灰白色の透明釉、光沢あり	口縁部玉縁状	内外面 施釉	A区 土壌19

第254図 土器20

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
329	土師貫土器坪	-	5.1	-	片肉石・黒石、 内・褐色 (外・薄一色緑色(凝結))	腰部の立ちあがりは急	内外面 面取・ヒコナデ、底部平 切リ	A区 土器20
330	土師器椀 (15.0)	-	-	-	黒褐色、 赤褐色	-	内面 面取ユビコナデ 外面 面取ユビコナデ、ヒコナデ 内面 面取ユビコナデ 外面 面取ユビコナデ、ヒコナデ 底面にヒコナデ(横成条)	A区 土器20
331	土師器碗	-	-	-	片肉石・黒石、 赤褐色	底部中央に穿孔あり	内面 ユビコナデ 外面 ヒコナデ、横成条	A区 土器20
332	内黒土器瓶	-	(7.8)	-	片肉石・黒石、 内・黒色 外・濃褐色	断面方形の器台が付される	内面 ユビコナデ 外面 ヒコナデ、横成条	A区 土器20
333	青花皿	(10.0)	(3.2)	2.6	A色をおびた白色釉	底部は器台底	内面 青花文 外面 流目文帯、巴風草帯 貫入あり 文様は全て褐色で一筆描き	A区 土器20
334	瓦質土器火鉢	-	-	-	石英、 内・褐色 外・茶色をおびた灰白色	脚が付される	内面 八ヶ岳 外面 横方向のナデ、ナデ	A区 土器30
335	須古窯 口縁器	(29.0)	-	-	黒石、 灰色、口縁部は立灰色	口縁外面が厚	内面 ナデ、ヒコナデ 外面 ヒコナデ、不定方向のナデ	A区 土器20

第255図 土器22

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
336	土師貫土器 小皿	(8.8)	(7.5)	1.3	黒石・片肉石・赤色粒石、 内・褐色 外・濃褐色	底部は短く直立気味	内面 面取ヒコナデ、底部不定方 向のナデ 外面 面取横ナデ、流目条切リ	A区 土器22
337	白磁碗	-	(7.2)	-	黄色っぽい灰白色の釉	-	内面 横筋 外面 流筋、底部流筋、茶台ケス リあり	A区 土器22

第256図 土器23

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
338	土鍋	-	-	-	片肉石・黒石、 内・黄褐色 (外・濃褐色)	口縁部外方に折れる	内面 ヒコナデ、ナデ 外面 ヒコナデ、ナデ	A区 土器23

第257図 土器24

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
339	瓦質土器土鍋	(26.4)	-	-	黒石・金雲母、 内・灰色 外・黄褐色	口縁縁部内側がやや肥厚	内外面 ヒコナデ	A区 土器24
340	土師貫土器	(34.0)	-	-	-	口縁部やや内傾気味	内面 横方向のナデ、ヒコナデ 外面 ヒコナデ、ヒコナデ	A区 土器24

第258図 土器25

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
341	青花皿	(10.0)	-	-	やや黄色味がかかった釉	底部は器台底と思われる	外面 流目文帯、巴風草文やや 青い黄色で一筆描き 貫入あり	A区 土器25
342	瓦質土器 鉢鉢	-	-	-	石英、 黄色味がかかった灰白色	-	外面 タタキ目 底面に横筋(ヒコナデ)	A区 土器25
343	須古流器鉢	-	-	-	-	-	内面 ヒコナデ、底部ナデ 指貫の垂れは10本～12本あり	A区 土器25
344	須古器鉢	-	-	-	-	-	内面 タタキ 外面 平打タタキ	A区 土器25

第259図 土器27

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
346	白磁碗	-	-	-	灰色がかった白の釉	-	内面 横筋 外面 横筋、下洋流筋 貫入あり	A区 土器27

第260図 土器29

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
348	土鍋	-	-	-	片肉石・黒石、 凝結褐色(外蓋す付量)	口縁部は外方に折れる	内面 横方向のナデ 外面 ナデ	A区 土器29

第261図 土器30

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
349	青花碗	-	(4.5)	-	透明の釉	底部環子線タイプ	内面 文様不削 外面 草流成文、赤線2条 濃い黄色で一筆描き	A区 土器30

第262図 土器31

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
350	土師貫土器坪	(10.0)	(7.8)	-	淡黄褐色	腰部の立ちあがり緩やか	内面 ナデ、ヒコナデ後へラヒコナ デ 外面 ヒコナデ、底部横成条	A区 土器31
351	土師貫土器 小皿	(9.4)	(5.5)	1.8	赤褐色、 凝結褐色	底部は直立気味	内外面 面取ナデ	A区 土器31
352	土師器	-	(13.4)	-	片肉石・斜長石、 凝結褐色	底部は直立気味	内面 面取ナデ、底部口縁直 径 外面 ヒコナデ、流目条切リ	A区 土器31
353	茶釜	-	(13.6)	-	片肉石・斜長石、 凝結褐色	口縁部は短く直立	内外面 ヒコナデ	A区 土器31
354	茶釜	-	-	-	灰色粒石・赤色粒石、 灰褐色、灰色、緑い凝結褐色	胴部に把手、腰部中程に灰帯	内面 ユビコナデ、ナデ 外面 ヒコナデ、二条三角灰帯	A区 土器31

第263図 土器32

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
356	土師貫土器 小皿	(8.8)	(6.2)	1.1	片肉石 凝結褐色	底部は短く直立する	内外面 面取ナデ 底部条切リ	A区 土器32

357	瓦質土器	柄	高さ 8.8	径小 4.0-1.0	白色粘土・赤色粘土・長石、 磁鉄色	-	土器として焼成後打ち回してメ ンコ製にたものか?	A区 土器33
-----	------	---	-----------	---------------	----------------------	---	-----------------------------	------------

第280図 土器34

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
358	土師質土器杯	-	(6.4)	-	長石・石英、 淡黄褐色	腰部の立ちあがりはや	内外面 磨粒ナデ 底部糸切り	A区 土器34

第282図 土器35

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
359	瓦器碗	(11.8)	-	-	明黄灰色	-	内外面 磨粒ナデ	A区 土器35
360	瓦器碗	-	(7.6)	-	暗灰白色	底部平底	内外面 磨粒ナデ 底部糸切り	A区 土器35

第283図 土器36

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
361	土師器碗	-	-	-	角閃石・金雲母、 磁鉄色	口縁部は短く外方に折れる	内外面 磨粒ナデ	A区 土器36

第284図 土器37

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
362	土師質土器 小皿	-	(7.6)	-	角閃石、 紫〜暗褐色	腰部の立ちあがりはや	内外面 磨粒ナデ 底部へうすり?	A区 土器37
363	内黒土器碗	-	(8.0)	-	長石・角閃石、 (内) 褐色 (外) 磁鉄色	破面長方形の高い高台が付される	内面 不鮮明なガキ 外側 ナデ、高台貼り付けナデ	A区 土器37

第290図 土器40

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
364	瓦器碗	-	(7.4)	-	角閃石、 灰白色	底部平底	内外面 ナデ	A区 土器40
365	瓦質土器大鉢	-	-	-	角閃石、 (内) 灰色 (外) 褐色	-	内面 ココナデ 外側 ココナデ、突帯貼り付け	A区 土器40

第291図 土器41

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
366	土師器碗	(14.8)	-	-	角閃石・斜長石・金雲母、 磁鉄色	-	内外面 ナデ	A区 土器41
367	土師器碗	-	(8.2)	-	長石、 磁鉄色	高い高台が付く	内面 ナデ 外側 高台貼り付け、磨粒ナデ	A区 土器41
368	須恵輪こね鉢	-	-	-	白色粘土、金雲母	-	内外面 磨粒ココナデ	A区 土器41

第297図 土器45

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
369	瓦器碗	-	(5.8)	-	長石・石英、 (内) 灰白色 (外) 灰色・灰白色	胴部三角形の高台貼り付け	内面 四方向のミカキ 外側 磨粒ナデ、高台貼り付け 磨粒ナデ	A区 土器45
370	瓦器碗	-	(7.6)	-	褐色	低い高台が付される	内面 ココナデ 外側 ナデ、高台貼り付けナデ 高台がナデ、ユビオサエ	A区 土器45
371	瓦器碗	-	(8.2)	-	石英、 灰白色	底部平底	内面 ココナデ、磨粒一方 ナデ 外側 ナデ、磨粒ナデ、底部糸切 り、磁鉄色	A区 土器45
372	瓦質土器火鉢	-	-	-	灰色	外側口縁下に2条の突帯	内面 ココナデ、ユビオサエ 外側 ココナデ、磨粒貼り付け	A区 土器45
373	瓦質土器火鉢	-	-	-	角閃石 磁鉄色	口縁外側が肥厚 口縁下の突帯間にへうすり	内面 ココナデ 外側 ココナデ、突帯貼り付け、 口縁磨粒ナデ	A区 土器45
374	瓦質土器火鉢	-	-	-	角閃石・長石、 (内) 灰色 (外) 磁鉄色	はり付けの脚部には削り出しで磨粒 を付ける	内面 ココナデ、不定方向のナデ 外側 ナデ、ココナデ、ユビオサエ	A区 土器45
375	織前滑笠	-	-	-	長石、 灰白色	口縁玉縁状	内外面 ココナデ	A区 土器45

第299図 土器46

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
376	石鏡柄	(83.4)	-	-	黄褐色、 輪厚1cm	-	裏入れなし	A区 土器46
377	土師器鉢鉢	-	-	-	角閃石・長石、 褐色	-	内面 ナデ、磨目の単位4本以上 外側 ココナデ	A区 土器46
378	土師	(30.2)	-	-	内側石・長石、 褐色(外側すす付帯)	腰部は直立気味	内面 長方形の高のハク、ココナデ、コ コナデ 外側 ココナデ、ナデ、磨い いコナデ	A区 土器46

第301図 土器47

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
384	土師質土器杯	-	6.4	-	石英、 磁鉄色	腰部の立ちあがりはや	内面 ナデ 外側 ナデ、底部糸切り	A区 土器47
385	土師質土器 小皿	(8.6)	(6.4)	1.5	長石、 磁鉄色	腰部の立ちあがりはや	内外面 磨粒ナデ、底部糸切り	A区 土器47
386	土師	(35.6)	-	-	内側石・長石、 黄褐色	腰部下で肥厚し、下半には柄子目ク タキ	内面 ココナデ、ナデ 外側 ココナデ、ユビオサエ、柄子 目クダキ	A区 土器47

第303図 土器48

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
389	瓦質土器碗	(14.8)	-	-	角閃石・長石、 磁鉄色	-	内外面 磨粒ナデ	A区 土器48

第305回 土曜49

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装束・文様	調査時の 遺構名
		口徑	底径	高さ				
390	土師質土師杯	(16.2)	-	-	角閃石・長石・金雲母、 緑褐色	-	内面 縦方向のハビ目、ナメ、ヨココナテ 外面 ヨコナテ、縦方向のナテ 内面 四角ナテ、底盤口口直あり	A区 土曜49
391	土師質土師碗	-	8.6	-	長石、 緑褐色	断面長方形の両台が付される	内面 四角ナテ、底盤口口直あり 外面 四角ナテ、底盤口口直あり	A区 土曜49
392	瓦葺火鉢	-	-	-	角閃石・長石、 緑褐色	口縁下に突帯2条 突帯下にスタンプ文	内面 ナテ 外面 ヨコナテ、ケズリ、貼り付け 突帯、スタンプ文	A区 土曜49
393	土鍋	-	-	-	角閃石・長石、 (外)赤褐色 (内)赤褐色	口縁外側に浅いコナテ	内面 ナテ 外面 ナテ、ケズリ	A区 土曜49
394	瓦葺土師鉢	(29.0)	-	-	角閃石、 緑褐色	口縁縁部内側を上方に引き上げる	内面 ナメ方向のナテ、ヨコナテ 外面 ヨコナテ、ナテ	A区 土曜49
395	瓦葺土師土鍋	(28.8)	-	-	角閃石・斜長石、 灰白色	口縁縁部内側を上方に引き上げる	内面 縦方向のハビ目 外面 ヨコナテ	A区 土曜49
396	土師質土師 (土師鉢)	-	-	-	角閃石・斜長石、 灰白色	-	削オサエ、ナテ	A区 土曜49
397	土鍋	-	-	-	角閃石、 灰褐色	-	内面 ヨコナテ、ナテ 外面 ヨコナテ、ナメ方向のケズリ	A区 土曜49
398	備前焼土師鉢	(31.4)	-	-	(内)緑赤褐色 (外)灰褐色	口縁外側に凹筋状のもの	内外面 ヨコナテ 縦断面が5本以上	A区 土曜49
399	備前焼土師鉢	-	-	-	赤褐色	口縁外側に凹筋状のもの	内外面 ヨコナテ	A区 土曜49

第307回 土曜50

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装束・文様	調査時の 遺構名
		口徑	底径	高さ				
403	土鍋	(20.8)	-	-	長石・角閃石、 白っぽい淡褐色	口縁縁部を外方に拡張	内面 四角ナテ、ヨコナテ 外面 ヨコナテ、四角ナテ	A区 土曜49

第310回 土曜52

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口徑	底径	高さ				
404	瓦葺碗	-	(6.6)	-	角閃石・長石、 灰白色	底面平直	内面 ナテ 外面 四角ナテ、底盤糸切り	A区 土曜49

第313回 土曜54

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口徑	底径	高さ				
405	土鍋	-	-	-	角閃石・長石・赤色粘土・石英、 緑赤褐色	外口口縁下に突帯	内面 ヨコナテ 外面 ヨコナテ、ユビオサエ	A区 土曜54

第315回 土曜58

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口徑	底径	高さ				
406	土師質土師 小皿	(7.0)	(5.4)	1.2	長石・斜長石、 緑褐色	縁部内湾気味	内面 四角ナテ 外面 四角ナテ、底盤糸切り	A区 土曜58
407	土鍋	(35.4)	-	-	斜長石・角閃石、 緑褐色	口縁縁わずかに外傾	内面 四角ナテ、底盤糸切り 外面 四角ナテ、底盤糸切り	A区 土曜58

第322回 土曜67

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口徑	底径	高さ				
409	土師質土師杯	(15.0)	(11.0)	3.8	角閃石・長石、 橙黄褐色	縁部直立気味	内面 ナテ、ナメ方向のナテ 外面 縦方向のナテ、底盤糸切り	A区 土曜67
410	土師質土師 小皿	(7.0)	(6.2)	0.8	角閃石、 黄褐色	縁部は短く、立ちあがり気味	内面 四角ナテ 外面 四角ナテ、底盤糸切り	A区 土曜67
411	瓦葺碗	-	7.0	-	石英・長石、 灰白色	底面平直	内面 四角ナテ 外面 四角ナテ、底盤糸切り	A区 土曜67

第322回 土曜69

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口徑	底径	高さ				
413	内黒土師削	-	7.0	-	石英 (内)灰色 (外)黄一橙褐色	円筒状高台	内面 ミガキ 外面 ヨコナテ、底盤糸切り	A区 土曜69

第324回 土曜70

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口徑	底径	高さ				
414	土師質土師杯	(15.8)	-	-	長石、 黄褐色	縁部内湾気味	内外面 四角ナテ	A区 土曜70
415	瓦葺碗	(16.0)	7.6	5.8	金雲母・角閃石・長石、 灰色・灰白色	口縁縁部外湾気味 底面平直	内面 四角ナテ、ユビナテ 外面 ヨコナテ、底盤糸切り ナテ	A区 土曜70
416	瓦葺碗	(16.4)	-	-	角閃石、 緑灰色・灰白色	-	内面 縦方向のミガキ 外面 縦方向のミガキ、縦方向の ナテ、削オサエ	A区 土曜70
417	瓦葺碗	(15.7)	(7.7)	4.5	長石、 灰白色・灰白色	口縁縁部外湾気味 底面平直	内面 四角ナテ 外面 四角ナテ、底盤糸切り	A区 土曜70
418	竹葉鉢花皿	(11.6)	-	-	-	縁部下に底面	内外面 直線	A区 土曜70
419	白磁罐	(11.8)	(6.0)	2.9	灰色の釉	口縁縁反り	内外面 直線、高台に付付帯	A区 土曜70
420	磁器碗	-	-	-	白色磁平 内・淡赤灰色 外・淡黄灰色、灰色	外側に彩色あり	内面 ヨコナテ、ユビオサエ 外面 ヨコナテ	A区 土曜70
421	土師質土師 鉢	(30.0)	-	-	角閃石・斜長石、 緑褐色	口縁内湾	内面 縦方向のナテ、ユビナテ、 縦筋の高低5〜7本 外面 縦方向のナテ、横方向の ケズリ、縦方向のケズリ	A区 土曜70

422	瓦質土器鉢	-	(10.4)	-	角閃石、 赤辰色	-	内面 該方向のハケ目 外面 ナテ、ヨコナデ	A区 土層70
423	瓦質土器 火鉢	-	-	-	長石 黄赤褐色	-	内面 ヨコナデ 外面 該方向のミガキ、実形跡 付け、スレノ文	A区 土層70
424	土鍋	(43.2)	-	-	角閃石 暗褐色(外面すす付層)	外部は斜方向に口縁へいたる	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	A区 土層70
425	土鍋	-	-	-	暗褐色(外面すす付層)	口縁縁面に深いヨコナデが施さ れ、やや歪曲	内面 ナテ、該方向のナテ、ヨコ ナデ 外面 ヨコナデ、該方向のミガキ	A区 土層70
426	土鍋	-	-	-	角閃石 暗褐色-黄褐色	-	内面 ヨコナデ 外面 ナテ、実形跡ナテミガキ	A区 土層70

第337回 土層71

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
429	土師質土器 小皿	(7.6)	(6.8)	1.1	角閃石・長石・赤色磁子、 暗褐色	外部直立気味	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、底部糸切り	A区 土層71
430	古磁鉢	-	-	-	白っぽい棕色	口縁部残張り	内外面均種 軽度10m、ムスあり 磁器面文	A区 土層71
432	瓦質土器鉢	(26.0)	-	-	角閃石・長石	外部下で磨面	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、該方向のケズリ、 ナテ	A区 土層71
433	土鍋	(39.2)	-	-	長石・長石、 (内)黄褐色 赤褐色	口縁が広く折れる 口縁は上方に引き上げられる	内面 該方向のハケ目 外面 ヨコナデ	A区 土層71
434	磨面成瓷	(34.8)	-	-	長石 赤褐色	口縁玉脚状	内外面 ヨコナデ 口縁部ノコリ	A区 土層71

第338回 土層72(1)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
435	磨面成瓷	-	(29.4)	-	赤色磁子・赤色磁子・白色磁子、 暗赤褐色	-	内面 ハケ、ハケナデ、ケズリ 外面 ヘラナデ、タテハ	A区 土層72

第340回 土層72(2)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
436	土師質土器鉢	(12.2)	(9.0)	2.2	角閃石・長石、 褐色(内外面にすす付層)	外部は直立気味	内面 ナテ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ、底部糸切り	A区 土層72
437	土師質土器鉢	-	5.5	-	角閃石・長石・赤色磁子、 (内)黄白色 外:赤褐色	外部の立ちあがりはや急である	内面 磨面磁子 外面 磨面磁子ナテ、底部糸切り	A区 土層72
438	瓦質土器鉢	(32.0)	(18.6)	11.7	長石 黄褐色	口縁部内外に砥指 外部内面気味	内面 該方向のミガキ 外面 ヨコナデ、該方向のミガキ	A区 土層72

第343回 土層73

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
441	内黒土器鉢	-	(7.4)	-	斜長石、 (内)赤色 外:深黄褐色	断面長方形の両台ははり付け	内面 ナテ、ミガキ 外面 ナテ、ヨコナデ	A区 土層73

第345回 土層74

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
442	土師質土器鉢	-	(5.4)	-	角閃石・斜長石、 黄褐色	-	内面 磨面磁子 外面 磨面磁子ナテ、底部糸切り	A区 土層74
443	土師質土器鉢	-	(7.4)	-	長石、 暗褐色	外部の立ちあがりはや急やか	内面 磨面磁子 外面 磨面磁子ナテ、底部糸切り	A区 土層74
444	土師質土器 小皿	(6.5)	(5.4)	1.2	暗褐色	外部は直立気味で、口縁は丸くおさ のち	内面 磨面磁子ナテ、底部糸切り 外面 磨面磁子ナテ、底部糸切り	A区 土層74
445	内黒土器鉢	-	(5.4)	-	(内) 黄褐色 外:深黄褐色	断面三角形の両台ははり付け	内面 ミガキ 外面 ヨコナデ、底部糸切り ヨコナデ	A区 土層74
446	瓦脚碗	-	(5.4)	-	長石・角閃石、 緑灰色	断面三角形の両台ははり付け	内面 ミガキ、ナテ 外面 ヨコナデ、底部糸切り ヨコナデ	A区 土層74
447	瓦脚碗	-	(7.0)	-	斜長石、 灰白色	底部平座	内面 磨面磁子 外面 磨面磁子ナテ、底部糸切り	A区 土層74
448	古磁碗	(12.2)	-	-	暗褐色	口縁部残張り	径約5.5m、細かい実入りあり、 磨面赤	A区 土層74
449	青磁皿	(11.2)	-	-	暗褐色がかった緑色 緑色0.5m	底部欠き大径	-	A区 土層74
450	磨面成瓷	-	-	-	長石・長石 (内) 黄褐色 (外) 赤褐色	-	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、波状文	A区 土層74
451	新瓦瓦	-	-	-	角閃石 暗褐色	-	板状のものでナテ、ナテ、ハケ目 いれまじりのあり	A区 土層74
452	土鍋	-	-	-	内閃石・斜長石・金雲母・長石、 (内) 暗褐色 外:黄褐色	外部は斜方向に口縁へいたる	内面 該方向のナテ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ、ユビオサエ、ナ テ、格子状跡あり	A区 土層74
453	土鍋	(49.8)	-	-	角閃石・斜長石、 (内) 黄褐色 外:黄褐色	口縁部わずかに外傾	内面 ナテ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ、ユビオサエ、ナ テすす付層のため不明瞭	A区 土層74

第348回 土層77

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
476	土師器碗	(18.6)	-	-	長石、 暗褐色	口縁部わずかに外反	内外面 ヨコナデ	A区 土層77
475	土師質土器 小皿	(8.8)	(7.0)	1.2	長石、 深黄褐色	外部は直立気味	内外面 ヨコナデ	A区 土層77
477	内黒土器碗	-	(7.0)	-	斜長石・長石、 (内) 赤色 (外) 暗黄褐色	断面長方形の両台ははり付け	内面 ミガキ 外面 ヨコナデ	A区 土層77

第350回 土層78

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
478	土師質土器 小皿	-	4.8	-	斜長石・長石、 暗褐色	-	内面 ナテ 外面 ナテ、底部糸切り	A区 土層78

479	内渠土器甕	—	(7.0)	—	黄褐色・長石、 (内)黒色 (外)黄褐色	—	内面ミガキ 外周ナデ、高台貼り付け後ナデ	A区 土器78
480	瓦器甕	(16.4)	—	—	長石、 緑灰色、灰白色	口縁部外面に黒い漆喰痕	内外面 顔彩ナデ	A区 土器79
481	青磁碗	(12.6)	—	—	磁粒色釉 緑黄(10)、黒入なし	—	顔彩本文	A区 土器80
482	白磁甕	(10.4)	—	—	濃い緑色 緑灰白色に濃い	口縁部折り曲り	—	A区 土器78

第352組 土器79

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺址名
		口径	底径	高さ				
483	瓦器碗	(16.4)	—	—	長石・長石、 緑灰色、灰白色	口縁部に黒い漆喰痕あり	内面 ナデ 外面 顔彩ナデ	A区 土器79
484	土鍋	—	—	—	赤石・赤色粘土・赤色粘土 灰青灰色	口縁外側肥厚、口縁上側に黒あり	内面 顔彩方向のハケ 外面 口縁ナデ、ヨコナデ	A区 土器79
485	瓦列土器 甕鉢	(28.0)	—	—	長石、 緑灰色、灰白色	口縁部内側に肥厚	内面 ナデ、唇目の単位非 外面 顔彩方向ナデ、ユビオサエ、 轉り方向ナデ、唇方向のナデ	A区 土器79

第355組 土器90

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺址名
		口径	底径	高さ				
486	内渠土器瓶	—	(6.8)	—	長石・石膏・黄褐色、 内渠色 (外)黄褐色	断面三角形の高台をほり付け	内面 顔彩ナデ 外面 顔彩ナデ、ヨコナデ	A区 土器90

第357組 土器81

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺址名
		口径	底径	高さ				
487	土鍋	(31.8)	—	—	長石、 赤褐色	口縁部広くの字状に折れる	内面 ハケ目、ハケ目の上からヨ コナデ 外面 ユビナデ、ユビオサエ	A区 土器81

第359組 土器83

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺址名
		口径	底径	高さ				
488	土師器碗	(11.4)	4.8~4.9	4.6	長石・内筒石、 (内)赤褐色～緑褐色、黒色 (外)緑褐色	断面三角形の高台	外面 ハケミガキ	A区 土器83

第361組 土器84

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺址名
		口径	底径	高さ				
489	西幹浅鉢	—	—	—	緑青褐色	—	内外面 顔彩ナデ、口口肥、床 目4条以上	A区 土器84

第365組 土器85

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺址名
		口径	底径	高さ				
491	内渠土器瓶	—	—	—	長石・内筒石、 (内)赤色(口縁下) (外)赤色、黒色(口縁下)	口縁部わずかに外反	内面 ヨコナデ、横方向のミガキ 外面 ヨコナデ、顔彩ナデ	A区 土器85
492	青磁碗	—	—	—	灰色がかった緑色の粒、 粒度0.5mm	—	内外面 緑釉 底中央(不割面)	A区 土器85

第367組 土器86

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺址名
		口径	底径	高さ				
493	土師質土器杯	—	(7.2)	—	白色粘土・長石、 赤褐色、 灰黄褐色	底部直立気味	内面 顔彩ナデ 外面 顔彩ナデ、魚目	A区 土器86
494	土師器甕	—	(6.4)	—	内筒石・長石 (内)灰～黒色 (外)赤黄褐色	高い高台をほり付ける	内面 外方向ナデ 外面 ヨコナデ、底部切り直し後 ナデ	A区 土器86
495	須恵器壺	(15.0)	—	—	長石、 灰白色	短い口縁がわずかに外方に折れる	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ヨコナデ、ナデ	A区 土器86

第368組 土器87

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺址名
		口径	底径	高さ				
496	土師器小皿	10.4	6.6	1.3~1.4	長石・内筒石、 灰黄褐色	底部緩やかに立ち上がる	内面 顔彩ヨコナデ 外面 顔彩ヨコナデ、底部糸切り 縁縁底灰痕	A区 土器87

第371組 土器88

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺址名
		口径	底径	高さ				
497	土師質土器 小皿	9.5~9.7	4.8	1.6~2.1	長石・赤色粘土、 緑褐色、 灰黄褐色	手づくね、丸底底部から縁やかに口 縁へ	内面 不定向方向ナデ 外面 顔彩ナデ	A区 土器88
498	土師器甕	(16.0)	—	—	長石、 灰白色	口縁部外反	内面 ヨコナデ、ミガキ 外面 ヨコナデ、ミガキ	A区 土器88

第373組 土器89

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺址名
		口径	底径	高さ				
499	土師質土器杯	—	—	—	赤色粘土・長石、 緑褐色	—	内外面 顔彩ナデ	A区 土器89
500	土鍋	—	—	—	長石・内筒石・金灰母、 (内)赤褐色 (外)緑褐色～褐色	—	内面 ハケ目 外面 顔彩目タテ	A区 土器89

第375組 土器90

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺址名
		口径	底径	高さ				
501	土師質土器 小皿	(7.2)	(4.2)	1.3	長石・赤色粘土、 内面中央付近・外面黒褐色 (その他)褐色	底部の立ちあがり緩やか	内面 不定向方向ナデ、顔彩ヨコナデ 外面 顔彩ヨコナデ、底部糸切り 縁ケケリ	A区 土器90
502	土師質土器 小皿	(8.8)	(6.6)	1.6	内筒石・長石・砂粒、 褐色	底部は底やかに立ちあがり斜方向に 口縁へ	内面 不定向方向ナデ、顔彩ヨコナデ 外面 顔彩ヨコナデ、底部糸切り 縁縁底灰痕	A区 土器90

503	土師器衝	(12.4)	-	-	白っぽい棕色	口縁部外反	内面ミガキ 内面ヨコナデ、圓錐ナデ?	A区 土師90
504	土師器椀	(18.0)	-	-	長石 白っぽい灰褐色	口縁部外反	内面ミガキ 内面ヨコナデ、ミガキ?	A区 土師90
505	土師黄土器杯	(17.6)	-	-	黄褐色・長石 灰褐色	-	内外面 圓錐コビナデ 外表面ロウケ	A区 土師90
506	内黒土器椀	(6.8)	-	-	長石 (内)灰色 外褐色	高い両台が付される	内面ミガキ 外表面ミガキ、ヨコナデ	A区 土師90
507	黒色土師碗	-	(7.8)	-	黄褐色・長石 褐色	前面三角形の高台が外周に付される	内面ミガキ 外表面ヨコナデ、底部切り刻し後ナデ	A区 土師90

第376回 土師91

番号	器種	法 定 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・装束・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
508	土鍋	-	-	-	内面石・赤色粘土、 灰褐色	外表面口縁下に溝帯	内面 横方向のハケ目 外表面ヨコナデ、ナデ	A区 土師91
509	土鍋	-	-	-	内面石 (内)暗褐色 外灰褐色	-	内面 ユビナデ、ユビオサエ 外表面 格子目タタキ	A区 土師91
510	常陸燗壺	-	-	-	長石	二重口縁状	内外面ヨコナデ	A区 土師91

第380回 土師93

番号	器種	法 定 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・装束・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
511	土鍋	(49.8)	-	-	赤雲母 (内)茶褐色 外灰褐色	体部下で屈曲、体部は対反臭味に口縁へ	内面ナデ、ハケ目 外表面ヨコナデ、ユビナデ(すずり)	A区 土師93

第382回 土師94

番号	器種	法 定 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・装束・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
512	土師器椀	-	(6.2)	-	長石 (内)褐色 外灰褐色	前面三角形の低い両台がはり付け	内面ミガキ 外表面 圓錐ナデ、ヨコナデ、底部 切り刻し、後ナデ	A区 土師94

第384回 土師95

番号	器種	法 定 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・装束・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
513	瓦器椀	-	(7.0)	-	長石 黄白色	底部平座	内面ナデ 外表面ヨコナデ、切り刻し、後ナデ	A区 土師95

第386回 土師96

番号	器種	法 定 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・装束・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
514	土師器碗	(13.0)	-	-	長石・角閃石、 (内)白っぽい黄褐色 (外)黄～緑色	口縁部わずかに外反	内面 横方向の上から横方向の ミガキ、ヨコナデ 外表面ヨコナデ、圓錐ナデ	A区 土師96

第390回 土師99

番号	器種	法 定 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・装束・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
515	土師黄土器杯	-	(3.8)	-	赤色粘土・内面石、 灰褐色	-	内面ナデ 外表面ヨコナデ、底部縁切り	A区 土師99

第394回 土師100(1)

番号	器種	法 定 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・装束・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
517	土師黄土器 小皿	(9.6)	(7.2)	1.8	長石・角閃石、 白っぽい灰褐色、内面が黒く なっている	-	内面 底部不定方向ナデ、圓錐 コビナデ 外表面 圓錐コビナデ、底部縁切り	A区 土師100
518	瓦器椀	-	6.7~6.8	-	長石・角閃石、 (内)灰色 (外)灰色(部分的に灰白色)	底部平座	内面 不定方向ナデ 外表面 圓錐コビナデ、底部縁切り	A区 土師100
519	白磁皿	(10.2)	-	-	灰色がかった白色	碗反り口縁	内外面 捺捺	A区 土師100
520	白磁皿	(11.4)	-	-	灰色がかった白色	碗反り口縁	内外面 捺捺	A区 土師100
521	青磁椀	(16.0)	-	-	やや青みがかった緑色種 釉薬1層前後	-	内外面 捺捺 外表面 捺捺	A区 土師100
522	円筒状土師品	-	-	-	長石・角閃石、 灰褐色	-	ナデ	A区 土師100
523	茶釜	-	-	-	内面石・長石、 (内)灰～灰色 (外)灰褐色	-	内外面 ナデ	A区 土師100
524	土鍋	-	-	-	内面石・赤色粘土・石英 粒褐色(断面内面は黒色)	-	内面 横方向ハケ目の上からナ デ 外表面 横方向のナデ、一帯横方 向のハケ目	A区 土師100
526	土師器鉢鉢	-	-	-	内面石・長石、 底部付底灰色、 その胎灰色	注目は縁がはいり状工具による	内外面 ナデ	A区 土師100
527	溝前煎茶鉢	-	-	-	-	外表面縮状のもの	内外面ヨコナデ 捺捺	A区 土師100
528	溝前煎茶鉢	-	-	-	-	-	内外面ヨコナデ	A区 土師100
529	瓦東北器器	(21.2)	-	-	長石、 暗灰色	縁部が短く直立し、口縁部肥厚	内面 ハケ 外表面 ナデ、器底へハケ目	A区 土師100
530	火鉢	(45.6)	-	-	長石・角閃石、 灰褐色	口縁内湾	内面ヨコナデ、ナデ 外表面ヨコナデ、ナデ	A区 土師100
531	瓦黄土器壺	(26.0)	-	-	内面石・長石・石英 (内)灰～灰白色 (外)灰白色	口縁外反	内面ヨコナデ、ハケ目の上から ヨコナデ、ナデ	A区 土師100
532	瓦黄土器壺	(45.0)	-	-	石英 暗灰色	口縁は体部から直立臭味につぶれ やや肥厚する	内面ヨコナデ、ハケ目状のもの 外表面ヨコナデ、ナデ、タタキ、口 縁に割目らしきものあり	A区 土師100
533	土師器壺	-	(24.0)	-	内面石・長石 淡褐色 断面ほとんどは灰色	-	内面 ハケ目をナデ消し、ヘラ の跡、器底ナデ 外表面 ナデ	A区 土師100

第388回 土曜101								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色類	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺品名
		口径	底径	高さ				
538	土師黄土器坪	—	(6.8)	—	黒石・金雲母・ 赤褐色	体部の立ち上がりは急	内面 面割ナデ、口内直縁も 外面 面割ナデ、底面赤切り	A区 土曜101
539	瓦器蓋鉢	(29.2)	—	—	内肉石・黒石 内褐色 外褐色～灰色	唇口は5本単位	内面 横方向のナデ、コビナデ、 ユビオサエ 外面 ココナデ、ユビオサエ、ユビ オサエの上から斜めのナデ	A区 土曜101

第403回 土曜106								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色類	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺品名
		口径	底径	高さ				
541	瓦器瓶	—	(3.2)	—	内肉石・黒石 白褐色	横面三角形の両方をほり付け	内面 両方ナデ、ココナデ 外面 面割ナデ、底面赤切り	A区 土曜106
542	土鍋	—	—	—	黒石、 内褐色 外深褐色(すず付着)	口縁部外方に折れる	内面 ナデ、ココナデ 外面 ココナデ、横方向のたぐさ ズリ	A区 土曜106
543	横前輪埴	—	—	—	—	—	内面 ココナデ 外面 ココナデ、口縁外縁に凹溝	A区 土曜106
544	瓦葺土器火鉢	(39.6)	—	—	角肉石・黒石 褐色～灰色	外周口縁下に2本の突起とスタンプ 文	内面 ナデ、横方向のナデ、ナ デ 外面 ナデ、横付け突起	A区 土曜106
545	横前輪埴	(20.6)	—	—	—	口縁玉縁	内外面 ココナデ	A区 土曜106

第405回 土曜108								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色類	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺品名
		口径	底径	高さ				
546	土師黄土器坪	(12.4)	8.6～8.7	3.3	黒石・角肉石、 赤褐色	体部直立気味	内外面 面割ナデナデ 底面赤切り	A区 土曜108
547	瓦器瓶	—	(7.0)	—	黒石、 灰色	底面平底	内面 ユビナデ 外面 面割ナデナデ、底面赤切り	A区 土曜108

第406回 土曜109								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色類	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺品名
		口径	底径	高さ				
548	土師黄土器坪	13.2	9.1	3.5～2.9	黒石、 赤褐色	体部の立ち上がりは急で直立気味	内外面 ココナデ 底面赤切り	A区 土曜109
550	土師黄土器坪	13.0～ 13.6	9.4	3.7	黒石 赤褐色	体部の立ち上がりは急で直立気味	内外面 面割ナデナデ 底面赤切り	A区 土曜109
551	土師黄土器 小皿	7.7	6.5	1.3	黒石、 黄褐色	体部は短く直立気味に立ち上がる	内外面 ココナデ 底面赤切り	A区 土曜109

第410回 土曜110								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色類	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺品名
		口径	底径	高さ				
552	土師黄土器坪	11.9	7.9～8.0	2.9	黒石・赤色粒平・白色粒平、 赤褐色	体部の立ち上がりは急で直立気味	内面 面割ナデナデ、底面コビナ デ 外面 面割ナデナデ、底面赤切り	A区 土曜110
553	瓦葺土器土鍋	(25.3)	—	—	黒石、 褐色	口縁は二重口縁状に立ち上がる	内面 ココナデ 外面 ココナデ、ユビオサエ、コビ ナデ	A区 土曜110

第412回 土曜111								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色類	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺品名
		口径	底径	高さ				
554	茶釜	(13.8)	—	—	黒石・角肉石、 黄～褐色	口縁は短く直立する	内面 ココナデ、ユビオサエ、ナ デ 外面 ココナデ、横方向のナデ	A区 土曜111

第414回 土曜112								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色類	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺品名
		口径	底径	高さ				
555	黄磁碗	(16.8)	—	—	滑い緑の釉	口縁わずかに傾斜	内外面 面割	A区 土曜112

第416回 土曜113								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色類	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺品名
		口径	底径	高さ				
556	須恵器 土鍋?	—	—	—	黒石、 灰色	—	内外面 ココナデ	A区 土曜113
557	瓦葺土器 土鍋?	—	—	—	角肉石・黒石、 赤褐色	口縁部厚	内外面 ココナデ、横方向のナ デ	A区 土曜113
558	瓦葺土器 土鍋?	—	—	—	黒石・角肉石、 褐色	体部は口縁にむかい直立	内面 ココナデ、面割ナ デ 外面 ココナデ、横方向のナ デ、 懸のナデ	A区 土曜113

第418回 土曜114								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色類	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺品名
		口径	底径	高さ				
559	土鍋	(30.2)	—	—	角肉石・黒石、 内褐色 外深褐色	体部は口縁にむかい直立	内面 ココナデ、横方向のナ デ 外面 ココナデ、底面ナ デ	A区 土曜114
560	瓦葺土器横埴	—	(18.4)	—	角石・角肉石、 内褐色 外深褐色(すず付着)	—	内面 横方向のナデ、ナ デ 外面 横方向のナデ、底面ナ デ	A区 土曜114

第420回 土曜116(1)								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色類	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺品名
		口径	底径	高さ				
561	土師黄土器坪	(7.0)	(6.6)	3.4	黒石・角肉石、 深褐色	体部直立気味	内面 面割ナデナデ、底面ナ デ 外面 面割ナ デ	A区 土曜116
562	瓦器瓶	(16.0)	—	—	黒石・角肉石・砂粒、 内灰色～白色	口縁部の厚み傾きあり	内外面 面割ナデナ デ	A区 土曜116
563	黄磁碗	14.3	6.6	6.7	内肉に黒入	—	内外面 滑い釉の上から緑を かける。 黄磁的な(緑地)な深赤文	A区 土曜116

第422回 土曜116(2)								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色類	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺品名
		口径	底径	高さ				
564	横前輪埴	27.2	—	—	内赤褐色 外深褐色	口縁部玉縁状	内面 ココナデ 外面 斜めのココナデ、ナ デ	A区 土曜116

第428回 土壁117								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・技法・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	器高				
565	瓦葺形	-	(7.4)	-	長石、 灰白色	底部平底	内面 不定方向ナデ 外面 同転ユビナデ、底部糸切り	A区 土壁117
566	土鍋	-	-	-	長石・角閃石、 内淡褐色～灰色 外淡褐色(すず付着)	口縁短く外方に折れる	内面 ヨコナデ、不定方向ナデ 外面 ヨコナデ、ナデ、不定方向ナデ ナデ縁部方向のケズリ	A区 土壁117

第429回 土壁118								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・技法・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	器高				
567	須恵器碗	-	-	-	白色粘土、 陶灰色	-	内面 縦方向のナデの上から内 心のナデ 外面 横子貝のナデ	A区 土壁118

第430回 土壁119								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・技法・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	器高				
568	瓦葺形	(12.6)	-	-	長石、 内淡色、灰白色、陶灰色 外淡褐色、灰白色	口縁部に凸ね筋あり	内外面 同転ナデ?	A区 土壁119
569	土鍋	-	-	-	内淡石・長石、 陶褐色	口縁短く外方に折れる	内面 ヨコナデ、ユビナデ 外面 ヨコナデ	A区 土壁119

第431回 土壁120								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・技法・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	器高				
570	土鍋	(41.2)	-	-	長石・金剛石・角閃石、 内淡褐色～陶褐色 外淡褐色	体部下で縦筋、斜方向に口縁へいた り、口縁わずかに折れる	内面 ヨコナデ、横方向のナデ、 縦方向のナデ 外面 ヨコナデ、ヨコナデ、ナデ	A区 土壁120
571	土鍋	-	-	-	長石・角閃石、 褐色～陶褐色	-	内面 乱ナデ 外面 横子貝のナデ	A区 土壁120
572	土鍋	-	-	-	長石・角閃石、 内淡褐色 外濃褐色	体部斜方向に口縁へ	内面 横方向のナデ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ、ユビナデ、ナデ	A区 土壁120
573	青磁碗	-	(5.0)	-	胎土は灰白色、釉は緑色 青入あり	-	内面 高縁の口内面 外面 高台縁出し、裏面縁出し	A区 土壁120

第432回 土壁121								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・技法・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	器高				
574	鉢鉢	(30.6)	-	-	内淡石・長石、 内淡褐色 外濃褐色	口縁部内側にわずかに肥厚	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ヨコナデ、斜め方向の縦 筋目縁4～7本	A区 土壁121
575	茶釜	(13.6)	(14.2)	13.1	長石・角閃石、 内淡褐色 外淡褐色	口縁外面にスタンプ文 体部中に雲帯	内面 ヨコナデ、横方向のユビナ デ、底面すず付着 外面 ナデ、ヨコナデ、スタンプ文、 底面一度縁にかけすず付着	A区 土壁121

第434回 土壁122								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・技法・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	器高				
576	土師灰土器片	-	(8.2)	-	長石・赤色粘土、 陶褐色	-	内面 同転ユビナデ 外面 同転ユビナデ	A区 土壁122

第435回 土壁123								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・技法・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	器高				
566	瓦葺形	(12.6)	-	-	角閃石、 灰白色	-	内外面 横いびきナデ	A区 土壁123
567	青磁碗	-	-	-	灰色がかった釉、胎厚1mm 青入あり	-	内外面 筋飾	A区 土壁123

第436回 土壁124								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・技法・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	器高				
568	瓦葺形	-	(7.6)	-	長石・砂粒、 灰白色	底部平底	内面 同転ユビナデ、底部不定 方向ナデ 外面 同転ユビナデ、底部糸切り	A区 土壁124
569	瓦葺土師器	-	-	-	砂粒、 灰白色	-	内面 ヨコナデ、ユビナデ 外面 横ナデナデ、横子貝ナデ	A区 土壁124

第440回 土壁125								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・技法・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	器高				
590	土師瓦土師 小皿	(8.6)	(7.2)	1.2	長石・赤色粘土・金剛石、 淡褐色	体部の立ちあがり緩やか	内外面 同転ナデ 底部糸切り	A区 土壁125

第444回 土壁126								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・技法・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	器高				
591	土鍋	-	-	-	石英・角閃石・長石・金剛石、 内淡褐色 外濃褐色	口縁短く外方に折れる	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ヨコナデ、横方向のケズリ	A区 土壁126

第445回 土壁129								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・技法・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	器高				
592	土師碗	(15.8)	-	-	赤色粘土、 淡褐色	口縁尖り双丸	序でて底面不明	A区 土壁129
593	土師器片	-	6.4	-	金剛石・赤色粘土、 淡褐色	鋭い高台をはり付ける	内面 乱ナデ 外面 同転不明	A区 土壁129
594	瓦葺形	-	-	-	内淡石・長石、 内淡～灰褐色 外淡褐色	-	内面 乱ナデ 外面 ヨコナデ	A区 土壁129

第448回 土壁130								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・技法・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	器高				
595	土師瓦土師 小皿	-	7.4	-	赤色粘土・角閃石・石英・金剛 石、 淡褐色	体部斜方向に立ちあがる	内面 同転ユビナデ(序でて裏面い) 外面 横ナデの様な同転ユビナ デ	A区 土壁130

第451図 土壁132

図号	素材	法 量 (cm)			土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	原資料の 図様名
		口深	底深	高さ				
588	土壁内土塀 小皿	(8.4)	(5.8)	0.7	黄褐色・長石、 緑褐色	体部は斜方向にのびる	内面 面紅コビナデ 外面 面紅コビナデ(底部未切り)	A区 土壁132

第452図 土塀135

図号	素材	法 量 (cm)			土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	原資料の 図様名
		口深	底深	高さ				
587	内黒土塀	-	(8.0)	-	長石・黄褐色、 (内)灰色	断面長方形の高い高台をはり付け (外)漆一層施す	内面 ミナ厚減して不鮮明 外面 面紅コビナデ	A区 土壁135

第458図 土塀138

図号	素材	法 量 (cm)			土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	原資料の 図様名
		口深	底深	高さ				
589	丹塗壁	(13.6)	-	-	淡い色の透明釉	-	内外面 花柄	A区 土壁138

第462図 土塀139

図号	素材	法 量 (cm)			土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	原資料の 図様名
		口深	底深	高さ				
800	土塀縁板	(16.0)	-	-	黄白色	口縁部わずかに外反	内面 面紅コビナデ 外面 面紅コビナデ	A区 土壁139
601	内黒土塀	(15.8)	-	-	長石・黄褐色、 (内)灰色	-	内面 ミナ厚減して不鮮明 外面 ココナデ、横方向ナデ (外)漆一層施す	A区 土壁139

第464図 土塀140

図号	素材	法 量 (cm)			土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	原資料の 図様名
		口深	底深	高さ				
602	土塀別土編坪	(13.8)	(7.4)	2.7	赤色粘土・石灰・黄褐色、 黄褐色 緑色	体部斜方向にのびる	内外面 面紅コビナデ 底部未切り	A区 土壁140
603	土塀別土編坪	(16.4)	(7.4)	3.6	石灰・赤色粘土、 淡黄褐色	体部の立ちあがりには緩やか	内面 面紅コビナデ 外面 面紅コビナデ 底部未切り	A区 土壁140
604	土塀別土編坪	-	(8.6)	-	赤色粘土・角閃石、 内面赤色 外黄褐色	体部は斜方向にのびる	内面 不意方向のナデ 外面 横方向のナデ	A区 土壁140
605	土塀別土塀 小皿	(9.4)	(7.6)	1.5	黄褐色・赤色粘土・長石、 (内)赤色 外黄褐色	体部外反	内面 面紅コビナデ 外面 ココナデ 底部未切り	A区 土壁140
606	土塀別土塀 小皿	(9.4)	(7.0)	1.2	淡い黄色粘土・角閃石、 (内)淡褐色 (外)漆一層施す	体部の立ちあがりには緩やか	内外面 面紅コビナデ 底部未切り	A区 土壁140
607	土塀別土塀 小皿	(10.8)	-	-	赤色粘土、 緑褐色	体部は斜方向にのびる	内面 面紅コビナデ	A区 土壁140
608	土塀縁板	-	11.9	-	黄褐色・石灰、 赤褐色 サマシロ(シロ)石灰	高い高台をはり付け	内面 ナデ 外面 ココナデ、高台貼り付け、底 部コビナデ	A区 土壁140
609	内黒土塀前	(14.6)	-	-	赤色粘土・角閃石・長石、 (内)灰一層白っぽい (口)縁部高、その他黄褐色	口縁部わずかに外反	内面 ミナ厚減して不鮮明 外面 ココナデ、ミナデ	A区 土壁140
610	内黒土塀前	(14.8)	-	-	赤色粘土、 内面 (外)漆、緑褐色	口縁部外反	内外面 ココナデ、ミナデ	A区 土壁140
611	内黒土塀前	-	5.8	-	赤色粘土・角閃石、 (内)漆 (外)黄褐色	高い高台が外側にはり付けられる	内面 面紅コビナデ 外面 ココナデ、ナデ	A区 土壁140
612	内黒土塀前	-	(7.8)	-	赤色粘土、 (内)漆 (外)黄褐色	断面長方形の高台をはり付ける	内面 コビナデ 外面 面紅コビナデ、ココナデ	A区 土壁140
613	内黒土塀前	-	(8.0)	-	内黒・長石・赤色粘土、 (内)漆 (外)緑色・黄褐色	断面長方形の高台をはり付ける	内面 不意方向ナデ 外面 ココナデ、両方貼り付け ココナデ	A区 土壁140
614	内黒土塀前	-	(7.6)	-	黄褐色・長石、 (内)赤色、淡褐色 (外)緑色	断面長方形の高台をはり付ける	内面 ミナデ、コビナデ 外面 面紅コビナデ、高台貼り付 けコビナデ	A区 土壁140

第468図 土塀141

図号	素材	法 量 (cm)			土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	原資料の 図様名
		口深	底深	高さ				
616	土塀縁板	(15.8)	-	-	-	-	内外面 縁減	A区 土壁141
617	土塀	(21.4)	-	-	黄褐色・長石、 (内)淡褐色 (外)漆一層施す	口縁部短く外反	内面 ココナデ、へうげのもので 横方向ナデ 外面 ココナデ、横方向のナデ	A区 土壁141

第469図 土塀143

図号	素材	法 量 (cm)			土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	原資料の 図様名
		口深	底深	高さ				
618	土塀縁板	-	-	-	赤褐色・石灰・石灰、 緑褐色	-	内外面 面紅コビナデ 外壁は(ろ)あり	A区 土壁143

第472図 土塀144

図号	素材	法 量 (cm)			土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	原資料の 図様名
		口深	底深	高さ				
620	土塀	-	-	-	黄褐色・長石・赤褐色粘土、 (内)赤褐色 (外)黄褐色	-	内面 横方向ナデ 外面 ココナデ、横方向ナデ	A区 土壁144

第473図 土塀146

図号	素材	法 量 (cm)			土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	原資料の 図様名
		口深	底深	高さ				
621	黄塩硝	(14.0)	-	-	灰色がかった緑色の凝 結硝0.5mm	-	内外面 縁減	A区 土壁146
622	白磁硝	-	(5.8)	-	白色結 晶硝0.5mm	-	内外面 縁減 高台縁減、縁付け	A区 土壁146
623	瓦葺土塀	(23.6)	-	-	角閃石・長石、 (内)赤褐色 (外)黄褐色	口縁部外面肥厚 淡い面影	内面 ミナデ 外面 ナデ、横方向のナデ	A区 土壁146
624	土塀縁板	(29.8)	-	-	赤褐色・長石、 黄褐色 内面一部黄褐色	口縁部斜内外にやや肥厚	内面 横方向のミナデ 外面 ココナデ、面紅コビナデ、ナ デ	A区 土壁146

626	土鍋	-	-	-	灰石・角閃石・金雲母、 内淡黄褐色 外暗褐色	口縁部を外方に引き出す	内面 横方向のナデ 外面 ココナデ、ケズリ	A区 土壌140
627	瓦質土師土鍋 (23.2)	-	-	-	石炭・長石、 内灰～灰褐色 外淡褐色	口縁部を上方に拡張	内面 ココナデ、横方向のナデ 外面 ココナデ、ハケ目	A区 土壌146
628	瓦質土師鉢鉢 (32.8)	-	-	-	石炭・砂粒、 内灰褐色 外淡灰褐色	口縁部内側に三角形に肥厚	内面 横方向のナデ 外面 ココナデ、タハケ後ナデ	A区 土壌148
629	滑前伎師鉢 (28.4)	-	-	-	-	口縁部は丸くおさめる	内面 ココナデ、指目7本縁状 外面 ココナデ	A区 土壌148
630	滑前伎師	-	-	-	長石、 赤褐色	-	内面 ココナデ、指目7本縁状 外面 ココナデ、指目7本縁状 内面 不定方向ナデ、底面不定方向ナデ 外面 縦紋ナデの上に貼り付けナデ、 ココナデ、面取ナデ後ナデ	A区 土壌146
631	滑前伎師	-	-	-	-	外面にへう掛き	内外面 ナデ	A区 土壌148
632	滑前伎師	-	-	-	-	外面にへう掛き	内外面 ナデ	A区 土壌148

第47回 土師149

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	高さ				
636	滑前鉢	(41.2)	-	-	白色砂粒・長石、 緑褐色	口縁部が十字に折れる	内面 ココナデ、横方向のナデ 外面 ココナデ、横方向のナデ、 指目7本縁状	A区 土壌149
637	滑前鉢	-	-	-	長石、 褐色灰	-	内面 縦方向に溝状内側のタテ 先	A区 土壌149
638	常形浅鉢	-	-	-	-	口縁部上下に拡張	内外面 ココナデ	A区 土壌149

第48回 土師150

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	高さ				
639	土師質土師 小皿	8.4	2.0	1.0	金雲母・角閃石・赤色粒子・石 炭褐色	低い体部が内湾気味に立ち上がる	内面 面取ナデ、底面不定方向ナデ 外面 面取ナデ、底面赤切	A区 土壌150

第49回 土師151(1)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	高さ				
640	土師質土師 小皿	-	-	-	角閃石・長石、 内淡黄褐色 外淡褐色	-	内面 ナデ、ココナデ 外面 ナデ	A区 土壌151
641	土鍋	-	-	-	角閃石・赤色粒子、 赤褐色	-	内面 面取ナデ 外面 底面赤切	A区 土壌151

第49回 土師151(2)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	高さ				
642	滑前浅鉢	-	-	-	赤褐色	口縁部玉縁状	内外面 ココナデ	A区 土壌151
643	滑前浅鉢 (31.6)	-	-	-	赤褐色	口縁部が下に膨れる	内外面 ココナデ、横方向ナデ	A区 土壌151
644	滑前浅鉢	-	34.4	-	赤褐色	-	内面 横方向ナデ、底面赤切 外面 横方向ナデ、ココナデ、ナ デ	A区 土壌151

第49回 土師151(3)

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	高さ				
645	滑前浅鉢	-	30.8	-	砂粒 緑い赤褐色	-	内面 ナデ 外面 タハケメ・ナメハケメ	A区 土壌151

第49回 土師152

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	高さ				
647	土師質土師鉢	-	8.2	-	石炭・長石・角閃石・金雲母、 内淡黄褐色 外淡褐色	高い縁台を外側にはり付け	内面 面取ナデ 外面 横方向ナデ、高台貼り付け、 指目赤切	A区 土壌153
648	滑前鉢	-	-	-	くずんだ灰色	-	内面に片切彫り	A区 土壌152
649	滑前浅鉢	-	-	-	赤褐色	口縁外縁玉縁状	内外面 ココナデ	A区 土壌153
650	滑前浅鉢	-	-	-	長石、 赤褐色	口縁部立ち上がる	内外面 ココナデ	A区 土壌153

第49回 土師154

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	高さ				
652	土師質土師鉢 (7.8)	(6.9)	3.5	-	角閃石・金雲母・赤色粒子、 赤い内淡褐色 赤色粒子・金雲母・長石・角閃 石、 内淡褐色 外淡褐色	体部内湾気味	内面 面取ナデ、底面指目赤切 外面 面取ナデ、底面赤切	A区 土壌154
653	土師質土師鉢	-	(7.6)	-	角閃石、 内淡褐色 外淡褐色	-	内面 不定方向ナデ 外面 面取ナデ	A区 土壌154
654	瓦鉢	-	(6.6)	-	石英	新築三角形の高台はり付け	内面 玉方キ 外面 面取ナデ、ココナデ	A区 土壌154
655	瓦質土師鉢鉢	-	-	-	石英	口縁内側は三角形に肥厚	内面 ココナデ、ココナデ指目 外面 ココナデ、ケズリ調整	A区 土壌154

第49回 土師155

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	高さ				
656	土師質土師鉢	-	(6.4)	-	金雲母・角閃石・赤色粒子・石 炭、 内淡黄褐色 外淡褐色	体部は斜方向に立ち上がる	内面 面取ナデ 外面 面取ナデ、やち口ロ口腹赤 ら、底面赤切	A区 土壌155
657	瓦鉢	-	(8.5)	-	角閃石、 白っぽい灰色	底面平底	内面 不定方向ナデ 外面 面取ナデ、底面赤切	A区 土壌155
658	滑前高形浅鉢	-	-	-	灰色粒子・白色砂粒、 胎土の粘	-	外面 高台形露出	A区 土壌155
659	白磁皿	-	-	-	白色粒子・ 透明釉(やちみま染り)	口縁口縁をもつものか	外面 底面無縁	A区 土壌155

660	青磁碗	-	-	-	灰褐色の粘土。 黄塗。幾何学的。 赤色粘土・角閃石・石英。 内面黄褐色。一部焼けて淡 黄色。 外底黄褐色	口縁破れ	内外面 凸縁	A区 土層155
661	瓦葺土器香炉	(9.2)	(7.2)	6.5	赤色粘土・角閃石・石英。 内面黄褐色。一部焼けて淡 黄色。 外底黄褐色	体部直立。小さな脚が付される	内面 ココナチ、ヘラナチ、ヘラケ ナチ 外面 黄塗ステンブ、ミガキ、御 座付、鹿頭シキ(半鐘ノズリ) 内面 コビオサエ、ヘラ状の筋で ナチ 外面 ココナチ、ココナチ、黄 塗ステンブ	A区 土層156
662	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石・長石・金塗母。 内底・灰白色 外底白色〜褐色	口縁部内側をわずかに引き出	内面 ココナチ、ナチ 外面 ミガキ、黄塗ステンブ、ス テンブ	A区 土層156
663	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石・長石。 灰褐色	-	内面 ココナチ、ナチ 外面 ミガキ、黄塗ステンブ、ス テンブ	A区 土層155
664	瓦葺土器火鉢	(34.2)	-	-	長石・角閃石。 黄〜褐色	-	内面 ミガキ、横方向ナチ縁部 向ナチ 外面 ココナチ、ミガキ、黄塗 ステンブ	A区 土層155
665	瓦葺土器火鉢	-	-	-	赤色粘土・長石	外面に平行沈線文	内面 横方向のミガキ 外面 ナチ	A区 土層155
666	瓦葺土器 火鉢	-	-	-	角閃石・長石。 褐色	山形を削り出した三角筋をほりけり、 さらに中央部に長方形粘土を置く	内面 コビオサエ、ナチ 外面 ミガキ、ナチ、黄塗、御座 付、蓋孔 内面 ココナチ、徑目5cm以上 外面 ココナチ、ナチ、ナチ	A区 土層156
667	燗煎焼椀鉢	-	-	-	-	口縁はあぶり発遣せずや上方に加 張される	内面 赤白 外面 ナチ 縁部絞り直し	A区 土層155
668	丸瓦	-	-	-	長石。 褐色	-	内面 赤白 外面 ナチ 縁部絞り直し	A区 土層155

第495図 土層156

番号	器種	寸法 (cm)			粘土・色調	彫刻の特徴	手法・図版・文様	調査時の 遺物名
		口径	底径	高さ				
670	土師器土器 小皿	(10.5)	(7.0)	1.8	赤色粘土・角閃石・長石・金塗 母・石英。 褐色	体部斜方向にのびる	内外面 藍転ナチ 底面赤切り	A区 土層156
671	滑石器蓋	(2.9)	-	-	白色粘土。 褐色	口縁部くの字状に折れる	内面 ココナチ、底面に高がうた ナチ、ユビオサエ 外面 ココナチ、平縁赤白	A区 土層156
672	滑石器蓋	-	-	-	砂粒 灰色	口縁部大きく外反	内面 ココナチ、径目5cm以上 外面 ココナチ、回転ナチ、ハ ケ	A区 土層156

第497図 土層157

番号	器種	寸法 (cm)			粘土・色調	彫刻の特徴	手法・図版・文様	調査時の 遺物名
		口径	底径	高さ				
673	土師器碗	-	8.4	-	金塗母・角閃石。 褐色	体部長方形のやや高い高が付さ れる	内面 ミガキ 外面 斜方向のミガキ、ココナチ、 鹿頭赤切り縁部底面	A区 2号壺穴
674	内黒土器鉢	-	(7.8)	-	長石・角閃石。 赤褐色 外底褐色	断面方形の高台を貼り付け	内面 ココナチ、底面に高がうた ナチ、ユビオサエ 外面 ナチ、ココナチ	A区 2号壺穴
675	青磁碗	-	(5.4)	-	高色の粘土 粒厚1mm 大きめの黒入	-	外面を緑を塗	A区 2号壺穴
676	白磁碗	-	-	-	やや灰色がかつた透明釉	口縁部玉縁	-	A区 2号壺穴
677	青花碗	-	(4.8)	-	外面に大きめの黒入	-	内外面 藍 文様は一半横きカマ 高台部分四角 底面に高台の彫刻がある。 赤褐色で縁の彫刻と、文などは 高い緑色で描く。	A区 2号壺穴
678	色絵坪	-	(4.2)	-	-	-	-	A区 2号壺穴
679	瓦葺土器鉢	-	-	-	-	口縁部外面が凹縁	内外面 ナチ、ココナチ	A区 2号壺穴
680	土師器鉢	-	-	-	長石・角閃石。 淡褐色 長石・角閃石。 内底褐色 外底褐色	口縁縁部が内側に凹縁	内面 ミガキ 外面 ココナチ、藍転ナチ	A区 2号壺穴
681	土鍋	-	-	-	長石・角閃石。 内底褐色 外底褐色	体部は斜方向に口縁へいたる	内面 横方向のナチ、ココナチ 外面 ココナチ、ナチ	A区 2号壺穴
682	土鍋	-	-	-	長石。 内底褐色 外底褐色	口縁部が短くわずかに外反	内面 ココナチ、ナチ 外面 ココナチ、ケズリ	A区 2号壺穴
683	瓦葺土器鉢	-	(10.0)	-	長石。 褐色	断面長方形の高台が付される	内面 ミガキ 外面 回転ナチ、ココナチ	A区 2号壺穴
684	瓦葺土器火鉢	-	(24.6)	-	角閃石。 灰色	-	内面 ココナチ、ナチ 外面 横高きケズリ状ナチ、コ コナチ、ナチ	A区 2号壺穴
685	瓦葺土器火鉢	-	(21.4)	-	角閃石・長石。 内底褐色 外底褐色	-	内面 横方向のナチ、横方向の ナチ、ココナチ、ナチ 外面 ココナチ、ココナチ	A区 2号壺穴
686	瓦葺土器火鉢	-	-	-	長石・角閃石。 褐色	底面に高台状の脚を付ける	内面 ナチ 外面 ココナチ、鹿頭ナチ	A区 2号壺穴
687	燗煎焼椀鉢	-	(10.6)	-	長石・砂粒。 黄褐色	斜方向にも層目が入る	内面 ココナチ、鹿頭ナチ 外面 藍転ナチ	A区 2号壺穴

第500図 土層158

番号	器種	寸法 (cm)			粘土・色調	彫刻の特徴	手法・図版・文様	調査時の 遺物名
		口径	底径	高さ				
696	土師器碗	-	6.9〜6.5	-	赤色粘土・長石。 淡褐色	内凹状高台	内面 藍転ナチ 外面 ココナチ、底面赤切り縁ナチ	A区 3号壺穴
697	燗煎焼椀鉢	-	-	-	赤色・黄白色土。 灰色	口縁外面に凹縁状のもの	内面 ココナチ、口内底あり 外面 コビオサエ、口の底あり、 鹿頭	A区 3号壺穴
698	土師器鉢	(27.2)	-	-	角閃石・長石。 褐色	口縁縁部が凹縁	内面 ミガキ 外面 ココナチ、ナチ	A区 3号壺穴
699	瓦葺土器壺	(29.6)	-	-	長石・角閃石。 褐色	口縁縁部は外方に凹縁	内面 ココナチ、ナチ 外面 ココナチ、横方向のナチ	A区 3号壺穴
700	火鉢	(35.8)	-	-	角閃石・長石。 内底褐色 外底褐色	口縁部内凹	内面 横方向のナチ、ココナチ 外面 ココナチ、ナチ	A区 3号壺穴

第507号 土曜199

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
701	土師質土器杯	-	-	-	-	-	内外面 ココナデ	A区 4号墓穴

第507号 土曜199

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
702	土師質土器杯	(15.4)	(9.5)	3.0	角閃石・金雲母・長石、 内白っぽい黄褐色 (外濃褐色)	体部斜方向にのびる	内面 回転コビナデ、ユビナデ 外面 回転コビナデ、底部糸切り 後部伏圧痕	B区 土曜1
703	土師質土器杯	16.3	9.8	3.7~3.9	角閃石・長石、 黄褐色	体部内湾気味	内面 回転コビナデ、不定方向ナ デ 外面 回転コビナデ、底部糸切り 後部伏圧痕	B区 土曜1
704	土師質土器杯	(15.2)	(8.0)	3.2	角閃石・長石、 黄褐色	体部の立ちあがり緩やかに、口縁より 気味	内面 回転コビナデ、不定方向ナ デ 外面 回転コビナデ、底部糸切り 後部伏圧痕	B区 土曜1
705	土師質土器 小皿	(19.6)	7.1~7.2	2.0	長石・石英、 赤褐色	体部斜方向にのびる	内面 回転コビナデ、不定方向のナ デ 外面 回転コビナデ、底部糸切り 後部伏圧痕	B区 土曜1
706	土師質土器 小皿	(10.2)	7.0	1.5	角閃石、 黄褐色	体部の立ちあがり緩やかに内湾する	内面 回転コビナデ、不定方向のナ デ 外面 回転コビナデ、底部糸切り 後部伏圧痕	B区 土曜1
707	土師質土器 小皿	9.0~9.1	7.8	1.1	角閃石・長石、 紅色と褐色の斑	体部の立ちあがり緩やかに内湾する	内面 回転コビナデ、不定方向の ナデ 外面 回転コビナデ、底部糸切り 後部伏圧痕	B区 土曜1
708	土師質土器 小皿	(1.0)	6.5~7.5	1.3	角閃石、 淡黄褐色	体部は緩やかに立ちあがり内湾する	内面 回転コビナデ、不定方向の ナデ 外面 回転コビナデ、底部糸切り 後部伏圧痕	B区 土曜1
709	土師質土器 小皿	10.5	7.0	1.5	角閃石・長石、 赤褐色	体部は斜方向に緩やかにのびる	内面 回転コビナデ、不定方向ナ デ 外面 回転コビナデ、底部糸切り 後部伏圧痕	B区 土曜1
710	土師器碗	(16.2)	(6.4)	5.5	白っぽい黄褐色	口縁部わずかに外反、断面長方形の 両面はり付け	内面 ココナデ、ココナデ、ミガキ 外面 ココナデ、ココナデ、ミガキ、 底部糸切り	B区 土曜1
711	土師器碗	(16.5)	(6.7)	5.2	角閃石、 白っぽい黄褐色	断面三角形の両面はり付け	内面 回転ココナデ、ミガキ 外面 回転ココナデ、ココナデ、ミ ガキ、底部糸切り	B区 土曜1
712	土師器碗	-	-	-	赤色結晶・金雲母、 濃褐色	-	内面 回転コビナデ 外面 回転コビナデ、ユビオサエ	B区 土曜1
713	土師器碗	(16.8)	-	-	赤色結晶・砂粒・土(断面)、 内淡黄褐色 (外淡褐色)	口縁部外反	内面 回転コビナデ、ミガキ 外面 回転コビナデ、ココナデ、ミガキ	B区 土曜1
714	土師器碗	(15.6)	-	-	金雲母・石英、 白っぽい黄褐色	-	断面のため不明	B区 土曜1
715	土師器碗	-	6.4	-	角閃石・長石、 白っぽい黄褐色	断面方形の高台はり付け	内面 ミガキ 外面 ミガキ、ココナデ	B区 土曜1
716	土師器碗	-	6.0	-	角閃石・長石、 淡褐色	断面方形の高台はり付け	内面 ミガキ、ココナデ、高台縁付 はり付け	B区 土曜1
717	土師	(38.8)	-	-	角閃石・長石・金雲母、 内橙褐色 (外濃褐色~黄褐色、黒斑あり)	口縁部くの字状に折れる	内面 ココナデ、ユビナデ、ユビオ サエ 外面 ココナデ、ユビナデ(後部圧痕 あり)	B区 土曜1

第508号 土曜1602

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
718	土鍋	-	-	-	角閃石・長石・赤色結晶・金雲 母、 濃褐色・淡褐色	口縁部くの字状に折れる	内面 回転ココナデ、ナデ 外面 回転ココナデ、ナデ	B区 土曜1
719	土鍋	(40.0)	-	-	角閃石・金雲母・長石、 褐色・黄褐色	口縁部くの字状に折れる 口縁部縁は曲取り	内面 ココナデ、ユビナデ(後部圧 痕あり) 外面 ココナデ、ユビナデ、ユビオ サエ	B区 土曜1

第510号 土曜161

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
720	土師質土器 小皿	(9.2)	(5.8)	1.5	角閃石・長石・石英、 黄褐色	体部は丸みもち立ち上がる	内面 回転コビナデ、東部回転コ ビナデ 外面 回転コビナデ	B区 土曜2
721	土師器碗	(15.4)	-	-	角閃石・長石、 黄褐色	-	内面 ココナデ、斜方向のミガキ 外面 回転コビナデ、斜方向のミガ キ	B区 土曜2
722	土師器碗	-	6.3	-	角閃石・長石、 (内黄褐色 外淡褐色)	断面方形の高台はり付け	内面 高台縁付後へう状のものナ デ 外面 高台縁付後へう状のものナ デ	B区 土曜2

第512号 土曜162

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
723	土師質土器 小皿	(7.2)	(5.8)	1.2	長石・角閃石、 棕色	体部直立気味	内面 回転コビナデ 外面 回転コビナデ、底部糸切り 後部伏圧痕	B区 土曜2
724	五器碗	(15.6)	-	-	角閃石・長石・石英・砂粒、 内黄褐色、灰白色 (外濃褐色、灰白色)	-	内面 ココナデ、 外面 ココナデ、回転コビナデ、ロ ウケ口縁あり	B区 土曜3

第514号 土曜163

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
725	土師質土器杯	(13.8)	(8.2)	3.5	角閃石・金雲母・長石・石英、 黄褐色	体部内湾気味	内面 回転コビナデ、不定方向ナ デ 外面 回転コビナデ、ココナデ、底 部糸切り後部伏圧痕	B区 土曜4
726	土師質土器 小皿	8.3	6.2	1.2~1.3	角閃石・石英・斜長石、 淡褐色	体部の立ちあがり急	内面 回転コビナデ 外面 回転コビナデ、不定方向ナ デ	B区 土曜4
727	五器碗	(15.6)	(8.2)	3.5	長石・角閃石・金雲母、 灰白色 (外面口縁部 淡灰色)	口縁部外側に華むき痕 底部平直	内面 回転コビナデ、不定方向ナ デ 外面 回転コビナデ、斜方向のユビ ナデ、底部糸切り後部伏圧痕の もの	B区 土曜4

第514図 土甎164

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色灰	形態の特徴	手法・調整・文様	調査所の 遺構名
		口径	底径	高さ				
728	土師器碗	(13.5)	—	—	角閃石・長石、 黄白色	—	内面 ココナテ、子午 外側 ココナテ、面転コナテ	B区 土甎6
729	内黒土師器	—	(6.4)	—	長石・角閃石、 内黒褐色 外濃褐色	断面方形の高さをほり付け	内面 面転コナテ、ユビオサエ 外側 ココナテ、底部糸切り	B区 土甎5
730	瓦器碗	—	(8.8)	—	長石 (内)褐色 (外)濃褐色	底部平座	内面 面転ココナテ、ユビオサエ 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎5

第514図 土甎165(1)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色灰	形態の特徴	手法・調整・文様	調査所の 遺構名
		口径	底径	高さ				
731	土師質土師器	14.8~ 16.0	8.8~9.8	3.0~3.5	—	体部は内湾または外反戻状	内面 面転コナテ、不定方向子午 外側 面転コナテ、底部糸切り	B区 土甎6
732	土師質土師器	(16.2)	7.9	3.8	石英・角閃石・長石、 赤褐色	体部内湾気味で口縁わずかに外反	内面 面転ココナテ、底部糸切り 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
733	土師質土師器	(18.4)	8.5~8.8	3.0~3.5	砂粒・角閃石・長石、 内湾赤褐色 外濃褐色	体部内湾気味で口縁わずかに外反	内面 面転ココナテ、底部糸切り 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
734	土師質土師器	(17.0)	(10.0)	3.0	角閃石・長石、 内濃褐色 外褐色	体部内湾気味で口縁わずかに外反	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
735	土師質土師器	(16.8)	—	—	淡褐色	体部斜方向にのびる	内面 面転コナテ 外側 面転コナテ	B区 土甎6
736	土師質土師器	(16.3)	—	—	角閃石・長石・赤色粘土、 淡褐色	体部内湾気味に斜方向にのびる	内面 面転ココナテ 外側 面転ココナテ	B区 土甎6
737	土師質土師器	14.1	8.5	2.7~3.0	角閃石・赤色粘土・石英、 赤褐色	体部は斜方向に緩やかなるいは内湾気味にのびる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、斜めのナテ、底部糸切り後縁状反直	B区 土甎6
738	土師質土師器	—	(7.4)	—	角閃石・赤色粘土、 赤褐色	体部斜方向にのびる	内面 ココナテ、ユビオサエ 外側 ヘラ状工具による面転コナテ、ロクノ底が顕著に残る、底部糸切り	B区 土甎6
739	土師質土師小皿	8.6	8.0	1.0~1.2	角閃石・長石、 白っぽい黄褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部ココナテ 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
740	土師質土師小皿	9.2	6.9	1.0	石英・赤色粘土・長石、 赤褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
741	土師質土師小皿	9.2	6.1~6.4	1.2~1.4	長石・角閃石・赤色粘土、 内(赤)白っぽい褐色 外(淡)黄褐色~褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部ココナテ 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
742	土師質土師小皿	(9.9)	(6.7)	1.0	角閃石・石英・赤色粘土・長石、 淡黄褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
743	土師質土師小皿	9.8	6.4	1.0	石英・角閃石・長石、 赤褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
744	土師質土師小皿	9.0~9.2	6.4	0.9~1.2	角閃石・長石・赤色粘土、 赤褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
745	土師質土師小皿	9.9	8.8	1.0~1.2	長石・石英・赤色粘土、 赤褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
746	土師質土師小皿	9.8	6.1	1.5	長石・赤色粘土・角閃石、 赤褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
747	土師質土師小皿	10.1	7.2	1.3	角閃石・赤色粘土・石英、 赤褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
748	土師質土師小皿	9.8	8.8	1.3	角閃石・長石、 淡褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
749	土師質土師小皿	9.1	8.7~8.1	1.3~1.4	角閃石・長石・石英、 褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、ユビオサエ、底部糸切り後縁状反直	B区 土甎6
750	土師質土師小皿	10.0	6.1~6.3	1.6	長石・角閃石、 褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
751	土師質土師小皿	(9.6)	6.4	1.4	石英・赤色粘土・角閃石・長石、 赤褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
752	土師質土師小皿	9.2	7.1	1.1~1.3	角閃石・長石・赤色粘土、 内側半分淡褐色 (外)淡黄褐色	体部の立ちあがりにはシェーブ	内面 面転ココナテ、不定方向子午 外側 面転ココナテ、不定方向子午	B区 土甎6
753	土師質土師小皿	(10.2)	(6.7)	1.4	赤褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ	B区 土甎6
754	土師質土師小皿	10.9	6.8	1.3~1.4	角閃石・長石、 褐色	体部は斜方向に緩やかに立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
755	土師質土師小皿	(10.6)	(7.4)	1.4	角閃石、 赤みがかった褐色(二次焼成)	体部の立ちあがりには比較的シェーブで斜方向に立ち上がる	内面 不定方向子午、面転ココナテ 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6
756	土師質土師小皿	10.7	6.8	1.7	長石・角閃石、 黄褐色	体部の立ちあがりには比較的シェーブで斜方向に立ち上がる	内面 面転ココナテ、底部不定方向子午 外側 面転ココナテ、底部糸切り	B区 土甎6

757	土師器土器 小皿	10.6	6.0~6.8	1.8~2.0	長石・角閃石、 淡黄褐色	底部は緑やかに立ち上がる 他に比べ器高が高い	内面 顔面ユビナデ、底面不定 方向ナデ 外面 顔面ユビナデ、底部糸切り 縁取状圧痕	B区 土層6
758	土師器碗 (14.8)	—	—	—	内面石・長石、 黄褐色	口縁部を外方に引き出す	内面 ユビナデ、顔面ユビナデ、 ユビオサエ、ミガキの痕跡 外面 ユビナデ、顔面ユビナデ、 ユビナデ	B区 土層6
759	土師器碗 (15.2)	—	—	—	長石・砂鉄、 黄白色	口縁部緩やかに外反	内外面 ムガキ	B区 土層6
760	土師器碗 (15.2)	—	—	—	角閃石・長石、 内面赤色～灰白色 外淡褐色	—	内面 ユビナデ、ミガキ 外面 ユビナデ、顔面ナデ	B区 土層6
761	土師器碗	—	(6.6)	—	内面石・長石・石英、 内淡黄褐色 外淡褐色	断面方形の高台をばり付け	内面 不定方向ナデ 外面 ユビナデ、底部切取し縁 取状圧痕	B区 土層6

第516図 土師1652

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土・色調	形態の特徴	手法・刷射・文様	調査時の 遺存品
762	内裏土器筒 (15.2)	8.8	5.9	—	角閃石・長石・赤色粘土。 口縁部薄 底の物に淡赤褐色	口縁部わずかに外反 断面長方形の高台が外開きに	内面 縦方向のミガキ、顔面にユビ オサエ 外面 縦方向のミガキ(縁部薄 い)、底面糸切り縁取状圧痕	B区 土層6
763	内裏土器碗 (15.6)	6.0	6.1	—	角閃石・長石、 内赤色～灰白色 外淡褐色	口縁部わずかに外反 断面長方形の高台をばり付け	内面 ユビナデ、ミガキ 外面 ユビナデ、ミガキ、 底面糸切り縁取状圧痕	B区 土層6
764	内裏土器碗 (15.8)	—	—	—	角閃石・長石、 内赤褐色、口縁部黒色	—	内面 ユビナデ、縦方向のミガキ 外面 ユビナデ、ミガキ	B区 土層6
765	内裏土器筒	—	7.6	—	角閃石・長石、 内赤褐色	内面状高台	内面 ユビナデ、ミガキ 外面 ユビナデ、底部糸切り	B区 土層6
766	内裏土器筒 (15.4)	—	—	—	角閃石・長石、 内(内の一帯)赤褐色 外淡褐色	口縁部わずかに外反	内面 ユビナデ、ミガキ 外面 ユビナデ、底面のため不織	B区 土層6
767	内裏土器碗 (16.8)	—	(6.8)	—	長石・角閃石、 赤褐色	断面長方形の高台を外開きに	内面 ユビナデ、ミガキ 外面 ユビオサエ、ユビナデ	B区 土層6
768	内裏土器筒	—	7.0	—	長石・赤色粘土・角閃石、 内赤褐色	断面長方形の高台をばり付け	内面 ユビナデ 外面 ユビナデ、ユビナデ、底部糸切 り	B区 土層6
769	内裏土器筒	—	(6.4)	—	長石・角閃石、 内赤褐色 外淡褐色	断面長方形の高台をばり付け	内面 ユビナデ 外面 ユビナデ、ユビナデ、底部糸切 り	B区 土層6
770	内裏土器碗	—	6.6	—	角閃石・長石、 内淡褐色 外淡褐色	断面長方形の高台をばり付け	内面 ユビナデ 外面 ユビナデ、ユビオサエ、底面糸 切り	B区 土層6
771	内裏土器筒	—	(6.6)	—	長石・角閃石、 内赤褐色	断面長方形の高台をばり付け	内面 ユビナデ 外面 ユビナデ	B区 土層6
772	内裏土器筒	—	(6.2)	—	角閃石・長石、 内赤褐色	断面長方形の高台をばり付け	内面 ユビナデ 外面 ユビナデ、ユビナデ	B区 土層6
773	内裏土器筒	—	(6.2)	—	角閃石・長石、 内赤褐色 外淡褐色	断面長方形の高台をばり付け	内面 ユビナデ 外面 ユビナデ、底部糸切 り	B区 土層6
774	内裏土器筒	—	7.3~7.4	—	角閃石、 内赤褐色 外淡褐色	断面長方形の高台をばり付け	内面 ユビナデ 外面 ユビナデ	B区 土層6
775	内裏土器碗	—	(7.4)	—	長石、 内赤褐色 外淡褐色	—	内面 縦方向のミガキ、斜め方向 のミガキ 外面 ユビナデ、ユビナデ、底部糸切 り	B区 土層6
776	内裏土器碗	—	(7.0)	—	長石・角閃石・金灰母、 内赤褐色 外淡赤褐色	円盤状高台	内面 不定方向のナデ長ミガキ、 底部にユビオサエ 外面 ユビナデ、ユビナデ、底部糸切 り	B区 土層6
777	内裏土器碗	—	7.4	—	長石・角閃石、 内赤褐色 外淡褐色	円筒状高台	内面 ユビナデ 外面 ユビナデ、底部糸切り	B区 土層6
778	内裏土器筒	—	(7.6)	—	長石・角閃石、 内赤褐色 外淡褐色	円筒状高台	内面 ユビナデ、ユビナデ 外面 ユビナデ、ユビナデ、底部糸切 り	B区 土層6
779	内裏土器筒	—	(7.0)	—	角閃石・長石、 内赤褐色 外黄白色	円筒状高台	内面 縦方向のミガキ、斜め方向 のミガキ 外面 ユビナデ、ユビナデ、底部糸切 り	B区 土層6
780	黒色土器碗	—	7.6	—	角閃石・長石、 黒褐色	断面長方形の高台をばり付け	内面 ユビナデ、底面にユビナデ、 ユビオサエを施す 外面 顔面ナデ、ユビナデ、底 面糸切り縁取状圧痕	B区 土層6
781	土師器鉢 (20.4)	—	—	—	角閃石・長石、 緑褐色	口縁部わずかに内湾	内面 ユビナデ、斜め方向のナデ 外面 ユビナデ、ユビナデ	B区 土層6
782	土師器鉢 (19.8)	—	—	—	角閃石・長石、 底面に黄褐色(筋すずみ付)	口縁部わずかに内湾	内面 ユビナデ、顔面ユビナデ 外面 ユビナデ、顔面ユビナデ	B区 土層6
783	土師器鉢 (12.4)	—	—	—	角閃石・石英、 黄褐色	口縁部くの字状に深く折れる	内面 ユビナデ、顔面ナデ 外面 ユビナデ、顔面ナデ	B区 土層6

第520図 土師1653

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土・色調	形態の特徴	手法・刷射・文様	調査時の 遺存品
784	土師	(28.4)	—	—	石英・角閃石・長石・金灰母、 内赤褐色 外褐色	口縁部は強く折れる	内面 ユビナデ、縦方向のユビナ デ、ユビオサエ 外面 ユビナデ、ユビナデ、ユビ オサエ	B区 土層6
785	土師	—	—	—	角閃石・長石、 赤褐色	口縁部くの字状に折れる	内面 ユビナデ、ユビナデ 外面 縦方向ユビナデ、ユビナ デ	B区 土層6
786	土師	—	—	—	—	口縁部短く折れる	内外側割れのため不明	B区 土層6
787	土師	(16.2)	—	—	長石・角閃石 内赤褐色 外淡褐色	口縁部短く折れる	内面 ユビオサエ、縦方向のナデ 外面 ユビナデ、ユビオサエ、ナ デ	B区 土層6
788	土師	—	—	—	白色粘土・石英・長石・角閃石、 底面に一部黒褐色(筋すずみ付)	—	縦方向にへラナデ	B区 土層6
789	土師	—	—	—	角閃石・長石 黄褐色、褐色(一部緑色)	—	部分的にユビオサエあり	B区 土層6

第521号 土籠165(4)								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装身・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
790	土師土器	(56.6)	-	-	長石・内肉質 緑褐色、口縁部は緑色	口縁外部が短く内傾	内面 青白、ユビオナミ 外面 ユビナデ、ユビオナミ	B区 土籠6
第522号 土籠168								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装身・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
791	土師土器土師杯	-	-	-	角閃石、 ピンクがかった淡褐色、 黄褐色を帯びる	-	内面 白磁ナデ 外面 白磁ナデ、ナデ	B区 土籠9
792	土師土器	-	(7.8)	-	角閃石・長石・赤色粘土 (内肉)黄 (外)淡緑色	断面長方形の高台が外開き気味に 付、底面ナデ	内面 白磁ユビナデ 外面 白磁ユビナデ、高台が付 け、底面ナデ	B区 土籠9
第527号 土籠169								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装身・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
793	土鍋	-	-	-	砂鉄・角閃石・長石・白色粘土 赤色粘土、 (内)淡褐色 (外)緑褐色	-	内面 白磁ユビナデ 外面 白磁ナデ、ユビナデ	B区 土籠10
第530号 土籠171								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装身・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
794	土師土器	(12.2)	-	-	金波母、 褐色	-	内外面 面転ユビナデ	B区 土籠12
第534号 土籠174								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装身・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
795	土鍋	(43.8)	-	-	角閃石・長石、 (内)淡褐色 (外)淡緑色(すず付層)	口縁部が平状に外傾 体部厚形気味	内面 ユビナデ、ハツ目、ナデ 外面 ユビナデ、ナデ、アズリ	B区 土籠15
第538号 土籠177								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装身・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
796	土師土器小皿	(7.6)	(8.2)	1.2	角閃石・長石、 淡褐色	体部の立ちあがりには比較的シャープ	内面 白磁ナデ 外面 白磁ナデ、底面赤切り	B区 土籠18
第540号 土籠178								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装身・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
797	土師土器	(14.6)	-	-	長石、 淡褐色	-	内外面 ユビナデ後部方向の立方 ナデ	B区 土籠19
第542号 土籠179								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装身・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
798	土師土器小皿	(10.2)	(8.0)	1.5	長石、 黄褐色	体部斜方向にのびる	内面 白磁ナデ 外面 白磁ナデ、底面赤切り	B区 土籠20
799	内黒土器	-	(8.0)	-	長石、 (内)黒色 (外)緑褐色	-	内面 黒ナデ 外面 ナデ、底面赤切り後ナデ	B区 土籠20
800	内黒土器	-	(7.2)	-	角閃石・長石、 (内)黒色 (外)緑褐色	断面長方形の高台が外開きにはり 付く	内面 黒ナミ(立方ナミ) 外面 ナデ、高台が付けたナデ、 底面赤切り	B区 土籠20
第543号 土籠180								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装身・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
801	土師土器土師杯	-	8.4	-	角閃石・長石、 褐色	体部斜方向に立ち上がる	内面 白磁ユビナデ 外面 白磁ユビナデ、底面赤切り、 底面ナデ	B区 土籠21
802	土師土器	-	(8.0)	-	角閃石・長石、 褐色	断面三角形の高台が付される	内面 ナデ 外面 ユビナデ、高台が付けたナ デ、底面赤切り	B区 土籠21
803	内黒土器	-	(7.4)	-	長石・金波母、 (内)黒色 (外)淡緑褐色	断面三角形の高台が付される 体部下面にフツ状のもの	内面 ナデ 外面 白磁ナデ、高台が付けた ナデ	B区 土籠21
804	内黒土器	-	(7.2)	-	粘土、 (内)黒色 (外)緑褐色	断面三角形の高台が付される	内面 黒ナミ、断面平定方両ナデ 外面 ユビナデ、高台が付けたナ デ	B区 土籠21
805	土鍋	(28.6)	-	-	角閃石、 (内)淡褐色 (外)黄褐色(すず付層)	口縁外部に折れる	内外面 ユビナデ、オナミ、ナデ	B区 土籠21
第546号 土籠181								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装身・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
807	土師土器土師杯	(14.6)	-	-	角閃石、 黄褐色	-	内外面 白磁ナデ	B区 土籠22
808	土師土器土師杯	-	(7.8)	-	角閃石・長石、 内)淡褐色 (外)黒色	体部は斜方向に立ち上がる	内外面 白磁ナデ 底面赤切り	B区 土籠22
809	土師土器土師杯	-	(7.2)	-	角閃石・長石、 黄褐色	体部は斜方向に立ち上がる	内外面 白磁ナデ 底面赤切り後黄切付面	B区 土籠22
810	土師土器土師杯	-	(7.2)	-	角閃石・金波母、 黄褐色	-	内外面 白磁ナデ 底面赤切り後黄切付面	B区 土籠22
811	土師土器	-	(6.8)	-	赤色粘土・角閃石・長石、 淡褐色	内底状高台	内面 白磁ナデ、底面赤切り 外面 白磁ナデ	B区 土籠22
812	内黒土器	-	(7.8)	-	角閃石、 (内)黒色 (外)淡緑褐色	内底状高台	内面 白磁ナデ 外面 ナデ、底面赤切り後黄切 付面	B区 土籠22
第547号 土籠182								
番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装身・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
813	瓦器小皿	(8.2)	(8.2)	1.7	粘土・角閃石・長石・赤色粘土、 淡明軟色	体部直立気味	内面 白磁ユビナデ 外面 白磁ユビナデ、底面赤切り	B区 土籠25

814	瓦葺切	-	(6.6)	-	角閃石・長石・砂粒、 灰白色、灰色	底面平直	内面 面粒コナナ、底面ユビナ デ 外面 面粒コナナ、底面赤切り	B区 土塊25
815	瓦葺切	(15.4)	(7.2)	5.9	砂粒・角閃石・長石・石英、 暗灰白色、灰白色、黒灰色	口縁部外面筆ね成直 底面平直	内面 面粒コナナ、底面ユビナ デ 外面 面粒コナナ、底面赤切り	B区 土塊25
816	瓦葺切	(14.8)	-	-	砂粒・長石・白色結子・茶色結 子、 灰白色	口縁部外面筆ね成直	内外面 面粒コナナ	B区 土塊25
817	須置器壁	(38.0)	-	-	砂粒・長石・白色結子・石英、 褐色	口縁部は平直で、口縁部を形成	内面 斜めのハケ目、斜めのへう ナデ 外面 横方向のへうナデ、横ハ ケ目、平行ナデ	B区 土塊25

第552回 土塊183

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
818	瓦葺切	-	(7.4)	-	長石・角閃石、 内灰白色 (外側灰褐色)	底面平直	内面 ナデ、不定方向ナデ 外面 コナナ、底面赤切り	B区 土塊26

第553回 土塊184

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
819	土師黄土器切	-	(8.2)	-	長石、 砂粒	底部の立ち上がりは比較的シャープ	内面 ナデ 外面 コナナ、底面赤切り	B区 土塊27
820	土師黄土器 小皿	(8.4)	(6.5)	1.4	赤褐色・長石、 褐色、(外側底部)暗褐色	底部は丸みを持ち立ち上がる	内面 コナナ、底面ナデ 外面 コナナ、底面赤切り	B区 土塊27
821	瓦葺切	-	(7.2)	-	赤褐色・長石、 (内側)暗褐色 (外側)灰白色	底面平直	内面 面粒ナデ 外面 面粒ナデ、底面赤切り	B区 土塊27

第554回 土塊185

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
822	土師黄土器切	-	(7.2)	-	角閃石・長石・赤色粉子・石英、 淡灰色	底部は丸みを持ち立ち上がる	内面 ミガキ? 外面 面粒ナデ、底面赤切り後ナ デ	B区 土塊29
823	瓦葺土器 こね鉢	-	(9.4)	-	石英・長石・砂粒、 (内側)色がかった淡灰色 (外側)シラ	-	内面 面粒ナデ、横方向ナデ 外面 へう状工具のケズリ、底面 切削、横ナデ	B区 土塊29

第555回 土塊187

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
824	土師	(18.8)	-	-	角閃石・長石、 褐色・黒褐色	底部直立	内外面 面粒ユビナナデ	B区 土塊31
825	土師	-	-	-	角閃石・長石、 灰色、暗灰色、白っぽい褐色	-	ナデ、横方向のナデ	B区 土塊31
826	瓦葺土師土師 小皿	-	-	-	角閃石・長石・重曹、 内灰褐色 外黒色	-	内面 へう状のものでミガキ平直 外側 結子タタキ?	B区 土塊31
827	須置器壁	-	-	-	長石、 灰色	-	内面 コナナ、底面ナデ 外面 コナナ、底面ナデ	B区 土塊31
828	瓦葺土師壁	(45.0)	-	-	角閃石・長石・白色結子、 暗褐色	口縁は細くくの字状に折れる 口縁部は上下にわずかに低直	内面 コナナ、横方向のナデ、 横方向のハケ目 外面 コナナ、横方向のナデ、 ハケ目	B区 土塊31

第560回 土塊189

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
830	土師黄土器 小皿	(7.0)	(5.2)	(1.3)	角閃石・長石、 淡褐色	底部はやや丸みをもち立ちあがる	内面 面粒ユビナナデ、底面不定 方向ナデ 外面 面粒ユビナナデ、ナ デ、面粒ユビナナデ	B区 土塊32
831	土師黄土器 小皿	(7.0)	(4.8)	1.4	長石、 褐色	底部はやや丸みをもち立ちあがる	内面 面粒ユビナナデ、底面不定 方向ナデ 外面 面粒ユビナナデ、底面赤切り	B区 土塊32
832	土師器 ミニチュア壁	(4.8)	-	-	角閃石、 暗褐色	平づくね	内面 コナナナデ、ナ デ 外面 コナナ、ユビナナ デ	B区 土塊32
833	瓦葺切	-	(7.4)	-	角閃石・石英、 淡灰色	底面平直	内面 面粒ナデ、ユビナナ工 外面 面粒ナデ、底面赤切り	B区 土塊32
834	白磁器	(15.6)	-	-	灰色がかった白色釉、 青い裏	玉縄口縁	外面 玉縄 底面 平直	B区 土塊32
835	黄磁器	(15.2)	-	-	灰色がかった薄い褐色の釉	-	外面 平直	B区 土塊32
836	土師	(21.0)	-	-	長石・白色結子、 内灰白色 外灰～暗灰色	口縁下に須磨	内面 横方向のユビナナ 外面 コナナ(実地上)、ナデ(実 地上)	B区 土塊32
837	土師	(24.4)	-	-	角閃石・石英、 淡褐色	口縁部外面に須磨	内面 横方向のナデ 外面 コナナナデ、横方向のユビ ナデ、実地上ナデ	B区 土塊32

第562回 土塊189

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
838	瓦葺切	-	-	-	砂粒・角閃石・長石・赤色結子、 灰白色	低い高台が付される	内面 ミガキ ユビナナ 外面 面粒コナナ、面粒ナデ、 底面切削、黒シラ	B区 土塊100
839	瓦葺切	-	-	-	-	底面平直	内外面 ナデ	B区 土塊100
840	瓦葺切	-	-	-	砂粒・長石・白色結子、 灰白色	底面平直	内面 面粒ユビナナデ、ユビナ ナデ 外面 斜め・横方向のへうミ ガキ、底面赤切り	B区 土塊100
841	土師	(25.2)	-	-	砂粒・角閃石・長石・茶色結子、 白色結子、 淡褐色	口縁部くの字状に折れる	内面 横・斜め方向のハケ目 外面 コナナナデ、斜めハケ目	B区 土塊100
842	土師	-	(6.8)	-	砂粒・角閃石・長石・茶色結子、 内側灰白色 外側淡褐色(土付蓋)	口縁部短く折れる	内面 コナナナデ 外面 コナナナデ、斜めハケ目	B区 土塊100
843	瓦葺土器 こね鉢	(10.8)	-	-	砂粒・長石・白色結子、 灰白色	-	内面 面粒コナナ 外面 面粒コナナ、ユビナナ	B区 土塊100

844	土師瓦葺	-	(7.4)	-	内面 灰石・砂粒。 内面 灰褐色 (外壁褐色)	口縁部張り外反	内面 面転コナチ、ユビナチ 外面 面転コナチ、ユビナチ、底 部急切り	B区 土蔵100
-----	------	---	-------	---	-------------------------------	---------	------------------------------------------	-------------

第563号 土蔵190

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
845	瓦葺板	(14.5)	-	-	角肉石。 (外壁 灰白色、灰白色)	口縁部外面に凹凸溝あり	内外面 面転コナチ	B区 土蔵101
846	瓦葺板	-	5.5	-	淡青褐色	断面長方形の高台を張り付け	内面 面転コナチ 外面 面転コナチ、高台貼り付、底 部急切り	B区 土蔵101
847	土師	-	-	-	角肉石・灰石・石英。 内面 淡褐色 (外壁褐色(すずみ材))	口縁部緩やかに外反	内面 コナチ、コナチ、縁・斜 め方向のナチ 外面 コナチ	B区 土蔵101

第565号 土蔵191

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
848	土師瓦土師外	-	(8.6)	-	灰石 淡褐色 灰石・内肉石 黄褐色	体部は直立気味	内面 面転コナチ 外面 ナチ、底部急切り	B区 土蔵102
850	土師瓦土師小皿	(7.6)	(8.6)	1.1	灰石・内肉石 黄褐色	体部は直立気味	内外面 コナチ 底部急切り	B区 土蔵102
851	土師瓦土師小皿	8.3	8.8	0.9~1.0	灰石・石英 淡褐色	体部の立ちあがりはやや斜方向	内外面 ナチ 底部急切り	B区 土蔵102
852	土師瓦土師小皿	(8.2)	(8.2)	1.1	角肉石 淡褐色	体部は直立気味	内外面 コナチ 底部急切り	B区 土蔵102
853	瓦葺板	-	(8.2)	-	角肉石・灰石、 黄褐色	断面三角形の高台を張り付け	内面 ナチ 外面 コナチ、底部急切り	B区 土蔵102
854	瓦葺板	-	(8.4)	-	角肉石・斜灰石、 灰色	低い高台を張り付け	外面 ユビサエ(狭方向)のナ チ、底部急切り	B区 土蔵102

第567号 土蔵192

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
858	土師瓦土師小皿	(9.2)	(8.3)	1.3	内肉石、 淡褐色	体部の立ちあがりやや丸みをもち ナチ	内面 面転コナチ、不定方向ナチ 外面 面転コナチ、底部急切り、底 部ナチ	B区 土蔵103
859	土師瓦土師小皿	(9.0)	(7.1)	1.1	石質、 黄褐色	体部は斜方向にのびる	内面 面転コナチ、底部一方向ナ チ	B区 土蔵103
860	土師瓦土師小皿	9.4	6.6	1.2~1.4	内肉石、 黄褐色	体部は緩やかに立ちあがり、内肉気 味	内面 面転コナチ、底部不定方向 ナチ 外面 面転コナチ、底部急切りナ チ	B区 土蔵103
861	土師瓦葺	(16.6)	(8.4)	6.3	黄褐色	断面三角形の高台を張り付け	内面 面転コナチ 外面 ユビサエ	B区 土蔵103
862	瓦葺板	(15.8)	(7.2)	6.0	灰白色	底部平直	内外面 ナチ	B区 土蔵103

第569号 土蔵193

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
863	土師瓦土師外	(16.0)	8.0	4.1	砂粒・内肉石・灰石・茶色砂子、 淡褐色 内面 淡褐色 (外面 淡褐色)	断面が高く、体部は斜方向にのびる	内面 面転コナチ、底部ユビナチ 外面 面転コナチ、ユビサエ 内面 面転コナチ、底部ユビナチ 外面 面転コナチ、底部急切り	B区 土蔵116
864	土師瓦土師外	(13.8)	8.6	2.6	砂粒・内肉石・灰石・茶色砂子、 淡褐色	体部は内肉気味	内面 面転コナチ、底部ユビナチ 外面 面転コナチ、底部急切り	B区 土蔵110

第571号 土蔵194

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
865	土師器外	(14.2)	(7.6)	4.5	灰石・赤色砂子・内肉石、 淡褐色(底部 褐色)	-	内外面 面転コナチ 底部急切り	B区 土蔵12
866	瓦葺(かわり前)	(7.0)	(3.8)	2.4	黄石・茶褐色 黄褐色	低い高台を張り付け	内面 コナチ、面転コナチ、底部 不定方向ナチ	B区 土蔵12
867	伊勢漆こね鉢	-	-	-	灰石 淡い灰色(口縁部外縁黄褐色)	口縁部上方に拡張	内面 コナチ、ナチ 外面 コナチ、面転コナチ	B区 土蔵12
868	土師	-	-	-	黄褐色・黄褐色	口縁下に実帯	内面 コナチ、斜方向のナチ 外面 コナチ、ナチ	B区 土蔵12

第573号 土蔵195

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
869	土師	(23.0)	-	-	石質 黄・黄褐色	口縁上面に接ぎ付く	内面 ハケによる斜方向のナチ、 コナチ 外面 コナチ、ユビサエ	B区 SX-2

第575号 土蔵196

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 通称名
		口径	底径	高さ				
870	土師瓦土師外	(13.0)	3.5	7.4~7.8	赤色砂粒・灰石・内肉石、 内面 淡褐色 外壁 褐色	体部の立ちあがり又は丸みをもち斜方 向にのびる	内面 面転コナチ 外面 面転コナチ、底部急切り	B区 SX-1
871	土師瓦土師外	13.0	3.4~3.5	7.0	角肉石・灰石・赤色砂子、 内面 淡褐色 (外にふいば)黄褐色とやがらみの 色の区別になっている	体部内肉気味	内面 面転コナチ 外面 面転コナチ、底部急切り ナチナチ、黄を上にならべて いる	B区 SX-1
872	土師瓦土師外	13.0	(8.2)	3.1	角肉石・灰石・赤色砂子、 内面 淡褐色	体部斜方向にのびる	内面 面転コナチ 外面 面転コナチ(へう?)、底部急 切り	B区 SX-1
873	瓦葺板	16.2	6.6	5.9	内肉石・石英、 口縁部 黄褐色	断面方形の低い高台を張り付け	内面 不規則なナチ 外面 ユビサエ、底部急切り	B区 SX-1
874	瓦葺板	(15.0)	(6.4)	5.3	角肉石・赤褐色、石英、 灰褐色(一部 灰白色)	底部平直	内面 ナチ 外面 面転コナチ、底部急切り	B区 SX-1
875	瓦葺板	-	(7.0)	-	白色砂子・灰石・石英、 内面 灰色 外壁 丸みの灰色	底部平直	内面 面転コナチ 外面 面転コナチ、底部急切り	B区 SX-1

876	洞窟器こね鉢	(28.0)	—	—	石灰、 灰色(外面口縁部のみ黄灰色)	口縁玉縁状	内面 ココナデ後斜め方向のナ デ 外面 筒状ナデ内用のココナデ、 ココナデの上から不定方向ナデ	B区 SX-1
-----	--------	--------	---	---	-----------------------	-------	----------------------------------------------------------	------------

第278群 表(1)

番号	器種	口径	高さ (cm)		胎土・色調	形態の特徴	手法・装束・文様	調査時の 図録名
			口縁	器縁				
877	土師質土器鉢	(12.2)	7.2	3.3	角閃石・長石・茶色粘土・砂粒、 明褐色	底部は厚みをもち、体部内湾気味	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
878	土師質土器鉢	(11.8)	(7.6)	(3.2)	砂粒・長石・茶色粘土・白色粘 土・石英、 明褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
879	土師質土器鉢	(13.2)	(7.4)	3.3	角閃石・長石・茶色粘土・砂粒、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ 外面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ	B区溝1
880	土師質土器鉢	(15.4)	(13.6)	2.7	角閃石・長石・茶色粘土・砂粒、 淡褐色、明褐色(器縁)	体部内湾気味	内面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ 外面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ	B区溝1
881	土師質土器鉢	(12.8)	(7.2)	3.1	角閃石・長石・茶色粘土・砂粒	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
882	土師質土器鉢	(13.0)	(6.6)	3.2	角閃石・長石・茶色粘土・白色 粘土・砂粒、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
883	土師質土器鉢	—	7.4	—	長石・茶色粘土・白色粘土、 明褐色(明SL・リンガ色)	体部内湾気味	内面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ 外面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ	B区溝1
884	土師質土器鉢	(13.2)	(7.6)	3.3	砂粒・長石・茶色粘土・石英・角 閃石・金雲母、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
885	土師質土器鉢	(13.4)	(7.4)	3.2	砂粒・長石・茶色粘土、 淡褐色、黄灰色(一部)	体部内湾気味	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、ユビナデ、底 部糸切り	B区溝1
886	土師質土器鉢	(13.2)	(7.0)	3.2	角閃石・長石・茶色粘土・砂粒、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
887	土師質土器鉢	(13.0)	(8.8)	3.3	砂粒・長石・茶色粘土、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ 外面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ	B区溝1
888	土師質土器鉢	(13.2)	(7.4)	3.7	角閃石・長石・茶色粘土・金雲 母、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
889	土師質土器鉢	(13.8)	6.6	3.8	砂粒・角閃石・長石・赤色粘土、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ 外面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ	B区溝1
890	土師質土器鉢	(13.4)	(6.4)	3.2	角閃石・長石・茶色粘土、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
891	土師質土器鉢	—	(7.8)	—	長石・茶色粘土、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
892	土師質土器鉢	13.8	7.4	3.6	長石・茶色粘土、 砂粒・角閃石・長石・茶色粘土 ・金雲母、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ 外面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ	B区溝1
893	土師質土器鉢	(14.0)	(8.0)	3.6	角閃石・長石・茶色粘土・金雲 母、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、ユビナデ、底 部糸切り 外面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ	B区溝1
894	土師質土器鉢	(14.4)	(8.0)	3.3	角閃石・長石・茶色粘土・金雲 母、 淡褐色、淡茶褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
895	土師質土器鉢	14.0	7.4	3.5	角閃石・長石・金雲母、 灰白色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
896	土師質土器鉢	(13.8)	7.0	3.9	角閃石・長石・茶色粘土・金雲 母・砂粒、 やや黄褐色がかった淡褐色	877と同様な器形	内面 丁字ナデ 外面 筒状ココナデ、ユビナデ	B区溝1
897	土師質土器鉢	(14.4)	7.2	3.2	角閃石・長石・茶色粘土・金雲 母、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1

第278群 表(2)

番号	器種	口径	高さ (cm)		胎土・色調	形態の特徴	手法・装束・文様	調査時の 図録名
			口縁	器縁				
898	土師質土器鉢	13.6	7.4	3.4	長石・白色粘土・茶色粘土、 灰白色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
899	土師質土器鉢	14.1	7.6	3.9	長石・角閃石・茶色粘土、 明褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ 外面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ	B区溝1
900	土師質土器鉢	(13.4)	(7.4)	3.7	長石・茶色粘土・石英・金雲母、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
901	土師質土器鉢	(13.8)	(7.3)	3.7	長石・茶色粘土・金雲母、 淡褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ 外面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ	B区溝1
902	土師質土器鉢	14.0	8.0	3.8	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土、 明褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
903	土師質土器鉢	(14.8)	(8.1)	3.3	角閃石・長石・茶色粘土・石英、 明褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
904	土師質土器鉢	(14.0)	7.5	4.0	角閃石・長石・茶色粘土・白色 粘土・灰色粘土・石英、 淡明褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、ユビナデ、底 部糸切り 外面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ	B区溝1
905	土師質土器鉢	14.0	7.8	3.5~4.0	長石・石英・金雲母、 明褐色(下付糸)	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部面状ナ デ一方糸ナデ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
906	土師質土器鉢	(13.8)	7.3	3.6~4.4	長石・茶色粘土、 明褐色	877と同様な器形	内面 筒状ココナデ、底部ユビナ デ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1
907	土師質土器鉢	(15.8)	(7.6)	3.8	角閃石・長石・茶色粘土・砂粒、 内淡褐色 外淡褐色	底部はあまり広くなく、体部内湾	内面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ 外面 筒状ココナデ、底部糸切り ナデ	B区溝1

908	土師質土器片	(14.4)	7.8	3.0	長石・茶色粘土・石英・金雲母、明褐色	877と同様な磁粒	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
909	土師質土器片	14.2	7.6	3.9	長石・茶色粘土、淡緑褐色	877と同様な磁粒	内面 凹粒コナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部ユビナデ	B区溝1
910	土師質土器片	(14.4)	(7.4)	3.5	角閃石・長石・青色粘土・金雲母、淡緑色	877と同様な磁粒	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
911	土師質土器片	(13.4)	7.2	3.5	長石・茶色粘土・金雲母、淡明褐色	877と同様な磁粒	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
912	土師質土器片	(13.4)	7.6	3.6	角閃石・長石	877と同様な磁粒	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
913	土師質土器片 小皿	(15.6)	—	—	角閃石・長石・白色粘土・茶色粘土・石英・金雲母、明緑褐色	磁器近く、体部内溝	内面 凹粒コナデ、ユビナデ 外面 凹粒コナデ	B区溝1
914	土師質土器 小皿	9.1	6.6	1.8	砂粒・長石・茶色粘土・白色粘土、淡緑色、明緑褐色	体部内溝気味	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
915	土師質土器 小皿	6.9	5.4	1.1	長石・角閃石・石英、淡褐色	体部の立ちあがりには比較的シャープ	内面 凹粒コナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部ユビナデ	B区溝1
916	土師質土器 小皿	(8.2)	(6.2)	1.4	角閃石・長石・茶色粘土・白色粘土、淡褐色	体部内溝気味	内面 凹粒コナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部ユビナデ	B区溝1
917	土師質土器 小皿	(8.0)	(7.4)	1.2	角閃石・長石・茶色粘土・黒色粘土、明緑褐色	体部内溝気味	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
918	土師質土器 小皿	(8.0)	(8.0)	1.2	砂粒・長石・茶色粘土・金雲母、淡緑褐色、内面一部明緑褐色	体部内溝気味	内面 凹粒コナデ、ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
919	土師質土器 小皿	(7.6)	(5.9)	1.2	角閃石・長石・茶色粘土、明褐色	体部内溝気味	内面 凹粒コナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部ユビナデ	B区溝1
920	土師質土器 小皿	8.8	6.4	1.5	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土・金雲母、淡明褐色	体部の立ちあがりには緩やか	内面 凹粒コナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部ユビナデ	B区溝1
921	土師質土器 小皿	(8.0)	(5.2)	1.2	長石・茶色粘土・砂粒、淡褐色 体部明緑褐色	体部の立ちあがりには緩やか	内面 凹粒コナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部ユビナデ	B区溝1
922	土師質土器 小皿	(8.3)	(6.4)	1.5	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土、淡明褐色	体部の立ちあがりには比較的シャープ	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
923	土師質土器 小皿	9.4	6.6	1.2	角閃石・長石・茶色粘土、乳白色	体部は緩やかに立ちあがり、斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部ユビナデ	B区溝1
924	土師質土器 小皿	7.6	5.5	1.2	角閃石・長石、淡緑褐色	体部の立ちあがりには緩やか	内面 凹粒コナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部ユビナデ	B区溝1

図5(9) 溝1(3)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・特徴・文様	調査者の 遺構名
		口径	直径	高さ				
925	土師質土器 小皿	(8.2)	(5.8)	1.5	角閃石・長石・金雲母、内淡褐色、外明褐色、底灰褐色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
926	土師質土器 小皿	8.1	6.1	1.5	長石・茶色粘土、淡褐色 (体部表面に青色あり)	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
927	土師質土器 小皿	8.2	6.4	1.6~1.2	角閃石・長石・石英、淡褐色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部ユビナデ	B区溝1
928	土師質土器 小皿	(7.4)	5.8	1.0	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土、明褐色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
929	土師質土器 小皿	(8.0)	(6.8)	1.0	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土・金雲母、淡明緑褐色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部ユビナデ	B区溝1
930	土師質土器 小皿	(7.4)	5.4	1.3	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土、明褐色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部ユビナデ	B区溝1
931	土師質土器 小皿	8.0	6.0	1.3	角閃石・長石・茶色粘土・砂粒、明緑褐色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
932	土師質土器 小皿	(8.0)	(5.8)	1.1	長石・石英・金雲母、明褐色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
933	土師質土器 小皿	(8.0)	(6.4)	1.2	長石・金雲母、灰白色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
934	土師質土器 小皿	8.8	7.2	1.2	角閃石・長石・茶色粘土・金雲母、明褐色、底灰色(すず)	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、ユビナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
935	土師質土器 小皿	8.3	8.2	1.3	長石・茶色粘土、淡明褐色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
936	土師質土器 小皿	8.0	6.4	1.2	砂粒・角閃石・長石・白色粘土・石英・金雲母、淡緑色、明緑褐色(表面に灰色)	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
937	土師質土器 小皿	7.2	5.9	1.3	角閃石・長石・石英、淡褐色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
938	土師質土器 小皿	7.2	5.8	1.0	長石・金雲母、淡褐色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
939	土師質土器 小皿	8.0	6.4	1.3	長石・茶色粘土、明淡褐色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部ユビナデ 外面 凹粒コナデ、底部糸状リ	B区溝1
940	土師質土器 小皿	10.0	7.2	1.3	角閃石・長石・白色粘土・茶色粘土・石英、灰白色	体部は斜方向にのびる	内面 凹粒コナデ、底部糸状リ 外面 凹粒コナデ、底部ユビナデ	B区溝1

941	土師質土器 小皿	8.2	6.5	1.2	砂粒・角閃石・長石・茶色粒 子・石英 明褐色	体部は斜方向にのびる	内面 磁粒コナナテ、底部コナナ テ 外面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部コナナ テ	B区溝1
942	土師質土器 小皿	(8.4)	(6.4)	1.3	砂粒・長石・茶色粒・石英・黄 褐色 淡褐色	体部は斜方向にのびる	内面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部コナナ テ	B区溝1
943	土師質土器 小皿	(8.6)	6.2	1.4	砂粒・角閃石・長石・茶色粒・ 淡褐色	体部は斜方向にのびる	内面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部コナナ テ	B区溝1
944	土師質土器 小皿	(8.0)	(8.4)	1.2	砂粒・長石・茶色粒・石英・黄 褐色(一部明褐色)	体部は斜方向にのびる	内面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部コナナ テ	B区溝1
945	土師質土器 小皿	(8.6)	(8.8)	1.8	角閃石・長石・茶色粒・白色 粘土 淡褐色	やや断面が高く、体部は直立気味	内面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部コナナ テ	B区溝1
946	土師質土器 小皿	8.0	6.7	1.1	角閃石・長石・ 淡褐色	体部はシャープに立ちあがり体部外 反気味	内面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部赤切り	B区溝1
947	土師質土器 小皿	7.8	6.2	1.3	角閃石・長石・石英・ 茶褐色 長石・茶色粒・石英・白色粒 子	体部下は丸みもち口縁やや外反 気味	内面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部コナナ テ	B区溝1
948	土師質土器片	8.5	6.8	1.2	角閃石・明褐色 淡褐色	体部わずかに外反気味	内面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部コナナ テ	B区溝1
949	土師質土器 小皿	(8.6)	7.0	1.0	角閃石・長石・茶色粒・ 白色粘土 明褐色	体部はシャープに立ちあがり体部は やや外反気味	内面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部コナナ テ	B区溝1
950	土師質土器 小皿	8.9	1.4	1.5	砂粒・角閃石・長石・茶色粒・ 茶灰褐色(一部淡褐色)	体部外反気味	内面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部コナナ テ	B区溝1
951	土師質土器 小皿	8.2	6.4	1.2	角閃石・長石・茶色粒・ 白色 淡褐色	体部外反気味	内面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部赤切り 断面平坦	B区溝1
952	土師質土器 小皿	(7.8)	5.8	1.4	砂粒・角閃石・長石・茶色粒・ 明茶褐色	体部わずかに外反気味	内面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部赤切り	B区溝1
953	土師質土器 小皿	8.6	6.8	1.4	角閃石・長石・石英・ 淡褐色(すずり層)	体部わずかに外反気味	内面 磁粒コナナテ 外面 磁粒コナナテ、底部赤切り	B区溝1
954	土師質土器 小皿	(8.0)	(6.4)	1.3	角閃石・長石・茶色粒・金剛 砂・黄・砂粒 淡褐色	体部わずかに外反気味	内面 磁粒コナナテ 外面 磁粒コナナテ、底部赤切り	B区溝1
955	土師質土器 小皿	5.8	7.0	1.3	砂粒・角閃石・長石・茶色粒・ 明褐色	体部わずかに外反気味	内面 磁粒コナナテ、底部赤切り 外面 磁粒コナナテ、底部赤切り	B区溝1
956	土師器碗	(11.4)	(4.8)	3.5	長石・茶色粒・灰色粘土・砂 粒 やや茶色のかたまり白色 粘土 角閃石・長石・茶色粒・砂粒 内・外・内口縁部明褐色・ 外・外口縁部褐色	断面三角形の高台をはり付け、体部下 に緩やかな縁をもち上わずかに外 反気味	内面 磁粒コナナテ 外面 磁粒コナナテ、高台貼付け 縁・ユビナテ、底部コナナテ	B区溝1
957	土師器碗	(17.8)	(6.0)	-	内・外・内口縁部明褐色・ 外・外口縁部褐色	断面長方形の高台をはり付ける	内面 磁粒コナナテ、高台部ユビ ナテ 外面 コナナテ、斜めへらミナ テ	B区溝1
958	土師器碗	(18.4)	-	-	角閃石・茶色粒・ 明淡褐色	-	内面 コナナテ 外面 コナナテ、斜めへらミナ テ	B区溝1

第38回 調査4

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	胎土の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺体名
		口径	底径	高さ				
959	土師器碗	-	(6.2)	-	砂粒・長石・茶色粒・ 淡褐色	断面長方形の高台をはり付け	内面 磁粒コナナテ、高台部ユビ ナテ 外面 磁粒コナナテ、高台へら ミナテ	B区溝1
960	土師器碗	-	(6.4)	-	長石・白色粘土・ 茶褐色	断面長方形の高台を外開きにはり付 け	内面 磁粒コナナテ、内面ユビナ テ 外面 磁粒コナナテ、ユビナテ、底 部赤切り	B区溝1
961	土師器碗	-	(8.0)	-	砂粒・角閃石・長石・茶色粒・ 明褐色、淡褐色	断面長方形の高台を外開きにはり付 け	内面 コナナテ、高台部ユビナ テ 外面 磁粒コナナテ、ユビナテ	B区溝1
962	土師器碗	-	(8.2)	-	角閃石・長石・茶色粒・ 内・内口縁部 外・淡褐色	断面長方形の高台を外開きにはり付 け	内面 磁粒コナナテ 外面 磁粒コナナテ、ユビナテ	B区溝1
963	土師器碗	-	(7.8)	-	角閃石・茶色粒・ 淡褐色 高台の一部明褐色	断面方形の高台をはり付け	内面 磁粒コナナテ、高台貼付け 縁・ユビナテ 外面 磁粒コナナテ、高台部ユビ ナテ	B区溝1
964	土師器碗	-	(7.4)	-	角閃石・長石・茶色粒・ 淡褐色	断面方形の高台をはり付け	内面 磁粒コナナテ、ユビナテ 外面 磁粒コナナテ、ユビナテ	B区溝1
965	土師器碗	-	(8.2)	-	角閃石・長石・茶色粒・ 明褐色(二次焼成か?)	断面方形の高台をはり付け	内面 磁粒コナナテ、内面ユビナ テ	B区溝1
966	土師器碗	(15.0)	(7.4)	6.2	角閃石・長石・茶色粒・砂粒・ 黒褐色 黄褐色(一部明褐色)	断面長方形の高台を外開きにはり付 け口縁部わずかに外反	内面 コナナテ、高台貼付け 縁・ユビナテ、高台部ユビナ テ 外面 コナナテ、高台部ユビナ テ	B区溝1
967	内黒土器碗	-	(7.0)	-	内・内口縁部 外・淡褐色	断面長方形の高台を外開きにはり付 け	内面 磁粒コナナテ、ユビナテ、底 部赤切り 外面 磁粒コナナテ	B区溝1
968	内黒土器碗	-	(8.0)	-	砂粒・角閃石・長石・ 内・内口縁部 外・淡褐色	断面長方形の高台を外開きにはり付 け	内面 磁粒コナナテ、ユビナテ 外面 磁粒コナナテ、ユビナテ	B区溝1
969	内黒土器碗	-	(8.4)	-	角閃石・長石・ 内・内口縁部 外・淡褐色	断面方形の高台をはり付け	内面 斜めへらミナテ、ユビナテ 外面 磁粒コナナテ、ユビナテ	B区溝1
970	内黒土器碗	-	(7.2)	-	角閃石・長石・ 内・内口縁部 外・淡褐色	断面方形の高台をはり付け	内面 磁粒コナナテ 外面 磁粒コナナテ、ユビナテ	B区溝1
971	内黒土器皿	(7.6)	-	-	角閃石・長石・石英・金剛砂・ 内・内口縁部 外・淡褐色(茶褐色か?)	断面三角形の低い高台をはり付け	内面 磁粒コナナテ、高台貼付け 縁・ユビナテ 外面 磁粒コナナテ、ユビナテ	B区溝1
972	褐色空 蓋土器碗	(14.6)	-	-	角閃石・長石・砂粒・ 茶褐色	口縁下に強いナテ	内面 ユビナテ後縁へらミナテ、 口縁部一帯は縁あり 外面 ユビナテ後縁へらミナ テ	B区溝1
973	瓦葺碗	(15.5)	(6.2)	5.8	角閃石・長石・ 暗灰色、灰白色	低い高台をはり付け	内面 磁粒コナナテ、部分的にへ らミナテ、高台貼付け	B区溝1

974	瓦葺明	(15.8)	(5.6)	6.0	角閃石・長石・白色粘土・茶色粘土 (内層褐色) (外層深灰色、緑色) (ニ支線成あり)	低い高台をほり付け	内面 磁転コナデ 外面 磁転コナデ、ユピオサエ	B区溝1
975	瓦葺中	(14.6)	(5.6)	5.4	砂粒・角閃石・長石・白色粘土・ 黒炭・暗灰色、淡灰色	断面三角形の高台をほり付け	内面 磁転コナデ、狭方向のへう 外側 磁転コナデ、ユピナデ、ユ ピオサエ、高台付け後ユピナデ	B区溝1
976	瓦葺前	(5.8)	(14.9)	6.4	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土・ 暗灰色、灰白色	低い高台をほり付け	内面 磁転コナデ、狭・斜のへう 外側 磁転コナデ、ユピオサエ、 駝付け高台	B区溝1
977	瓦葺境	(16.0)	7.0	6.2	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土・ 黒炭・灰白色、淡灰色	断面三角形の低い高台をほり付け	内面 磁転コナデ、黒部ユピナ 外面 磁転コナデ、ユピナデ 内面 磁転ナデ、黒部磁転ナデ 後ユピナデ	B区溝1
978	瓦葺前	(6.6)	7.0	6.3	角閃石・長石・ 灰色、灰白色、暗灰白色	断面三角形に低い高台をほり付け	内面 磁転コナデ、黒部ユピナ 外面 磁転ナデ、高台付け後 ユピナデ、黒部赤切り後状窪 底	B区溝1

系S82(同)溝(3)

番号	層様	深さ (m)			粘土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	試容持の 遺構名
		口徑	底徑	高さ				
979	瓦葺境	(12.2)	6.4	4.1	角閃石・長石、 灰褐色	中や小型品 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 不定方向ナデ、黒部磁転コナ デ 外面 磁転ユピナデ、黒部赤切り 内面 磁転コナデ、黒部ユピナ デ	B区溝1
980	瓦葺境	18.2	8.0	5.6	砂粒・長石・白色粘土、 灰色、淡灰色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で内湾気味の体部	内面 磁転コナデ、黒部ユピナ デ 外面 磁転コナデ、ユピナデ、黒 部赤切り	B区溝1
981	瓦葺境	(16.2)	(7.5)	5.7	角閃石・長石、 暗灰白色、灰白色	口縁部外面に重ね焼き成あり 体部内湾気味	内面 磁転ナデ、黒部磁転ナ デ 狭方向ナデ 外面 磁転ナデ、黒部赤切り後ナ デ	B区溝1
982	瓦葺境	15.4	7.4	5.5	角閃石・石英、 灰白色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転ナデ、黒部磁転ナ デ 後ユピナデ 外面 磁転コナデ、黒部赤切り	B区溝1
983	瓦葺境	(17.0)	(8.0)	5.3	角閃石・長石・白色粘土・茶色 粘土・石英・砂粒、 暗灰色、灰白色、灰色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ、ユピナ デ 外面 磁転コナデ、ユピナデ、黒 部赤切り	B区溝1
984	瓦葺境	(16.0)	7.4	5.5	長石・黒色粘土、 暗灰色、灰白色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ、黒部ユピナ デ 外面 磁転コナデ、ユピナデ、黒 部赤切り	B区溝1
985	瓦葺境	(16.4)	8.0	5.7	砂粒・長石・茶色粘土・白色粘 土・石英、 明褐色、淡黄褐色	厚の底部で、体部内湾気味	内面 磁転コナデ、黒部ユピナ デ 外面 磁転コナデ、ユピナデ、黒 部赤切り	B区溝1
986	瓦葺境	(15.8)	7.0	6.0	角閃石・長石・砂粒、 暗灰色、灰白色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ、黒部ユピナ デ 外面 磁転コナデ、黒部赤切り	B区溝1
987	瓦葺境	(15.8)	7.8	5.3~5.4	角閃石・長石・白色粘土・砂粒、 暗灰色、灰白色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ、黒部ユピナ デ 外面 磁転コナデ、ユピナデ、黒 部赤切り後 後状窪底、ユピナデ	B区溝1
988	瓦葺境	16.3	8.0	5.8~5.9	長石・角閃石、 外側 口縁部茶色、 灰白色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ、黒部不定方向 ナデ 外面 磁転ナデ、黒部赤切り	B区溝1
989	瓦葺境	(15.6)	(7.3)	(8.2)	長石・茶色粘土・石英、 淡褐色、灰褐色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ、黒部赤切り 外面 磁転コナデ、黒部ユピナ デ	B区溝1
990	瓦葺境	(16.2)	7.6	6.3	角閃石・長石・石英、 暗灰色、灰白色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ、黒部ユピナ デ 外面 磁転コナデ、ユピナデ、黒 部赤切り	B区溝1
991	瓦葺境	(15.9)	7.2	8.5	角閃石・長石・白色粘土・石英 炭母・茶色粘土、 淡褐色、暗灰色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ、黒部ユピナ デ 外面 磁転コナデ、ユピナデ、黒 部赤切り	B区溝1
992	瓦葺境	15.6	7.2	5.9~6.0	砂粒・角閃石・白色粘土・茶色 粘土、灰褐色	口縁部わずかに外反気味	内面 磁転コナデ後不定方向 ナデ 外面 磁転コナデ、黒部赤切り	B区溝1
993	瓦葺境	(16.4)	(8.4)	5.5	砂粒・角閃石・長石・石英・茶色 粘土、 淡褐色、淡黄灰色、灰白色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ、ユピナデ、黒 部赤切り	B区溝1
994	瓦葺境	(15.8)	(7.2)	5.5	砂粒・角閃石・長石・白色粘土、 暗灰色、灰白色、灰色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ 外面 磁転コナデ、ユピナデ、黒 部赤切り	B区溝1
995	瓦葺境	(15.4)	8.9	6.1	長石・角閃石、 暗灰色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転ユピナデ、黒部ユピナ デ 外面 磁転ユピナデ、黒部赤切り	B区溝1・7
996	瓦葺境	(15.0)	(7.2)	5.8	砂粒・角閃石・長石、 暗灰色、暗灰色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ、黒部赤切り 外面 磁転コナデ、ユピナデ、黒 部赤切り(不明)	B区溝1

系S82(同)溝(4)

番号	層様	深さ (m)			粘土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	試容持の 遺構名
		口徑	底徑	高さ				
997	瓦葺境	(15.6)	(7.6)	5.9	長石、 暗灰色、灰白色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転ナデ、黒部磁転ナ デ 不定方向ユピナデ 外面 磁転ナデ、黒部赤切り後 後状窪底	B区溝1
998	瓦葺境	(18.2)	7.6	—	角閃石・長石・茶色粘土、 淡褐色、黒灰色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ、ユピナ デ 外面 磁転コナデ、黒部赤切り	B区溝1
999	瓦葺境	15.8	7.8	6.0	砂粒・長石・白色粘土・茶色粘 土・石英、 暗灰白色、灰白色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 不定方向のユピナデ 外面 磁転コナデ	B区溝1
1000	瓦葺境	(18.1)	7.8	5.1~6.1	角閃石・長石・白色粘土・石英、 暗灰色、灰白色	口縁部外面に重ね焼き成あり 厚の底部で、体部は内湾気味	内面 磁転コナデ、黒部ユピナ デ 外面 磁転コナデ、黒部赤切り 後状窪底、黒部窪底	B区溝1

1001	瓦磨切	(16.4)	—	—	砂粒・角閃石・長石・ (内)淡灰色、淡灰色 (外)淡灰色、黒灰色	口縁部外面に雲むき痕あり 厚めの底部で、体部は内湾気味	内面 圓筒コナデ 外面 圓筒コナデ、底部全切り	8区溝1	
1002	瓦磨切	(15.8)	7.2	5.5	長石・茶色粒子・ 明淡褐色	厚めの底部で、体部内湾気味	内面 圓筒コナデ、底部全切り 外面 圓筒コナデ、底部全切り 厚	8区溝10	
1003	瓦磨切	(15.0)	7.6	6.8	角閃石・長石・白色粒子・石英、 暗灰色、灰白色	口縁部外面に雲むき痕あり 厚めの底部で、体部は内湾気味	内面 圓筒コナデ、底部全切り 外面 圓筒コナデ、ユビナデ、 底部全切り	8区溝1	
1004	瓦磨切	(15.8)	7.4	6.2	砂粒・角閃石・長石・灰色粒子、 暗灰色、灰白色	口縁部外面に雲むき痕あり 厚めの底部で、体部は内湾気味	内面 圓筒コナデ、底部全切り 外面 圓筒コナデ、ユビナデ、 底部全切り	8区溝1	
1005	瓦磨切	(18.2)	7.4	6.0	長石・茶色粒子・石英、 淡赤褐色	厚めの底部で、体部内湾気味	口縁部外面に雲むき痕あり 厚めの底部で、体部は内湾気味	内面 圓筒コナデ、底部全切り 外面 圓筒コナデ、底部全切り 後後状況痕、ユビナデ	8区溝1
1006	瓦磨切	16.9	8.0	6.1	長石、 灰色、灰白色	口縁部外面に雲むき痕あり 厚めの底部で、体部は内湾気味	内面 圓筒コナデ、底部全切り 外面 圓筒コナデ、ユビナデ、 底部全切り	8区溝1	
1007	瓦磨切	16.1	7.6	5.9	長石、 灰色、灰白色	口縁部外面に雲むき痕あり 厚めの底部で、体部は内湾気味	内面 圓筒コナデ、底部全切り 外面 圓筒コナデ、ユビナデ、 底部全切り	8区溝1	
1008	瓦磨切	(15.4)	7.0	5.4	砂粒・角閃石・長石・白色粒子、 暗灰色、淡灰色	口縁部外面に雲むき痕あり 厚めの底部で、体部は内湾気味	内面 圓筒コナデ、ユビナデ、 底部全切り	8区溝1	
1009	瓦磨切	16.0	5.8~6.2	8.1	角閃石・長石・石英、 (内)灰白色~茶色 (外)口縁部裏面、その他灰白色	口縁部外面に雲むき痕あり 厚めの底部で、体部は内湾気味	内面 圓筒コナデ 外面 圓筒コナデ、底部全切り	8区溝1	
1010	瓦磨切	(15.0)	(7.8)	8.2	角閃石・長石・石英、 暗灰色、灰白色	口縁部外面に雲むき痕あり 厚めの底部で、体部は内湾気味	内面 圓筒コナデ、ユビナデ 外面 圓筒コナデ、底部全切り 後後状況痕	8区溝1	
1011	瓦磨切	(16.8)	7.6	5.0	角閃石・長石・砂粒、 淡褐色、灰色	口縁部外面に雲むき痕あり 厚めの底部で、体部は内湾気味	内面 圓筒コナデ、底部全切り 外面 圓筒コナデ、ユビナデ 後後状況痕、ユビナデ	8区溝1	
1012	瓦磨切	(16.0)	7.4	6.0	長石・石英、 暗灰色、灰白色	口縁部外面に雲むき痕あり 厚めの底部で、体部は内湾気味	内面 圓筒コナデ、底部全切り 外面 圓筒コナデ、ユビナデ、 底部全切り	8区溝1	

第649種 (通1)

番号	器種	法 容 (cm)			治土・色別	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	高さ				
1013	瓦磨切	(16.2)	—	—	長石・茶色粒子・灰色粒子・砂粒、 灰白色、灰色	—	内面 圓筒コナデ、横へう型 外面 圓筒コナデ後部、斜めへう型	8区溝1
1014	瓦磨切	(15.4)	—	—	角閃石・長石・白色粒子・茶色 粒子、 (内)淡灰色、灰白色(二次焼成 痕) 砂粒、暗灰色、暗褐色	—	内面 丁寧ナデ 外面 圓筒コナデ、ユビナデ	8区溝1
1015	瓦磨切	(8.0)	—	—	砂粒・角閃石・長石・白色粒子、 暗灰色、暗褐色、灰白色 砂粒・角閃石・長石・茶色粒子、 暗灰色、灰白色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 丁寧ナデ 外面 圓筒コナデ	8区溝1
1016	瓦磨切	(16.0)	—	—	砂粒・角閃石・長石・石英・重 量鉄、 淡赤褐色、黒灰色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1
1017	瓦磨切	(16.8)	—	—	砂粒・角閃石・長石・茶色粒子、 暗灰色、淡灰色、灰色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1
1018	瓦磨切	(16.0)	—	—	砂粒・角閃石・長石・茶色粒子、 暗灰色、淡灰色、灰色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1
1019	瓦磨切	(15.8)	—	—	砂粒・白色粒子・長石、 灰色、灰白色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ 外面 丁寧ナデ	8区溝1
1020	瓦磨切	(15.2)	—	—	砂粒・角閃石・長石、 暗灰色、灰白色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1
1021	瓦磨切	(15.8)	—	—	砂粒・角閃石・長石、 暗灰色、淡灰色、灰色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1
1022	瓦磨切	(15.0)	—	—	角閃石・長石・砂粒	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1
1023	瓦磨切	(15.8)	—	—	砂粒・角閃石・長石・白色粒子、 暗灰色、灰白色、淡灰色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1
1024	瓦磨切	(14.6)	—	—	長石・白色粒子、 暗赤褐色	体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1
1025	瓦磨切	(14.8)	—	—	砂粒・長石・白色粒子・長石、 淡灰色、灰色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1
1026	瓦磨切	(16.4)	—	—	砂粒・長石、 黒灰色、灰白色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ 外面 圓筒コナデ、握痕痕	8区溝1
1027	瓦磨切	(16.2)	—	—	砂粒・角閃石・長石・白色粒子、 暗灰色、灰白色、灰色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1
1028	瓦磨切	(15.6)	—	—	砂粒・角閃石・長石・白色粒子、 暗灰色、灰色、淡褐色、暗灰色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1
1029	瓦磨切	16.1	—	—	角閃石・長石・白色粒子・石英、 暗灰色、灰白色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ 外面 圓筒コナデ、底部ナデ、 握痕痕	8区溝1
1030	瓦磨切	(16.2)	—	—	角閃石・長石・茶色粒子・石英、 暗灰色、淡灰色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ 外面 圓筒コナデ、ユビナデ	8区溝1

第650種 (通1)

番号	器種	法 容 (cm)			治土・色別	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存名
		口径	底径	高さ				
1031	瓦磨切	(14.6)	—	—	角閃石・長石・茶色粒子・石英、 内湾気味	体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1
1032	瓦磨切	(74.6)	—	—	砂粒・角閃石・白色粒子、 暗灰色、淡灰色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ 外面 圓筒コナデ、ユビナデ	8区溝1
1033	瓦磨切	(15.0)	—	—	角閃石・長石・白色粒子、 灰白色、灰色、暗灰色	口縁部裏面湾曲 体部内湾気味	内面 圓筒コナデ	8区溝1

1034	瓦葺棟	(14.8)	-	-	砂粒・角閃石・長石・白色粘土 茶色粘土	口葺部・波打葺き棟 屋根内張り	内外面 圓柱コナデ	B区棟1
1035	瓦葺棟	(15.0)	-	-	砂粒・長石 緑灰色・淡灰色	口葺部・波打葺き棟 屋根内張り	内外面 圓柱コナデ	B区棟1
1036	瓦葺棟	-	(6.2)	-	砂粒・角閃石・長石・白色粘土 (内)灰白色・緑灰色 (外)灰白色・灰色	断面三角形の高台をはり付け	内面 斜めのへらミガキ 外面 圓柱コナデ、ユビナデ、造 部糸切り	B区棟1
1037	瓦葺棟	-	(8.2)	-	砂粒・角閃石・長石・白色粘土 灰白色	断面三角形の高台をはり付け	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1038	瓦葺棟	-	(6.5)	-	角閃石・長石・砂粒 (内)淡灰色 (外)灰色	壁い高台をはり付け	内面 ユビナデ、波打葺き 外面 圓柱コナデ、高台をはり付 けユビナデ、造部糸切り	B区棟1
1039	瓦葺棟	-	7.6	-	角閃石・長石・茶色粘土 明灰灰色	断面三角形の高台をはり付け	内面 圓柱コナデ、ユビナデ、 造部糸切り	B区棟1
1040	瓦葺切	-	(7.5)	-	角閃石・長石・白色粘土・石英 砂粒 灰白色	断面三角形の高台をはり付け	内面 ユビナデ、造部圓柱コ ナデ	B区棟1
1041	瓦葺切	-	6.4	-	角閃石・長石・白色粘土・金重 母 濁灰色、灰白色	断面三角形の高台をはり付け	内面 ユビナデ、造部圓柱コ ナデ	B区棟1
1042	瓦葺切	-	7.5	-	角閃石・長石・石英 灰白色	断面三角形の高台をはり付け	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1043	瓦葺切	-	6.5	-	角閃石・長石・砂粒 灰白色	断面三角形の高台をはり付け	内面 圓柱コナデ、造部糸切り 外面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1044	瓦葺切	-	7.2	-	角閃石・長石・白色粘土 黄灰色	断面三角形の高台をはり付け	内面 ユビナデ 外面 波打葺き、ユビナ デ、造部糸切り	B区棟1
1045	瓦葺切	-	(7.2)	-	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土 石英	断面三角形の高台をはり付け	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1046	瓦葺切	-	(7.2)	-	砂粒・角閃石・長石 濁茶褐色	断面三角形の高台をはり付け	内面 圓柱コナデ 外面 圓柱コナデ、ユビナデ、造 部糸切り	B区棟1
1047	瓦葺切	-	7.8	-	砂粒・角閃石・長石・白色粘土 淡灰色	断面三角形の高台をはり付け	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1048	瓦葺切	-	(7.0)	-	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土 淡灰色	断面三角形の高台をはり付け	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1049	瓦葺切	-	(7.0)	-	角閃石・長石・白色粘土 (内)濁灰色 (外)淡白色 (屋根)濁灰色	断面三角形の高台をはり付け	内面 圓柱コナデ、造部糸切り 外面 波打葺き、ユビナデ、造 部糸切り	B区棟1
1050	瓦葺切	-	7.2	-	長石・白色粘土 セメント色	屋根平座	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1051	瓦葺切	-	7.4	-	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土 淡灰色	屋根平座	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1052	瓦葺切	-	7.4	-	長石 淡灰色	屋根平座	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1053	瓦葺切	-	7.4	-	角閃石・長石 淡灰色	屋根平座	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1054	瓦葺切	-	7.4	-	長石・石英 淡灰色	屋根平座	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1055	瓦葺切	-	7.2	-	砂粒・角閃石・長石 淡灰色	屋根平座	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1056	瓦葺切	-	6.6	-	角閃石・長石・白色粘土・砂粒 淡灰色	屋根平座	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1057	瓦葺切	-	7.2	-	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土 金重母 (内)濁灰色 (外)濁つぱい淡褐色	屋根平座	内面 圓柱コナデ、造部糸切り 外面 波打葺き、ユビナデ、造 部糸切り	B区棟1
1058	瓦葺切	-	(7.4)	-	砂粒・角閃石・長石・石英 濁灰色	屋根平座	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1059	瓦葺切	-	7.2	-	長石・白色粘土 淡灰色	屋根平座	内面 圓柱コナデ、造部糸切り 外面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1
1060	瓦葺切	-	7.4	-	砂粒・角閃石・長石・石英 (内)濁灰色 (外)濁淡褐色	屋根平座	内面 圓柱コナデ、造部ユビナ デ	B区棟1

表56(別) 遺1(9)

番号	葺種	法 量 (cm)			土・色 質	形態の特徴	手法・調査・文様	調査時の 遺構名
		口葺	屋根	壁高				
1061	瓦葺切	-	(7.6)	-	砂粒・角閃石・長石・灰色粘土 黄灰色	屋根平座	内面 圓柱コナデ 外面 圓柱コナデ、ユビナデ、造 部糸切り	B区棟1
1062	瓦葺切	-	7.4	-	長石・白色粘土・茶色粘土 明灰白色、濁灰色 内底のみ灰白色	屋根平座	内面 圓柱コナデ、不定方向の ユビナデ 外面 圓柱コナデ、造部糸切り	B区棟1

1063	瓦葺板	-	(7.0)	-	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土・白色粘土、淡灰色	底部平座	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、コビナテ、底面無切羽	B区溝1
1064	瓦葺板	-	7.6	-	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土、灰白色	底部平座	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、コビナテ、底面無切羽	B区溝1
1065	瓦葺板	-	7.6	-	長石、淡灰色	底部平座	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1066	瓦葺土器初	-	7.0	-	角閃石・長石、暗灰色	底部平座	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1067	瓦葺板	-	8.8	-	角閃石・長石、暗灰色、淡灰色	底部平座	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1068	瓦葺板	-	7.6	-	角閃石・長石、淡灰色	底部平座	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、コビナテ、底面無切羽	B区溝1
1069	瓦葺板	-	7.8	-	角閃石・長石・白色粘土・石英、暗灰色、淡黄色、灰白色	底部平座	内面 同色コナナテ、コビナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1070	瓦葺板	-	6.8	-	長石・茶色粘土、灰白色	底部平座	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1071	瓦葺板	-	(7.0)	-	砂粒・角閃石・長石・灰色粘土、暗灰色	底部平座	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、コビナテ、底面無切羽	B区溝1
1072	瓦葺板	-	8.0	-	角閃石・長石・茶色粘土・砂粒、暗灰色、淡灰色	底部平座	内面 同色コナナテ、内底コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1073	瓦葺板	-	7.8	-	砂粒・角閃石・長石・灰色粘土、淡灰色	底部平座	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1074	瓦葺板	-	(8.4)	-	角閃石・長石・白色粘土、暗灰色、淡灰色	底部平座	内面 同色コナナテ、底面無切羽 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1075	瓦葺板	-	7.0	-	砂粒・角閃石・長石・白色粘土、内底灰色、外底灰色	底部平座	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1076	瓦葺小皿 (9.2)	(8.8)	1.7		砂粒・角閃石・長石・茶色粘土、淡灰色、暗灰色	底部の立ちあがりはシャープ	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1077	瓦葺小皿 (9.2)	(6.6)	1.7		砂粒・長石、暗灰色、淡灰色	底部下平に丸みをもつ	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1078	瓦葺小皿 (8.0)	(6.4)	1.7		角閃石・長石、暗灰色、灰白色	底部の立ちあがりはシャープで内溝気味	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1079	瓦葺小皿 (8.0)	(6.8)	1.7		角閃石・長石・白色粘土・砂粒、暗灰色、灰白色	底部の立ちあがりはシャープで斜方向に口縁部へ	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1080	瓦葺小皿 (8.8)	(6.6)	1.6		砂粒・角閃石・長石・白色粘土、暗灰色、淡灰色	底部の立ちあがりはシャープで内溝気味	内面 同色コナナテ、底面無切羽 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1081	瓦葺小皿 (7.8)	(6.4)	1.7		砂粒・長石、暗灰色、淡灰色	底部孤立気味	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1082	瓦葺小皿 8.8	8.3	1.7		砂粒・角閃石・長石、暗灰色、淡灰色	底部はシャープに立ちあがり斜方向へのびる	内面 同色コナナテ、底面コナナテ 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1083	瓦葺小皿 8.0	6.4	1.3		砂粒・角閃石・長石・雲母、暗灰色、灰白色	底部の立ちあがりはシャープ	内面 同色コナナテ、底面無切羽 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1084	瓦葺小皿 8.2	6.4	1.4		石英、灰白色	底部の立ちあがりはシャープ	内面 同色コナナテ、底面無切羽 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1
1085	瓦葺小皿 -	(5.2)	-		砂粒・角閃石・長石・白色粘土、灰白色	底部の立ちあがり丸みをもつ	内面 同色コナナテ、底面無切羽 外面 同色コナナテ、底面無切羽	B区溝1

第587号 遺(10)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色料	胎地の特徴	手法・刷毛・文様	調査時の調査点
		口径	底径	高さ				
1086	青磁碗	-	(7.0)	-	緑黄色・黄色・赤土・灰白色	底部は厚い	内外面 流釉(外面のみ流釉) 内面に文様	B区溝1
1087	青磁碗	-	5.4	-	緑黄色・オレンジ色・赤土・淡灰色、淡茶褐色	底部は厚い	内外面 流釉 内外面 文様	B区溝1
1088	青磁碗	-	5.8	-	緑黄色・オレンジ色・赤土・灰白色	底部は広い	内外面 流釉(高台・内底無釉) 内外面 文様	B区溝1
1089	青磁碗	-	5.0	-	乳白色・オレンジ色 (赤土・灰白色・黄色粘土を含む)	底部は厚い	内外面 流釉、青入あり 内外面 文様	B区溝1
1090	青磁碗	-	(4.3)	-	-	-	内外面 流釉	B区溝1
1091	白磁碗	-	(4.2)	-	緑黄色・淡灰色 (赤土・淡灰色(黄色粘土を含む) 或る部は緑釉)	-	内外面 流釉 内外面 文様	B区溝1
1092	青磁碗	-	5.2	-	緑黄色・オレンジ色 (赤土・灰白色・黄色粘土を含む)	-	内外面 流釉(高台) 内外面 文様(高台更新)	B区溝1
1093	白磁碗	(18.0)	-	-	乳白色・黄色 (赤土・灰白色)	口縁玉縁状	内外面 流釉、青入あり	B区溝1
1094	白磁碗	-	(6.4)	-	緑黄色・オレンジ色 (赤土・灰白色)	-	内外面 流釉	B区溝1
1095	白磁碗	-	(5.2)	-	乳白色・黄色 (赤土・黄色粘土が混入した灰白色)	-	内外面 流釉 内底に緑褐色のみし流釉あり	B区溝1
1096	青磁碗 (14.8)	-	-	-	緑黄色・オレンジ色 (赤土・灰白色)	-	内外面 全蓋流釉 青入あり	B区溝1
1097	青磁碗 (10.4)	-	-	-	緑黄色・淡灰色 (赤土・淡灰色)	-	内外面 流釉	B区溝1
1098	青磁碗	-	-	-	淡黄色	-	内外面 流釉、青入あり	B区溝1

1099	須恵窯こね鉢	-	-	-	黄土・白色粒子・茶色、灰白色	口縁輪郭を上方に引き出す	内面 扇状コナテ、斜め方向のユビナテ 外面 扇状コナテ	8区清1
1100	須恵窯こね鉢 (28.0)	-	-	-	灰白色	口縁部外面わずかに肥厚	内面 扇状コナテ 外面 斜め方向にコナテ	8区清1
1101	須恵窯こね鉢 (30.0)	-	-	-	灰色 口縁の一部灰色、自然釉	口縁部外面わずかに肥厚	内面 コナテ 外面 コナテ	8区清1

第589図 清1(1)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・変型・文様	調査時の 遺姓名
		口径	底径	高さ				
1102	須恵窯こね鉢	-	-	-	灰白色	口縁輪郭を上方に引き出す	内面 扇状コナテ 外面 コナテ	8区清1
1103	須恵窯こね鉢	-	-	-	砂粒・角閃石・黒石・茶色粒子、 (内) 淡褐色 (外) 濃灰褐色	口縁部は断面三角形に肥厚	内面 扇状コナテ、斜めナテ 外面 扇状コナテ	8区清1
1104	須恵窯こね鉢	-	(10.4)	-	砂粒・黒石・白色粒子、 淡灰色	-	内面 扇状コナテ 外面 扇状コナテ、ユビナテ、底 部表切り?	8区清1
1105	須恵窯こね鉢	-	(8.2)	-	砂粒・黒石・黒石・白色粒子、 灰色粒子、 淡灰色	-	内外面 扇状コナテ	8区清1
1106	土鍋	-	-	-	砂粒・角閃石・黒石・白色粒子、 (内) 淡褐色 (外) 濃褐色	口縁部L字状に折れる	内面 傾・斜めハケ目 外面 傾・斜めハケ目後ユビオサエ	8区清1
1107	土鍋	-	-	-	角閃石・黒石・茶色粒子・石英 (内) 淡褐色 (外) 濃褐色	口縁部L字状に折れる	内面 ココハケ目、タテハケ目 外面 ナテ、タテハケ目	8区清1
1108	土鍋	-	-	-	角閃石・黒石・石英・茶色粒子、 内湖褐色 (外) 濃褐色	口縁部L字状に折れる	内外面 扇状コナテ	8区清1
1109	土鍋	-	-	-	砂粒・角閃石・黒石、 (内) 淡褐色 (外) 濃褐色	口縁部外方に折れる	内面 ココハケ目 外面 扇状コナテ、ユビオサエ	8区清1
1110	土鍋	-	-	-	砂粒・角閃石・黒石・茶色粒子・ 石英 (内) 淡褐色 (外) 濃褐色(すずり付)	口縁部L字状に折れる	内面 ココハケ目 外面 ナテ、タテハケ目、ユビナテ	8区清1
1111	土鍋	-	-	-	砂粒・角閃石・黒石・白色粒子 ・金灰質 ・褐色色、茶褐色	口縁部は頸部で折れ、内底縁部に立 ちあがる	内面 ハケ目、ナテ、コナテ 外面 ココハケ目、ユビオサエ	8区清1
1112	土鍋	(31.4)	-	-	砂粒・角閃石・黒石、 (内) 淡褐色 (外) 濃褐色	腰部は半球彫か	内面 ココナテ、斜め・縦ハケ目、 コナテ 外面 ココナテ、ユビオサエ、コ コハケ目	8区清1
1113	土鍋	(23.5)	-	-	砂粒・角閃石・黒石・白色粒子・ 石英 (内) 淡褐色 (外) 濃褐色	外蓋口縁下に突起	内面 傾・斜めハケ目 外面 扇状コナテ、ユビナテ、タ テハケ目後ナテ	8区清1
1114	土鍋	(24.4)	-	-	角閃石・黒石・茶色粒子・白色 粒子 ・淡褐色、茶褐色(外蓋すずり付)	外蓋口縁下に突起	内面 ナナメハケ目、ココハケ目 外面 ナテ	8区清1
1115	土鍋	(31.9)	-	-	角閃石・黒石・茶色粒子・白色 粒子、 ・淡褐色、濃褐色	外蓋口縁下に突起	内面 ココハケ目 外面 ココナテ、ユビオサエ、タ テハケ目	8区清1

第589図 清1(2)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・変型・文様	調査時の 遺姓名
		口径	底径	高さ				
1116	土鍋	-	-	-	砂粒・角閃石・黒石・石英・白 色粒子、 ・明褐色、茶褐色	外蓋口縁下に突起	内面 扇状コナテ 外面 扇状コナテ、ユビオサエ	8区清1
1117	土鍋	-	-	-	砂粒・角閃石・黒石・茶色粒 子・石英、 ・黄白色	口縁部外面に突起	内面 扇状コナテ、ココハケ目 外面 扇状コナテ	8区清1
1118	土鍋	-	-	-	砂粒・黒石・茶色粒子、 明淡褐色	口縁部外面に突起	内面 ココハケ目、ナテ直し 外面 ココナテ、ココナテ、タ テハケ目、横子状タテ	8区清1
1119	土鍋	-	(傾斜時) 3.7	-	角閃石・黒石・茶色粒子、 淡褐色	-	ナテ、ユビオサエ	8区清1
1120	器種不明 (土師片土器)	-	10.2	-	砂粒・角閃石・黒石・茶色粒 子・石英、 ・明淡褐色	腰部で腹出し、体部斜方向にのび る	内面 ココナテ 外面 扇状コナテ、底部表切り タテ	8区清1
1121	須恵窯	(26.0)	-	-	茶色粒子・石英、 灰色	口縁部大きく外反	内面 ココナテ 外面 ココナテ、ユビオサエ、平行 タテ	8区清1
1122	須恵窯	-	-	-	砂粒・黒石・灰色粒子・白色粒 子 ・灰色	口縁部外反	内面 扇状コナテ、ハケ目ナ テ 外面 扇状コナテ、横子状タ テ	8区清1
1123	須恵窯	-	-	-	灰色	口縁部外反	内外面 ココナテ	8区清1
1124	瓦質土器(7色)	-	-	-	砂粒・角閃石・黒石・石英・黒 色粒子・白色粒子、 (内) 淡灰白色 (外) 濃灰褐色	-	内面 横ヘラナテ、丁太なナテ 外面 扇状コナテ、ナナメタ テ、平行タテ	8区清1
1125	瓦質土器(7色)	-	-	-	砂粒・角閃石・黒石・白色粒子、 内湖灰色、明淡褐色 (外) 濃灰褐色	口縁縁が上下に拡張	内面 扇状コナテ 外面 扇状コナテ、斜めタテ	8区清1
1126	土師窯	(22.6)	-	-	砂粒・角閃石・茶色粒子・石 英・白色粒子・茶色粒子、 (内) 灰色 (外) 濃灰褐色	-	内面 扇状コナテ 外面 扇状コナテ、ナナメハケ	8区清1
1127	土師窯	(28.0)	-	-	砂粒・角閃石・黒石・白色粒子 ・金灰質 ・濃褐色	-	内外面 扇状コナテ	8区清1
1128	常滑窯	(55.8)	-	-	茶褐色	口縁縁が上下に拡張	内外面 ココナテ	8区清1
1129	常滑窯	-	-	-	黒石、 淡褐色、内蓋口縁部に自然釉	口縁縁が上下に拡張	内外面 傾方向のナテ、ココナ テ	8区清1
1130	常滑窯	-	-	-	黒石、 淡褐色、内蓋口縁部に自然釉	口縁上方に拡張	内面 ココナテ 外面 ココナテ、横方向のナ テ	8区清1

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	高さ	底高				
1131	常滑浅袋	-	-	-	灰白色	外側にタタキ文	内面 ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ 外側 ナデ、タタキ	B区画1
1132	常滑浅袋	-	-	-	(内) 灰白色 (外) 緑褐色	外側にタタキ文	内面 ヨコナデ 外側 タタキ、ナデ	B区画1
1133	須恵黄蓋?	-	(6.8)	-	(内) 灰褐色 (外) 土色	底部高台状	全面に口縁直線 内面は口縁直線	B区画1
1134	土師器	-	4.2	-	砂粒・角閃石・長石・茶色粘土、 淡褐色	-	手づくね ユビオサエ、ユビナデ	B区画1
1143	石罫 (24.4)	-	-	-	褐色	口縁下に深帯	内面 タテ削り出し 外側 タテ・ヨコ削り出し、口縁部 一層削り出しがある	B区画1

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	高さ	底高				
1153	土師器	-	(5.4)	-	砂粒・長石・茶色粘土、 明淡褐色	断面三角形の高台はり付け	内面 斜め・横方向のへうらぎ 外側 ヨビオサエ、ユビナデ	B区画2
1154	瓦器椀	-	(6.2)	-	砂粒・長石・石英、 淡灰色	断面三角形の高台はり付け 外縁面にへうらぎ	内面 斜め・横方向のへうらぎ 外側 丁寧なナデ、ユビナデ、底 部赤褐色	B区画2
1155	瓦器椀	-	(6.4)	-	砂粒・長石・白色粘土、 淡灰色	断面三角形の高台はり付け	内面 斜めへうらぎ 外側 磨転コナデ、ユビナデ、底 部赤褐色	B区画2
1156	瓦器椀	-	(6.2)	-	砂粒・長石・白色粘土・石英、 淡灰色	断面三角形の高台はり付け	内面 磨転コナデ 外側 磨転コナデ、ユビナデ、底 部赤褐色	B区画2
1157	瓦器椀	-	(6.7)	-	砂粒・長石・白色粘土	断面三角形の高台はり付け	内面 斜め・横方向のへうらぎ 外側 ヨビナデ	B区画2
1158	瓦器椀	-	(6.2)	-	砂粒・長石・白色粘土・石英、 灰色	断面三角形の高台はり付け	内面 斜めへうらぎ 外側 磨転コナデ、ユビナデ 内面 磨転コナデ、底赤褐色	B区画2
1159	瓦器椀	-	(6.2)	-	砂粒・長石・白色粘土、 淡灰褐色、暗灰色(内底)	断面三角形の高台はり付け	内面 磨転コナデ、ユビナデ、底 部ユビナデ	B区画2
1160	黄緑器	-	(5.4)	-	緑釉・リブ灰色 胎土淡灰色	厚い底帯	底部～高台部は斑織、裏面入り 内面は無飾	B区画2
1161	土師 器	(36.0)	-	-	砂粒・角閃石・長石・石英、 暗褐色 (内) 外周縁部付汁溝褐色	口縁は強く斜方に折れる	内面 ヨコ・ナメナメリ 外側 ヨビオサエ、斜線のハタジ	B区画2

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	高さ	底高				
1164	土師 器	(19.8)	-	-	砂粒・角閃石・長石・白色粘土、 濃褐色(外周全体にすず付帯)	外側口縁下に深帯	内面 ヨコ・ナメナメリ 外側 磨転コナデ、ユビオサエ	B区画6

番号	器種	法 量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺構名
		口径	高さ	底高				
1165	土師質土器杯	11.8	8.0	3.1~3.2	長石・角閃石・砂粒、 内褐色 外淡白色~褐色	底部の立ちあがりは丸みせも、底部 直立状	内面 磨転コナデ、底部ユビナ デ 外側 磨転コナデ、底部赤褐色 縁部は丸みせの口縁コナデ	B区画7
1166	土師質土器杯	-	(7.8)	-	砂粒・角閃石・長石・石英・金 赤、明淡褐色	底部の立ちあがりはややか	内面 磨転コナデ、底部ユビナ デ 外側 磨転コナデ、ユビナデ、底 部赤褐色縁部は丸みせ	B区画7
1167	瓦器椀 (14.8)	7.0	8.1	-	長石・角閃石・石英、 灰色・灰白色	底部平ら、体内内気孔 口縁部丸みせ状	内面 磨転コナデ、底部ユビナ デ 外側 磨転コナデ、底部赤褐色	B区画7
1168	瓦器椀 (16.4)	-	-	-	長石・角閃石、 (内) 磨転褐色(その他) 暗褐色	口縁部丸みせ状	内外側 磨転コナデ	B区画7
1169	瓦器椀 (16.4)	-	-	-	長石・角閃石、 (内) 灰色~褐色 (外) 磨転褐色	口縁部丸みせ状	内外側 磨転コナデ	B区画7
1170	瓦器椀 (7.8)	-	-	-	長石・角閃石・石英、 茶色がかった灰白色	底部平ら	内面 磨転コナデ 外側 磨転コナデ、底部赤褐色 縁部は丸みせ	B区画7
1171	瓦器椀	-	(7.6)	-	砂粒・角閃石・長石・石英、 明淡灰色、 (内) 外底・縁灰色	底部平ら	内面 磨転コナデ、ユビナデ、底 部赤褐色	B区画7
1172	瓦器椀	-	7.2	-	砂粒・角閃石・長石、 淡灰色	底部平ら	内面 磨転コナデ、ユビナデ、底 部赤褐色	B区画7
1173	瓦器椀	-	8.1	-	長石・角閃石、 淡褐色	底部平ら	内面 磨転コナデ、ユビナデ、底 部赤褐色	B区画7
1174	瓦器椀	-	7.4	-	石英、 灰白色	底部平ら	内面 磨転コナデ、ユビナデ、底 部赤褐色	B区画7
1175	瓦器椀	-	6.7	-	砂粒・長石・茶色粘土、 明淡褐色、黒色(外底、すず付 帯)	底部平ら	内面 磨転コナデ、底部ユビナ デ 外側 磨転コナデ、ユビナデ、底 部赤褐色	B区画7
1176	瓦器椀	-	(6.6)	-	砂粒・長石、 灰色	底部平ら	内面 磨転コナデ、底部ユビナ デ 外側 磨転コナデ、底部赤褐色 縁部は丸みせ	B区画7
1177	瓦器椀	-	7.8	-	砂粒・長石・角閃石、 (内) 磨転褐色 (外) 淡灰色、灰色	底部平ら	内面 磨転コナデ、ユビナデ、底 部赤褐色	B区画7
1178	瓦器椀	-	(5.6)	-	砂粒・長石・白色粘土、 (内) 淡灰色 (外) 淡灰色	断面三角形の高台はり付け	内面 タテ・ヨコへうらぎ 外側 磨転コナデ、高台ユビナ デ、底部赤褐色	B区画7

1179	瓦葺葺	—	(3.0)	—	砂粘・長石・石英・白色粘土・ (内)黄褐色 (外)黄褐色	断面三角形の裏台はり付け	内面 面粒3コナ子, 底部ユビナ子 + 庄流 外面 面粒3コナ子, ユビナ子, 底 部は赤粘・高台流, 庄流, 庄流 内外面 庄流, 高台流~底部は 黄粘	8区溝7
1180	青磁葺	—	(5.9)	—	釉オリーブ灰色 (粘土)黄灰オリーブ色	広い底部	底辺文 内面 庄流 外面 底部, 面粒	8区溝7
1181	白磁葺	—	(6.8)	—	(粘)明灰灰色 (粘土)灰白色	—	内面 庄流 外面 底部, 面粒	8区溝7
1182	白磁御耳葺	—	(7.4)	—	(粘)明オリーブ色 (粘土)灰白色	深い底部	内面 底部, 面粒 外面 底部, 面粒 両面は赤粘, 両面下部より外 底は黄粘	8区溝7
1183	青白磁御子葺	(7.2)	—	—	淡明灰黄色	—	内外面 庄流 土の粒は黄粘	8区溝7
1184	土葺	—	—	—	(内)淡褐色 (外)褐色(すず付色)	口縁部短くくの字状に折れる	内面 ヲコナ子, ユビナ子 外面 ヲコナ子, タチハク目録機 方向の子	8区溝7
1185	瓦葺葺	(28.6)	—	—	粗面な粘土・ 灰色	口縁部やや肥厚	内面 ハク目, ヲコナ子 外面 ヲコナ子, ナデ, ユビオサエ	8区溝7

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形状の特徴	手法・装束・文様	調査時の 産出地
		口径	底径	高さ				
1186	土師貫土器 小皿	(7.6)	(6.6)	1.4	角閃石・長石・ 黄褐色	体部短く直立	内面 ヲコナ子 外面 ヲコナ子, 底部糸切り	A区溝10
1189	土師貫土器 小皿	(6.0)	(5.8)	1.5	長石・金剛砂・石英・ 黄褐色	体部内高気味	内面 面粒3コナ子 内面 面粒3コナ子, 底部は赤粘 内外面 面粒3コナ子, 底部に附任 底 面粒3コナ子, 底部を切り 上, 面粒に黄褐色	A区溝10
1190	土師貫土器 小皿	7.8~8.1	5.8~6.1	1.3~1.5	長石・赤色粘土・角閃石・ 緑色	体部は丸みをおもち立ちあがり, 口縁わ ずかに外気味	内面 面粒3コナ子, 底部を切り 上, 面粒に黄褐色 内面 ヲコナ子, 底部に口コ直 外面 面粒3コナ子, 底部糸切り	A区溝10
1191	土師貫土器 小皿	(8.5)	(8.0)	1.4	長石・石英・角閃石・ 黄褐色	体部緩やかに立ちあがり体部外皮	内面 面粒3コナ子, 底部に口コ直 外面 面粒3コナ子, 底部糸切り	A区溝10
1192	土師貫土器 小皿	(9.4)	(8.8)	1.4	角閃石・長石・ 淡黄褐色	体部外気味	内面 面粒3コナ子 内面 面粒3コナ子, 底部へ付任 内面 ヲコナ子, 底部一定方向のミ ガキ 外面 ナデ, ミガキ, 底部糸切り後 高台輪付け, ナデ	A区溝10
1193	土師器葺	(16.1)	(6.3)	5.8	長石・角閃石・赤色粘土・石英・ 黄褐色	口縁部外反 断面三角形の裏台はり付け	内面 一方角子, 縦方向のミガ キ 外面 面粒3コナ子, 高台輪付け, 底 部ナデ	A区溝10
1194	内黒土器葺	—	(5.4)	—	長石・角閃石・ (内)褐色 外)黄褐色	低い高台をはり付け	内面 一方角子, 縦方向のミガ キ 外面 面粒3コナ子, 高台輪付け, 底 部ナデ	A区溝10
1195	瓦葺葺	(16.1)	7.8	5.3~5.6	(内)灰白色~暗灰色 (外)暗灰色~灰白色~灰色	深い底部に内方気味の体部 口縁外側に華ね模様	内面 ヲコサエナ 外面 面粒3コナ子	A区溝10
1196	瓦葺葺	(16.0)	(6.8)	5.9~6.3	長石・ (内)暗灰色~灰白色~灰白色 外)暗灰色~灰白色~暗灰色	体部内高気味 口縁外側に華ね模様	外面 面粒3コナ子, 底部糸切り	A区溝10
1197	瓦葺葺	(15.2)	6.8	5.5~5.9	角閃石・長石・石英・ (内)灰白色 (外)灰白色	深い底部で, 体部内高気味	内面 面粒3コナ子, 底部不定 方向ナデ 外面 面粒3コナ子, 底部糸切り	A区溝10
1198	瓦葺葺	(17.4)	—	—	長石・角閃石・白色粘土・ 灰白色	—	内面 面粒3コナ子, 底部分ミガキ 外面 面粒3コナ子	A区溝10
1199	瓦葺葺	(16.8)	—	—	角閃石・ 暗灰色, 灰白色	口縁部に華ね模様	内外面 面粒3コナ子	A区溝10
1200	瓦葺葺	(16.4)	—	—	長石・角閃石・ 灰白色	—	内面 面粒3コナ子後ヘラナ子 外面 面粒3コナ子	A区溝10
1201	瓦葺葺	(16.4)	—	—	角閃石・長石・石英・ (内)暗褐色 (外)灰白色	—	内面 面粒3コナ子後ユビナ子 外面 面粒3コナ子, 底部切り離し後 ナデ	A区溝10
1202	白磁器	(11.2)	—	—	黄色っぽい釉	—	内面 面粒 外面 面粒	A区溝10
1203	須恵器こね鉢	—	—	—	増灰白色	口縁縁部上方に裾張	内面 ヲコナ子, 縦方向の子 外面 ヲコナ子	A区溝10
1204	須恵器鉢	—	—	—	長石・ 灰色	口縁縁部上方に裾張	内面 継がしいけ目(縦方向) 外面 ヲコナ子, ユビナ子 内面 ヲコナ子, ヘラ工具によ るナデ	A区溝10
1205	須恵器甕	(45.4)	—	—	長石・角閃石・白色粘土・石英・ 淡黄灰色	口縁部大きく外皮	内面 ヲコナ子, 横方向の子 外面 ヲコナ子, 横方向の子	A区溝10

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形状の特徴	手法・装束・文様	調査時の 産出地
		口径	底径	高さ				
1206	土葺	(23.2)	—	—	長石・角閃石・石英・ 灰白色	胴部から直立する体部 口縁部は短く折れる	内面 縦方向のハケ 外面 ヲコナ子, ユビオサエ, ハケ	A区溝10
1207	土葺	(18.1)	—	—	長石・角閃石・白色粘土・ (内)黄褐色 (外)黄褐色, 茶褐色	口縁部は緩やかに外方に折れる	内面 ヲコナ子, ユビオサエ, ナデ (兼)面 外面 縦方向のハケ, ユビオサ エ, 板状工具で縦方向の子	A区溝10
1208	注口(7)	—	—	—	角閃石・ 暗黄褐色	—	ナデ	A区溝10
1209	土葺	—	—	—	角閃石・長石・ 黄褐色	—	ナデ	A区溝10

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色質	形状の特徴	手法・装束・文様	調査時の 産出地
		口径	底径	高さ				
1217	土師貫土器 小皿	(8.0)	(4.2)	1.2	—	体部斜方向のひび	内面 面粒3コナ子 外面 面粒3コナ子, 底部は茶濁	A区溝22
1218	瓦葺葺	(15.4)	—	—	角閃石・ (内)灰白色 (外)灰白色~灰白色	—	内面 面粒3コナ子 外面 ヲコナ子, ユビナ子	A区溝22
1219	須恵器こね鉢	—	—	—	灰~灰白色	—	内面 面粒3コナ子, ヲコナ子 外面 ヲコナ子, 面粒3コナ子	A区溝22
1220	土師器葺	(38.8)	—	—	角閃石・長石・ ピンク色(二次焼成)	—	外面 ヲコナ子, 縦方向の子 外面 ナデ, 高台を輪付けた高台	A区溝22
1221	常滑焼葺	(27.6)	—	—	長石・ 灰色	口縁部上下に裾張	内面 ヲコナ子, 縦方向の子 外面 ヲコナ子, 縦方向の子	A区溝22

1222	藤前橋橋脚	-	(14.0)	-	砂粒・長石、 内灰褐色 (外壁褐色～灰褐色)	-	内面 横方向のナデ、ヨコナデ、 底部ナデ、縦目単位3本 外面 横方向のナデ、ヨコナデ、 縦目ナデ	A区溝22
------	-------	---	--------	---	------------------------------	---	-----------------------------------------------------------	-------

第609号 溝1

番号	路種	溝幅 (cm)			土土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口深	底深	溝深				
1225	藤前橋脚	-	-	-	赤褐色、 外壁に自然粒	口縁部底に玉縁	内面 ヨコナデ、コビナデ 外面 ヨコナデ、ナデ	A区溝21

第611号 溝3

番号	路種	溝幅 (cm)			土土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口深	底深	溝深				
1226	白飯沼	(15.4)	-	-	(横)乳白色 (縦)うすい緑、粒径0.5mm	外側に凸縁弁文	内外面 玉縁 内面 ヨコナデ	A区溝1
1227	青蓮院	(15.6)	-	-	赤褐色	外面に突物とスタンプ文	内面 ヨコナデ、駝付文	A区溝1
1228	瓦質土器火鉢	-	-	-	長石、 赤褐色	口縁部縦外方に折れる	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、縁方角のケズリ	A区溝1
1229	土鍋	(41.0)	-	-	内灰石、 灰白色	内面に縦目単位あり	内面 縦目単位 外面 底面はケツのナデ	A区溝1
1230	瓦質土器 鉢鉢	-	(14.2)	-	灰白色	内面に縦目単位あり	内面 縦目単位 外面 底面はケツのナデ	A区溝1

第620号 溝14

番号	路種	溝幅 (cm)			土土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口深	底深	溝深				
1236	土師瓦土器 水皿	-	-	-	内灰石・石灰、 黄褐色 長石、 内灰白色 (外・口縁部黄褐色)	体部の立ちあがり緩やか	内面 ナデ 外面 ナデ、底部赤切り	A区溝5
1237	瓦器碗	-	-	-	長石、 内灰白色 (外・口縁部黄褐色)	-	内外面 ヨコナデ	A区溝5
1238	瓦質土器鉢	-	-	-	長石、 灰白色	-	内外面 ナデ	A区溝5

第621号 溝13南側

番号	路種	溝幅 (cm)			土土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口深	底深	溝深				
1239	土師瓦土器 水皿	6.4	3.4	2.5~2.7	内灰石 黄褐色	口深に比し溝高が低い 体部は斜方向に黒縁的に開く	内面 ナデ 外面 ナデ、底部赤切り	A区溝3
1240	土師瓦土器 水皿	-	(7.0)	-	長石・石灰、 淡緑褐色	体部の立ちあがり緩やか	内面 ナデ 外面 ヨコナデ、底部赤切り	A区溝3
1241	土師瓦土器 水皿	-	(8.0)	-	内灰石・石灰、 黄褐色	体部の立ちあがり緩やか	内面 ナデ 外面 ヨコナデ、底部赤切り、 縁部赤	A区溝3
1242	瓦器碗	-	(6.8)	-	長石・内灰石、 内灰白色 内灰褐色	断面三角形の低い高台をはり付け	内面 ナデ 外面 ナデ、高台駝付後ナデ	A区溝3
1243	内黒土器 鉢	-	(7.4)	-	内黒色 内灰褐色	断面方形の高台をはり付け	内面 ナデ 外面 ナデ、高台駝付後ナデ、 断面赤角形、縁部赤	A区溝3
1244	内黒土器 鉢	-	(8.2)	-	内黒色 外淡緑褐色	体部下にツバ状の突物 断面赤角形のほり付け	内面 一方駒ナデ 外面 一方駒ナデ、高台駝付け、 底面赤	A区溝3
1245	瓦器碗	(15.6)	-	-	うすい緑色の粒、 粒径1mm	口縁部反り	内外面 玉縁 内外面 玉縁	A区溝3
1246	青蓮院	(11.0)	-	-	白っぽい粒	-	内外面 玉縁 内外面 玉縁	A区溝3
1247	青蓮院	-	(5.2)	-	やや黄味がかった緑色、 内外に黒入あり	-	内面 玉縁 外面 玉縁、高台駝付、 ケズリ出し	A区溝3
1248	青蓮院	-	(5.0)	-	やや黄味がかった緑色、 内外に黒入あり	-	内面 玉縁 外面 玉縁、高台駝付、 ケズリ出し	A区溝3
1249	青蓮院	-	-	-	うすい緑白色	-	内面 玉縁 外面 玉縁、高台駝付、 ケズリ出し	A区溝3
1250	白磁	-	-	-	-	-	内面 玉縁 外面 玉縁、高台駝付、 ケズリ出し	A区溝3
1251	青花皿	(9.8)	-	-	黄褐色、 黒色	外壁口縁下に突物とスタンプ文	内面 ナデ 外面 ナデ、ヨコナデ、スタンプ文	A区溝3
1252	瓦質土器 火鉢	-	-	-	内灰石、 赤褐色	口縁部反り	内面 ヨコナデ、斜め方向にナデ 外面 ヨコナデ	A区溝3
1253	土鍋	-	-	-	黄褐色	口縁部反り	内面 ナデ、縦目 外面 ナデ	A区溝3
1254	土師瓦土器 鉢鉢	-	-	-	内灰石、 黄褐色	口縁部内湾黄味	内面 ヨコナデ、ヘラ状のもので 横方向のナデ 外面 ヨコナデ、斜め方向にナデ、 横方向のケズリ	A区溝3
1255	土師瓦土器 鉢鉢	(35.6)	-	-	内灰石、 内灰褐色 外壁黄褐色(すず付)	口縁部縦外反	内面 ヨコナデ、横方向のナデ 外面 ヨコナデ、スタンプ	A区溝3
1256	瓦質土器 鉢鉢	-	-	-	長石、 淡灰色	唇部は張り、頭部直立	内面 ヨコナデ、底部ナデ 外面 ヨコナデ、底部コビヘラナデ、 駝り出し	A区溝3
1257	藤前橋	-	(9.2)	-	赤褐色	-	内面 ヨコナデ、底部コビヘラナデ、 駝り出し	A区溝3

第624号 溝13東側(1)

番号	路種	溝幅 (cm)			土土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口深	底深	溝深				
1263	土師瓦土器 水皿	-	(8.2)	-	内灰石・石灰、 黄褐色	断面の高いもの	内面 断面コビナデ、断面ナデ 外面 断面ナデ、口縁部、 断面赤切り、縁ナデ	A区溝17
1264	色釉鉢	-	-	-	粒径0.5mm	口縁部反り	内外面 玉縁、文様に赤色・ 黒色も用いる	A区溝3・17
1265	青花鉢	-	-	-	(横)やや黄味がかった半透明 土褐色、内灰褐色、 黄褐色、黒色、 赤褐色、黒色、 土赤土質赤褐色と含む、 粒径	口縁部反り	内外面 玉縁	A区溝3・17
1266	青花鉢	(12.4)	-	-	赤褐色、 淡灰色	口縁部反り	内外面 玉縁	A区溝3・17
1267	青花鉢	-	(7.8)	-	赤褐色、 淡灰色	-	内外面 玉縁、高台駝付、 高台削り出し 文文	A区溝17
1268	白磁碗	(7.6)	3.3~3.5	3.6	黄褐色	口縁部反り、低い高台	高台削り出し	A区溝17
1269	青磁花瓶	12.6	5.7	2.8~2.9	赤みがかった緑色の粒、 黒入あり	体部下で壁曲	内面 玉縁、見込み中央に 断面玉縁、高台の一部、 断面赤、高台削り出し	A区溝17

1270	摩羅系 ¹⁰⁾	-	5.0	-	-	-	内面 階段、見込み口口縁 外面 地盤、腰部下部～底部縁 胎、高台縁以出	A区溝17
1271	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石・長石、 灰～黒褐色	口縁下に突帯とスタンプ文	内面 斜めのナデ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ、突帯ヨコナデ後 縁付け、スタンプ文、刻み 内面 縦方向のナデ 外面 3/4ナ、縦方向のナデ、ヨコ ナデ、高台縁以出	A区溝17
1272	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石・長石、 内灰～灰白色 外淡褐色	板状の蓋をかり付け	内面 縦方向のナデ 外面 3/4ナ、縦方向のナデ、ヨコ ナデ、高台縁以出	A区溝17
1273	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石・長石、 内灰～灰白色 外淡褐色	網をかり付け	内面 縦方向のナデ、ヨコナデ 外面 3/4ナ、ナデ、ヨコナデ 脚部 ヌビオナキ文	A区溝17
1274	土鍋	-	-	-	長石・角閃石、 内灰白色 外淡褐色	直口口縁	内面 ヨコナデ、ナデ、縦方向の 脚部 外面 ヨコナデ、縦いナデ、ケズリ	A区溝17
1275	土鍋	-	-	-	長石、 内灰白色 外淡褐色、口縁部にすず付蓋	口縁部広く外に折れる	内面 ヨコナデ、縦方向にナデ 外面 ヨコナデ、ケズリ	A区溝17
1276	土鍋	-	-	-	長石・石英、 灰白色	-	ナデ、ヨコナケ状のものあり	A区溝17
1277	土鍋	-	-	-	角閃石・長石、 赤褐色	-	ナデ、縦方向にナデ	A区溝17
1278	備前焼鉢	-	-	-	褐色赤褐色(外面口縁部に自然産 長石)	口縁部わずかに上下に拡張	内面 縦方向のナデ、縦目単位本 体 外面 ナデ、縦方向のナデ	A区溝17
1279	備前焼鉢	(18.2)	(7.6)	7.0	長石・角閃石、 褐色赤褐色 内面に自然産 長石	小口品 口縁部を上方に拡張	内面 ヨコナデ、縦方向にナデ、 縦目単位本 外面 ヨコナデ、縦方向にナデ ナデ、高台縁以出	A区溝17
1280	備前焼鉢	(24.2)	-	-	長石、 褐色赤褐色 外面口縁部に自然産 白色硝子、 赤褐色	厚い口縁部、口縁部上縁が凹む	内面 ヨコナデ、口口口、縦目本 体 外面 ヨコナデ、口口口、 内面 3/4ナ、縦目単位7本 外面 ナデ	A区溝17
1281	備前焼鉢	-	-	-	白色硝子、 赤褐色	-	内面 3/4ナ、縦目単位7本 外面 ナデ	A区溝17

第620回 溝13(溝2)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
1282	備前焼鉢	-	(13.0)	-	内淡褐色 外黒赤褐色	-	内面 縦方向にナデ、縦目単位本 体 外面 縦方向にナデ、ナデ、縦目 単位10ナ	A区溝17
1283	備前焼鉢	-	(16.4)	-	赤褐色硝子・長石、 赤褐色	-	内面 縦方向のナデ、ナデ、縦目 単位10ナ 外面 縦方向のナデと斜めに縦 方向のナデ、高台縁以出	A区溝17
1284	瓦葺鉢	(28.2)	-	-	長石 灰白色	口縁外反、底部肥厚	内面 ヨコナデ、縦いナデ 外面 ヨコナデ、ハケ目後横方向 のナデ	A区溝17
1285	瓦葺鉢	-	-	-	石英・白色硝子、 緑灰色	口縁部玉縁状	内外面とも全体的に厚托	A区溝17
1286	備前焼鉢	(33.0)	-	-	赤褐色	口縁部玉縁状	外面 ヨコナデ、 内面 縦方向のナデ	A区溝17
1287	瓦葺鉢	-	(26.5)	-	角閃石・長石、 内淡褐色 外淡褐色、すず付蓋	-	内面 縦方向のヘラナデ後ナデ、 縦方向のナデ、高台縁以出 外面 縦方向のヘラナデ、ナデ、 ヨコナデ、高台縁以出	A区溝17
1288	備前焼鉢	-	(30.8)	-	長石、 褐色赤褐色	-	内面 縦方向のナデ、高台縁以出 外面 3/4ナ、高台縁以出のもの のナデ	A区溝17

第621回 溝16

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
1300	瓦葺鉢	-	-	-	長石、 灰白色	底部平座	内面 ナデ 外面 ヨコナデ、底部縁以出	A区溝4
1309	白磁碗	-	-	-	灰白色の硝子、青入り	-	内外面 玉縁	A区溝4
1310	青磁碗	-	-	-	うすい藍色の硝子、青入り	-	内外面 玉縁 外面 玉縁、蓮華文	A区溝4

第622回 溝10(1)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
1311	土師器土師 小皿	(8.6)	(6.6)	1.3	長石・角閃石、 暗褐色	底部斜方向にのびる	内面 面取りナデ 外面 面取りナデ、底部縁以出	A区溝2
1312	土師器土師 小皿	(8.8)	(7.0)	1.2	角閃石・長石、 黄褐色	底部斜方向にのびる	内面 面取りナデ、底部縁以出 外面 面取りナデ	A区溝2
1313	土師器碗	-	(8.0)	-	内閃石・斜長石、 暗褐色	高い碗台をかり付け	内面 面取りナデ、底部縁以出 外面 ヨコナデ、高台縁以出、底 縁切以出、後ナデ	A区溝2
1314	土師器碗	-	(5.4)	-	角閃石・斜長石、 黄褐色	底部縁し出し 断面方形の高台をかり付け	内面 ナデ 外面 ヨコナデ、高台縁以出ナデ ナデ	A区溝2
1315	瓦葺碗	-	(7.8)	-	角閃石、 灰白色	底部平座	内面 ナデ 外面 ナデ、底部縁以出	A区溝2
1316	瓦葺碗	-	(6.8)	-	長石・金片母、 灰白色	底部縁に低い碗台	内面 ナデ 外面 ヨコナデ、底部縁以出 ナデ	A区溝2
1317	瓦葺碗	-	(5.6)	-	斜長石、 灰白色	断面三角形の高台をかり付け	内面 3/4ナ 外面 変形ナデ、高台縁以 出、底部縁以出	A区溝2
1318	青花碗	-	-	-	硝子灰白色、藍色 胎土、褐色硝子を食ひ、断面 縁部	-	-	A区溝2
1319	青花碗	-	-	-	硝子灰白色、淡青色、青入り 胎土、褐色硝子、藍色硝子を食 ひ、断面 縁部	-	内外面 地盤、葉付浅鉢	A区溝2
1320	青花碗	-	-	-	硝子灰白色、淡青色 胎土、褐色硝子を食ひ、断面 縁部	口縁内湾	-	A区溝2
1321	青花碗	(10.8)	(6.2)	2.1	硝子灰白色 胎土、褐色硝子を食ひ、断面 縁部	口縁部縁反り	-	A区溝2
1322	白磁四耳壺	-	(6.4)	-	硝子透明 胎土(黒)黄、褐色	厚みのある底部	内面 面取りナデ、前以出 外面 地盤、高台縁以出、底部 縁以出	A区溝2

1323	青磁碗	-	5.2	-	繪青磁類 胎土:凝灰、灰色 :繪白っぽい緑色の種、裏面に 赤、黒入あり 胎土:凝灰(緑灰色)	厚みのある底部	内面 笠輪 外面 笠輪、高台彫出し	A区溝2
1324	青磁碗	-	6.2	-		厚みのある底部	内外面 笠輪	A区溝2
1325	割漆玉輪製 白磁皿	-	4.2	-	増透明釉 胎土:凝灰	見込み部に目抜き痕	内面 笠輪 外面 笠輪、高台付近縁部、削り 出し	A区溝2
1326	割漆玉輪製 粉引沙器	-	4.4	-	増透明釉 胎土:凝灰、灰色	-	内面 ヘラ削り 外面 笠輪、ヘラ削り、高台削り出 し	A区溝2
1327	唐津茶碗	(13.0)	4.5	4.9	増透明釉 胎土:灰赤・長石・石粒	体部中程で縁出し、斜方向に凹く	ラズル面の発色は青色で空裏 より中心部がかった端が濃れる	A区溝2
1328	唐津茶碗細皿	(9.9)	2.5	4.4	増透明釉 胎土:石赤・長石	-	内外面 笠輪 高台削り出し、高台彫出し、笠輪彫 出し	A区溝2
1329	唐津系陶器鉢	-	(寛永) 4.6	-	増透明釉 胎土:凝灰土(白色粘り含む)	-	内外面 笠輪 外面 笠輪、高台削り出し	A区溝2
1330	瓦質土器火鉢	-	-	-	角閃石、 黄褐色	体部下に1條の突帯	内面 ココナデ 外面 ココナデ、突帯彫付け、底 面ナデ	A区溝2
1331	瓦質土器鉢	(30.0)	-	-	長石、角閃石、 黄褐色	体部が直立に立つ 高台が付けられる	内面 縁方向のミガキが空に入る	A区溝2
1332	瓦質土器鉢	-	(13.4)	-	長石、角閃石、 黄褐色	1331と同一体	内面 ミガキが空に入る 外面 縁方向のミガキが空に入る	A区溝2
1333	土師質土器鉢	-	(20.0)	-	内角石・斜長石、 黄褐色	-	内面 ナデ 外面 ナデ、底面ナデ、底底保 底	A区溝2
1334	土師質土器鉢	(38.9)	-	-	内角石・斜長石、 黄褐色	器壁が厚い	内外面 ココナデ、ナデ	A区溝2

第633号 溝1(2)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形状の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存品
		口径	底径	高さ				
1335	土鍋	(29.8)	-	-	角閃石、 黄褐色	体部直立、口縁部外反	内面 ココナデ、一握りナデ 外面 ココナデ、ナデ	A区溝2
1336	土鍋	-	-	-	角閃石・長石、 黄褐色	-	-	A区溝2
1337	瓦質土器世	(38.0)	-	-	長石、 黄褐色	肩部が張り、頸部直立する	内面 ココナデ、縁方向のハケ 面 ココナデ、縁方向のミガキ、 スラング文	A区溝2
1338	常滑焼世	-	-	-	内灰色 外、茶褐色、自然釉がかかる	口縁部上下に陥張	内面 ココナデ、ヨコ縁方向のナ デ 外面 ナデ	A区溝2
1339	常滑焼世	-	-	-	砂鉄、 黄褐色、自然釉がかかる	口縁玉縁状	内面 ココナデ、ナデ 外面 ココナデ	A区溝2
1340	土師質土器 鉢	-	-	-	長石、 黄褐色	口縁部内面が肥厚	内面 笠輪 外面 ココナデ	A区溝2
1341	瓦質土器鉢	-	-	-	角閃石・斜長石、 黄褐色	-	内面 ナデ、斜長石5本 外周 縁方向のケズリ、底部一 方面のナデ	A区溝2
1342	唐津系陶器鉢	(27.8)	-	-	長石、 黄褐色	口縁上面が内陥する	内外面 ココナデ	A区溝2
1343	唐津系陶器鉢	(29.8)	(26.9) 甲	(13.0)	内角石 胎土:凝灰	口縁上面が内陥する 内面 笠輪、ヨコ縁部、底面 ナデ	内外面 ココナデのみ端 部、底面ヨコ縁部	A区溝2

第644号 溝1(準)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形状の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存品
		口径	底径	高さ				
1351	青花碗	-	(5.2)	-	青みを帯びた白色釉	電子碗タイプ	内外面 笠輪、高台近縁部、高 台彫出し、高台彫出し	A区溝13
1352	唐津系陶器鉢	(11.8)	4.8	4.2	灰緑	見込み部に縁結	内面 笠輪、目抜き 外面 笠輪、高台削り出し、高 台彫出し	A区溝13
1353	白磁碗	(16.0)	-	-	灰色がかった黄褐色	平口口縁	内外面 無釉	A区溝13

第645号 溝1(1)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形状の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺存品
		口径	底径	高さ				
1358	土師質土器鉢	(11.0)	(9.8)	3.0	角閃石、 黄褐色	体部直立	内面 笠輪ナデ 外面 笠輪ナデ、底面削り出し	A区溝14
1359	瓦器碗	(15.4)	-	-	長石、 やや暗い白色	内外面 凹輪ナデ	内面 凹輪ナデ、底面平反方 ナデ 外面 凹輪ナデ、底面削り出 し	A区溝14
1360	瓦器碗	-	7.4	-	長石・角閃石、 黄褐色	平底底部	内面 凹輪ナデ、底面平反方 ナデ 外面 凹輪ナデ、底面削り出 し	A区溝14
1361	瓦器碗	-	(7.8)	-	長石、 灰白色	平底底部	内面 凹輪ナデ、底面削り出 し	A区溝14
1362	瓦器碗	-	(7.2)	-	長石・角閃石、 灰白色	平底底部	内面 凹輪ナデ、底面削り出 し	A区溝14
1363	瓦器碗	-	(7.4)	-	角閃石・長石、 灰色、灰白色	低い高台を付される	内面 ナデ 外面 ナデ、高台削り出し、底 面削り出し	A区溝14
1364	割漆玉輪製	-	(19.0)	-	-	-	内外面 ナデ	A区溝14
1365	青磁碗	(17.0)	-	-	うすい青色の種、 黒入あり	内面文様	内外面 笠輪	A区溝14
1366	青磁碗	-	(6.8)	-	うすい緑色の種、 黒入あり	内面文様	内面 笠輪 外面 笠輪、高台一握り露出、高 台削り出し	A区溝14
1367	青磁碗	-	(6.4)	-	増透明釉 胎土:灰赤	内面文様	内面 笠輪 外面 笠輪、高台一握り露出、高 台削り出し	A区溝14
1368	白磁皿	11.4	6.0	3.0	釉厚1mmくらい 黒入あり	口縁境反り	内外面 笠輪 外面 笠輪、高台一握り露出、高 台削り出し	A区溝14
1369	白磁皿	(1.8)	(8.2)	3.0	釉厚0.5mm	口縁境反り	内外面 笠輪 高台に彫り出し	A区溝14
1370	白磁皿	(13.0)	(7.0)	2.8	白色の釉	口縁境反り	内面 笠輪 外面 笠輪、高台露出、砂付	A区溝14

1371	白磁皿	11.1	5.4	2.9	やや膝がかった柱	口縁反り	内面 藍繪(一部緑入れあり) 外面 藍繪 高台のみ赤絵 高台に付置	A区清14
1372	白磁皿	11.5	8.4	3.0~3.2	輪厚0.5mmくらい	口縁反り	内面 藍繪 外面 藍繪 高台赤絵 高台に付置	A区清14
1373	白磁皿	11.1	6.5	3.4	輪厚0.5mm	口縁反り	内面 藍繪 外面 藍繪 高台赤絵 付置	A区清14
1374	瓦葺土器火鉢	(16.0)	-	-	角閃石・長石、 褐色褐色	口縁内湾	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、突帯貼付け、スタ ンプ文	A区清14
1375	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石	口縁内湾 外面口縁下に突帯2条とスタンプ文	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、突帯貼付け、スタ ンプ文	A区清14
1376	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石・斜長石、 灰白色	外面口縁下に突帯2条とスタンプ文	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、突帯貼付け、スタ ンプ文	A区清14
1377	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石・斜長石、 褐色色	外面口縁下に突帯2条とスタンプ文	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、突帯貼付け、スタ ンプ文	A区清14
1378	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石・長石	外面口縁下に突帯2条とスタンプ文	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、ヨコミガキ、突帯 貼付け、スタンプ文	A区清14
1379	瓦葺土器火鉢	-	-	-	-	口縁輪郭外面が肥厚	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、突帯貼付け、スタ ンプ文	A区清14
1380	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石・長石、 (内)灰白色 (外)赤い・黄い・灰白色	扉蓋はり付け	内面 ヨコナデ 外面 ナデ、突帯貼付け 扉蓋 貼付け、ユビオサエ、ナデ	A区清14
1381	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石・斜長石、 褐色白色	扉蓋はり付け	内面 ヨコナデ 外面 ナデ、突帯貼付け、扉蓋ナ デ、扉蓋 貼付け、ユビオサエ	A区清14

第649図 通11(2)

番号	器種	法 定 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・図案・文様	取寄物の 遺構名
		口径	底径	輪高				
1382	土鍋	-	-	-	角閃石、 黄褐色	口縁輪郭外面に突帯	内面 斜め方向のハゲ目 外面 ヨコナデ、縦方向のハゲ目 (不鮮明)	A区清14
1383	土鍋	-	-	-	角閃石・斜長石、 黄褐色	外面口縁下に突帯	内面 縦方向にハゲ目 外面 ヨコナデ、ユビオサエ	A区清14
1384	瓦葺土器蓋	(33.0)	-	-	長石、 白灰色	扉蓋が短く直立し、口縁輪郭が外 方に肥厚	内面 ヨコナデ、扉蓋のナ デ 外面 ヨコナデ、縦方向のハゲ目、 スタンプ文	A区清14
1385	瓦葺土器蓋	-	-	-	長石、 褐色色	口縁は短くの手状に折れ、やや肥 厚	内面 ヨコナデ、ユビオサエ、ユ ビオサエ、縦方向にナデ、ユ ビオサエ	A区清14
1386	瓦葺土器蓋	-	-	-	角閃石・長石、 灰白色	口縁短く直立	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ナデ	A区清14
1387	赤津流漆	-	-	-	(内)赤褐色 (外)灰褐色	口縁部は上下に肥厚	内外面 ヨコナデ	A区清14
1388	甕前流漆	(10.8)	-	-	長石、 褐色褐色	口縁は短く半ばに開く	内外面 ヨコナデ	A区清14
1389	甕前流漆鉢	-	-	-	赤褐色	口縁部輪郭上方にわずかに肥厚	内面 ヨコナデ、甕前 外面 ヨコナデ	A区清14
1390	甕前流漆鉢	(32.2)	-	-	赤褐色	口縁部直立、柄筋丸みをもつ	内面 ヨコナデ、甕前 外面 ヨコナデ	A区清14
1391	甕前流漆鉢	-	-	-	角閃石	-	内面 ヨコナデ、甕前5本単位 外面 ヨコナデ、底筋ナ デ	A区清14
1392	甕前流漆鉢	-	-	-	明赤褐色	-	内面 ヨコナデ、甕前 外面 ヨコナデ、底筋ナ デ	A区清14
1393	甕前流漆鉢	-	(13.0)	-	-	-	内面 ヨコナデ、甕前ナ デ 外面 ヨコナデ、底筋ナ デ	A区清14- 15-17
1394	甕前流漆鉢	-	-	-	赤褐色	-	内面 ヨコナデ、甕前 外面 ヨコナデ、4本方向のナ デ、底筋ナ デ	A区清14
1395	赤津流漆鉢	-	(9.4)	-	長石	1343と同一體か	内面 ナデ、甕前単位4~5本 外面 ヨコナデ、高台赤絵 内面 ヨコナデ、扉蓋縁部のみ、内 縁不定方向ナデ、甕前単位6本 外面 ヨコナデ、底筋切り肥厚 ユビナデ、縦筋赤絵	A区清14- 15-17
1396	瓦葺土器漆鉢	-	-	-	褐色白色	夏込み部にも柄筋あり	内面 ヨコナデ、底筋切り肥厚 ユビナデ、縦筋赤絵	A区清14

第650図 通12(南表1)

番号	器種	法 定 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・図案・文様	取寄物の 遺構名
		口径	底径	輪高				
1410	土器質土器杯	-	5.2	-	角閃石・長石、 黄褐色	底筋に比し輪高の高いものか	内面 内面口内湾 外面 底筋赤絵あり	A区清16
1411	土器質土器杯	-	-	5.4	赤褐色・角閃石・長石、 黄褐色	底筋の立ちも切りシャープで底筋内 湾赤絵	内面 内面口内湾 外面 底筋ナデ、底筋赤絵あり	A区清16
1412	瓦葺漆	-	(6.8)	-	金波母・長石・角閃石	短い瓦合はり付け	内面 底筋赤絵あり 外面 底筋赤絵あり、高台赤 絵貼付け、ユビナデ	A区清16
1413	瓦葺土鍋	-	(9.0)	-	金波母・角閃石・石英	断面長方形の高合はり付け	内面 ヨコナデ、不定方向のナ デ 外面 ヨコナデ、ヨコナデ、底 筋ヨコナデ 底筋 貼付け	A区清16
1414	白磁鉢	(17.0)	-	-	灰褐色、輪厚0.5mm	-	内面 底筋 外面 底筋、エンホール多量、輪 郭赤 外面 藍繪、高台内削り出し、 底筋	A区清16
1415	朝鮮王形産 経輪陶器類	-	(4.5)	-	石英、 灰白色	-	内面 底筋、エンホール多量、輪 郭赤 外面 藍繪、高台内削り出し、 底筋	A区清16
1416	瓦葺土器鉢	-	(16.0)	-	(内)灰白色 (外)黄褐色	断面長方形の高台付される	内面 ミガキ? 外面 底筋ナデ、底筋ナデ、底 筋貼付け、ケツリ、底筋赤絵	A区清16
1417	瓦葺土器火鉢	-	-	-	石英・角閃石・長石	体部は内湾し、口縁部は内側に折 れる 底筋には筋がはり付け	内面 ヨコナデ、縦方向のナ デ 外面 粘土素地付、ユビナデ、 スタンプ文、縦方向のミガキ、口 縁部底筋取り底筋 底筋 縦方向のミガキ、ユビオ サエ、ケツリ(底筋取り)	A区清16
1418	瓦葺土器火鉢	-	-	-	鉛灰土、 黄褐色	口縁部内側にやや肥厚	内面 ヨコナデ、不定方向のナ デ、ユビナデ 外面 突帯貼付け、縦方向のナ デ、口縁部底筋ナデ	A区清16

1419	瓦質土器火鉢	-	-	-	石英・長石、 褐色色	底部はり付け	内面 横方向にナデ、ナデ 外面 ミガキ風ナデ、ナデ 彫刻 貼付け、ユビオサエ、ナデ	A区清16
1420	瓦質土器火鉢	-	-	-	内閃石・金雲母・青色粒子、 淡緑褐色	体部下に突帯1条 彫刻はり付け	内面 斜めにナデ、横方向にナデ 外面 ミガキ、ヨコナデ、ナデ、粘 土彫刻付け	A区清16
1421	土鍋	-	-	-	内閃石・金雲母	口縁部縦やかに外反	内面 ハケ目、ヨコナデ 外面 ヨコナデ、ユビオサエ	A区清16
1422	土鍋	-	-	-	金雲母	口縁部短く折れる	内面 ナデ、ヨコナデ 外面 ヨコナデ、ナデ、ケズリ	A区清16
1423	瓦質土器燗鉢	-	-	-	内閃石・長石、 淡緑褐色	口縁内反	内面 ヨコナデ、ナデ、目目り 4本付 外面 ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ 内面 内面自然の凹凸	A区清16
1424	燗前焼燗鉢	-	-	-	赤褐色	口縁部直立、縁部広くふくらむ	内面 横方向にナデ、底面口ロ 縁、折目付 外面 横方向のナデ、縦方向の ナデ、ヨコナデ、彫刻ナデ	A区清16
1425	燗前焼燗鉢	-	(14.2)	-	長石	-	-	A区清16

第65回 遺12(準率2)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺物名
		口径	底径	高さ				
1426	瓦質土器燗	-	-	-	長石、 白っぽい灰色	口縁部短く折れる	内面 ヨコナデ、横方向のユビナ デ 外面 ヨコナデ、ユビオサエ、ナデ 内面 ヨコナデ、へうげのもの でナデ	A区清16、土 器146
1427	瓦質土器燗	-	-	-	石英・内閃石、 青灰色	縁部短く直立し、踵部が外面に肥厚	外面 ヨコナデ、不定方向ナデ、 粘土	A区清18
1428	瓦質土器燗	-	-	-	石英・内閃石、 青灰色	1427と同様な器形	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ヨコナデ、折点文、口縁部 ナデ	A区清16
1429	瓦質土器燗	-	-	-	石英、 青灰色	1427と同様な器形	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ヨコナデ、不定方向のナ デ、ヌシブ文	A区清18
1430	瓦質土器燗	-	-	-	長石・内閃石・金雲母、 淡緑色	肩があまり傾かない	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、縦方向の工具ナ デ、口縁部直立	A区清16
1431	燗前焼燗 (35.4)	-	-	-	-	口縁部外面に出縁状のものあり	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、青色の自然彫が かかると、口縁部貼付け	A区清16
1432	燗前焼燗 (34.2)	-	-	-	暗赤褐色	口縁部外面に凹縁	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、縦方向のハケ目	A区清14
1433	燗前焼燗	-	-	-	石英、 内閃石 外に自然彫がかかる	-	内面 横方向のナデ 外面 ナデ、ナデ後縁部直状文	A区清14

第65回 遺12(準率1)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺物名
		口径	底径	高さ				
1445	土師質土器 小皿	(8.0)	(8.0)	1.2	内閃石・長石、 内焼褐色 外、黄褐色	体部の立ちあがりシャープ	内面 ナデ 外面 ヨコナデ、底面赤切り?	A区清19
1446	土師質土器燗	(14.4)	-	-	長石、 黄褐色	縁部縦やかに外反	内外面 横方向のミガキ	A区清18
1447	瓦器燗	-	(7.2)	-	内閃石、 内面白色 外、暗灰色	断面三角形の高台はり付け	内面 ナデ 外面 ヨコナデ、高台貼付け、底 面彫刻、赤ナデ 器部の裏側にへうげキズ不備	A区清19
1448	白磁燗	(17.2)	-	-	灰色っぽい釉	縁部が短く外方に折れる	内面 磨釉 外面 磨釉、ケズリ、底面磨釉 外周 磨釉、漆部残存、高台削り 出し	A区清18
1449	白磁燗	-	(5.4)	-	やや黄褐色っぽい釉	-	-	A区清18
1450	瓦質土器燗	-	-	-	長石・石英、 暗灰色	口縁部玉縁状	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、タタキ	A区清19

第66回 遺12(準率2)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺物名
		口径	底径	高さ				
1451	土師質土器 小皿	(7.2)	(6.0)	1.7	長石・金雲母・石英・内閃石、 黄一緑褐色	体部の立ちあがりシャープ	内面 ナデ 外面 ナデ、底面赤切り	A区清18
1452	土師質土器 小皿	(7.0)	(6.4)	1.2	長石、 黄褐色	1451に比べ器高が低い	内面 ナデ、底面一方ナデ 外面 ナデ、底面赤切り	A区清18
1453	土師質土器燗	-	(8.3)	-	内閃石・長石、 黄褐色	体部の立ちあがりシャープ	内面 ナデ、底面赤切り	A区清18
1454	土師質土器燗	-	(7.8)	-	長石・金雲母・内閃石・石英、 黄褐色	体部は斜方向にのびる	内面 一方ナデナ 外面 ヨコナデ、底面赤切り	A区清18
1455	瓦器燗	-	(8.8)	-	内閃石・長石・石英、 暗灰色	低い高台はり付け	内面 ナデ 外面 ヨコナデ、底部ナデ、高台 貼付け	A区清18
1456	白磁燗	(15.0)	-	-	黄色っぽい釉	口縁玉縁	内外面 磨釉	A区清18
1457	白磁燗	-	(6.4)	-	黄色っぽい釉	-	内面 磨釉 外面 磨釉、高台削り出し、磨釉	A区清18
1458	青磁燗	-	-	-	ナデ1色の釉、輪厚1mm	-	外面 輪厚炎	A区清18
1459	青磁燗	(16.4)	-	-	白灰色の釉、輪厚0.5cm	-	内面 輪厚炎	A区清18
1460	青磁燗	(15.8)	-	-	深緑色の釉、 縁から内入あり	口縁端反り	内外面 磨釉	A区清18
1461	青花燗	(11.4)	-	-	白色釉	-	内面 南方部文 外面 粘土の磨釉文、磨釉	A区清18
1462	青花台子燗	7.2	-	1.8	青灰色の釉、 縁から内入あり	文様は輪部を覆わずに一筆描き	内面 磨釉 外面 磨釉、高台削り出し	A区清18
1463	瓦質土器燗	(12.4)	-	-	内閃石、 淡灰白色	口縁部は体部から短く内傾気味に	内外面 磨釉ナデ	A区清18
1464	瓦質土器火鉢	-	-	-	長石、 黄色っぽい灰白色	底縁近くに突帯1条	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、底部ナデ、突帯 貼付け	A区清18
1465	燗前焼燗	-	-	-	内閃石、 赤褐色	-	内面 口ロの底、ユビオサエ彫、折 目単体9本 外面 口ロの底、ナデ、底部ナデ	A区清18

1466	畿前焼盆鉢	(26.8)	-	-	長石・赤褐色	口縁輪郭上部が内傾	内面 ココナデ、ロクロ直、磨目磨 益本 外面 ココナデ、磨目ナデ	A区溝18
------	-------	--------	---	---	--------	-----------	----------------------------------------	-------

第670図 溝(1)北半(2)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	観察時の 透視名
		口径	底径	高さ				
1467	瓦葺土器火鉢	(36.6)	-	-	角閃石・金灰母・斜長石・ 内黄褐色 外黄褐色	口縁部外面が肥厚	内面 ココナデ 外面 縦方向にヒガキ	A区溝18
1468	畿前焼盆	-	-	-	茶褐色 胎土上部から自然露 出	口縁部長い玉縁	内外面 ココナデ	A区溝18
1469	畿前焼盆	(41.8)	-	-	赤褐色 胎土 赤褐色胎土露出	口縁部長い玉縁	内面 ココナデ、ナデ 外面 ココナデ、ナデ	A区溝18

第672図 溝(位)磨目(京南側)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	観察時の 透視名
		口径	底径	高さ				
1479	土師質土器杯	(5.8)	(3.0)	2.2	角閃石・長石・赤色粘土、 淡褐色	小型品で、口縁に比し縁高が深い	内面 磨目ナデ 外面 磨目ナデ、横方向ナデ、底 部急切り	A区溝12
1480	唐津系陶器碗	-	(4.4)	-	黄褐色 胎土赤褐色	-	内面 磨目 外面 磨目、底部下部露胎、高台 削り出し	A区溝12
1481	土師質土鍋	(21.2)	-	-	長石・角閃石・ 内黄褐色 外黄褐色	やや圓に丸みをもった体部	内面 ココナデ、横方向にナデ 外面 ココナデ、斜め方向にケズリ	A区溝12
1482	畿前焼盆	-	-	-	長石、 灰色	口縁輪郭を丸く肥厚させる	内外面 ココナデ	A区溝12
1483	畿前焼盆鉢	(24.6)	-	-	赤褐色	口縁輪郭を上方にやや拡張	内外面 ココナデ	A区溝12

第676図 溝(位)磨目(京東側1)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	観察時の 透視名
		口径	底径	高さ				
1490	瓦葺碗	-	(7.4)	-	内閃石・長石・白色粘土、 灰色	断面方形の高い磨目台をほり付け	内面 2方ナデ 外面 磨目ナデ(ロクロ直縁、コ コナデ、ナデ)	A区溝11
1491	瓦葺碗	(7.2)	-	-	-	体部丸みをもち立ち上がる	内面 磨目ナデ後一方向ナデ 外面 磨目ナデ、底部急切り後部 急切り	A区溝11
1492	行徳碗	(14.8)	-	-	苔みを帯びた緑色の釉、 胎土に黒が入る	口縁部厚み	内面 磨目、胎土が入る 外面 磨目	A区溝11
1493	青磁碗	-	(5.2)	-	黄色っぽい緑色の釉	厚い底部	内面 磨目 外面 磨目、胎土部分削り出し露胎	A区溝11
1494	青磁碗	-	(5.6)	-	深緑色の釉	広い底部	内面 磨目、夏込み部分削り出し露胎 あり	A区溝11
1495	青磁碗	-	(5.0)	-	くすんだ緑色の釉	内面磨目文	内面 磨目 外面 磨目、底面露胎	A区溝11
1496	青磁碗	(10.0)	(4.1)	2.9	黒っぽい緑色 胎土白色 胎土に黒が入る	磨目	内面 磨目 外面 磨目、底面露胎、高台削り 出し	A区溝11
1497	白磁碗	(8.4)	-	-	釉がかかった透明釉	玉縁口縁	内面 磨目 外面 磨目	A区溝11
1498	白磁碗	-	-	-	黄味がかった白色、黒入り	-	内面 磨目、胎土が入る 外面 磨目	A区溝11
1499	白磁碗	-	(4.0)	-	透明釉	-	内面 磨目 外面 磨目、胎土部分露胎、胎土露胎	A区溝11
1500	白磁碗	-	-	-	釉がかかった白色	-	内面 磨目 外面 磨目、底面露胎	A区溝11
1501	白磁碗	(11.4)	(6.6)	3.7	白色釉	口縁磨目	外面 磨目、底面露胎	A区溝11
1502	磨目土器高 豆皿型	-	(5.2)	-	黄味がかった白色の釉	比較的深さが深い	内面 磨目、高台部分露胎 外面 磨目	A区溝11
1503	切野玉系陶器 製陶粉鉢	(10.4)	(4.0)	3.0	(胎)白磁釉? 胎土灰色	底部下で底面削り、斜方向に口縁へい たる	内面 磨目、磨目急切り 外面 磨目、高台一部部分的 に削り	A区溝11
1504	切野玉系陶器 製陶粉鉢	-	(5.4)	-	白色→灰色の釉	-	内面 磨目	A区溝11
1505	瓦葺土器土鍋	-	-	-	角閃石、 黄褐色	口縁輪郭が上方に拡張	内面 ココナデ 外面 ココナデ、一帯縦方向にナ デとココナデ	A区溝11
1506	土師質土器 土鍋	-	-	-	角閃石・長石、 内黄褐色 外黄褐色	口縁部が短く外に折れる	内外面 ココナデ	A区溝11
1507	土師質土器 火鉢	-	-	-	角閃石・長石、 黄褐色	口縁内面	内面 ココナデ 外面 スタンブ文、胎土	A区溝11
1508	瓦葺土器火鉢	-	-	-	内閃石 灰白色	-	内面 ココナデ、胎土貼付け 外面 ココナデ	A区溝11
1509	瓦葺土器火鉢	-	-	-	角閃石・長石、 暗褐色	磨目けり付け	内面 ココナデ 外面 縦方向のヒガキ、ココナデ、 コトコエ、ナデ、胎土貼付け	A区溝11
1510	瓦葺土器火鉢	-	-	-	石英、 暗灰色	磨目けり付け	外面 ナデ、胎土コトコエ、ナデ	A区溝11
1511	瓦葺土器蓋	(15.0)	-	-	長石、 胎土灰色	-	表面 ヒガキ 裏面 ヒガキ、ココナデ	A区溝11

第677図 溝(10)磨目(本器脚2)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	観察時の 透視名
		口径	底径	高さ				
1512	輪郭浅鉢	-	-	-	長石、 黄褐色	口縁玉縁	内面 ココナデ 外面 ココナデ、自然釉がかか る	A区溝11
1513	畿前焼盆鉢	-	-	-	黄褐色	口縁部短く外折	内面 ココナデ 外面 ココナデ、胎土貼付け	A区溝11
1514	畿前焼盆鉢	-	(11.4)	-	赤褐色	-	内面 ココナデ、磨目9本重台 外面 ココナデ、底面ナデ	A区溝11
1515	須恵煎茶	-	-	-	暗黄褐色	口縁輪郭上下に拡張	内面 ココナデ 外面 ココナデ、へう状の工具で 焼か	A区溝11

第678図 溝15

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	観察時の 透視名
		口径	底径	高さ				
1516	土師質土器 小皿	3.9	2.9	0.8~0.9	長石・角閃石、淡黄褐色	小皿風 体部は厚み気味	内面 磨目ココナデ 外面 磨目ココナデ、底面急切り	A区溝15

1517	瓦葺土器土鉢	-	-	-	長石・角閃石、 暗褐色(外壁一部剥落)	体部内面、口縁縁部内側磨れる	内面 瓦葺ナデ 外面 ヨコナデ、スタンプ文、ミガキ	A区清15
1518	瓦葺土器土鉢	-	-	-	緑面ナデ (内面白色まだらな斑紋) (外壁暗灰色)	-	内面 瓦葺面のナデ 外面 ヨコナデ、スタンプ文、ミガキ	A区清15
1519	土師器鉢	(41.6)	-	-	角閃石・長石、 こくすい緑褐色	口縁部く字状に磨く	内面 ヨコナデ、ミガキ 外面 ヨコナデ、文面 内面 ナデ、首直線付7本 外面 ナデ、ヨコ方向の細いナデ、直線ナデ	A区清15
1520	瀬前焼磁鉢	-	-	-	長石・大きめの砂粒、 赤褐色(内面 自然釉)	-	内面 ナデ、首直線付3本 外面 横方向にナデた後タナデ、ヨコナデ、ナデ	A区清15
1521	瀬前焼磁鉢	-	-	-	長石 暗灰色	-	-	A区清15

第60回 清10-11

番号	器種	径長 (cm)			胎土・色別	形態の特徴	手法・図印・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
1527	瓦葺陶	(15.8)	(7.8)	5.5	長石	口縁部外面を丸縁 産部平造	内面 瓦葺ナデ、産部コビナデ 外面 磨粉ナデ、産部糸取り後 産部平造	A区清12-14
1528	青磁鉢	-	-	-	うすい緑色の釉 釉がかいて入るあり	-	内面 青磁、文様不明 外面 青磁	A区清12-14
1529	宮花鉢	-	-	-	-	-	内外面 青磁 内面口縁に青磁2本、一宮崎キ タイプ	A区清12-14
1530	瀬前焼磁鉢	(28.5)	-	-	赤褐色	口縁外面に凹縁状のもの 口縁縁部上裏内縁	内面 ヨコナデ、首直線付8本 外面 ヨコナデ	A区清12-14

第61回 清13-15

番号	器種	径長 (cm)			胎土・色別	形態の特徴	手法・図印・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
1531	土師質土器 小皿	7.0	5.8	1.2	角閃石・長石、 暗褐色	体部の立ちあがりほぼシャープで斜方 向にのびる	内面 磨粉ナデ、 外面 磨粉ナデ、産部糸取り 内面 瓦葺、口縁にうすい厚緑2 本入る。 外面 暗緑、口縁上部にうすい赤 褐色、赤黒文等。一宮崎キタイ プ、文等の下に厚緑1本	A区 清15-16
1532	宮花鉢	-	-	-	-	-	内面 青磁、 外面 暗緑、口縁上部にうすい赤 褐色、赤黒文等。一宮崎キタイ プ、文等の下に厚緑1本	A区 清15-16-17
1533	宮花鉢	(13.2)	-	-	釉がみがかつた赤褐色 (胎土褐色砂粒少量産出)	-	内外面 全面施釉	A区 清15-16-13
1534	宮花鉢	-	-	-	黄~緑褐色の肌張	-	内面 瓦葺、夏土黄緑2本、文 様あり、一宮崎キタイプ 外面 瓦葺、高台磨り出し、産部 高輪	A区 清15-16-17
1535	高取系系皿	(10.0)	(4.1)	3.1	青みがかった緑色	低い高さ、内面気味の体部	内面 瓦葺 外面 瓦葺、高台・産部施粉、高 台磨り出し	A区 清15-16-17
1536	高取系系皿	-	-	-	緑(内面)灰褐色(外)青灰色 釉厚1μ以下 (胎土褐色砂粒少量産出)	口縁部にむかい縁やかに外反	-	A区 清15-16-17
1537	瓦葺土器土鉢	-	-	-	角閃石・長石、 暗灰色	口縁縁部外面が肥厚	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 コロシ磨り取り、花文スタン プ文、ミガキ	A区 清15-16-17
1538	瓦葺土器土鉢	-	-	-	角閃石・長石・雲母、 黒褐色	体部内面	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、産部磨り付け、スタ ンプ文、ミガキ	A区 清15-16-17
1539	瓦葺土器土鉢	-	-	-	長石、 暗灰色	-	内面 ヨコナデ、赤土方向ナデ 外面 ヨコナデ、産部磨り付け、黄 文スタンプ、ミガキ	A区 清15-16-17
1540	土鍋	-	-	-	角閃石・長石・石英・赤色粘土、 二次焼成受ける	-	内外面口縁部 強いヨコナデ、 その他 ヨコナデ 口縁部磨り取り	A区 清15-16-17
1541	土鍋	-	-	-	長石、 内灰褐色 (外)灰褐色	口縁部内外面がわずかに段	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ヨコナデ、ナデ、ケズリ?	A区 清15-16-17
1542	土鍋	-	-	-	長石、 灰褐色 (外)灰褐色(口縁部ナデ付着)	口縁部がわずかに外縁	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ヨコナデ、ケズリ	A区 清15-16-17
1543	土鍋	-	-	-	長石、 灰褐色	口縁部がわずかに外縁	内面 ヨコナデ、その他不明 外面 ヨコナデ、ケズリ後ナデ、タ タキ、口縁部磨り取り後ヨコナデ	A区 清15-16-17
1544	土鍋	-	-	-	石英・角閃石、 灰褐色	口縁部がわずかに外縁	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、ケズリ後ナデ 口縁部磨り取り	A区 清15-16-17
1545	土鍋	-	-	-	角閃石・石英、 外磨りすす付着	体部直立気味	外面 ヨコナデ、ヘラケズリ、軟 こぼれ、ナデ 口縁部磨り取り	A区 清15-16-17
1546	土鍋	-	-	-	角閃石・長石・赤色粘土、 灰褐色	体部直立気味	内面 口縁部 強いヨコナデ、 その他 ヨコナデ	A区 清13-16-17
1547	土鍋	-	-	-	長石、 灰褐色	口縁外面に突帯	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ、産部磨り付け	A区 清15-16-13
1548	瓦葺土器土鉢	-	-	-	石英、 まだらな暗灰色	頸部短く直立し口縁部肥厚	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ミガキ、スタンプ文、ヨコナ デ	A区 清15-16-17
1549	瀬前焼磁	(25.2)	-	-	赤褐色	口縁部短く直立、体部中腹に突帯	内面 ヨコナデ、磨粉ナデ 外面 ヨコナデ、磨粉ナデ、突帯ヨ コナデにて磨り付け	A区 清15-16-17
1550	瀬前焼磁	(34.0)	-	-	長石、 赤褐色	口縁外面に凹縁	内面 ヨコナデ、横方向にナデ 外面 ヨコナデ 内面口縁部~外縁部にかけて 自然釉がかかる 高台と文字あり	A区 清15-16-17

第62回 瀬前焼磁の調査報告(土器)

番号	器種	径長 (cm)			胎土・色別	形態の特徴	手法・図印・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	器高				
1553	瀬前焼磁	(30.0)	-	-	赤褐色	口縁部やや内張った玉縁	内面 ヨコナデ、ナデ 外面 ヨコナデ、斜め方向にナデ	A区 清14~16

第623回 鹿野周辺の湧出結合土層②

番号	器種	質量 (g)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 道徳名
		口径	底径	高さ				
1554	備前浅鉢	(37.4)	-	-	桃赤褐色	口縁部長い玉縁	内外面 ココナデ	A区 土層15-18
1555	備前浅鉢	(30.2)	-	-	桃赤褐色	口縁部長い玉縁	内面 ココナデ 外面 ココナデ、横方向のナデ	A区 土層14~16、土層17
1556	備前浅鉢	-	-	-	長石、赤褐色	口縁部玉縁	内面 ココナデ、ナデ 外面 ココナデ、ナデ、自然釉	A区 土層11~14、土層14B
1557	備前浅鉢	-	-	-	赤褐色	体部に尖帯	内面 白磁ナデ、ナデ 外面 白磁ナデ、ココナデ後尖帯 土層11~14、土層14B	A区 土層14B
1558	備前浅鉢	(16.4)	(7.0)	6.4	桃赤褐色	平帯で体部内実	内面 白磁ナデ 外面 白磁ナデ、不定方向のナデ 自然釉、横ナデ	A区 土層14~16
1559	備前浅鉢	-	(28.8)	-	暗赤褐色	-	内面 ココナデ、底面ナデ 外面 横方向のナデ、底面ナデ	A区 土層14~18
1560	備前浅鉢	-	(28.8)	-	暗赤褐色	-	内面 ココナデ、不定方向のナデ 外面 ココナデ、底面不定方向のナデ	A区 土層15~16、土層17、土層17B

第624回 鹿野周辺の湧出結合土層③

番号	器種	質量 (g)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 道徳名
		口径	底径	高さ				
1561	備前浅鉢	(26.4)	-	-	赤褐色	口縁部やや内実した玉縁	内面 ココナデ、横方向のナデ 外面 ココナデ、ナデ	A区 土層11~15~18
1562	備前浅鉢	(24.6)	-	-	赤褐色	口縁部外周凹縁	内面 ココナデ、横方向のナデ 外面 ココナデ、ココナデ後尖帯 横のハケ目、尖帯	A区 土層16~16、土層22~146
1563	備前浅鉢	-	(32.2)	-	暗赤褐色、 内面に緑色の自然釉	-	内面 ナデ、横方向のハケ目 ココナデ 外面 横方向の板ナデ、ナデ、 ココナデ、底面ナデ	A区 土層17~18
1564	備前浅鉢	-	(32.4)	-	暗赤褐色	-	内面 ナデ、横方向のハケ目 ココナデ、自然釉がかかる 外面 横方向にココナデ、底面ナデ 一層ココナデナデあり	A区 土層14~17

第700回 SX4

番号	器種	質量 (g)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 道徳名
		口径	底径	高さ				
1571	土師質土器 小皿	18.4	5.9	4.7~2.1	黄褐色・長石、 赤褐色	体部の立ち上がりや丸みをもつ 方向に立ちあがる	内面 白磁ナデ、夏込み白磁ナ デ、一方白ナデ	A区 SX4 SX4
1572	瓦線輪	(15.6)	-	-	黄褐色・長石、 暗灰色、白色、灰色	口縁部に華ね線痕	内面 白磁ナデ 外面 白磁ナデ	A区 SX4

第700回 SX9

番号	器種	質量 (g)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 道徳名
		口径	底径	高さ				
1573	土師質土器 土師質土器	-	6.8	-	長石・石英、 淡緑褐色	体部斜方向にのびる	内面 白磁ナデ 外面 白磁ナデ、底面全切り	A区 SX7

第706回 SX10

番号	器種	質量 (g)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 道徳名
		口径	底径	高さ				
1589	土師質土器 杯	-	7.6	-	内面石・石英、 (内面に長石、赤褐色) 外面赤褐色	体部は比較的にシャープに立ちあがる	内面 付着物の為不研 ぎ、内面ナデ、底面全切り後 削ナデ	A区 SX9
1590	土師質土器 小皿	(8.4)	(6.2)	1.3	黄褐色・赤褐色ナデ、内面に長石、 淡緑褐色	体部は斜方向に立ちあがり内汚気味	内面 白磁ナデ 外面 白磁ナデ、底面全切り 削ナデ	A区 SX9
1591	青磁碗	-	-	-	内面石・石英、 透明釉、輪厚1mm	-	内汚気味	A区 SX9
1592	フイゴ口	内径 (2.4)	-	-	砂粒・石英、 淡緑褐色	-	ナデ	A区 SX9

第714回 鉢六

番号	器種	質量 (g)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 道徳名
		口径	底径	高さ				
1620	瓦線輪	16.0	7.6	5.2~5.7	長石・石英、 灰色、灰白色	底面やや収めて体部内汚気味	内面 白磁ナデ、不定方向ナデ 外面 白磁ナデ、底面全切り後 削ナデ	A区 鉢六10
1621	瓦線輪	16.0	7.1	5.7~6.2	長石・角閃石、 内面に赤褐色 (外周黄灰色、灰白色)	底面やや厚めで体部内汚気味	内面 白磁ナデナデ、見込み不 定方向ナデ 外面 白磁ナデナデ、底面全切り 後削ナデ	A区 鉢六10

第717回 諸跡出土器身・古墳時代出土遺物

番号	器種	質量 (g)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 道徳名
		口径	底径	高さ				
1623	弥生式土器 土器	(26.0)	-	-	角閃石・長石・石英、 赤褐色	頸部内凹、口縁外反、口縁下に深い 尖帯1条	内面 ココナデ、E方ナデ 外面 ココナデ、S方ナ、割目尖帯	A区 土層196
1624	弥生式土器 土器	(22.8)	-	-	角閃石・長石・石英・赤褐色ナデ、 (内淡褐色) (外赤褐色)	口縁下に尖帯	内面 ココナデ 外面 ココナデ、口縁部内面に 割目	A区 土層197
1625	弥生式土器 土器	-	(3.2)	-	黄褐色 黄褐色から黄褐色にかけて黒褐色 角閃石・長石・赤褐色ナデ、 白色ナデ、 (内淡褐色) (外赤褐色)	厚めの平底	内面 ナデ 外面 ナデ(厚さ異い)、底面ナ デ、穿孔あり	A区 M-2 P-2
1626	弥生式土器 土器	-	-	-	角閃石・長石・石英・赤褐色ナ デ (内淡赤褐色) (外淡赤褐色、黒褐色あり)	厚めの平底	内外面 ナデ	土層1
1627	弥生式土器 土器	-	5.0	-	角閃石・長石・赤褐色ナデ、 (内暗灰色) (外淡灰色)	平底	内面 縦方向板ナデ 外面 縦いハケ目、底面ハケ 目ナデ	土層16 P-6
1628	弥生式土器 土器	-	8.8	-	角閃石・長石・赤褐色ナデ 角閃石・石英・砂粒 淡褐色	上げ座の底面	外面 ユビナデ、ユビオサエ	B区 道徳輪一拾
1629	古墳時代 土器	-	-	-	角閃石・長石・白色ナデ・赤色 ナデ	口縁部の立ちあがりには縦や斜で外反	内面 ココナデ、斜め方向のハ ケ目ナデ、横方向の板ナデ 外面 ココナデ	土層3 A-9
1630	古墳時代 土器	(14.8)	-	-	黄褐色・長石、 赤褐色	Cの手状口縁	内外面 ココナデ、ナデ	SX9
1631	古墳時代 土器	(15.4)	-	-	角閃石・石英、 黄褐色	Cの手状口縁	内面 ナデ 外面 ココナデ	土層42

第718回 波出十六代軒土の土

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
1632	青磁碗	(19.2)	5.9	8.0	緑がけ〜アズ灰色 胎土(黒黒土、青灰色〜アズ灰 色)	保めの底部で口縁縁取り	内面 筋粒、見込み目縁み 外面 筋粒、高台彫り出し、目縁 み	波出 A-8
1633	青磁碗	—	—	—	緑がけ〜アズ灰色 胎土(黒黒土、アズ灰 色)	—	内外面 筋粒	第2-3
1634	緑釉陶器	—	(7.0)	—	胎土(白色)	高めの高台を付す	内面 筋粒 外面 筋粒(所々はびく)、底部赤 く	土器132

第722回 土器193(西瀬川遺跡)土器出土土

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
1657	土師質土器 小皿	7.9	6.3	1.0	長石・茶色粘土・金雲母・砂粒、 淡褐色(一部暗褐色〜紫色)	体部斜方向にのびる	内面 面粒コナナ、ユビナナ 外面 面粒コナナ、底部赤切り	G-1 遺物庫中 地点
1658	土師質土器 小皿	7.8	5.9	1.1~1.2	長石・白色粘土・茶色粘土、 淡明褐色	体部斜方向にのび、わずかに外反気 味	内面 面粒コナナ、ユビナナ 外面 面粒コナナ、底部赤切 り	G-1 遺物庫中 地点
1659	土師質土器 小皿	(8.2)	6.4	1.0	長石・茶色粘土、 淡明褐色	体部斜方向にのびる	内面 面粒コナナ、ユビナナ 外面 面粒コナナ、底部赤切り	G-1 遺物庫中 地点
1660	土師質土器 小皿	(8.0)	(8.2)	1.1	長石・茶色粘土、 淡褐色、明褐色(内庫)	体部の立ちあがりはやや丸みをもつ	内面 面粒コナナ 外面 面粒コナナ、底部赤切り	G-1 遺物庫中 地点
1661	土師質土器杯	—	(7.2)	—	角閃石・長石・茶色粘土・石英、 暗褐色	体部の立ちあがりはやや緩やか	内面 面粒コナナ、ユビナナ 外面 面粒コナナ、底部赤切り	G-1 遺物庫中 地点
1662	土師質土器杯	—	(8.0)	—	長石・茶色粘土、 淡褐色	体部の立ちあがりはやや緩やか	内面 面粒コナナ、ユビナナ 外面 面粒コナナ、底部赤切り	G-1 遺物庫中 地点
1663	土師質土器杯	—	(8.6)	—	長石・角閃石・茶色粘土・金雲母、 淡褐色	体部斜方向に立ちあがる	内面 面粒コナナ 外面 面粒コナナ、底部赤切り	G-1 遺物庫中 地点
1664	瓦器碗	—	(8.0)	—	長石・石英、 灰白色、暗灰色	底部平直	内面 面粒コナナ、ナデ 外面 面粒コナナ、ユビナナ、 底部赤切り	G-1 遺物庫中 地点
1665	土鍋	(26.0)	—	—	長石・白色粘土・茶色粘土・石 灰、淡褐色、明褐色(外面口縁部〜 体部にかけて)	体部下で厚直、上半は直立気味に立 ち、口縁がやや外張する	内面 ナデ、アハク目後ナデ、ナデ ナデ、コナナメハク目 外面 ナデ、アハク目後ユビナ ナデ、アハク目後ナデ、格子目 後ナデ	G-1 遺物庫中 地点
1666	須恵器	—	(16.4)	—	長石・白色粘土、 淡青緑色	—	内面 面粒コナナ、ユビナナ 外面 格子目タナキ、底部へうす び、底面平直	G-1 遺物庫中 地点

第723回 雑物以外の柱穴部土器(1)

番号	器種	寸法 (cm)			胎土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	底径	高さ				
1667	土師質土器杯	(13.0)	(8.3)	3.7	角閃石・長石・石英、 やや暗褐色	体部は斜方向に直線的にのびる	内面 面粒ナデ、見込み〜方向 ナデ 外面 面粒ナデ、底部赤切り後 縁直	B区 F-2 P-14
1668	土師質土器杯	(14.3)	8.3	3.9	長石・角閃石・石英・金雲母、 淡褐色	体部は斜方向に直線的にのびる	内面 面粒ナデ、見込み面粒ナ デ、コナナ、ユビナナ 外面 面粒ナデ、底部赤切り	B区 H-3 P-7
1669	土師質土器杯	12.2	6.8	3.1	長石・黄色粘土、 淡褐色	体部はやややかに立ちあがり内気味	内面 面粒ナデ、見込み不定方 向ナデ 外面 面粒ナデ、底部赤切り	A区 H-14 P-2
1670	土師質土器杯	11.8	7.5	3.3~3.4	石英・角閃石・金雲母、 暗褐色	体部はややかに立ちあがり内気味	内面 面粒ナデ、見込み不定方 向ナデ 外面 面粒ナデ、底部赤切り	B区 I-2 P-12
1671	土師質土器杯	(12.2)	(7.8)	3.2	長石、 赤褐色	体部内気味	内面 面粒ナデ、見込みユビナ ナデ 外面 面粒ナデ、底部赤切り	B区 H-3 P-15
1672	土師質土器杯	(12.0)	(8.2)	3.9~4.5	角閃石・長石、 淡褐色	体部内気味	内面 面粒ナデ 外面 面粒ナデ、底部赤切り	A区 G-11 P-3
1673	土師質土器杯	(15.2)	(10.2)	3.3	角閃石・金雲母、 黄褐色	体部内気味	内面 面粒ナデ、底部赤切り 縁直	B区 G-1 P-2
1674	土師質土器杯	14.2	7.2	3.4	長石・角閃石・石英、 赤褐色	体部はややかに立ちあがり内気 味	内面 面粒ナデ、見込み赤切り 縁直	B区 E-8 P-7
1675	土師質土器杯	(17.0)	(9.8)	3.3	角閃石、 淡褐色	体部の立ちあがりはやや丸みをもつ	内面 コナナ、見込みナデ 外面 コナナ、底部赤切り	A区 A-7 P-1
1676	土師質土器杯	(15.6)	(8.4)	3.7	角閃石・長石、 暗褐色	体部は丸直に近い感じに緩やかに 立ちあがる	内面 面粒ナデ、見込み視方向 ナデ 外面 面粒ナデ、底部赤切り、 縁直	A区 B-1 P-20
1677	土師質土器杯	(15.0)	(9.2)	3.5	角閃石、 やや暗褐色	体部の立ちあがりはやや丸みをもつ	内面 面粒ナデ 外面 面粒ナデ、底部赤切り ナデ	B区 H-3 P-3
1678	土師質土器杯	(14.2)	—	—	角閃石、 淡褐色	体部内気味	内外面 面粒ナデ	B区 I-1 P-10
1679	土師質土器杯	(15.0)	(10.0)	2.6	角閃石、 赤褐色	体部は丸直気味である	内面 面粒ナデ 外面 面粒ナデ、底部赤切り	B区 G-1 P-4
1680	土師質土器杯	(19.2)	(7.2)	4.3	角閃石、 淡褐色	体部の立ちあがりはやや丸みをもつ 外反気味	内面 面粒ナデ、底部赤切り 外面 面粒コナナ、ユビナナ	A区 I-1 P-41
1681	土師質土器杯	(13.7)	6.2	4.8	角閃石・長石・石英、 明褐色	体部は大きく外反	内面 面粒コナナ、底部へうす びナデ	A区 G-8 P-1
1682	土師質土器杯	—	7.0	—	角閃石・長石、 暗褐色	体部は斜方向にのびる	内面 面粒ナデ 外面 面粒ナデ(ハウ状工具 痕)、底部赤切り	A区 Q-1 P-100
1683	土師質土器杯	(14.4)	8.5	4.9	角閃石・長石、 暗褐色	体部は外反気味に口縁へ	内面 面粒ナデ 外面 面粒ナデ、底部へうす切 り	A区 D-10 P-9
1684	土師質土器 小皿	(7.4)	(7.0)	2.1	角閃石・長石・黄色粘土、 淡褐色	体部直立気味	内外面 面粒ナデ	A区 H-15 P-4
1685	土師質土器 小皿	7.5	6.1	1.3	角閃石・長石、 淡褐色	体部斜方向にのびる	内面 面粒ナデ、見込み面粒 ナデ 外面 面粒ナデ、底部赤切り	A区 E-3 P-11

1686	土師黄土器 小皿	7.7	5.6~5.9	1.2	長石・石英、 磨粒色	体部斜方向にのびる	内面 面転コナナ 外面 面転コナナ、底部糸切り	B級 A-2 P-3
1687	土師黄土器 小皿	8.5~8.9	1.0~1.3	7.6~7.7	内角石・長石・赤色粘土・金雲母・石英 うすい埋雑色	体部短く、やや直立気味	内面 面転コナナ 外面 面転コナナ、底部糸切り	B級 E-9 P-3
1688	土師黄土器 小皿	(7.2)	(5.8)	1.1	内角石・長石・石英、 赤褐色	体部斜方向にのびる	内面 面転ナナ、見込み不定方向ナナ、コビオサナ 外面 面転ナナ、底部糸切り	A級 A-1 P-13
1689	土師黄土器 小皿	(8.4)	(7.4)	1.3~1.4	内角石・長石・石英、 淡緑褐色	体部直立気味	内面 面転ナナ 外面 面転コナナ、底部糸切り	A級 A-1 P-18
1690	土師黄土器 小皿	8.0	6.2	1.2	長石・赤色粘土、 淡褐色	体部斜方向にのびる	内面 面転コナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転コナナ、底部糸切り	A級 I 10 P-1
1691	土師黄土器 小皿	(7.6)	(6.4)	6.8~1.4	長石・内角石、 褐色	体部斜方向にのび外反気味	内面 面転ナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り	A級 C-7 P-1
1692	土師黄土器 小皿	(8.6)	(7.2)	1.9	内角石・斜長石、 暗褐色	体部直立気味	内面 面転ナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り	B級 H 1 P-13
1693	土師黄土器 小皿	0.1~0.6	6.4~6.8	1.0~1.2	石英、 赤褐色	体部斜方向にのびる	内面 面転ナナ、ナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り、垂状気味	A級 K-6 P-78
1694	土師黄土器 小皿	8.5	6.9	1.6	赤色粘土・長石、 暗褐色	体部斜方向にのびる	内面 面転コナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転コナナ、底部糸切り	H級 H-1 P-48
1695	土師黄土器 小皿	(8.8)	(7.2)	1.4	石英、 やや暗い埋雑色	体部斜方向にのび、尖り気味	内面 面転コナナ、見込み不定方向ナナ 外面 コナナ、底部糸切り、嵌り気味	A級 A-7 P-1
1696	土師黄土器 小皿	8.5~8.7	5.2	1.1~1.3	内角石、 淡黄褐色	体部の立ちあがりは緩やか	内面 面転ナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り後ナナ	A級 A-7 P-1
1697	土師黄土器 小皿	(8.8)	7.2	1.2	長石、 暗黄褐色	体部斜方向にのびる	内面 面転ナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り、嵌り気味	A級 B-1 P-32
1698	土師黄土器 小皿	(9.6)	(7.8)	1.5	長石、 埋雑色(二次生成による)	体部斜方向にのび外反	内面 面転コナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転コナナ、底部糸切り後嵌り気味	B級 B-1 P-32
1699	土師黄土器 小皿	(9.2)	(6.2)	1.3	内角石・斜長石、 赤褐色(一部褐色)	体部の立ちあがりは丸みもち、斜方向にのびる	内面 面転コナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転コナナ、底部糸切り後嵌り気味	A級 H-5 P-12
1700	土師黄土器 小皿	10.2	7.0	1.4~1.5	内角石・長石・赤色粘土、 埋雑色	体部緩やかに立ちあがり斜方向へ	内面 見込み不定方向ナナ 外面 面転コナナ、底部糸切り後嵌り気味	A級 A-5 P-27
1701	土師黄土器 小皿	(11.0)	(7.2)	1.4	赤褐色・うすらぶらぶらの新土 粒・黄褐色	体部斜方向へのびる	外面 ナナ、底部糸切り後ナナ	A級 C-10 P-4

第724図 雑物以外の科穴器土器例)

番号	器名	高さ (cm)			治土・色調	形態の特徴	手法・装飾・文様	該当の 図録名
		口径	底径	器高				
1702	土師黄土器 小皿	8.3	6.4	0.8~0.9	内角石・長石・金雲母、 埋雑色	体部斜方向にのびる	内面 面転ナナ、見込み面転ナナ 外面 不定方向ナナ	B級 D 1 P-6
1703	土師黄土器 小皿	(8.0)	(6.0)	1.2~1.3	長石・内角石・石英・金雲母、 内面埋雑色 外面褐色	体部丸みもち立ちあがる	内面 面転ナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り	A級 D-3 P-4
1704	土師黄土器 小皿	(8.4)	(7.0)	1.4	内角石・斜長石、 内面淡褐色 外面褐色	体部斜方向へ	内面 面転ナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り後嵌り気味	B級 I-7 P-10
1705	土師黄土器 小皿	8.3	3.8	1.5~1.7	内角石・斜長石、 暗赤褐色	底部中央に穿孔あり 体部は斜方向に	内面 面転ナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り後ナナ	B級 B-1 P-30
1706	土師黄土器 小皿	(9.0)	(6.8)	1.3	内角石、 暗褐色	体部斜方向へのびる	内面 面転ナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り後ナナ	A級 C-3 P-1
1707	土師黄土器 小皿	(8.0)	(6.4)	1.7	長石、 埋雑色	体部の立ちあがりはやや急	内面 面転ナナ、見込みナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り	B級 H-5 P-4
1708	土師黄土器 小皿	(9.7)	(8.0)	1.4	内角石、 内面褐色 外やや暗褐色	体部は緩やかに立ちあがる	内面 面転ナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り後嵌り気味	B級 A-2 P-25
1709	土師黄土器 小皿	(10.6)	(6.8)	1.3	長石・内角石、 暗赤色	体部の立ちあがりは緩やかで斜方向へ	内面 面転ナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り	B級 A 4 P-7
1710	土師黄土器 小皿	9.6	7.2	1.7	内角石、 黄褐色	体部の立ちあがりは丸みもち口縁外反	内面 面転ナナ、見込みコナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り、一部短ナナの痕	B級 B-1 P-7
1711	土師黄土器 小皿	10.4	(6.9)	1.5	長石・赤色粘土・内角石、 淡黄褐色	体部の立ちあがりは緩やかで斜方向へ	内面 不定方向ナナ 外面 面転ナナ、底部糸切り	A級 H-5 P-22
1712	土師黄土器	(10.0)	—	—	内角石・斜長石・石英	明瞭が強い	内面 面転ナナ、高台隆付け、底部糸切り、嵌り気味	C級 C-5 P-5
1713	土師黄土器	(14.2)	—	—	内角石・長石・金雲母、 暗褐色	体部は急峻的に口縁へ	内面 面転ナナ、見込み不定方向ナナ 外面 面転ナナ、高台隆付け、底部糸切り、嵌り気味	A級 C 5 P-3
1714	土師黄土器	—	—	—	長石・赤色粘土、 内褐色、 外褐色	口縁部外反	内面 コナナ、斜め方向のへらミガキ 外面 コナナ、コナナミガキ	B級 D 1 P-1
1715	土師黄土器	—	7.0	—	石英、 黄褐色	断面方形の高台はけり付け	内面 面転ナナ、ミガキ 外面 面転ナナ、底部糸切り、一部短ナナの痕	A級 H-5 P-28
1716	土師黄土器	—	6.8	—	石英・長石、 黄褐色	高台外周にはけり付け	内面 面転ナナ 外面 面転ナナ、コナナ 断面 一方四角ナナ	C級 C-10 P-4
1717	内黄土器	(15.6)	(6.4)	5.6	内角石・斜長石、 内褐色、 外淡黄褐色	断面三角形の高台を外周側に付す	内面 面転ナナ、後様方向のミガキ 外面 面転ナナ、高台隆付け、底部糸切り	A級 A-7 P-1
1718	内黄土器	—	8.6~8.9	—	長石・内角石・赤色粘土、 内褐色、 外淡褐色	断面長方形の高台を外周側に付す	内面 面転ナナ、見込み中央にコナナ 外面 ミガキ、コナナ	A級 H 5 P-4

1719	内蔵土蟻塚	—	7.8	—	石膏・赤色粘土・角閃石、 内蔵色 外液緑色	内蔵状高台	内蔵 ミガキ? 外面 固結コナナテ、底部糸切り	A区 A-1 P-15
1720	内蔵土蟻塚	—	7.4	—	角閃石 内蔵褐色 外液暗褐色	内蔵状高台	内蔵 ミガキ 外面 底部糸切り、へう桶きの記号?	B区 C-1 P-8
1721	内蔵土蟻塚	—	(8.4)	—	—	体部下にツバ状の突帯を付す	内蔵 ミガキか? 外蔵 ナナテ	A区 H-1 P-28
1722	瓦礫塚	(25.2)	(6.0)	5.6	長石・角閃石 内蔵色、暗灰色	断面三角形の高台はり付け	内蔵 斜めのミガキ、固結コナナテ	A区 H-1 P-28
1723	瓦礫塚	(15.0)	(5.8)	5.4	角閃石、 灰白色～淡灰色	断面方形の高台はり付け	内蔵 固結ナナテ後ミガキ、固結ナナテ 外蔵 固結ナナテ後板方向のミガキ、固結ナナテ、高台はり付け	A区 A-1 P-16
1724	瓦礫塚	15.5	5.7	5.9	角閃石・長石、 暗灰色、灰白色、灰色	低い高台はり付け	内蔵 固結ナナテ、見込み固結ナナテ 外蔵 固結ナナテ、ミガキエ、高台はり付けナナテ、底部糸切り	B区 E-1 P-3
1725	瓦礫塚	16.5	6.2	5.8~6.0	角閃石・長石、 暗灰色	低い高台はり付け	内蔵 固結ナナテ、見込み固結ナナテ 外蔵 固結ナナテ、ミガキエ、高台はり付けナナテ、底部糸切り	A区 B-2 P-15
1726	瓦礫塚	(15.0)	(6.4)	6.0	石膏 淡黄褐色	断面平座	内外面 固結ナナテ	A区 G-11 P-4
1727	瓦礫塚	16.3	7.8	5.6	長石・灰色粘土、 暗灰色、灰白色、灰色	口縁部外面に雲ね積成 底部平座	内蔵 固結コナナテ、見込みコナナテ 外蔵 固結コナナテ、底部糸切り 後壁状はり	B区 D-1 P-3

第725図 瓦礫以外の柱穴出土遺物(3)

番号	部位	寸法 (cm)			土土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺物名
		口径	底径	高さ				
1728	瓦礫塚	(15.8)	7.2	6.1	角閃石・長石、 内蔵褐色 外・口縁暗褐色 (外・土の地)暗褐色	口縁外面にふね積成 底め底部で体部内蔵気味	内蔵 固結ナナテ、見込み不定方向ナナテ 外蔵 固結ナナテ、底部糸切り	B区 E 1 P-3
1729	瓦礫塚	15.2	7.4	5.9	角閃石・石膏、 暗灰色、灰白色	口縁外面にふね積成 底め底部で体部内蔵気味	内蔵 固結ナナテ後ミガキ、見込み不定方向ナナテ 外蔵 固結ナナテ、ミガキ、底部糸切り	B区 E 1 P-3
1730	瓦礫塚	16.3	7.8	5.8~5.9	角閃石・長石、 灰白色、淡灰色	口縁外面にふね積成 体部内蔵気味	内蔵 固結ナナテ、見込み不定方向ナナテ 外蔵 固結ナナテ、底部糸切り後ナナテ	B区 E-9 P-7
1731	瓦礫塚	15.4	7.4	6.0	長石・白色粘土、 暗灰色、灰白色	口縁外面に雲ね積成 底め底部で体部内蔵気味	内蔵 固結コナナテ、見込みコナナテ 外蔵 固結コナナテ、ミガキエ、底部糸切り	B区 D-1 P 3
1732	瓦礫塚	15.6	7.3	5.1~5.8	角閃石、 暗灰色、灰白色	口縁外面に雲ね積成 体部内蔵気味	内蔵 固結ナナテ、見込み固結ナナテ 外蔵 固結ナナテ、底部糸切り後一方側のミガキナナテ	B区 E-1 P-3
1733	瓦礫塚	(15.0)	—	—	石膏・白色粘土、 暗灰色～灰色	わずかに段をもち外蔵気味で口縁部へ	内蔵 ミガキ 外蔵 固結コナナテ、ミガキエ、一部段の工具がある	B-1 P-21
1734	瓦礫塚	(15.8)	—	—	角閃石・長石、 内蔵白色 外・内蔵色、灰白色、暗灰色	口縁外面にふね積成	内外面 固結ナナテ	B区 D-8 P-3
1735	瓦礫塚	(17.4)	—	—	石膏 淡褐色、灰白色	口縁外面に雲ね積成	内外面 固結ナナテ	A区 D-11 P-4
1736	瓦礫塚	(15.4)	—	—	長石・石膏、角閃石、 内蔵白色 (外)長石、灰白色	口縁外面に雲ね積成	内外面 固結ナナテ	B区 E-1 P-2
1737	瓦礫塚	—	8.5	—	角閃石・石膏、 内蔵白色 外・淡灰白色	断面三角形の高台はり付け	内蔵 固結ナナテ、ミガキ 外蔵 固結ナナテ、高台はり付けナナテ、底部糸切り、後固結ナナテ	B区 E-9 P-7
1738	瓦礫塚	—	5.5	—	石膏・長石、 暗色～灰白	断面三角形の高台はり付け	内蔵 ミガキ 外蔵 固結ナナテ、ミガキエ、不定方向のナナテ	A区 A-4 P-12
1739	瓦礫塚	—	(6.7)	—	角閃石・長石、 暗灰色	断面三角形の高台はり付け	内蔵 板方向のミガキ、固結ナナテ 外蔵 固結ナナテ、高台はり付けナナテ	A区 A-4 P 16
1740	瓦礫塚	—	(7.2)	—	長石、 内蔵褐色 (外)暗褐色	非常に細く低い高台あり	内蔵 固結ナナテ、見込み固結ナナテ 外蔵 固結ナナテ、高台はり付けナナテ、底部糸切り後コナナテ	A区 E-10 P-1
1741	瓦礫塚	—	(7.4)	—	長石	断面平座	内蔵 固結ナナテ 外蔵 固結ナナテ、底部糸切り	A区 D-10 P-3
1742	瓦礫小屋	—	—	—	石膏・雲母、 内蔵色 外・淡灰白色～灰白色	体部内蔵	内蔵 固結コナナテ 外蔵 固結コナナテ、底部糸切り	A区 A-2 P 6
1743	瓦礫小屋	(8.4)	(4.4)	2.1	暗色粘土・石膏・長石、 灰色	体部斜方向にのびる	内蔵 固結コナナテ 外蔵 固結コナナテ、高台はり付け	A区 H-2 P-16
1744	瓦礫小屋	9.4	6.8	1.9~2.1	角閃石・長石、 灰白色	体部の立ちあがりにはシャープ	内蔵 固結ナナテ、見込み不定方向ナナテ 外蔵 固結ナナテ、底部糸切り後ナナテ	B区 B 4 P-15

第726図 瓦礫以外の柱穴出土遺物(4)

番号	部位	寸法 (cm)			土土・色調	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の遺物名
		口径	底径	高さ				
1745	青瓷鉢	(12.0)	(6.4)	2.4	文様(内蔵)滑石質・外面・褐色 焼成肌あり	口縁縁取り	内蔵 全面滑石 文様一筆焼き	A区 J-8 P-42
1746	青瓷鉢	(15.0)	—	—	暗黄色っぽい緑、濁入あり 近・前・口の裏面白色	—	文様はくすんだ古で一筆焼き	A区 G-10 P-5
1747	白磁碗	(15.6)	—	—	暗灰色がかった白色	口縁縁部は縁外方に折れる	内外面 磨蝕	A区 H-2 P-7
1748	白磁碗	(8.0)	(3.8)	2.3	白色釉、貫入あり	狭めの縁部	内蔵 磨蝕、正ね強きの裏 外蔵 磨蝕、高台磨蝕、4ヶ所の 切込みあり	A区 G-16 P 6
1749	白磁碗	—	(6.6)	—	やや緑がかった白色釉	—	内外面 磨蝕 高台削削し、磨蝕	A区 E-1 P 2
1750	青磁研	(16.2)	—	—	暗灰色、輪厚0.8mm	—	透弁文	B区 C-3 P 14
1751	青磁碗	(17.0)	—	—	うすい緑色の釉、輪厚0.3~1mm	—	磨蝕弁文	B区 E-7 P 2

1752	古磁瓶	—	—	—	褐色色がかった緑色	見込み、内面文様あり	外蓋 短紐、高倉形出し、蓋面	A区 H-8 P-4
1753	古磁瓶	—	5.05	—	茶青・青色粒子、 黄緑褐色、内面に青入り	—	内蓋 短紐、見込みに流筋? 外蓋 短紐、高倉形出し	A区 G-2 P-4
1754	青磁皿 (13.0)	—	—	—	濁黄褐色 土灰白色	体部は屈曲し、口縁部へむかい斜方向にのびる	内蓋 短紐、流筋あり、一部に縁筋文様あり 外蓋 短紐、やや細かい青入り	A区 B-1 P-15
1755	瓦葺土器火鉢 (35.2)	—	—	—	黒色(内外面ともすず付層)	外蓋口縁下に突帯2条とスタンプ文	内蓋 縦方向のナデ 外蓋 ヨコナデ、縦方向のナデ、スタンプ文、横方向のナデ	A区 G-16 P-7
1756	瓦葺土器火鉢	—	—	—	黒褐色(すず付層)	体部下に突帯1条	内蓋 縦方向のナデ、横方向のナデ 外蓋 斜め方向のナデ、ヨコナデ、突帯筋付け	A区 G-15 P-3
1757	須磨器二鉢鉢 (27.6)	—	—	—	長石・白色粒子、 明褐色	口縁部上下差干線部	内蓋 ヨコナデ、下ー上のヘラナデ 外蓋 ヨコナデ、ユビオサエ	B区 D-1 P-2
1758	須磨器二鉢鉢 (28.6)	—	—	—	石英、 外蓋口縁部褐色 体の縁部白色	口縁部を上方に拡張	内外面 縦筋ヨコナデ	A区 D-6 P-3

第729図 器物以外の出土品(土遺物)

番号	名称	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	高さ	幅				
1759	土鍋	(53.8)	—	—	角閃石・ 内面黄褐色、暗褐色 (外)黄褐色、(底部)凝灰による 暗褐色	体部は下部で屈曲し、斜方向にのびる 縁部は短く外方に折れる 底面は丸底状	内蓋 ヨコナデ、見込み不安方向のナデ 外蓋 ナデ、縁子目タテ、底部 縦方向のナデ	A区 J-11 P-2
1760	土鍋	(41.2)	—	—	角閃石 (内)暗褐色 (外)すず付層の為に口縁部が 黒(二次産物)	口縁部平状に折れる	内蓋 ヨコナデ、ユビナデ 外蓋 ヨコナデ、ユビオサエ	B区 H-1 P-9
1761	土鍋	(35.7)	—	—	石英、 赤褐色(全体に二次産物)	口縁部外側に突帯	内蓋 縦方向のハケ、ユビオサエ 外蓋 ヨコナデ、斜め方向のハケ、 ユビナデ、縦方向のハケ 口縁に突帯あり	A区 E-9 P-2
1762	土鍋	(20.0)	—	—	角閃石・石英、 (内)暗赤褐色 (外)すず付層の為に暗褐色	口縁下に突帯	内蓋 ハケ状のものでココナデ、 ユビオサエ 外蓋 ヨコナデ、ユビオサエ、突帯 筋付け	B区 H-1 P-3
1763	土鍋	—	—	—	暗褐色 外面にすず付層	口縁部は短く外に折れる	内蓋 縦筋ヨコナデ 外蓋 ヨコナデ、ナデ、縦方向の ケズリ	A区 G-7 P-28
1764	茶釜	—	—	—	角閃石・長石、 内面淡茶褐色 外深褐色	体部中程に突帯	内蓋 短紐ナデ、ヨコナデ、ユビオサエ 外蓋 短紐ナデ、ケズリ、突帯筋 付け、ユビナデ、すず付層	A区 K-7 P-55
1765	瓦葺土器鉢鉢	—	—	—	長石・石英・青色粒干・白色粒干	口縁部内面に縁面三角形に凹窪	内外面 全体的に厚薄多い	A区 G-10 P-6
1766	須磨器鉢鉢	—	—	—	赤褐色	—	内外面 ヨコナデ、眉目単位10珠	A区 G-7 P-13
1767	須磨器鉢	—	—	—	灰色	—	内蓋 ヨコナデ、縦筋瓦葺 外蓋 横・斜め方向の縁がいろいろ	B区 D-8 P-3

第730図 その他の出土品(土遺物)

番号	名称	寸法 (cm)			胎土・色質	形態の特徴	手法・調整・文様	調査時の 遺構名
		口径	高さ	幅				
1768	土師質土器杯	15.2	9.5	3.5~2.6	角閃石・長石、 暗褐色	体部緩やかに立ちあがり体部内湾気味	内蓋 短紐ナデ、見込み縦筋ナ デ、ユビナデ 外蓋 短紐ナデ、蓋面糸切り 内蓋 短紐ヨコナデ、見込みユビ ナデ	B区 H-6
1769	土師質土器杯	(13.4)	(9.6)	2.9	角閃石・長石・青色粒干、 淡黄褐色	体部は丸みをもち立ちあがり口縁やや 外反気味	内蓋 短紐ヨコナデ、ユビナデ、蓋 面糸切り 外蓋 短紐ヨコナデ、ユビナデ、蓋 面糸切り	A区 表採
1769	土師質土器杯	(14.0)	8.6	3.5	角閃石・長石、 明褐色	体部斜方向にのびる	内蓋 短紐ヨコナデ、見込みユビ ナデ 外蓋 短紐ヨコナデ、蓋面糸切り	10H-レンチ
1769	土師質土器杯	14.0	7.9	3.5	角閃石・長石、 淡黄褐色	体部緩やかに立ちあがり口縁わずかに 外反	内蓋 短紐ナデ、短紐ナデ後流 しユビナデ、底面糸切り後→ 縁筋のヘラナデ 外蓋 短紐ナデ、短紐ナデ後流 しユビナデ、底面糸切り後→ 縁筋のヘラナデ	遺構名不明
1769	土師質土器杯	14.2	8.8	6.2	角閃石・長石・青色粒干・砂粒	体部は斜方向に直線的にのびる	内蓋 短紐ヨコナデ、ユビナデ 外蓋 短紐ヨコナデ、底面糸切り 縁筋状文様	A区 A-2 遺構面一様
1769	土師質土器杯	(13.2)	(6.4)	3.4	—	体部内湾気味	内蓋 短紐ヨコナデ、見込みユビ ナデ 外蓋 短紐ヨコナデ、蓋面糸切り	B区 遺構面一様
1769	土師質土器杯	(13.2)	(6.4)	3.5	長石・角閃石・茶色粒干・砂粒、 淡黄褐色	体部の立ちあがりには、体部内湾気 味	内蓋 短紐ヨコナデ、蓋面糸切り 外蓋 短紐ヨコナデ、見込みユビ ナデ	B区 表採
1769	土師質土器杯	(12.4)	7.0	3.0	角閃石・長石・青色粒干、 明褐色	体部内湾気味	内蓋 短紐ヨコナデ、蓋面糸切り 外蓋 短紐ヨコナデ、蓋面糸切り	B区 表採
1769	土師質土器杯	(11.0)	(8.4)	3.4	—	体部直立気味	内外面 ヨコナデ、底面糸切り	B区 遺構面一様
1769	土師質土器杯	—	(7.6)	—	長石・角閃石・金雲母・茶色粒干、 淡黄褐色	体部の立ちあがり緩やか	内蓋 短紐ヨコナデ、見込みユビ ナデ 外蓋 短紐ヨコナデ、ユビナデ、底 面糸切り 内蓋 短紐ヨコナデ、見込みユビ ナデ	B区 遺構面一様
1800	土師質土器杯	—	(8.0)	—	長石・青色粒干・白色粒干、 明褐色、明淡褐色	体部内湾気味	内蓋 短紐ヨコナデ、ユビナデ、底 面糸切り 外蓋 短紐ヨコナデ、ユビナデ、底 面糸切り	B区 表採
1801	土師質土器 小皿	(10.8)	(6.6)	1.4	角閃石・長石・茶色粒干、 明褐色	体部の立ちあがり緩やかで斜方向に のびている	内蓋 短紐ヨコナデ、蓋面糸切り 外蓋 短紐ヨコナデ、底面糸切り 後ナデ	10H-レンチ
1802	土師質土器 小皿	10.7	7.9~8.0	1.4	青色粒干・長石、 淡黄褐色	体部斜方向にのびる	内蓋 短紐ヨコナデ、見込みユビ ナデ 外蓋 短紐ヨコナデ、ユビナデ、底 面糸切り	A区 H-4 遺構面
1803	土師質土器 小皿	10.8	7.4	1.5	角閃石・長石・茶色粒干、 明褐色、淡明褐色(内)	体部の立ちあがり緩やか	内蓋 短紐ヨコナデ、見込みユビ ナデ 外蓋 短紐ヨコナデ、ユビナデ、底 面糸切り後縁筋状文様	10H-レンチ

1804	土師瓦土器 小皿	(11.0)	(7.0)	1.5	角閃石・長石・茶色結子、 明淡褐色	体部は縦やかに立ちあがり口縁や 外反	内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ 外面 面転コナナ、底部永切リ 面転コナナ	B区 道橋第一括
1805	土師瓦土器 小皿	10.8	8.7	1.7	長石・角閃石・白色結子、 黄褐色	体部斜方向にのびる	内面 コナナ、見込み不整ナデ 外面 コナナ、底部永切リ後縁 折反	B1区 試掘
1806	土師瓦土器 小皿	9.6	6.3	1.45	長石・角閃石・白色結子	体部斜方向にのびる	内面 コナナ、見込み不整ナデ 外面 コナナ、底部永切リ	B1区 試掘
1807	土師瓦土器 小皿	(11.2)	(7.0)	1.8	長石・長石・茶色結子、 黄褐色、灰淡褐色	体部斜方向にのびる	内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ 外面 面転コナナ、底部永切リ 内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ	B区 I-2 道橋第一括
1808	土師瓦土器 小皿	(15.2)	(7.8)	1.5	長石・茶色結子・白色結子、 淡褐色	体部内湾気味	内面 面転コナナ、底部永切リ 後縁折反	B区 道橋第一括
1809	土師瓦土器外 小皿	(8.8)	8.2	1.8	角閃石・長石・茶色結子、 明淡褐色	体部丸みをもち立ちあがり直立気味	内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ 外面 面転コナナ、ユビナデ、底 部永切リ	B区 道橋第一括
1810	土師瓦土器 小皿	8.9~10.4	6.8~6.4	1.9~2.4	角閃石・長石、 黄褐色	やや器高が高く斜方向にのびる	内面 面転コナナ、ユビナデ 外面 面転コナナ、底部永切リ	B区 A-4
1811	土師瓦土器 小皿	8.3	6.4	1.1	長石・茶色結子、 明淡褐色	体部やや内湾気味	内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ 外面 面転コナナ、底部永切リ 後縁折反	B区 道橋試掘出
1812	土師瓦土器 小皿	(7.8)	(5.8)	1.3	長石・茶色結子・石英、 淡明褐色	体部斜方向にのびる	内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ 外面 面転コナナ、底部永切リ	B区 E-2
1813	土師瓦土器 小皿	(7.8)	(6.0)	1.2	—	体部斜方向にのびる	内面 面転コナナ、底部永切リ	
1814	土師瓦土器 小皿	7.7	5.9	1.2	角閃石・長石、 淡褐色	体部斜方向にのびる	内面 面転コナナ 外面 面転コナナ、底部永切リ後 縁折反	遺構不明
1815	土師瓦土器 小皿	(7.4)	(5.4)	1.1	長石・角閃石・茶色結子、 黄褐色	体部斜方向にのびる	内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ 外面 面転コナナ、底部永切リ 内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ	B区 道橋試掘出
1816	土師瓦土器 小皿	(6.2)	(6.0)	1.3	長石・茶色結子、 黄褐色、明褐色	底部厚く、体部斜方向にのびる	内面 面転コナナ、底部永切リ 外面 面転コナナ、見込みコビ ナデ	B区 C-6 道橋第一括
1817	土師瓦土器 小皿	7.4	5.7	1.5	角閃石・長石・茶色結子・白色 結子・石英・金雲母、 黄褐色	底部厚く、体部斜方向にのびる	内面 面転コナナ、底部永切リ 外面 面転コナナ、見込みコビ ナデ	B区 C-5 道橋第一括
1818	土師瓦土器 小皿	6.6	5.4	1.4	角閃石・長石・茶色結子・白色 結子・石英・金雲母、 淡褐色	体部斜方向にのびる	内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ 外面 面転コナナ、底部永切リ	B区 C-5 道橋第一括
1819	土師瓦土器 小皿	(8.0)	(6.3)	1.2	—	体部直立気味	内外面 面転コナナ、底部永切リ	
1820	土師瓦土器 小皿	8.0	6.3	1.8	角閃石・長石・砂粒、 明淡褐色	やや器高が高く、体部直立気味	内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ 外面 面転コナナ、底部永切リ 内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ	A区 試掘
1821	土師瓦土器 小皿	8.2	6.2	1.5	長石・石英・茶色結子、 黄褐色、明淡褐色	体部内湾気味	内面 面転コナナ、底部永切リ 外面 面転コナナ、底部永切リ	B区 道橋試掘出
1822	土師瓦土器 小皿	8.4	7.2	1.4	長石・茶色結子・石英、 淡褐色、明褐色	体部の立ちあがりはシャープで口縁 直立気味	内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ 外面 面転コナナ、底部永切リ 内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ	B区 道橋試掘出
1823	土師瓦土器 小皿	(8.0)	(7.4)	1.0	長石・茶色結子、 明淡褐色	器高低く、体部内湾気味	内面 面転コナナ、底部永切リ 外面 面転コナナ、見込みコビ ナデ	B区 道橋第一括
1824	土師瓦土器 小皿	(7.2)	(6.4)	1.2	茶色結子・長石・金雲母、 黄褐色	体部直立気味	内面 面転コナナ、見込みコビ ナデ 外面 面転コナナ、底部永切リ	B区 F-6
1825	土師甕形	(15.8)	(5.8)	—	角閃石・砂粒、 淡茶褐色	断面三角形気味の高さはり付け 体部は腰があまり張らない	内面 面転コナナ 外面 面転コナナ、へらガキ、 コナナ、底へらガキ付ナデ	築石10
1826	土師甕形	(15.8)	—	—	石英、 黄褐色	口縁部短く外反	内外面 面転コナナ後縁方向の へらガキ	B区 L-1
1827	土師甕形	—	(8.3)	—	角閃石・長石・石英、 黄褐色	高い高さはり付け	内面 コビナデ、高台付付け、ユ ビナデ、底部永切リ後縁折反 外面 三方キ、見込みコビナデ分 外周三方キ、高台付付け、底部 永切リ、へらガキ	10トレンチ
1828	土師甕形	—	(5.7)	—	角閃石・長石、 黄褐色	断面方形の高さはり付け	内面 三方キ、見込みコビナデ分 外周三方キ、高台付付け、底部 永切リ、へらガキ	B区 A-5
1829	土師甕形	—	(8.0)	—	角閃石・長石・茶色結子・石英、 内湾褐色(すずみ付) 外湾黄褐色	断面三角形気味の高さはり付け	内面 傾斜のへらガキ 外面 ココへらガキ、高台付付け ナデ、底部永切リ	B区 A-4
1830	土師甕形	—	(6.6)	—	角閃石・長石・茶色結子、 内湾灰褐色 外湾黄褐色	断面三角形気味の高さはり付け	内面 丁字なコビナデ 外面 コビナデ、底部永切リ	B区 道橋試掘出
1831	土師甕形	—	(8.0)	—	角閃石・長石・茶色結子、 明淡褐色	断面方形の低い高さはり付け	内面 ココへらガキ 外面 面転コナナ、ユビナデ、 コビナデ	道橋試掘出 第一括
1832	土師甕形	—	(6.6)	—	角閃石・長石、 黄褐色	断面三角形の低い高台 外反側へらガキ	内面 へらガキ 外面 高台コナナ、底部永切リ	築石2

表7-20 其の他の出土遺物(2)

番号	種名	口径	高さ	底径	器高	胎土・色別	形態の特徴	手法・副産・文様	試掘名の 遺構名
1833	内庫土器碗	—	(8.6)	—	—	長石、 内湾褐色 外湾黄褐色	内湾枕状高台	内面 コビナデ 外面 ナデ、底部永切リ後縁折反 底の成り代ナデ	—
1834	内庫土器碗	—	(7.2)	—	—	角閃石・長石・茶色結子、 内湾灰褐色 外湾黄褐色	円筒状高台	内面 面転ナデ 外面 面転ナデ、底部永切リ	10トレンチ
1835	内庫土器碗	(16.4)	—	—	—	角閃石・長石・茶色結子、 黄褐色、淡褐色	口縁部縁やに外反	内外面 面転コナナ	—
1836	内庫土器碗	—	(8.0)	—	—	角閃石・長石・茶色結子、 明淡褐色	断面方形の高さはり付け	内面 丁字なナデ 外面 面転コナナ、ユビナデ、底 部永切リ	B区 G-9 道橋第一括
1837	内庫土器碗	—	(8.2)	—	—	角閃石・長石、 内湾褐色 外湾黄褐色	断面長方形の高さはり付け	内面 丁字なナデ、ユビナデ分 外周 面転コナナ、ユビナデ分 コビナデ、底部永切リ後縁折反	10トレンチ

1838	内蔵土器鉢	-	(6.2)	-	黄石・茶色粒子、 黄白色、茶色	断面方形の高台はり付け	内面 コナナメヘラミガキ 外面 凹形コナナナ、高台コナナ ナ、底面糸のり後取付	B区 2
1839	内蔵土器瓶	-	(7.8)	-	黄陶土 黄青 黄褐色、 内蔵灰色 外 濃緑褐色、底面黒色	断面長方形の高台はり付け	内面 丁字ナナナ、ヘラミガキ 外面 凹形コナナ、高台コナナ ナ、底面コナナ、ヘラミガキ	16-Lシナナ
1840	内蔵土器鉢	-	(6.4)	-	石黄・粉緑、 内蔵灰色 外 濃褐色	断面三角形の高台はり付け	内面 平高台のヘラミガキ 外面 コナナナ、底面糸切り、ヘラ ミガキ	裏石 9
1841	内蔵土器碗	-	7.2	-	内陶石・黄石・石黄・茶色粒子、 明灰褐色	内筒状高台	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸切り	B区 A 1 透柿面一括
1842	五瓣菊	(14.9)	(5.8~6.0)	5.4	内陶石、 灰白色	断面三角形の高台はり付け	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸切り	B区 C-4
1843	五瓣菊	(15.0)	(5.0)	6.2	黄石、 灰白色	断面三角形の高台はり付け	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸切り	B区 C-0
1844	五瓣菊	(18.8)	(7.8)	-	黄石・白色粒子、 灰白色、灰褐色	厚みの底面から内湾気味の体部が 立ちあがる	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸切り	A区 表鉢一括
1845	五瓣菊	(16.6)	7.6	-	黄石・白色粒子、 淡灰色、黄灰白色(口縁部の一 部)	厚みの底面から内湾気味の体部が 立ちあがる	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸切り	B区 透柿面一括
1846	五瓣菊	(16.2)	7.2	4.0	黄石 灰白色、暗灰色	厚みの底面から内湾気味の体部が 立ちあがる	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸切り	B区 A-2
1847	五瓣菊	(16.0)	(7.4)	5.8	黄石・白色粒子、 灰白色、淡灰色	厚みの底面から内湾気味の体部が 立ちあがる	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸切り	B区 透柿面一括
1848	五瓣菊	(15.0)	(7.8)	5.7	内陶石・黄石・白色粒子・茶色 粒子、 黄白色	厚みの底面から内湾気味の体部が 立ちあがる	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸切り	B区 透柿面一括
1848	五瓣菊	(15.4)	(7.8)	5.8	黄石・白色粒子・茶色粒子、 暗灰色、淡灰色	厚みの底面から内湾気味の体部が 立ちあがる	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸切り	B区 表鉢一括
1850	五瓣菊	(14.2)	-	-	内陶石・黄石・白色粒子、 暗灰色、淡褐色、 黄灰色(口縁部)	-	内面 凹形コナナ 外面 凹形コナナ、底面糸切り	B区 C-9 透柿面一括
1851	五瓣菊	(13.6)	-	-	内陶石・黄石・茶色粒子、 灰白色、灰白色	-	内面 凹形コナナ 外面 凹形コナナ	B区 透柿面一括

第121回 そのの出土品目録

番号	器 種	口径 (cm)			胎土・色質	形造の特徴	手法・装束・文様	調査時の 遺構名
		口徑	底徑	高さ				
1852	五瓣菊	-	-	-	内陶石・黄石、 淡緑褐色	口縁部ちかくで直立する	内面 コナナヘラミガキ 口縁に黄白色	B区透柿面
1853	輪蓋型土器鉢	-	6.0	-	暗灰色	外開きの高台をはり付け	内面 見込み高台目録のヘラ ミガキ 外面 コナナ	透柿面 裏鉢一括
1854	碗型型土器碗	-	5.8	-	黄石、 明灰褐色	口縁うすい	内面 コナナメヘラミガキ 内面 凹形コナナ、高台コナ ナナ、底面糸切り	B区 透柿面一括
1855	五瓣菊	-	8.0	-	内陶石・黄石・茶色粒子、 明灰白色	断面方形の高台はり付け	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、高台コナ ナナ、底面糸切り	B区 A 2 透柿面一括
1856	五瓣菊	-	(5.4)	-	-	断面長方形の高台はり付け	内外面 ナナ	B区
1857	五瓣菊	-	6.0	-	黄石・白色粒子、 明灰褐色	断面三角形の高台はり付け	内面 コナナメヘラミガキ 外面 凹形コナナ、底面糸 切り	B区 透柿面
1858	五瓣菊	-	(6.8)	-	黄石・内陶石・石黄、 灰白色、暗灰色	断面方形の高台はり付け	内面 丁字ナナナ 外面 コナナナ	B区 透柿面一括
1859	五瓣菊	-	(5.4)	-	内陶石・黄石、 黄褐色	断面三角形の高台はり付け	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸 切り	B区 透柿面一括
1860	五瓣菊	-	(5.8)	-	黄石・白色粒子、 明灰褐色	低い高台をはり付け	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸 切り	B区 A 4 透柿面一括
1861	五瓣菊	-	(7.0)	-	内陶石・黄石、 灰白色	低い高台をはり付け	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸 切り	B区 透柿面一括
1862	五瓣菊	-	(7.2)	-	内陶石・黄石・茶色粒子・白色 粒子・石黄、 淡灰色	低い高台をはり付け	内面 凹形コナナ、高台コナ ナナ、底面糸切り	B区 A-2
1863	五瓣菊	-	7.4	-	内陶石・黄石・茶色粒子、 灰白色、淡褐色	低い高台をはり付け	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸 切り	A区 表鉢
1864	五瓣菊	-	(7.2)	-	内陶石・黄石、 淡灰色、暗灰色(底面)	平底底部 外底面にヘラミガキ	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸 切り	B区 D-8 透柿面一括
1865	五瓣菊	-	(7.2)	-	内陶石・黄石、 暗灰色、淡灰色	平底底部	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸 切り	B区 透柿面一括
1866	五瓣菊	-	(7.6)	-	内陶石・黄石・石黄、 黄褐色	平底底部	内面 凹形コナナ、見込みコナ ナナ 外面 凹形コナナ、底面糸 切り	B区 透柿面一括
1867	五瓣菊	-	6.8	-	黄石、 淡灰色	平底底部	内面 凹形コナナ、底面糸 切り	B区 C-8 透柿面一括

1868	瓦器壱	-	(7.0)	-	長石・白色粒子、 淡灰色	平底罐部	内面 白磁コナナ、見込みコビ ナデ 外面 白磁コナナ、コビナデ、底 部黒色切り	B区 A-2 透模面一括
1869	瓦器壱	-	(7.0)	-	角閃石、 緑灰色	平底罐部	内面 白磁コナナ、見込みコビ ナデ 外面 白磁コナナ、コビナデ、底 部黒色切り	B区 C 6 透模面一括
1870	瓦器壱	-	(7.2)	-	角閃石・長石・茶色粒子、 内淡褐色 外淡褐色	平底罐部	内面 白磁コナナ、見込みコビ ナデ 外面 白磁コナナ、コビナデ、底 部黒色切り	B区 D-1 透模抽出面 一括
1871	瓦器壱	-	7.0	-	長石・白色粒子・石英、 淡灰色	平底罐部	内面 白磁コナナ、見込みコビ ナデ 外面 白磁コナナ、コビナデ、底 部黒色切り	B区 表様
1872	瓦器壱	-	7.4	-	角閃石・長石・茶色粒子、 内淡褐色 外灰白色	平底罐部	内面 白磁コナナ、見込みコビ ナデ 外面 白磁コナナ、コビナデ、底 部黒色切り	B区 B 2 透模面一括
1873	瓦器壱	-	7.0	-	角閃石・長石・白色粒子、 淡灰色	平底罐部	内面 白磁コナナ、見込みコビ ナデ 外面 白磁コナナ、底部病状注 文あり	B区 透模抽出 面
1874	瓦器壱	-	7.4	-	長石・角閃石・茶色粒平・石英、 灰白色	平底罐部	内面 白磁コナナ、見込みコビ ナデ 外面 白磁コナナ、コビナデ、底 部黒色切り	A区 表様
1875	瓦器壱	-	(7.6)	-	角閃石・長石・金雲母、 緑灰色	平底罐部	内面 白磁コナナ、ナデ 外面 白磁コナナ、底部赤切り透 模面あり	B区 F-6
1876	瓦器壱	-	8.0	-	角閃石・長石・茶色粒子、 黄褐色(黄白色に近い)	平底罐部	内面 白磁コナナ、見込みコビ ナデ 外面 白磁コナナ、底部赤切り 透模面あり	B区 透模抽出 面
1877	瓦器小皿	(8.3)	(6.4)	1.7	長石・石英、 黄褐色、 灰白色	体部直立状態に立ち あがる	内面 白磁コナナ、 外面 白磁コナナ、底部赤切り 透模面あり	B区 E-4
1878	瓦器小皿	(8.8)	(5.6)	2.5	長石・茶色粒子、 淡灰色	内面平らな面からシェーブに立ち あがる	内面 白磁コナナ、 外面 白磁コナナ、底部赤切り 透模面あり	B区 透模抽出 面
1879	楕圓型瓦器壱	(9.6)	(5.0)	2.8	長石、 灰色	半製面 体部内湯気味	内面 白磁コナナ、底部赤切り 透模面あり	B区 C-6
1880	青磁壱	(17.4)	-	-	緑灰色	-	内外面 全面施青 澤あり	A区 表様
1881	青磁壱	(16.4)	(5.4)	-	緑灰色(灰オリーブ緑)	-	内外面 全面施青 澤あり	B区 表様
1882	白磁壱	-	-	-	灰白色	口縁玉縁	内外面 全面施青 澤あり	A区 表様
1883	黄磁壱	-	(4.0)	-	茶緑灰色、金剛に貫入あり	-	内外面 全面施青 澤あり	B区 透模抽出 面
1884	白磁壱	-	(5.9)	-	黄白色、金剛に貫入あり	-	内外面 全面施青 澤あり	B区 透模抽出 面
1885	青磁壱	-	(6.2)	-	白っぽい緑色の釉	-	内面 施青、一部高脚 外面 一部施青、高台筋線、削り あり	B区 E-6

第732回 その他の出土遺物(4)

番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土・色質	形姿の特徴	手法・装飾・文様	調査書の 記述名
1886	須恵焼こむすび	(29.2)	-	-	長石・角閃石・石英、 淡灰色	口縁部を上方に拡張	内面 ナメナデ上げ 外面 白磁コナナ	B区 透模面一括
1887	須恵焼こむすび	-	-	-	長石、 黄褐色	口縁部肥厚	内面 コナナ、ナデ 外面 コナナ、白磁コナナ	B区 E 7
1888	瓦質土器 こむすび	-	-	-	長石、 淡灰色	-	内面 ナメナデ目 外面 コナナ、ユビオサエ	B区 D-1 透模面一括
1889	瓦質土器 こむすび	-	-	-	長石・茶色粒平・灰色粒平、 淡灰褐色	口縁部肥厚気味で、わずかに内折す る	内外面 白磁コナナ	B区 透模抽出 面一括
1890	瓦質土器 こむすび	-	(8.8)	-	角閃石・長石、 内淡褐色 外灰白色	断面方形の扁筒	内面 白磁コナナ 外面 白磁コナナ、底部赤切り、高 脚状抽出面あり	B区 O-1 P 4
1891	瓦質土器火鉢	-	-	-	緑灰褐色	体部下に突帯1条	内面 ナメナデ目、コナナ、ナデ 外面 コナナ、ユビオサエ	土塊3
1892	土鍋	-	-	-	角閃石・長石・茶色粒平・白色 粒平、 内淡褐色 外淡褐色 石英・金雲母 赤褐色	体部彫削気味で、口縁八字状に折れ る	内外面 コナナ	黒石2
1893	土鍋	-	-	-	角閃石・長石・茶色粒平・白色 粒平・石英、 赤褐色	口縁部外方に折れる	内面 コナナ、ナデ 外面 コナナ、ナデ、ユビオサエ	P-5
1894	土鍋	-	-	-	角閃石・長石・茶色粒平・白色 粒平・石英、 赤褐色	口縁部くの字状に折れる	内面 白磁コナナ、コナハク 外面 白磁コナナ、ユビオサエ	B区 H-3 透模面一括
1895	土鍋	-	-	-	角閃石・長石、 赤褐色	口縁部大き外反	内面 コナナ 外面 コナナ、ナメナデ目	試掘トレンチ
1896	土鍋	(40.4)	-	-	角閃石・長石・白色粒平、 内淡褐色、赤色、二次加焼に よる赤変 石英・角閃石・赤鉄 石・内赤褐色	口縁部強く折れる	内面 コナナ、コナハク目 外面 ナメナデ目、ユビオサエ	黒石2
1897	土鍋	(39.2)	-	-	角閃石・長石・茶色粒平・白色 粒平・石英、 淡褐色	口縁部大き外反	内面 コナナ、ナデ 外面 コナナ、ナデ、ハク目	No.2
1898	土鍋	-	-	-	角閃石・長石・茶色粒平・白色 粒平・石英、 淡褐色、茶褐色	半球形の体部	内面 コナナ目、ナデ上げ 外面 ユビオサエ、ナメナ デ上げ	黒石2
1899	土鍋	-	-	-	角閃石・長石・白色粒平・茶色 粒平・石英・金雲母、 淡黄褐色、淡褐色	-	内外面 ナメコナナハク目 ユビオサエ	B区 A-2 透模面一括

第713図 その他の出土遺物(5)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形状の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺物名
		口径	底径	高さ				
1900	土瓶	--	--	--	内面 灰石・茶色粘土・白色 粘土・石膏 淡明褐色。暗褐色(すず付露)	口縁部L字状に折れる	内面 白磁コナナデ 外面 白磁コナナデ、ユビオサエ	B区 G-5 遺構層一画
1901	土瓶	(29.0)	約9.5 (25.5)	--	内面 灰石・茶色粘土・茶色 粘土・石膏 内淡灰色 (内淡褐色(すず付露))	口縁部は外方に折れる	内面 白磁コナナデ、ヨコハク目 外面 白磁コナナデ、ナメハク 目	試験シテナ
1902	土瓶	(34.2)	--	--	内面 灰石・茶色粘土・石膏 粘土・石膏 内淡灰色 (内淡褐色(すず付露))	口縁部L字状に折れる	内面 白磁コナナデ 外面 白磁コナナデ、ナデ	B区 遺構層一画
1903	土瓶	--	--	--	内面 灰石・茶色粘土・石膏 粘土・石膏 内淡灰色 (内淡褐色(すず付露))	口縁部短く折れ、やや上方に拡張	内面 白磁コナナデ、ヨコハク目 外面 白磁コナナデ、ナメハク 目	B区 遺構層一画
1904	土瓶	--	--	--	茶色粘土・ 明淡褐色	口縁部短く折れる	内面 白磁コナナデ、ヨコハク目 外面 白磁コナナデ、ユビオサエ	B区 表層
1905	土瓶	--	--	--	内面 灰石・茶色粘土・ 明淡褐色	口縁部短く折れ、上方にやや拡張	内面 白磁コナナデ 外面 白磁コナナデ、タテハク 目	B区 遺構層一画
1906	土瓶	--	--	--	石膏・砂粒 内暗褐色 明淡褐色(すず付露)	口縁部短く折れる	内面 白磁コナナデ、ナデ 外面 ヘラ杖工具でコナナデ、ケ ズリ	P 7
1907	土瓶	--	--	--	暗褐色	口縁部短く折れる	内面 白磁コナナデ、ナデ 外面 白磁コナナデ、ケズリ	土蔵2
1908	土瓶	--	--	--	石膏・角閃石・砂粒 内淡褐色 (内淡褐色(すず付露))	体部斜方向にのび口縁へ	内面 白磁コナデ、ユビオサエ 外面 白磁コナデ、ヘラケズリ	No.3
1909	土瓶	--	--	--	石膏・角閃石・砂粒 内淡褐色 内淡褐色	やや外反気味に口縁へ	内面 雑質のため不明 外面 白磁コナデ、ナデ	P 6
1910	土瓶	--	--	--	石膏・砂粒 白っぽい褐色	やや外反気味に口縁へ	内面 白磁コナデ、ハケ目 外面 白磁コナデ、ハケの上からナ デ	B区 E-6
1911	土瓶	(27.6)	--	--	角閃石・灰石・白色粘土・ 淡褐色 茶褐色二次浸透によるすず付 露	口縁からやや下って外面に突帯	内面 白磁コナナデ、ユビオサエ、 ナメハク目 外面 白磁コナナデ、ユビオサエ	B区 遺構層一画
1912	土瓶	(24.4)	--	--	角閃石 内暗褐色 外江口付近の淡褐色	口縁下に突帯	内面 灰方向のハケ目 外面 白磁コナデ	B区 E-5
1913	土瓶	(20.2)	--	--	内面 灰石・茶色粘土・ 淡褐色	口縁下に突帯	内面 白磁コナデ、ヨコハク目 外面 白磁コナナデ、ナデ	B区 D-4、E-4、 E-6
1914	土瓶	--	--	--	内面 灰石・茶色粘土・ 明淡褐色	口縁下に突帯	内面 白磁コナナデ 外面 白磁コナナデ、ユビナデ	B区 遺構層一画
1915	器種不明	--	--	--	内面 灰石・白色粘土・茶色粘土・ 茶褐色・明褐色(内面) 外面 灰石・茶色粘土・ 茶褐色、暗褐色	--	内外面 白磁コナナデ	A区 表層
1916	土瓶	--	--	--	二次浸透により黄変	--	ユビオサエ	B区 表層
1917	土瓶	--	--	--	白色粘土・灰石・茶色粘土・角 閃石・石膏 明淡褐色、明褐色 火焼による黄変	--	手づね ユビオサエ、ユビナデ	B区 遺構層一画

第714図 その他の出土遺物(6)

番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形状の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺物名
		口径	底径	高さ				
1918	甕形甕	--	--	--	灰石 白色粘土・ 茶褐色	口縁外反、肩部上下の拡張	内面 白磁コナナデ、ヨコハク目 外面 白磁コナナデ、ハケ目	B区 遺構層一画
1919	甕形甕	--	--	--	茶褐色	--	内面 不定方向のヘラナデ 外面 一方のヘラナデ	P-7
1920	甕形甕	--	(19.2)	--	石膏・ 内淡白色 外暗灰色	球形気味の体部か	内面 ユビオサエ、ユビナデ、ヨ コハク目 外面 斜め方向の平打タタキ、産 物ナデ	B区 B-5
1921	小甕	2.5	5.0	5.8	白色粘土・灰石・ 明淡褐色	四方にへら開きの縮面	外面 ユビオサエ、産物のナ デ、産物ヘラタタキ	表層
1922	フイゴの頸口	外径 (8.4)	内径 (4.8)	2.8	白色粘土・灰石・茶色粘土・茶 色粘土・石膏・ 淡明褐色 暗灰色(すず付露)	--	手づね、タチナデ 内面にしぼり痕あり	B区 A-2 遺構層一画

第741図 試験採取出土遺物

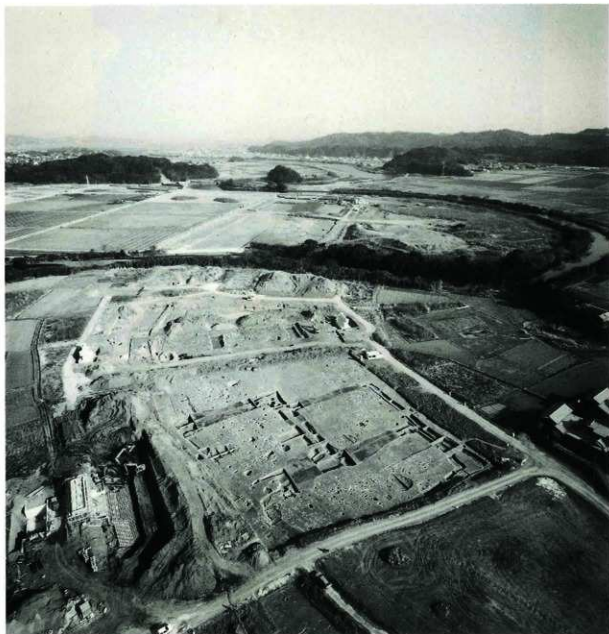
番号	器種	法量 (cm)			胎土・色調	形状の特徴	手法・装飾・文様	調査時の 遺物名
		口径	底径	高さ				
1945	内蓋土器	15.2	8.2	5.8	角閃石・砂粒 内淡褐色 外淡褐色	口縁部外反、比較的高い肩台を伴 付	内面 白磁コナナデ、ナメハク 目 外面 白磁コナナデ、ヘラタタキ、高 台粘付、底縁本切り縁留工 具によるすず 付露	試験
1946	内蓋土器	15.5	8.0	5.9-6.2	内面 灰石・茶色粘土・ 内・外口縁部暗褐色 外淡明褐色	口縁部外反、外側部の肩台を伴 付	内面 白磁コナデ、ヘラタタキ 外面 白磁コナナデ、高台粘 付、ヨコハク目、底縁本切り 後ナデ	試験
1947	内蓋土器	(15.2)	(7.2)	6.3	内面 灰石・砂粒 内淡褐色 外淡明褐色	口縁部外反、外側部の肩台を伴 付、体部下にフイゴの突帯	内面 ナメコヘラタタキ 外面 白磁コナナデ、ヨコハク 目、高台粘付、底縁本切り	試験
1948	古磁器	19.0	8.5	4.4	淡褐色	底の背縁から口縁部が外方に折 れる	外表面を焼き全面施釉	試験
1949	甕形甕	5.6	11.5	(23.8)	茶褐色→淡褐色	断面ですず付口縁へむき、開 く	白磁コナデ	試験



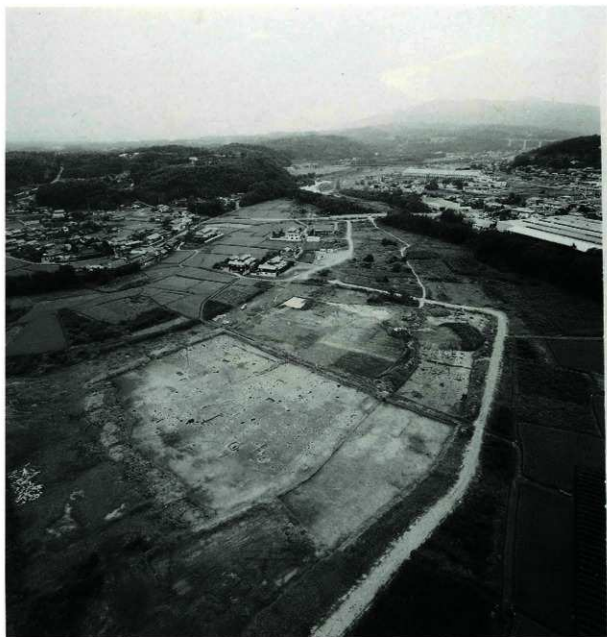
八坂中遺跡全景（北から）



八坂中遺跡全景（北東から）



八坂中遺跡から八坂川下流方向（八坂本庄遺跡・八坂久保田遺跡）を見る



八坂中遺跡遠景（北東から）



八板中遺跡東半分



八板中遺跡居館及び周辺の溝



八坂中遺跡居館2（上から）



八坂中遺跡居館3（上から）



八坂中遺跡井戸 1



八坂中遺跡井戸 2



八坂中遺跡地下式土壙 1 骨出土状況



八坂中遺跡地下式土壙 1



八坂中遺跡地下式土壙 2



八坂中遺跡地下式土壙 4



八坂中遺跡地下式土壙 1・2



八坂中遺跡土壙器 1



八坂中遺跡土墳墓 1 出土土器



八坂中遺跡土墳墓 2



八坂中遺跡土墳墓 3



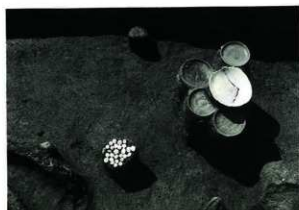
八坂中遺跡土墳墓 4



八坂中遺跡土墳墓 7



八坂中遺跡土墳墓 8



八坂中遺跡土墳墓 8 出土遺物



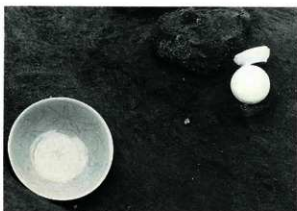
八坂中遺跡土墳墓 12



八坂中遺跡土墳墓13



八坂中遺跡土墳墓14



八坂中遺跡土墳墓14出土遺物



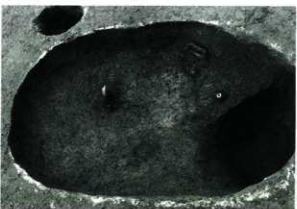
八坂中遺跡土墳墓15



八坂中遺跡土墳墓16



八坂中遺跡土墳墓17



八坂中遺跡土墳墓18



八坂中遺跡土墳墓20



八坂中遺跡土墳墓20出土數珠



八坂中遺跡土墳墓20出土齒



八坂中遺跡土墳墓21



八坂中遺跡土墳墓23



八坂中遺跡土墳墓24



八坂中遺跡土墳墓24出土鉄器



八坂中遺跡土墳墓26



八坂中遺跡周溝墓1



八坂中遺跡周溝墓 1 主体部



八坂中遺跡周溝墓 1 完振状態



八坂中遺跡壘棺 1・2 出土状況 (1)



八坂中遺跡壘棺 1・2 出土状況 (2)



八坂中遺跡壘棺 1



八坂中遺跡壘棺 2



八坂中遺跡壘棺 1 出土直



八坂中遺跡壘棺 3



八坂中遺跡甕棺 3人骨出土状況



八坂中遺跡竪穴 1



八坂中遺跡竪穴 2



八坂中遺跡土壇 11



八坂中遺跡土壇 12



八坂中遺跡土壇 13



八坂中遺跡土壇 16



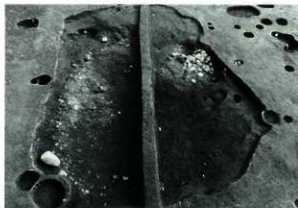
八坂中遺跡土壇 24



八坂中遺跡土坑26



八坂中遺跡土坑26完掘状態



八坂中遺跡土坑49



八坂中遺跡土坑70具殻出土状況



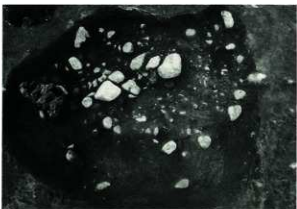
八坂中遺跡土坑70出土具殻



八坂中遺跡土坑74



八坂中遺跡土坑75



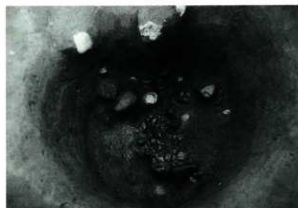
八坂中遺跡土坑76



八坂中遺跡土坑100石組み



八坂中遺跡土坑157



八坂中遺跡土坑160



八坂中遺跡土坑165



八坂中遺跡土坑187



八坂中遺跡土坑195



八坂中遺跡土坑196 (1)



八坂中遺跡土坑196 (2)



八坂中遺跡溝 1 (北から)



八坂中遺跡溝 4 (東から)



八坂中遺跡溝 5 (東から)



八坂中遺跡溝 5 出土五徳



八坂中遺跡溝 9 (北から)



八坂中遺跡溝 9 完掘状態 (北から)



八坂中遺跡溝 10・溝 11 南辺 (東から)



八坂中遺跡溝 10・溝 13・溝 14 土層図



八坂中遺跡溝10出土貝殻



八坂中遺跡溝11出土遺物



八坂中遺跡溝13西辺土層図



八坂中遺跡溝13石組み（北から）



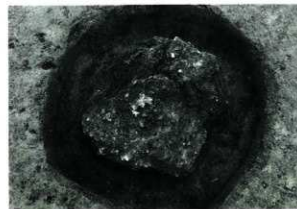
八坂中遺跡溝13北辺（東から）



八坂中遺跡溝14石組み（東から）



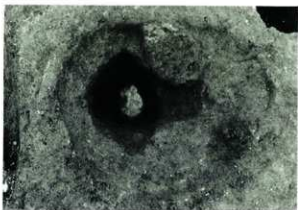
八坂中遺跡 SX 1、SX 2



八坂中遺跡 SX 4



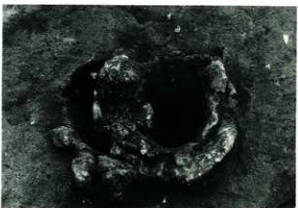
八坂中遺跡 SX5



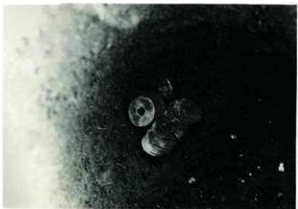
八坂中遺跡 SX6



八坂中遺跡 SX8



八坂中遺跡 SX9



八坂中遺跡柱穴 3 錢貨出土狀況



八坂中遺跡柱穴 6 瓦器碗出土狀況



八坂中遺跡柱穴 7 鉄刀出土狀況



作業風景



八坂中遺跡地下式土壙 2 59



八坂中遺跡地下式土壙 3 60



八坂中遺跡土壙墓 1 71



八坂中遺跡土壙墓 4 72



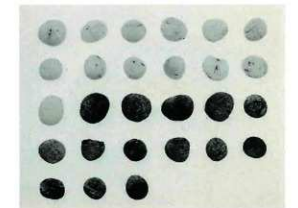
八坂中遺跡土壙墓 8 81



八坂中遺跡土壙墓 8 80



八坂中遺跡土壙墓 8 79



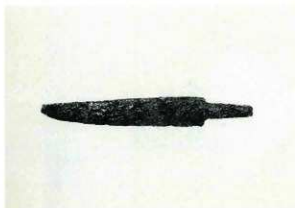
八坂中遺跡土壙墓 8 85~111



八坂中遺跡土墳墓12 122



八坂中遺跡土墳墓12 127



八坂中遺跡土墳墓12 126



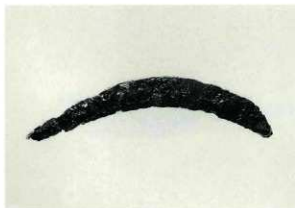
八坂中遺跡土墳墓13 129



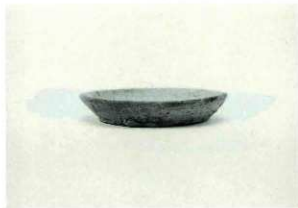
八坂中遺跡土墳墓14 131



八坂中遺跡土墳墓14 130



八坂中遺跡土墳墓14 132



八坂中遺跡土墳墓20 156



八坂中遺跡土墳墓20 152



八坂中遺跡土墳墓20 155



八坂中遺跡土墳墓20 154



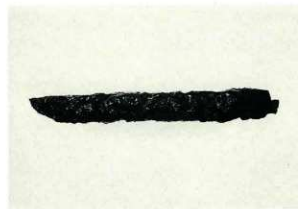
八坂中遺跡土墳墓20 153



八坂中遺跡土墳墓20 150



八坂中遺跡土墳墓20 158~182



八坂中遺跡土墳墓24 207



八坂中遺跡土墳墓25 212



八坂中遺跡土墳墓25 210



八坂中遺跡土墳墓25 209



八坂中遺跡土墳墓26 216



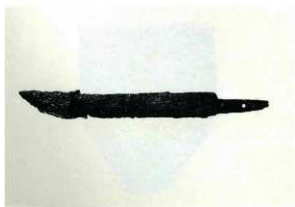
八坂中遺跡土墳墓26 218



八坂中遺跡土墳墓26 219



八坂中遺跡土墳墓26 220



八坂中遺跡土墳墓26 221



八坂中遺跡周溝墓1 222



八坂中遺跡周溝墓 1 236



八坂中遺跡周溝墓 1 228



八坂中遺跡周溝墓 1 227



八坂中遺跡周溝墓 1 230



八坂中遺跡周溝墓 1 233



八坂中遺跡周溝墓 1 237



八坂中遺跡甕棺 1



八坂中遺跡甕棺 3



八坂中遺跡竪穴 2 256



八坂中遺跡土壙 6 278



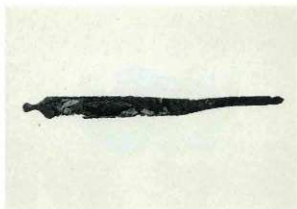
八坂中遺跡土壙20 333



八坂中遺跡土壙26 341



八坂中遺跡土壙30 349



八坂中遺跡土壙84 490



八坂中遺跡土壙109 550



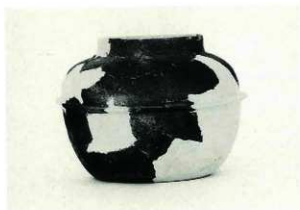
八坂中遺跡土壙109 549



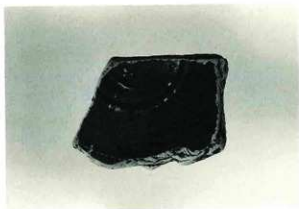
八坂中遺跡土壙116 563



八坂中遺跡土壙116 564



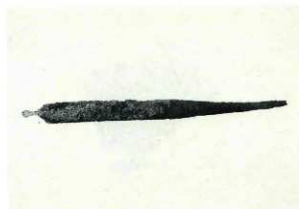
八坂中遺跡土壙121 575



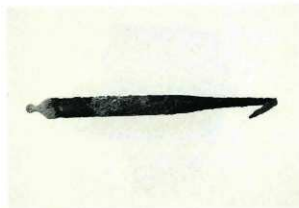
八坂中遺跡土壙132 1634



八坂中遺跡土壙157 678



八坂中遺跡土壙157 694



八坂中遺跡土壙157 695



八坂中遺跡土壙157 690



八坂中遺跡土壙 165 741



八坂中遺跡土壙 165 756



八坂中遺跡土壙 165 757



八坂中遺跡土壙 165 744



八坂中遺跡土壙 165 790



八坂中遺跡溝 1 899



八坂中遺跡溝 1 892



八坂中遺跡溝 1 936



八坂中遺跡溝 1 948



八坂中遺跡溝 1 926



八坂中遺跡溝 1 915



八坂中遺跡溝 1 927



八坂中遺跡溝 1 956



八坂中遺跡溝 1 973



八坂中遺跡溝 1 999



八坂中遺跡溝 1 992



八坂中遺跡溝 1 1006



八坂中遺跡溝 1 1007



八坂中遺跡溝 1 1009



八坂中遺跡溝 1 989



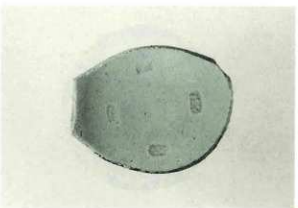
八坂中遺跡溝 1 1084



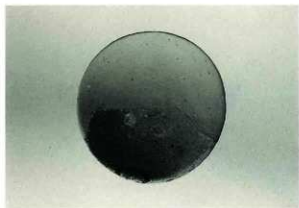
八坂中遺跡溝 5 1215



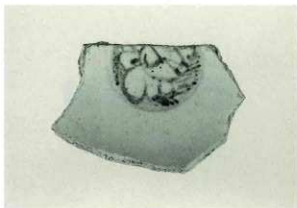
八坂中遺跡溝 10 1321



八坂中遺跡溝 10 1325



八坂中遺跡溝10 1503



八坂中遺跡溝11 1351



八坂中遺跡溝11 1352



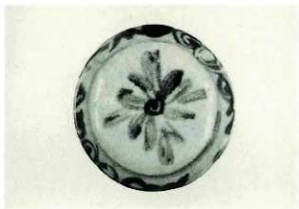
八坂中遺跡溝11 1372



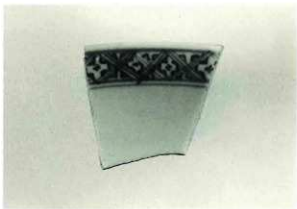
八坂中遺跡溝11 1368



八坂中遺跡溝11 1398



八坂中遺跡溝12 1462



八坂中遺跡溝12 1461(内面)



八坂中遺跡溝12 1461(外面)



八坂中遺跡溝12 1471



八坂中遺跡溝13 1296



八坂中遺跡溝13 1305



八坂中遺跡溝13 1302



八坂中遺跡溝13・溝15 1303



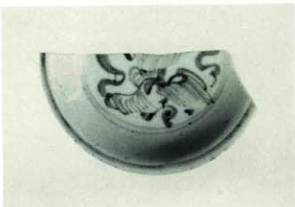
八坂中遺跡柱穴3 1595~1617



八坂中遺跡柱穴6 1621



八坂中遺跡柱穴 6 1620



八坂中遺跡建物以外の柱穴 1745



八坂中遺跡建物以外の柱穴 1724



八坂中遺跡建物以外の柱穴 1728



八坂中遺跡建物以外の柱穴 1729



八坂中遺跡建物以外の柱穴 1727



八坂中遺跡建物以外の柱穴 1944



八坂中遺跡建物以外の柱穴 1748

大分県文化財調査報告書第150輯
八坂川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

八坂の遺跡Ⅱ
八坂中遺跡

2003（平成15）年3月31日

発行 大分県教育委員会
〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1

印刷 三恵印刷株式会社
〒870-0941 大分市下郡3055-8

